THE KAIZO

改造

三月号

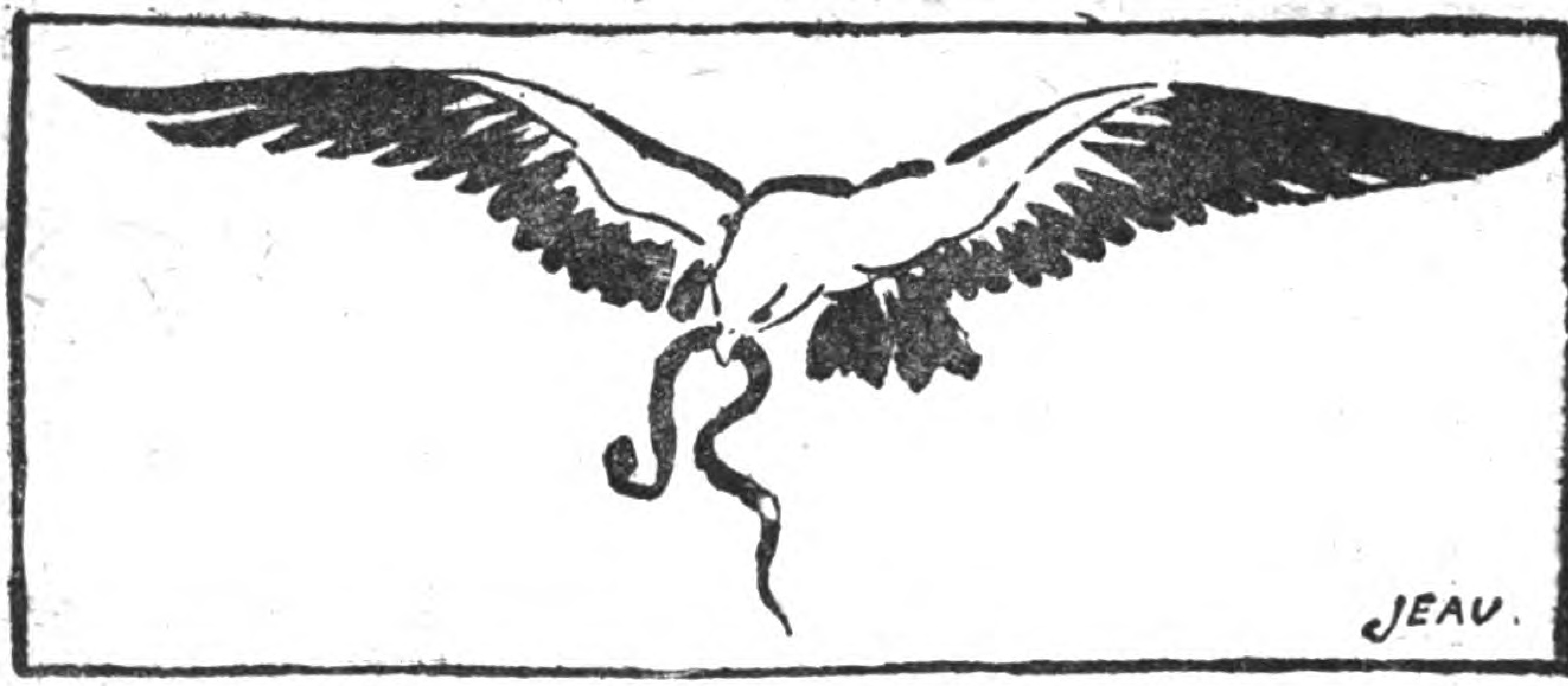
1924


紳士の髭剃に
クラブ石鹸
カテイ石鹸
安全剃刀
クラブ洗粉
乾きタオル
クラブゼリー
クラブタルカン
眉目清秀
齒牙の保健に
チユーブ入
クラブ煉齒磨
齒科醫學者の推賞せる模範的齒磨
口に爽快 齒に有効
お顔のアレない クラブ石鹸



改造三月號目次





(三月號)

清浦內閣の次の次

清浦內閣は蚊の聲のやうに微弱な內閣である。しかしその成立と、存在は我が憲政を常軌にかへし、そして眞の民衆政治へ復歸する爲めには却つて功蹟ある內閣である。第一に元老は今回の民衆の激奮的努力に怖氣がついて此度で總退却と決めているだろうし、又、研究會の如き特權階級も自己の地位が、自分達の自惚るるが如きものでなかつたことに吃驚しておるだろう。お負けに自分達の母國のやうに思つた貴族國の英國は勞働內閣と早變りしたのであるから。

護憲三派及び政友本黨の如きかびくさい政黨はもう時代の圈外に押流さるるが當然であろうし、そこには新興團體の出現が何より問題となつてくる。

從來議會を否認し、勞働會議を否認してゐた左翼勞働團體、および社會主義團體がこの頃に至つて、議會行動を是認し、大衆と共に動かんとするの傾向があるのは我國の、政治の一轉向を示すものとして大に注目すべき價値がある。

彼等は尙ほ進んで海員組合、官業勞働組合、思想團體等を大團結して從來の政黨と截然區別さるべき旗幟を揭げ、世界的政策、主張によりて議會の一角に依つて、大に新興階級の爲に努力すべく底意あるを傳ふるものがある。

時代はまさにかくの如き新興政黨を醞釀し、要求しておるのであろう、利權獲得と內爭と名譽欲しかない、かびくさい既成政黨がどうしやうがそんなことは、もう問題とされない時代が到來しておる。

政黨の黎明は、國民運動の生色は、かくの如き新興團體によりてのみ、齎らさるるであらうが、そうなると大化會　經倫學盟一派の如き國粹團體も、之に對抗して政黨的組織に取りかかるであろうし、茲に面白い對立は我が政局に向つて一つの新しい雰圍氣をつくる。

かくの如き二潮流は普選實施と共に、いよ〳〵具體的となるであろうし、普選は清浦內閣の次の次の內閣で斷行すると思へば間違はあるまい。

過渡的內閣の、國民的憎惡に滿てる清浦內閣の半面にはかく世人の豫測せざる有爲、新裝の胎兒が生長し、醱酵しつつあることを我々は知つておるべきだ。新時代の人々と共鳴し、新時代の世界的氣運を打開して、我帝國を重からしむるものは將に此徒の一致團結の秋にある。

リヒヤルト・ワグナアと社會主義

小泉信三

（一）

標題に斷つてある通り、茲で話題になるワグナアは、或は讀者の豫想するやうに、ロオドベルトスに私淑して國家社會主義に傾いた經濟學者、故アドルフ・ワグナアではなくて、十九世紀の音樂革新者たり、「タンホイザア」「パルシフアル」「ニイベルンゲンの指環」等の作歌作曲者たるリヒアルト・ワグナアである。併しそれでも猶ほ此標題は、稍妥當を失してゐるかも知れない。それは本篇では、直接にワグナア其人よりも、バアナアド・ショオのワグナア樂劇論の方が恐らく主なる話題になるだらうからである。讀者の中には、音樂家たるワグナアと社會主義との間に抑も何の交渉があるかを異しむ者があるかも知れないが、實はショオは其の社會主義者の立場から、ワグナアの最大作「ニイベルンゲンの指環」

を観て、此に資本主義社會の解剖批評に外ならぬものとの解釋を下してゐる許りでなく、此の四部作を構成する第一第二第三の「萊因の黄金」「ワルキユウレ」「ジイクフリイト」と、第四の「神々の黄昏」との間には連繫統一が缺けて居ると斷定し、而して此の不一貫を十九世紀に於ける社會運動發達の實際上の經過に由て說明しようとして居るのである。

（二）

社會主義思想は、十九世紀中に於て二段の進歩を遂げた。その第一段は、所謂空想的社會主義がマルクス―エンゲルスの科學的社會主義に依て代られたことである。第二段はマルクス―エンゲルスの社會主義に對する修正主義の起つたことである。此の第二段に就いては、之を進歩と云ふことに對して異論を唱へるものがあるかも知れない。進歩といふ言葉が惡ければ、無論それを固執する必要はない。兎に角さう云ふ變遷があつた。空想的社會主義と科學的社會主義、又は唯理的社會主義と歴史的社會主義との相違は、樣々の方角から之を認めることが出來るが、現在の社會制度に對する其態度に就いて云へば、空想的社會主義者が永久不變的の原理に照らして、之を不當不正なるものと宣告するのに對してマルクス、エンゲルスは、資本主義社會も故なくして起り、故なくして在るものではない。「凡ての現にあるものは皆合理的である。」資本主義社會も、一定の條件の下に於ては、優に存在の理由を持つてゐる。たゞ其條件が變れば、嘗て合理であつたものが不合理となつて、存在の justification を失ふに過ぎぬと謂ふのである。若し現在の資本的生産方法といふものが、永劫不變の正義、原則に背いてゐるものならば、資本主義は永遠の昔から永遠の未來に亙つて、終に一度も其存在の是認せらるべき時がない譯であるけれども、マルクス、エンゲルスは決してさうは觀てゐない。彼れに從へば、資本主義社會が滅び、又當然滅びるのは、其の現在の存在を正當とする一定の條件が消滅した曉、稍々具體的に

云へば、資本的生産方法の下に生長を遂げた生産力が、資本的收得方法と兩立しなくなつた曉に於て、始めて起るべき事なのである。空想的社會主義に於ては全然、或は殆ど全然見ることの出來なかつた進化の思想が、玆に社會主義說の基礎として採用せられたのである。故に空想的社會主義者の立場からすれば、社會主義社會は、誤つて造られた、不當不正なる現社會を撤廢一掃して、其跡に全然新たに設計し直ほされなければならぬ筈であるが、マルクス、エンゲルスに從へば、資本主義は社會主義の爲めに缺くべからざる前提、省略すべからざる階段である。資本主義の發達成熟を俟つて始めて社會主義は可能となると謂ふのである。

（三）

斯の如くマルクス、エンゲルスに從へば、資本的生産方法は當然あるべくしてあるものである。然らば資本的生産方法は何時當然あるべからざるものとなるか。マルクス、エンゲルスの物の觀方に從へば、一物が其存在の理由を失ふ時は、即ち其物の消滅崩壞する時である。資本主義は何時崩壞するか。此問題になると、革命家の焦慮は屢々其觀測を謬らしめた。マルクス、エンゲルス共に資本主義終局の時を遙かに實際よりも近く觀察豫言したのである。一八四八年の共產黨宣言を讀めば、吾々は資本主義が目前數步の外にある斷崖に向つて、驀進しつゝあるものであるかの如き印象を受けざるを得ない。エンゲルスは更に其三年前、其「英吉利に於ける勞働者階級の狀態」の一節で、「革命は必ず來らざるを得ぬ。平和的解決を提議するには時が已に遲い」と記して居るが、これは無論當らなかつた。更に彼は一八七八年、其の「駁デユウリング」の一節で、資本主義が行詰まる點は「今到達して居る」と記して居るが、これも同じく當つて居らぬ。其の少壯時代の觀測の謬つてゐたことを、エンゲルスは晩年明かに自認して告白して居る。即ち其の生涯

の最後の作物たる、マルクスの「佛蘭西に於ける階級鬪爭」の緒論(一八九五年三月六日附)の中に斯う云つて居るのである。「歷史は、吾々及び吾々と同樣に考へてゐた凡ての者が謬つてゐた事を示した。歷史は、大陸に於ける經濟的發達の程度が、資本的生產撤廢の爲めには當時猶ほ遙かに未成熟であつたことを明にした。歷史は此事を、一八四八年以來全歐洲大陸を捉へ、佛蘭西、墺太利洪牙利、波蘭及び近年は露西亞に始めて眞に大工業を歸化せしめ、獨逸を正に第一流の工業國とならしめた——而かもそれを凡べて資本主義の基礎の上に、即ち一八四八年に於ては猶ほ大に擴張の餘地のあつた基礎の上に於てした——ところの經濟的革命に依て證明したのである。「其當時とは違つて今日では、偉大なる社會主義者の國際的軍隊は、日々其數量、組織、訓練、洞察力及び勝利の確信を高めつゝ、抑止すべからざる勢を以て前進しつゝある。而かも「此の偉大なるプロレタリヤ軍も、猶ほ未だ曾て其目的に到達して居らぬとすれば、此プロレタリヤ軍も、到底一大打擊を以て勝利を獲得する者では無くて、堅忍持久の戰鬪に於て、陣地から陣地へ除々に前進しなければならぬものとすれば、此事は一八四八年に於て、簡單なる奇襲に依て社會改造を獲得することの如何に不可能であつたかを遺憾なく證明する」といふのである。

ベルンシユタインの修正主義は、此の晩年のエンゲルスのと同じ觀察を基礎とするといふか、或はそれに一步を進めたと謂ふべきものである。資本主義は「共產黨宣言」に解剖豫言せられてゐるやうに近い將來に行詰まつて崩解するものではない。資本主義は未だ中々其生存能力を喪ふものではない。而して既に資本主義が左ほど速かに且つ容易に滅びるものでないとすれば、社會主義運動も亦其積りで其方針を立てなければならぬといふのがベルンシユタインの主張である。「共產黨宣言が近世社會の進化に下した豫後診斷は、此進化の一般的傾向を示した限りに於ては正しかつたが、樣々の特殊の結論、就中此進化に要すべき時間の測定に於て謬つてゐた。此の後の事は、『宣言』の共著者フリイドリヒ・エンゲ

ルスに依て「佛蘭西に於ける階級鬪爭」の序文中で腹藏なく容認せられに居る。然し乍ら經濟的進化が、豫定せられたよりも遙に長時間を要することに依て、それは又共産黨宣言の豫見せず、且つ豫見することの出來なかつた形態を取り、狀境に導かれねばならなかつたことは明白である」と彼れは謂つて居る。

資本主義發達の徑路と形態とが斯の如きものであるとすれば、是に處して社會主義者は何を爲すべきかといふに、ベルンシュタインは獨逸語に謂ふ「日々の仕事」（Gegenwart.arbeit）に力を捧げよと說いた。「……社會民主黨の當面の任務、勞働者の都市及び町村に於ける自家階級利益の爲めにする政治的活動、並に勞働者の經濟的組織の業に最大の價値を置く」のである。併し獨逸民主黨は事實に於て此事を行つて居る。たゞ實に此を行ひながら、口に革命主義の空語を絕たないのである。其處でベルンシュタインはシルレルの「マリヤ・スチュアルト」の一句

"Und was sie ist, das wage sie zu scheinen"

を引いて、社會民主黨にその民主的社會主義的改良黨たるの實を敢て隱くすには及ばぬと說いたのである。

（四）

ベルンシュタインは共著「社會主義の前提と社會民主黨の任務」の序文の終りに記して、社會主義理論に殘存する空想主義的思考法を退治することに依て、社會主義運動上に於ける現實主義的並に理想主義的要素を均しく強めることが本書の主なる目的だと謂つて居る。此に所謂空想主義的思考法は、無論一部社會主義者の、資本主義の崩壞が明日にも迫つてゐるかのやうに說くことを意味するものであるが、其中には又屢々行はれる、現實のプロレタリヤの理想化をも含んで居るのであらう。プロレタリヤの爲めに戰ふ者は、往々にしてプロレタリヤと共敵のブルジョワジイとを、その現に

有る通りに見ることを欲しない。往々にしてブルジョワジイは直ちに貪婪不正を、プロレタリヤは廉潔正直を代表するものであるかの如き、階級別が直ちに人間の德性を定めるものであるかの如き口吻を漏らすのである。同時に是に伴つて、人間一切の行爲の中、プロレタリヤの爲めにすることのみに價値があると說かれるのである。論文は無論プロレタリヤの爲めに書かなくてはならぬ。小說も詩もプロレタリヤの爲めに作らなければならぬ。否な行住坐臥、眠食も戀愛も皆プロレタリヤ解放の爲にしなくてはならぬといふ類ひの說が行はれるのは、必しも我邦で許りではない。而かも同時に反面に於て、現社會は益々多數の人を無產者たらしめ、無產者の境遇は必ず益々低下して、物質的に窮迫し、精神的に墮落獸化するといふのが動かすべからざる眞理だと認められて居るのである。ベルンシユタインは此矛盾偏頗を指摘して憚らない。「吾々は勞働者を、彼等がある通りに取らなければならぬ。而して彼等は、共產黨宣言に豫見せられたほど、一般的に窮民化して居るものでもなければ、また彼等の佞臣 Höflinge)が吾々に信じさせようとするほど、偏見と弱點とを脫却して居るものでもない。彼等は、彼等が其下に生活する經濟的並に社會的諸條件の德と不善とを有するもので、而して此條件も又其作用も、共に一日にして撤去せられるものではない。「此點に就て異說を抱き得るものは、曾て一度も實際勞働運動に密接に關係したことのない文士等のみである」と彼れは謂ふのである。

此說は、實質的には左ほど新奇を以て目すべきものではない。併しベルンシユタイン其人の境遇、其の獨逸社會民主黨內に於ける位置を考へて見ると、此人が此言明を敢てするには可なりの決心を要したに相違ないことが察せられるのである。ベルンシユタインは社會民主黨中にあつて最も忠實なるマルクス主義學者として重ぜられて來て、而してマルクス及び殊にエンゲルスには、個人的に最も厚い眷顧を受けてゐる。その敬愛する先師の學說に批評を加へることの心苦しさを彼れは時々漏らしてゐるが、事は其れ丈けでは濟まない。社會民主黨內に於ては、マルクスの說は、漸く學說

ではなくて、信仰個條にならうとしてゐる。斯る場合に忌憚なく其缺點弱點と認むべきものを指摘することは、其の多年の僚友同志に離れ、その黨内に占め得た地位を失墜することを意味してゐるのである。社會主義は一の自由思想として權威の抑壓に反抗して起つたものであるが、社會主義思想界に於ても一の大系統が確立せられると、それが又再び自由討究を抑壓する新しい一權威となることは、勢ひ免れ難いところである。殊にマルクスのやうに、啻に思想家としてのみならず、一個の人として、人を動かし、人を惹着ける異常の力を持つてゐた人格にあつては、其說を奉ずる者の中に、誠實は餘りあつて、獨立の觀察力思考力の是に伴はぬ者を多く見ることも、亦異しむに足らぬ。而して此等熱誠なる信奉者に依て、眞僞、當否の問題は、屢々忠不忠の問題と混同される。師說に忠なるものは直ちに眞、これと相容れざるものは直に不眞と豫定せられる嫌が往々にしてあるのである。一思想家の系統は、其亞流の手に依て凝結石化する。マルクス主義は動もすればマルクス主義者に依てマルクス自身の說いたよりは更に一層マルクス的なるものになる傾きがある。或機會にマルクスは苦笑して、「予はマルクシストではない」と謂つた事があるが、此發育は他の幾多の場合にも適用することが出來るのである。斯る社會に於ては、マルクスの所說は往々自由批評自由討究を許さぬドグマとなる。決してロオザ・ルクセンブルグを凡庸の思想家だと云ふのではないが、併し此人がハンノヷアの社會民主黨大會に於て、ベルンシユタイン問題を論じて、討議の自由は「此討議が黨の一般原則の基礎の上に於て行はるゝ限り」に於てのみ容さるべきものだと主張したのは、よく一部マルクシスト社會の空氣を窺はしめるものである。ヘルクナアが評して、ベルンシユタインの「社會主義の前提」の著は、學問上（intellektuell）重要だと謂ふよりも、寧ろ道德上勇敢なる行爲だと謂つたのは、強ち自ら好む所に阿ねる評言ではないのである。

（五）

社會主義者の中資本主義進化の徑路、資本主義から社會主義への遷移に就て、ベルンシュタインと略同じ觀察をしてゐるものは外の國にもあるが、先づ擧ぐべきは、英吉利のフエビヤン協會々員であらう。フエビヤン協會の特色は、其の冷靜なる事務的常識的なる判斷にあつて、一の社會主義體系としての深淺大小は固よりマルクシズムと同日に論ずべきものではないけれども、その反社會主義ドグマを排斥すると同樣に、社會主義のドグマをも指摘排斥して、毫も忌憚なき態度には、人をして爽快を感ぜしめるものが尠くない。然らばフエビヤン協會が活動を始めた其當時、社會主義ドグマの排斥すべきものには何があつたかと云へば、それは英吉利に於ても矢張りマルクシズムであつた。一八八〇年代の始め、マルクスに傾倒したハインドマンが社會民主聯合を起こして、一時は英國に於ける社會主義運動の中心となつた。而してマルクシズム又はマルクス其人の、人を心醉せしめる異常の力は茲にも現れて、ハインドマン等は其師說を信ずること厚きの餘り、此を批評し、此に反對する者を直ちに異端視しようとした。フエビヤン等は、此敎權を排斥したのである。フエビヤン協會の中でも、緻密な調査研究はシドニイヱツブを俟たなければならぬが、討論應酬はバアナアドショオの長技であるから、自然マルクシズム、又はマルクシストに對する批評には、專らショオが當ることになつた。ショオが價値論に就てマルクシストと論爭した事は嘗て本誌（大正十年九月號）に書いた事がある。（此批評がエンゲルスに不快を感ぜしめたことは、資本論第三卷に對する後者の序文に現れて居る通りである。）自餘の諸問題に就ては、ショオが起草して一八九六年倫敦に開かれた國際社會主義勞働者及び勞働組合大會に提出した「フエビヤン政策の報告」が最もよく其態度を窺はしめる。

此報告中「フエビヤンの思想の自由」と題する一節は、社會主義教權に對するショオ等の批評的態度を遺憾なく表明して居る。それに曰く、「フエビヤン協會は、社會主義的著作者、經濟學者、首領及び黨派の誤謬に就いて、其(社會主義の)反對者の誤謬に於けると正に同樣に、極力其思想言論の自由を固執する。例へば本協會は、其見解の或物が今日では誤謬又は時世遅れとして排棄せられねばならぬマルクス及びラツサアルに對して、此等卓越せる社會主義者其人等自身が、其先人たるサン・シモン及びロバアト・オエンに對して取つたのと同じ批評的態度を維持するの必要を主張するのである」と。

晩年のエンゲルスが社會改造は簡單なる奇襲に依て成就し得るものでないと謂ひ、ベルンシユタインが資本主義は未だ容易に近い將來の或瞬間に一時に崩壞するものではない。從つて社會主義運動も、是に適應する形を取らねばならぬと說いたと同樣の主旨を、ショオも亦別の言葉で說いて居る。曰く、「フエビヤン協會の態度は全然立憲的で、其の取る所の方法は、英吉利の政治生活に於ける平常の方法である。フエビヤン協會は、人間本性と、英吉利人の國民的性格及び政治的事情に依てそれに課せられた諸條件を容認する。協會は、革命や軍隊及び警官との衝突や、殉教よりも、平和漸進的變化を喜ぶ尋常市民の欲求に同情する。協會は、社會民主主義は勞働階級のプログラムの全部ではなくて、產業の社會化を目的とする個々の各方策は、幾多の他の改革と其採用の先後を競はねばならぬ事實を承認する。故に協會はプロレタリヤを一方にし、有產階級(プロプリエタリヤ)を他方にして、社會主義全體の運命が、一總選擧の結果、衆議院内の一法案に依て悉く決せられると云ふやうな瞬間の來り得べき事を信じない。社會民主主義の各分賦償還分は、幾多方案中の一法案たるに過ぎずして、社會黨の努力に依て始めて維持遂行せらるることを得るものであらう。故にフエビヤン協會は、センセエショナルな歷史的危機の到來を期待して居る社會主義者等には、別の何れかの協會に入會せんことを乞

ふものである」と（「フエビヤン立憲主義」）。さう云ふ譯であるからショオ等は、其妥協主義を匿すことを却て陋とする。「フエビヤン協會は凡ての事に於て其意を貫くことの出來ぬ點に於ては社會主義者も餘人と擇ぶ所がないことを學んで居るから、民主的社會に於て、妥協は政治的進歩の一必要條件なることを認める」と云ふのである（「フエビヤンの妥協」）。

前にベルンシユタインも論じた一部社會主義者のプロレタリヤ理想化を、無遠慮なショオが容赦する筈はない。「フエビヤンと中流階級」（註、英語の middle class は、我邦の中流又は中産階級とも、獨逸の Mittelstand とも多くの場合に於て違ふ。ブルジョワジイといふ外國語を用ゐないとすれば、それに相當する英語は此 middle class より外にはないやうである）と題する一節には斯う謂つて居る。「社會主義運動が今日まで中流階級又はブルジョワジイの屬員に依て鼓吹せられ、教育せられ、指導せられて來た事實に顧みて、フエビヤン協會は、是等の指導者が其の己れの階級に行はれて居る狹猾なる社會的理想を痛撃して已まないのを毫も異しみはせぬか、併し社會主義者等が社會主義の生れた階級其者を特に社會主義の敵なるものと非難するの妄誕に抗議する。フエビヤン協會は、プロレタリヤが此等の同じ狹猾なる理想から自由であるといふ浪曼的な幻覺を抱くものではない。他の各社會主義團體と同樣に、本協會も有ゆる階級の最も聰明なるメムバアの結論に通曉せしむることに依てのみ、民衆を社會主義に教育することが出來るのである。故にフエビヤン協會はブルジョワ又は中流階級の語を非難の言葉として用ゐることを至當と認めない。それに依て本會々員の大部分を非難することになるから猶更である。」此一節中の或句には、多少詭辯の嫌がないではない。併し有意無意のプロレタリヤ理想化に對する批評としてはこれが充分役に立つのである。

ショオは固より一部社會主義者の社會主義の効能に關する仰山な廣告揚言を嘲けるものであるから、社會主義は決して人間社會の一切弊害に對する救治策となるものでないことを言明する。「フエビヤン協會は人間社會の諸害惡に對する

萬能藥としてではなくて、僅に缺陷ある産業組織と根本的に不良なる富の分配に因て生じた諸害惡に對するものとして社會主義を提出する」と謂ふのである。

（六）

以上エンゲルス、ベルンシユタイン、バアナアド・ショオ等に就て述べた事は、本題のワグナアと關係が無さそうに思はれるかも知れないが、さうではない。第一にショオは、ワグナアの「ニイベルンゲンの指環」を、社會主義的作物と解釋し批評して居るのであるから、其の解釋者たり、批評者たるショオ自身の社會主義者としての見解態度が何ういふものであるかを先づ明かにして置く必要がある。次にエンゲルス、ベルンシユタイン等を引いたのは、ショオに據れば、ワグナアも亦晩年のエンゲルス及びベルンシユタイン等と資本主義社會の發達に對して同じ觀察をして居るといふのだからである。ワグナアが一八四九年、バクウニン等のドレスデン暴動に參加した後間もなく、其劇詩の稿を起こした大樂劇が、二十幾年の後にやうやく完成する迄には（「ニイベルンゲンの指環」の劇詩が完成して始めて私刷に附せられたのは一八五三年で、最初のバイロイト劇場祝祭の爲めに全部の作曲が完成したのは、一八七六年ワグナアが六十歳の時であつた）、ワグナアの考が變つて、それが爲めに前記の通り、四部作の前三部と最後の「神々の黄昏」とが一貫しないものになつた。然らば何故ワグナアの思想が變つたかと云へば、それは、ショオに從へば、ワグナアが此期間に資本主義社會組織の發達の徑路が其豫想と一致しないことを觀察し得たから、一八四八年の自由主義の爆發から、一八七一年の巴里コンミユンに至るまでの西歐羅巴革命史が、「現在の資本主義的秩序の消滅はワグナアの劇詩に現れるよりも遙に複雑な仕事とならうとしてゐることを實際に證明した」からである。「萊因の黄金」「ワルキユウレ」及び「ジイグフリ

イド」と「神々の黄昏」とが一貫を缺いて居るといふ事は、ショオは始めてその The Perfect Wagnerite を書いた時（一八九八年）から主張して居るが（無論是に對しては、ワグナア學者の間に異論は多いことだらう）、これに上記のやうな説明を加へたのは、一九〇七年に出た此書の獨逸譯に始まるもので、英語の版には、一九一三年の第三版に至つて始めて此部分が增補せられたのである。果してショオが、始めから上記の理由でワグナアの作物に不一貫が生じたと解釋したものか、或は始めはたゞ一貫を缺くと云ふ斷定だけがあつて、其の説明は後に至つて始めて思着いたものであるか、それは今茲で論ずる必要のない問題である。

（七）

「ニイベルンゲンの指環」の梗概を書くのは容易の業ではない。玆にはワグネル解説書に載せてあるものを、更に大に省略して掲げることを以て甘んじなければならぬ。併し本篇の爲めには、それでも略ぼ用を辨ずるのである。先づ本文に關係のある登場主要人物の名と種族とを掲げるのが便利であらう。それは凡そ次の如きものである。

人物	種族
ヲオタン（Wotan） ドンネル（Donner） フロオ（Froh） ロオゲ（Loge） フリツカ（Fricka） フライヤ（Freia）	神及び女神
ヲクリンデ（Woglinde） ヱルグンデ（Wellgunde） フロスヒルデ（Flosshilde）	ラインの少女
アルベリツヒ（Alberich） ミイメ（Mime）	矮人ニイベルンゲン

エルダ (Erda)

ブルユンヒルデ (Brünnhilde) ——ワルキユウレ (Walküre)

ジイクムント (Siegmund)
ジイクリンデ (Sieglinde) } 人間 (Volsungen)
ジイクフリイド (Siegfried)

ファゾルト (Fasolt)
ファフネル (Fafner) } 巨人

グンテル (Gunther)
グウトルウネ (Gutrune) } ギイビツヒユンゲン(Gibichungen)
ハアゲン (Hagen)

先づ矮人アルベリツヒが戀を棄てて、萊因の少女の護る黄金を盗む。通常解説せられる所に從へば、全樂劇の動機はアルベリツヒが此黄金で造つた指環の所有に懸るのである。指環は現世的權力の象徴である。最高の神ヲオタンは焔の神ロオゲの狡智を借りて、暴力と詭計とを以て之をアルベリツヒの手から奪ふ。アルベリヒは、此指環に呪を籠める。此指環を手離すことを欲しないヲオタンは、やうやく萬物生成の母なる女神エルダの諫に從つて、之を神々の爲めにワルハルラ (Wallhala) の宮殿を築いた巨人ファフネル、ファゾルトに代價として交附すると、ファフネルは指環を獨占せんが爲めに、ファゾルトを殺し、自ら大蛇に化して岩窟の內に之を護る。此間一方に於てヲオタンはエルダに豫言せられた神國の沒落(黄昏)を恢復せんが爲め、戰場に倒れた勇士等をワルハルラ城に伴ふ半神處女の戰士ワルキユウレを生んで、矮人ニイブルンゲレの復讐に備へ、他方に於て人間英雄の出現を待つ。此の英雄はヲオタンが別の女に生ませたジイクムンドと、其双生の妹にしてフンヂング(Hunding)の妻たるジイグリンデとの間に生れたジイグフリイドである。恐れを知らぬジイグフリイドを森林中に養育するものは、矮人アルベリツヒの弟の狡猾なるミイメである。ミイメはジイグフリイドに依つてファフネルを殺し、此の大蛇の護る指環と財寶とを獲ようと謀る。ジイグフリイドは、その父ジ

イグムンドから傳へられた破片を自ら鍛え直した劍（Nothung）を以て容易く大蛇を屠り、又併せてミイメをも殺す。指環はジイグフリイドの手に歸する、ワルキユウレの一人ブルユンヒルデは、父ヲオタンの命に背いて（實は其裏心の望みに從つて）、姦通と兄妹相姦とを犯したシイクムントを庇護した罪の爲めに、焰の壁に圍まれた山頂の岩の上に眠らされて居る、此の焰の壁を冒してブルユンヒルデの眠を醒まし得るものは、當然恐れを知らぬジイグフリイドの外にはない。ヲオタンも今は此の人間の英雄を遮ぎる力はない。曾てジイクムンドの劍を粉砕したヲオタンの鉾は、今ジイクフリイトのノオツングの一揮に逢つて却て自ら砕けるのである。シイグフリイドが當然ブルユンヒルデを獲ることは讀者の豫想する通りである。指環は一度ブルユンヒルデの手に歸し、シイグフリイトは更に新しい冒險を求めて、ギビツヒユンゲンの族長グンテルの許に到達する。グンテルと其母を同うするハアゲンの父は、矮人アルベリツヒで、シリグフリイトは遂に其の奸計の犧牲となる。ハアゲンはシイグフリイトに藥酒を薦めてブルユンヒルデを忘れしめ、狩獵に誘つて其背を刺すのである。グンテルは再びジイグフリイトの手に歸してゐた指環をハアゲンと爭つて此に殺され、一度シイグフリイトの不信を怒つて、ハアゲン、グンテルの企てに助力したブルユンヒルデは、今實情を知つて馬に騎して自らシイグフリイト火葬の火に投じ、同時に遠くヲオタンの居城ワルハルラもヲオタン自ら之を焚き、ハアゲンはブルユンヒルデがシイグフリイトの指から拔取つて、萊因河に投じた指環の跡を追ふて、萊因の少女（女精）に捉へられ、少女の一人は再び其手に歸した指環を捧げ、二人はハアゲンを拉して水底に沈むと云ふのが大團圓である。（此梗概を書くのに田村寛貞君編「リツヒアルト・ワークナー」岩波書店刊行、の助けを得るところが多かつた。厚く同君に謝意を表する。此外二三の通俗書を見たが、何れも充分でない。元來斯る大作物の簡約した梗概を作る爲めには、何うしても取捨の標準となるべき解釋が先づなければならない筈であるが、本文では成るべく特殊の解釋に賴ることを避けて、普通々用の

記載に從ふ必要があるので、自然梗概に不明瞭な廉が多くなつた。就中ヲオタンとシイクフリイトとの關係はもつと明にしなければならぬと感じては居るが、それをする爲めには何うしても梗概の限界を越えて、解釋又は說明の域に踏入らなければならぬ。ところが其解釋又は說明になると僅か二三の書の間にも必ずしも一致がないので、自然不滿足のものを不滿足の儘にするの已むなきに至つたのである）

（八）

さてショオは此大作を何う解釋して居るかといふに、此の材料を北歐傳說に取つた樂劇は、決して古代の事を取扱つたものではなくて、現代の吾々に切實なる目前の社會を論ずるものであると謂ふ。「指環」は「今日の戯曲」であつて、「十九世紀後半以前には書かれる筈のなかつたものである。それは其當時に於て始めて完成しつゝあつた事件を取扱ふものだからである。其の事件といふのは社會的政治的の事件である。此作は Die Feen がワグネルの「浪曼的オペラの最初の essay であつたやうに、政治哲學の最初の essay だ」と謂ふのである

十九世紀後半以前にはまだ完成しなかつた事件といへば、當然先づ念頭に浮ぶのは資本主義であるが、ショオは實に萊因の少女から黃金を盜んだアルベリッヒに、工業資本家又は金權者を認めてゐるのである。黃金を盜み得たアルベリッヒは、其の霧の國に於て同胞のニイベルンゲンを黃金の力を以て使役して、鑛坑内に勞働せしめて居る。ショオは此一段を近世資本主義的工業の縮圖と解するのである。「彼れ（アルベリッヒ）は直ちに此黃金の權力を揮つて仕事に着手する。彼れの利得の爲めに、彼れの同胞の群衆が、地上に於て地下に於て、目に見えぬ鐵鞭の笞に鞭たれて働く悲慘な奴隷たるべき運命に陷るのである。矮人等が遂に一度も彼れを見ないことは、今日の『危險工業』（dangerous trade）の犧牲

者が遂に一度も株主を見ずして、而かも猶ほ株主の權力は、到處に彼等を驅つて破滅に赴かしめるのと少しも異なる所はない。彼等が其勞働を以て造り出す富其者が、彼等を貧困ならしめる新たなる力となつて加はるのである。何となれば富は彼等がそれを造出すと同じ速度を以て彼等の手から雇主の手に滑入つて、雇主の權力を前よりも更に一層强盛ならしめるからである。諸君は今日の各文明國に於て自分で此手續を見ることが出來る。其處では幾百萬の人民が吾々のアルベリツヒの爲めに更に多くの富を累積する爲めに、己れ自身の爲めには、時として怖るべき、苦痛甚しき疾病と、確實なる短命との外何物をも蓄積することなくして、缺乏と疾病との中に勞役して居るのである。凡て此部分の物語は、恐るべく現實的、恐るべく現在的、恐るべく近世的であつて、その吾々の社會生活に對する影響は、吾々をして最早此に出て亂さるべき幸福あることを知らしめぬ程に、凄慘にして荒廢的である。此等の事物を堪え難しとするものは、人生の何たるべきかに就ての想像力ある詩人の外にはない。若し吾々が詩人の國民であつたならば、吾々は此の悲慘な世紀の終りに先んじて、此等の一切を根絶せしめたであらう。ところか反對に、道德的矮人の種族である爲めに、吾々は之を大に尊敬すべき、快適なる、正當なることと考へて、自由にその有ゆる方向に其害惡を繁殖増加せしむることを許して居るのである。」

此のアルベリツヒが矮人等を使役して居る陰鬱な場所は、必しも鑛坑内たることを要しない。「黄燐と黄燐中毒と多額の配當と僧侶株主の多數とを持つ燐寸工場であつてもいゝ。或は又白鉛工場であつても、化學工場であつても、陶器工場であつても、鐵道車庫であつても、裁縫店であつても、酒浸しになつて居る小洗濯屋であつても、麵麭燒場であつても、大店舗であつても、其他或貪婪な、痴かな動物が、其金權の偶像に向つて歡喜の聲を揚げて、讃美歌

Thou mak'st me eat whilst others starve,

And sing while others do lament
Such unto me Thy blessings are,
As if I were Thine only care.

を歌ひ得んが爲めに、人間の生命と福祉とが日々犧牲に供せられてゐる處ならば、何處でもいゝ」のである。

アルベリツヒは、指環の外、其弟ミイメに造らせた「望みの冑（タルンヘルム）」を持つて居る。此を被る者は望み通りに其姿を變ずることが出來るのである。此に就てショオは謂ふ、「此冑は、吾々の街頭に於て極く普通に見る代物である。其處では、それは通常シルクハットの形を取つて現れるのである。それは、人の株主としての姿を見えなくして、樣々の形態を取らしめる。例へば敬虔なる基督教徒、病院寄附者、慈善家、模範的なる夫及び父、鋭敏實際的なる獨立の英吉利人其他の如きものである。然るに實際は、彼れは大に消費して、何物をも生産せず、何物をも感ぜず、何事をも知らず、何事をも信ぜず、他の凡ての者がする事の外何事をも爲さぬ……憐むべき社會の寄生蟲なのである」と。

（九）

さてアルベリツヒはプルトクラツトを代表するものとして、最高神ヲオタンは何を代表するか。ヲオタンは女神フリツカを妻としてゐる。フリツカは法律を代表するものである。ショオは此結婚を宗教と法律、教會と國家との提携結合を示すものと見て居る。ヲオタンは其一眼を抉出して之をフリツカを娶る代償にした事が詩の一節にある。ショオは是を宗教が法律と結ぶ爲めに、其の vision 一半を失つたものと解するのである。

巨人は何を意味するか。善きにせよ、惡しきにせよ、巨人は何等の理想を持たぬ愚昧單純なる、而して貪慾なる種族

である。「彼等は才能と野心もない。ただ單に錢を渇望するのである。」さて普通に神と云へば、人間以上に位するものと解せられるが、ワグナアに從へば、最高のものは人間である。「世界は不完全にして拘束せられたる神々の支配から、救拔せられる爲めに人間を待つて居る」のである。斯う解して見れば、寓意が極めて明白單純であることが分るだらう。矮人と巨人と神々とは、三種の人間の戯曲化である。即ち掠奪を喜び、好色貪婪なる本能的人物と、辛抱強く、勞役を厭はぬ、愚昧恭謙にして錢を崇拜する人物と、及び國家と教會とを案出經營する智徳才能ある人物とがそれである。「此等三種族の最高なるものよりも更に高きものは何か。それは英雄である。此樂劇ではジイクフリイドがそれであることは言ふ迄もない。

ショオに從へば、ワグナアの「指環」と同じ題目を取扱つたものが英吉利にもある。シエリイの「縛を解かれたるプロメシウス」がそれである。取扱ふ所の題目は、何れも人間（ヒユマニチイ）と神及び政府との衝突で、人間意志が成長して、完全なる力と自信に到達することに依て抑壓からの救濟が行はれるものとする解決も亦兩者に共通である。シエイリは、アルベリツヒとフアフネルとロオゲとヲオタンの野心家としての一面とを一身に兼ねたものとして其ジユピタアを描き、之を其のプロメシウスの敵にして居るが、シエリイよりも老熟せるワグナアは、ヲオタンを理解し寛假して、此に累する其提携者から之を離して取扱ひ、結局己を覆へす眞理（ショオはブリユンヒルデが眞理を現すものと解して居るのである）と英雄とを其最愛の子となし、又ヲオタンが結局己れ自身の排除と寂滅との運命に甘んじ服して、其到來を促す爲めに働くものとして之れを描いて居る丈けの違ひがあると謂ふのである。さて此のヲオタンに對抗するジイクフリイドは、恐れを知らぬ、己れの意志の外に己れを拘束するものを知らぬ英雄である。彼れは「己れの氣分の外に何等の法律を知らぬ。」「一言以て蔽へば、全然無道徳なる人、天成の無政府主義者たり、バクウニンの理想、ニイチエの『超人』の豫想たる人である」。四百年前に神と啓示との解釋者として教會よりも信憑すべきものは各人自己の判斷であることを敢然主張したのはプ

ロテスタントであつた。此のプロテスタントの所爲を今日に行へば、即ち無政府主義である。ジイクフリイドは此意味のプロテスタントたり、無政府主義者たるものである。ワグナアは此の無政府主義者に Nothung（前出、劍の名）を揮つて其途に横はる宗教、政府、金權政治、及び其他壯者の王國の諸制度一切を薙ぎ倒させようとしたのである。

然るにショオに從へば、ワグナアは「萊因の黄金」及び「ワルキュウレ」に於けるその寓意の論理を最後まで一貫させて居らぬ。音樂の形式に於ても始めの嚴粛な樂劇（ムジクドラマ）は舊式のグランド・オペラを以つて終つて居るし、戲曲中の人物も其性格が凡化して、第四部に於けるジイクフリイドのブリュンヒルデに對する態度は、世間人の態度に類する所があり、ブリュンヒルデは動もすれば尋常の一妬婦とならうとして居ると謂ふのである。音樂の形式及び技巧の事に關しては玆にショオの所説を紹介して居る遑がないから、詳しいことは原文（pp.61—63.80—98）を見て貰ふより外はない。兎に角ショオは、此の大作は首尾一貫を缺くものと斷定し、而して其の一貫を缺くに至つた理由を説明しようと試みて居る。而して此部分がベルンシュタイン、晩年のエンゲルス等と關係があることは始めに述べた通りである。

（十）

ワグナアは何故其計劃を變じたか。ショオに從へば、それは實世界には終にジイクフリイドに相當する英雄が現れなかつたからである。否なジイクフリイドが現れなかつた許りでなくて、却てビスマルクが現れた。一八四八年の幾多のジイクフリイドは皆な失敗に終つて、却て幾多のヲオタン、幾多のアルベリッヒ、幾多のロオゲが成功して居る。少壯ワグナアの事を共にしたバクウニンは、ワルハルラの宮殿は破壞せずして、却てマルクスと爭つて、インタナショナルを破壞した。一人のフェルヂナンド・ラッサアルを除くの外、當年の革命首領に實際政治上に於ける impossibilists でないもの

は一人もない。而して其のラッサアルは、其大遊説に健康を損じ、勞働者階級の大多數には未だ來り投ずるの用意なく、來り投ずる少數者は、已れを理解せぬことを發見した後、浪曼的な、全く辯護の餘地のない決鬪に斃れて居る。一八六四年マルクスが倫敦に起したインタナショナルは、國際的勞働組合運動の多少の端緒を開きはしたが、其の革命的社會主義的方面に於ては、「それは一個の浪曼的虚構（a romantic figment）であつた。」

　然らば巴里コンミユンは何うかといふに、ショオは、此のマルクスが事前に於ては「自暴自棄の愚擧」と評し、事後に於ては「六月革命以後に於ける我黨の最も光榮ある行業」と讃美した「勞働者獨裁」の試みを批評するのに、毫も遠慮會釋がない。彼れに從へば、巴里コンミユンの顛歴に依つて「メロドラマ的社會主義は終りを告げた」のである。而して此事件は、浪曼的な素人と演劇的夢想家とが、有能實際的なる行政家と軍人との爲めに剿滅せられた、最も悲慘な實例だと謂つて居る。社會主義者が保寨（バリカアド）を前にして戰ふ者を直ちに悲壯なる勇士、保寨に向つて戰ふ者を直ちに卑怯なる無賴漢として描かうとする弊は、ベルンシユタインも其の二月革命六月革命論（Wie eine Revolution szugrunde ging?）の中に指摘してゐるが、ショオの筆鋒は一層事務的で、一層假借する所がない。乃ち謂ふ、チエエル、ガリフエ（コンミユン鎭定の任に當れる將軍）を背德無賴の人物にし、フエリクス・ピヤア及びデレクルウス（共にコンミユン側の名士）を揚げて、チエエル並にガリフエよりも、遙に高尙な理想を抱く人とするのは、マルクスには容易の業であつた。「併し否定することの出來ない一事實は、實際の戰鬪となつた時ガリフエはデレクルウスを射殺せしめたけれどもデレクルウスはガリフエを射殺せしめることを得なかつたといふ事、及び佛蘭西の國事を處理することになれば、チエエルは兎に角何うにかそれを仕遂げてゐるのに、ピヤアはそれを仕遂げることも、亦饒舌を已めて、他人をして之を行はしめることも出來なかつたといふ事である。成程、チエエルに就けば、地主と資本家とに搾取される刑罰を免れないだらう。併しピヤ

アに就けば、全く不必要、全く無益に、狂犬の如く銃殺せられるか、善くてもニユウカレドニヤに流される刑罰を免れないのである」と。

要するにジイグフリイドが現れなかつたのである。否なワグナアの比喩を假れば、指環は再びアルベリツヒの手に歸し、アルベリツヒは其れを以てヲオタン、ロオゲと結んだのである。(ブルジヨワジイとアリストクラシイとの提携)。此提携の結果は、一八七一年の獨逸帝國建設に至つて其頂上に達し、ワグナアは「皇帝行進曲」を作つて、此事件を祝賀して居る。「皇帝行進曲」の後にワグナアが、何うして其の一八五三年のジイクフリイト理想化に復歸することが出來るか。チエエル軍の砲彈が既に凱旋門を連擊し、シヤンゼリゼエの舖道を穿つてゐるのに、フエリクス・ピヤアが巴里市廳で、際限なく社會主義の原理を論じてゐる光景を目前にして、ジイクフリイトが大蛇を屠り、焰の壁を突破することを何うして眞面目に信ずることが出來よう。「事物は全く豫期せざる發展を示したのである。「指環」はマルクス、エンゲルスの共產黨宣言と同じく、今日の資本主義的神政時代の歴史的法則と終末の運命とを豫測しようとしたものかも知れないが、然かも「ワグナアは、マルクスと同樣に、其概括論が實現せらるべき現實の過程、又は關係諸階級が其中に於て動むべき役目を豫見するには、統治行政の技術に餘りに無經驗で、その善玉惡玉的階級鬪爭觀 (hero-contra-villain conception) に於て餘りにメロドラマ的であつた」と謂ふのである。

（十一）

其處でショオは、ワグナアの劇詩中に描かれて居るところと、現實の近世社會との一致しない點を指摘する。

「指環」の巨人ファフネルは、指環と財寶との死藏者として描かれて居る。然るに現實界のファフネルたる資本家は、守錢

奴ではなくて配當を欲し、快適なる生活を欲し、ヲオタンとロオゲとの社會、即ち上流社交界に出入せんことを欲して居る。これをするには黄金をアルベリッヒに還して、其代りにアルベリッヒの企業の株主か債權者かになることをしなくてはならぬ。然るに此黄金を獲てアルベリッヒは、其同胞たる矮人及び無資本の巨人等に對する支配權を愈々確實にする。然しそれ丈けではない。アルベリッヒの性格は、その競爭場裡に大企業を經營するとゝ其成功が齎す自尊心と社會の尊敬とに依て、ワグナアやマルクスが豫想しなかつたやうな發達を遂げるのである。十を百にし、百を千にするには、貪欲のみで事を辨ずるが、千を十萬にするには經濟的宏量及び金錢意志と共に權力意志を必要とする。而して更に十萬を百萬にする爲めには、アルベリッヒは勞働者に取つての地上の神となり、都市を建設し、市場を支配するとをしなければならぬ。斯くしてファフネルが、其能力不行使の爲め、道德上智能上退化して、收入ではアルベリッヒに賴り、政治ではロオゲに賴り、體面と安全とではヲオタンに賴る、全く無力のものとなるに反して、アルベリッヒは、エンゲルスに「英吉利勞働者階級の狀態」中に描かれた、俗惡なるマンチエスタアの工場主から進化して、エッセンのクルップ、ボオンギルのキアドベリイ、ボオトサンライトのリヴアになつたのである、

ショオが何の爲めに此事を言ふかといへば、それは現實界のアルベリッヒは、決して「指環」のアルベリッヒのやうに、簡單容易に片付けることの出來るものではないとを謂はんが爲めである。現實界に於ては、今日ヲオタンもアルベリッヒに依賴して居る。ロオゲも其命を奉じて居る。而してアルベリッヒは更に輿論を製造する「新聞紙」と稱する新しい神を所有し、頤使して居る。ジイクフリイドが之に取つて代る丈けの力量熟練を習得する迄は到底アルベリッヒの支配を廢する譯には行かぬと謂ふのである。然るにアルベリッヒの仕事は、ヲオタン、ロオゲのと同じく、必要の仕事である。故にアルベリッヒに代り得るものは、武力の人でなくて、アルベリッヒの仕事を一日の中絶もなく引繼ぎ得る有能の事務家で

なくてはならぬ。エンゲルスが奇襲の時代は既に過ぎたと謂ひ、ベルンシュタインが、獨逸勞働者には未だ資本家に代つて大小企業を經營するの用意がないと言明して居るのは、ショオと所見を同じうするものである。ショオは謂ふ、縱し假りに凡ての國のプロレテエルが階級意識に目醒め、マルクスの號令に應じてプロレタリヤの勝利を實現し、凡ての××、富豪、地主、資本家が平民となつたとしても、勝利を得たプロレタリヤンは、無政府狀態の下に翌日餓えるか、然らずんば、好かれ惡しかれ、今日吾がロマノフ等、我がホオエンツオルレルン等、我がクルツプ等、キヤドベリイ等、リヴア等及び其政治的隨從者に依て行はれて居る、政治上産業上の仕事を行はなければならぬ。彼等に取つて代るには、革命的勢力が抗議し、説教し、義憤を發する素人共の陰謀でなくて、積極的、實行的、實務的勢力とならなければならぬ。然るに此發展は、ワグナア、マルクスの共に豫想しなかつた所である。此二人は共に資本主義時代の終末を豫言し、而して其豫言は、當時推測し得る限りに於ては正しい豫言であつた。彼等は又一八四八年以前の産業史に就ては、アカデミツクな學者よりも遙に優れた、犀利な觀察をしてゐる。ただ彼等は其處で止まつて、一八四八年以後を空虚の儘に遺したので、吾々は彼等から何等の指導を受けることが出來ぬのである。フエビヤンと修正主義者とは、社會民主黨は濃霧の中に方角を失したといふ事實に直面して、徒らに資本論の頁の中に託宣を求める代りに、時代の歴史の光に照らして、途を發見しようとして居るものであるが、マルクス主義者は、異常の熱心を以て此を抑壓しようと努めつつ、右の空虚の中を彷徨してゐるのである、マルクスは自ら此空虚に心着くには餘りに正直なる隱遁者で、又餘りに自説の眞なるを信ずることが厚かつた。其處へ行くとワグナアは、マルクスよりは稍々實際的であつた。ワグナアは「指環」の寓意を完結せしむる爲めには、猶ほ數幕の戯曲を挿入しなければならなかつたことを、「萊因の黄金」と「皇帝行進曲」との間に學び得たに違ひない。一八四八ー九年の市街戰に其年期を入れて、一八七一年の市街戰にチエエルの砲彈下に滅び

た革命時代の英雄の、行政的幼稚と浪曼的自負心とに對して、ワグナアの目の何の程度迄開かれたかを疑ふ者には、彼の怪しからぬ嘲笑曲 Eine Kapitulation を讀ませるが好い。ジイクフリイトの作歌作曲者は、此中で、一八四九年に自ら其爲めに亡命の客となつた同じ事を一八七一年に於て行ひつゝあつた佛蘭西の共和主義者をば、小學兒童の輕躁を以て嘲つてゐるのである　要するに彼れの望みを囑した英雄が現れなかつたのである。「彼れが神々の黄昏の總音譜を作つた時には、彼れはジイクフリイトの失敗と、ヲオタンーロオゲーアルベリヒ同盟の勝利とを事實として既に承認してゐたのである。」彼れは既に英雄を夢み、最終の解決を夢みることを斷念して、パルシフアルの腹案を凝らしつゝあつた。パルシフアルは、觸るゝもの皆斷つ利劍を以て武裝せる英雄ではなくて、斷じてそれを用ゐずとの條件の下に、鎗を以て武裝せる愚人である。大蛇を屠つて歎ふ代りに、鵠を射たことを羞ぢる人である。救濟者の觀念は全く玆に一變したのである。「それは「萊因　黄金」と「神々の黄昏」との作曲との間にワグナアの心意上に起つた變化を反映してゐる。而してそれは何故に彼れが爾かく容易に『指環』の寓意を放棄して、Lohengrinizing（グランドオペラ流）に退却したかを説明する」ものである。

是れがバアナアド・ショオのワグナア解釋である

（十二）

此解釋は果して當つてゐるか。ワグナアの「指環」のやうに、其研究に沒頭して居る學者の間にも異論があつて決しない大問題に對して、無智識無素養の門外漢が、當座の思着きで批評の口を挾むのは最も愼むべきことであるが、併しショオの特殊の解釋に對しては、吾々にも多少疑問を起す餘地がある。ワグナア其人の閲歷性行と、又其の一八五六年八

月廿三日人に與へた私信の中に「余は世界の不正の根源を曝露しようと云ふ目的で此樂劇を創作した。されば此不正の世界は――蓋し我等が如何にして其不正を認識し、其根源を絶滅し、正義の世界を建設す可きかを學ばんがために――沒落するのである」と謂つてゐる（田村君著二五四頁）ことなどに徴すれば、此の大作を「政治哲學の最初の essay」と云ふ言葉で評することは、必しも理由のないことではあるまい。併し假りに此四部作が、ショオの謂ふが如く、首尾一貫せぬものであるとしても、此矛盾が、ワグナアの十九世紀後半に於ける實際運動の經過を觀察した結果として起つたのだといふ說明に至つては、些か首肯し難い處がある。ショオは、現實界に豫期せられたジイクフリイトが現れなかつた爲めに、ワグナアは其最初の案を遂行しなかつたのだと謂ふが、「神々の黄昏」の作曲こそは一八七六年に始めて完成を告げたもの丶、劇詩全篇は、ショオも記して居る通り、一八五三年、ワグナアが未だ現實のジイクフリイトに失望せぬ頃に既に脫稿してゐたのである。其處でワグナアが現實界の革命家に失望して、其考へが變つたものとすれば、それは「指環」の音樂の方面丈けの事であるか、それとも劇詩其者の方面にも及んで居るのかといふ問題になるが、ショオはワグナアの寓意の論理が一貫して居らぬと謂ふのであるから、問題は無論曲の上のみでなくて、劇詩其者にも及んでなくてはならぬ筈である。それでは一八五三年に一旦脫稿した劇詩が、後に至つて根本的に訂正せられたといふ事實があるかといふに、是はワグナア學者ならば即座に確答し得る疑問であるが、さうでない者にも是丈けの事は言へる。「指環」は本と一八四八年頃に其の最初の腹稿が起こされたもので、其時は「ジイクフリイトの死」を取扱ふ筈のものであつたが、漸く其計劃が擴大せられ、前に膨脹して、「萊因の黄金」、「ワルキユレ」、「ジイクフリイト」が附加へられ、同時に其主人公もジイクフリイト（或はジイクフリイト一人）ではなくなつて、ヲオタンが現れるやうになつたのである。故にジイクフリイトの死の運命は、最初から定まつてゐたのである。ショオは、現實界に終にジイクフリイトが現

れないのを見て、ワグナアは其寓意を放棄したといつて居るが、假に現實界に豫想通りの英雄が現はれて、それがNothungを採つて現實界のワルハルラを破壞することが出來たら、果して戯曲と現實とはよく一致するかといふに、現實界のジイクフリイトは大蛇を屠り、アルベリツヒを殺し、ヲオタンを滅ぼして、自由意志の帝國を建設して居るのに、戯曲の上のジイクフリイトは、一ハアゲンの騙殺に倒れてゐるのでは、矢張り一致は缺けてゐると謂はなければならぬ。併しジイクフリイトが騙殺に遭ふことは、「ジイクフリイトの死」が樂劇の標題にも擇ばれようとした位で、最初から定まつてゐた事であつて、決してワグナアが現實の英雄等の爲すなきを見て、始めて豫定を變更して下した解決ではないのである。

斯の如くショオのワグナア解釋には、吾々にさへも首肯し難い節がある。併し彼れのワグナア評論の當否其物は、實は筆者に取つては左程の問題ではない。筆者は彼のワグナア評論の中に、ワグナア問題とは離れても、猶ほ傾聽すべきものの尠からぬのを喜ぶのである。ショオの言論は屢々眞面目を缺くものとの批評を受けてゐる（批評語の當らざることは、レニンもベルンシュタインと共に彼れのために辯じたことがある）。併し絕えず悲歌慷慨する者が必しも眞面目な人物ではない。ショオは何よりも此の無力なる悲歌慷慨を嫌ふのである。ショオの言說に、時として誇張詭辯の含まれてゐることは爭ひ難いが、併しその實行の伴はぬ大言壯語を嘲り、善玉惡玉的階級鬪爭論を排斥し、仰山にして空漠たる社會改造の素人論を戒める點に於ては、彼の謂ふ所は大に時弊に當つて居る。他の資格に於ての事は措いて、社會主義者中の最忌憚なき社會主義批評家としても、彼は確かに論評に値する人物である。（二月四日）

民衆戰ふべきか、旗進むべきか

室伏高信

一

政治上の一つの大きなキャムペンが始まつた。人々はこれを第二憲政擁護運動と名づける。政黨の大半がこれを率ゐ高名の智者が笛ふき、全國の新聞紙が殆んど一齊に筆陣を揃へて戰ひ、一日は一日より熱を高め、民衆なるものもまたやがて彼等の踊を踊らんかに見えて、風樓に滿つるの慨がある。民衆踊らんか。旗進まんか。

半人半獸の怪物が内閣にある。怪物が天下を私せんとして台閣に立つ。天下は常に私されるものである。古往今來、天下は常に×されてきた。怪物が天下を私するもまた可なりである。けれども戰機既に動く。政戰は半ば衝動のうへに立つ。眞に戰はんとするものあらば、何ものもそれを妨げることはできないのだ。戰ふものを戰はしめよ。人々は今において怪物の頭を叩くべきである。淸浦内閣倒すべし。それ幾分かは天の聲である。

政機は更に動いてゐる。一つの癌が除かれた。政友會の分裂がこれである。十年、若しくは數十年、日本の政界には生々の活力を欠いてきた。政友會が常に權力者であり、若しくは權力の裏にあつたからである。そしてこの力は、尙ほ五年、十年、拔くべからざるものだと思はれてきたからである。ここに政治の停滯がある。政機の死滅がある。政治の改革は、日本においては、それゆえに先づ政友會を叩くのであつたのだ。

顧みれば、日本の政界では、不可思議なるものが舞台の表面に踊つてきた。文明の舞台に、反文明の怪物が踊つてき

た。それを近きに見ても、寺内正毅、山本權兵衛、加藤友三郎、そして清浦奎吾。何れも、、、、の怪物である。半野蠻人である。半野蠻人が文明の舞台に踊るべからずして踊つてきたのだ。そは日本の憲法政治が普倖西的跛として生れ落ちたからでもあらう。政友會はこの跛に重心を置いた。妥協、情意投合、白紙、是々非々。これみな跛的憲法政治の原理である。政友會がこの跛の一方の足となつてきたのだ。跛的憲法政治の今日にまで續き、尙ほ未だ續かんとしてゐることとの責任は、政友會が大半これを負はなくてはならないのである。その政友會が半分に割れた。殘留者も脱黨者もともに政友會である。政友會の精神を精神とする。跛の片脚とならうとしつゝある。力はしかし二つに分割された。分割されたる二つの力は、闘爭する二つの利害である。停滯から流動への原理がここに働く。一つの政友會は停滯であり、二つの政友會は流動である。政機はこゝに動いてきたのである。政友會の分裂こそ、日本の政界にとつては、十年來の、若しくは數十年來の收獲なのである。

普選問題も今や解決の道を半ば步るいてきて、彼岸は既に眼前たゞ一步である。政治に行くべくして行かざりしものその内に蹐屈した力をもつて、その機會を捕えんとす。民衆の政治は昂揚して、政治狂は日本の津々浦々を犯さんとしてゐる。石のごとき心の人でない限り、多少の程度において、政治的マラリヤ熱に犯されずにはゐないであらう。政治の黃金時代、政治狂、民衆煽動家にとつての黃金時代は正に開けんとしつゝある。

暴力の横行さへも、もとより政治熱の勃興と無交涉ではあり得ない。暴力は今は政治生活の常識である。日々の新聞紙が、暴力横行を傳へること既に數年である。それはたゞに權力的暴力だけではない。トルストイの所謂組織されたる暴力だけではない。組織されざる暴行、、、、、音もまた頻々として人の耳を打つ。今日は政治熱の昂揚時代であるとともに、また×××の大國時代である。××を擊つのは民衆の歡呼をうけ、無政府主義者を絞めるものはその恩賞付に及ぶ。××は重きがごとく輕きがごとく、××は法律の及ばざる高きに立つ。ソレルでなくて、政治熱がこれを肯定するのだ。或は更に他の何れのものかゞそれを呼びもとめてゐるのだ。

、、、、が議會を解散して、政戰はその第二陣營にと進められた。政府は選擧干涉をなすべく百官有司を率ゐてこゝ

にある。民軍と稱せられるものは運動費の山を積んで彼所にある、總選擧は無前の激烈さを見るであらう。黄金と黄金、暴力と暴力、舌と舌、筆と筆、そして更に足と足と相擊つ。一場の壯觀でないと誰がいゝうるものか。

何處からきて何處へ行かんとするか。政治家等は、高名の智者達は、しかし民衆の車を何處から何處へと輓き行かんとするか。

曰く特權階級打破、曰く貴族平民の戰ひ、曰く政黨政治の確立、曰く政憲擁護、曰く僞黨打破、曰くデモクラシイの徹底、曰く普通選擧。曰く不當解散。旗印はその多きに苦しむでゐる。民衆は戰ふべきか。旗は進むべきか。

二

解散不當を叫ぶものがある。一場の選擧演說としてなら、私たちは何だともいふべきものはないのだ。解散にはしかし當もなく不當もない。解散は憲法上の大權事項である。大權に向つて解散を奏請する。天皇を輔弼するものゝ隨意である。何時、如何なる場合に行ふべきかも、彼の隨意である。そは議員にとつては常に懲罰である。懲罰に非ざる解散はありえないのである。そは戰ひの方法である。何時、如何なる時に解散を斷行するかは、一つの戰術の問題である。從つて當もなく不當もない。巧と拙とがあるのみである。

民意は何れの側にあるか。それは一つの博奕である。選擧によつて何れの政黨が多數を占めるかを試みんとすることは一つの博奕である。地震の豫言よりは危險である。何人も半人半獸の內閣が多數を制しえずとは斷言することはできないのだ。議員の三分の二が半人半獸內閣に反對したことを私は無視してゐるのではない。その三分の二が果して何の權威ぞやと私は問ふのである。買はれたる議員が民意と何のかゝはりがあるかと私はいふのである。若し民意なるものを代表することができると したら、私はジエエムス・ブライスの言葉を思ひ出すであらう。彼が亞米利加的デモクラシイの研究者として、權威であることは何人も異議を挾まない。數百の代議士よりは、一人の大統領が、より多く民意を代表すると、

人々は新聞紙の論調によつて輿論の方向を知るといふ。新聞紙は輿論であるか。輿論を代表するか。ニイチエの言葉でいはう。それは一つの泡沫―Galle―ではないか。

政府は必ず選擧干渉を行ふであらう。公平なる選擧を行ふためにこの内閣ができたのではない。選擧干渉のためにできたのである。選擧干渉を行へ。そして仆れよ。何人も、政治家である限り、この内閣の選擧干渉を非議することはできない。原内閣も、大隈内閣も、有名なる選擧干渉の内閣であつたではないか。その内閣のもとに選擧を爭ひ、その庇護によつて當選し若しくは落選したものは、今日選擧干渉を口にすることを許されてはゐないのだ。たゞ選擧干渉と戰へ。この人たちをして眞に選擧干渉の苦きを知らしめるだけでも、それは決して無用の仕事ではないのだ。「公平なる選擧」なるものがあるとしたら、それはかくのごとき意味においての選擧干渉そのものゝ別名であるのみである。

人々は戰ふべきか。旗は進むべきか。」

三

特權内閣打破、特權階級打破。

政治家の耳は長い。汝、高名の智者達よ。清浦内閣は誠に特權内閣である。その後楯としての研究會は誠に特權ある一團である。貴族内閣は倒すべし。貴族對平民の戰は、後れたと雖も、必要あらば戰ふべし。

加藤高明は貴族である。加藤高明を打破すべし。

山本内閣は、貴族、閥族、官僚、軍閥の内閣であつた。加藤友三郎内閣もまた然りであつた。山本内閣に對して、好意若しくは惡意の中立を標榜したものが、そしてまた加藤友三郎内閣に好意若しくは惡意の中立を標榜したものが、何の顏あつて清浦内閣を特權内閣といふや。

エゼルの諸公、權力賤民の諸君、そしてまたこれ等のエゼルと權力賤民とを圍繞する數百千の白痴の諸君、公等の矛盾を指摘することが私の任務ではない。私は高橋是清が爵位を放擲したことをたゞ冷笑しようとするものでもない。

そはたしかに賢き芝居であるのだ。ihr berühmten Weisen!——武藤金吉を感泣せしむるに足るべく、汝の決心は悲壯なものであつたのだ。政治は、本質において利益である。民衆の前においては芝居である。煽動劇である。榮爵！其は汝が一生を捧げて贏ちえたる名譽である。名譽はしかし民衆がこれを崇敬する時に名譽である。民衆がこれを憎惡する時において不名譽である。今日は、高名なる智者がよくこれを知るであらうごとくに、爵位の効用は既に枯れた。爵位が時代の變遷とゝもにそのファンクションを失ひ盡くしたのだ。弊履である。弊履を弊履のごとくに捨てゝ、尙ほ武藤金吉を感泣せしむるとしたら、感泣するものも、せしめるものも、ともに緞帳役者ではないのだ。

君は爵位を捨てた。それが君にとつての約束なのだ。爵位を捨てゝ、君はしかし天空快濶を感んずるか。君は平民に歸つたといふ。平民か素町人か。平民に歸つたのではない。素町人に歸つたのだ。純なるブルヂョアに歸つたのだ。ブルヂョアが貴族の列に入ることは、ブルヂョアの勝利ではない。貴族への降伏である。君は今ブルヂョア出戻りである。ブルヂョアがこゝに喝采する。君はしかし弊履を捨てたのみである。君にとつて本質的なものは鐚一文も損失になつてはゐないのだ。大厦高樓の平民よ。君は力をもつ。權力をもつ。在野の政客ではない。在朝の客である。

君が幾何の財産をもつかを私は知らない。私はしかし君が財産を放棄したことを知らない。君の財産は君のものである。それとゝもに國家のものである。國家の保障、法律の保護なくして君の財産はありえないのだ。その國家、その法律は、しかし財産なくしては存在しない。財産なく不正義なし、ロックのいふたことはユウクリッドの幾何學よりもたしかである。

今日は國家萬能の時代である。國家萬能の時代においては、法律は力である。文明の時代は法律が力である時代である。ブルヂョア國家においても、プロレタリヤ國家なるものにおいても、文明は法律を力とする。プロレタリヤ國家は、頭を地にして歩るく。法律が財産を規約せんとする。唯物史觀の信者が、唯物史觀を逆立せしめて、法律によつて財産を征伐しようとする。財産敗るゝか××破るゝか。それは尙ほ露西亞の將來に讓ることとするも可なりである。ブルヂョア國家ではしかし財産は××を越へる。××はこゝでは紙幣である。經濟的權力は正貨準備である。正貨準備なき法

律は、力ではない。パピアマアクである。

君よ、病氣は君の「榮爵」にあつたのではない。君の冠木門の柱一本なりとも放棄せよ。君がその冠木門の柱一本たりとも放棄せざる間は、君の權力には微動だもないのだ。私たちはそれを特權階級と名づけるのだ。貴族であるとないとは、私たちにとつては、そして恐らく君自身にとつても、弊履を投げ捨てると否との問題なのだ。貴族は今やその職分を使い盡くした。ファンクションしないのだ。鳴かざる鶯なのだ。鳴かざる鶯は特權階級ではない。君よ、今日は一人の老耄貴族と、紙屑貴族の集合であるにしか過ぎない內閣が、特權階級の內閣であるのではないのだ。君と、君の代表する政友會とが特權階級なのだ。支配階級は彼に非ずしてこゝにある。君、特權階級打破を叫ぶの勇氣があるか。然らば君と、君の代表する政友會とを打破すべし。

總選擧の結果がどうなりゆくかを私は知らない。暫らく憲政會のいふことを聽く。憲政會は必ず議會の比較多數黨たるべし。十年の苦節が酬ゐられるの秋がきたと。加藤高明の演說である。或は然るかも知れぬ。然らざるかも知れぬ。憲政會が、幸か不幸か、比較多數を制したとせよ。安達謙藏が選擧の神になり、加藤高明が、宿昔の志を滿たして、宰相の印綬を帶びたとせよ。そうあらねばならぬ。そうありたきである。憲政會も、加藤高明も、大杯を擧げてその喜びの歌を歌ふべきである。

その時である。今日の政戰の意義が明瞭にされるのは。

私は、加藤高明に對して好意も惡意もない。彼は今日の政戰に最も適した役者である。彼こそ立役である。憲政の神は、尾崎であるよりは、犬養であるよりは、彼において最も應はしい。またそれゆえに、「特權內閣」なるものを打破した後においては、彼こそ內閣の首班たるべき最高最適の政治家である。何故なら、彼は、日本一の富豪岩崎家の女婿であるからである。

その時である。日本において財產と法律、ドミニユウムとイムペリユウムとが完全に一致するの時は、またその時である。階級鬪爭が政戰の舞臺に彼自身を意識するであらうのは。加藤高明內閣である、階級鬪爭の戰士が兩腕を撫して

待つてゐるであらうのは。

階級鬪爭は今日の政戰においてゞはない。今日の政戰は、直接には、階級鬪爭とは何のかゝわりもない。階級鬪爭は、寧ろ今日の政戰の終るのを待つてゐるのだ。

民衆戰ふべきか、旗進むべきか。

四

エゼル等よ、高名の智者等よ。政黨政治の確立、議會主義、憲政擁護、國民運動。公等のいはんとすることは既に民衆の耳に胝いた。十年また數十年、公等の叫びは一日のごとくであつたのだ。苦節十年また數十年ではない。反覆十年なのだ。食言數十年なのだ

犬養毅、オ、憲政の神！公は陣頭に立つて特權内閣、貴族内閣の打破を叫ぶ。厚顏なる哉。昨日まで、特權内閣、貴族内閣、閥族内閣の同卓會議に列したものが、今は起つて憲政擁護の神である。權勢擁護の神、犬養毅を倒すべし。

憲政會もまた陣頭に立つ。憲政會とは何ものぞや。同志會の別名である。同志會とは何ものぞや。桂内閣の陣門に降つて、特權内閣の御用黨として天降り的に組織せられたるもの、政權と金權の産物こそ同志會、そして憲政會であつたことを、何ものの健忘症が忘れようか。手を翻せば雨となり風となる。當年の憲政會は今日の政友本黨である。彼は桂内閣の忠僕として成立し、是は清浦内閣の番犬として組織さる。彼が是を笑ひ、是を難んず、めかけざるがはなかけざるを笑ふの類でなくて何んであるか。彼是交々憲政擁護を叫ぶこと十年また數十年、憲政は反覆十年また數十年である。憲政擁護すべくんば、清浦内閣一蹴すべく、御用政黨政友本黨打破すべし。また從つて桂内閣打破すべく、御用政黨憲政會打破すべし。

第一憲政擁護運動を回顧する。最初の一歩から最後の一歩まで、みなこれ恥辱と僞瞞の記錄である。尾崎、犬養よく笛ふき、民衆また隨所に踊つたことを私は決して忘れてゐるのではない。政治家等よ、エゼル等よ、ihr beruhmtn w

る。」汝等は常に笛ふく。汝等の笛はしかしミダスの神の聲である。憲政の神の聲ではなくて、ミダスの神の聲である。買はれたる神よ、賣らんがための笛よ、賣らん哉、賣らん哉。清浦に賣らんか、權兵衛に賣らんか。第一憲政擁護運動は權兵衛に賣つた。當年の政友會、民衆の踊りと尾崎の笛とを、權兵衛に賣つて十年政界に蟠居してきた當年の政友會が、今また憲政擁護をいふ。高橋是清の「弊履」と民衆の踊りとを 公等は今何人に賣らんとしてゐるのであるか。虛僞に始まつて虛僞に終る政治家等よ。汝等の智覺を盡くして民衆を欺き、民衆を賣り、民衆を失望のどん底へと落とせ。汝等の智謀は最早や涸渇しつゝあるのではないのか。智嚢を養つてよく民衆を欺け。民衆は、政治的民衆は、汝等に欺かるべく待つてゐるのだ。政治的民衆が欺かれ盡した時に、他の新らたなる民衆が代るであらう。

五

政治家等よ、自稱政治家等よ。私は清浦内閣とその與黨とには何ごとも今いはうとはしない。彼等を信んずる何人もゐないからである。

汝等は自ら國民の代表者だといふ。ナポレオン三世が自ら國民の代表者だといふた。議會の小驢馬等よ、ナポレオン三世は、議會の小驢馬等に告げて意氣軒昂、われは佛蘭西國民の代表であるといふた。汝等はこれを傲慢だといふか。汝等自らを顧みよ。汝の良心に問へ。神に誓つて、自ら國民の代表者なりと斷言しうるものがたゞの一人でもありうるかを思へ。

國民代表の理論は十八世紀の遺物である。今日の政治學は、最早やかくのごとき陳腐なる理論を奉じてはゐないのだ。ファンクションの原理について思へ。人が人を代表することが可能であるか。意識の中心としての人を、意識的活動の統一者としての自我を、若しくは無意識の奥深くに根ざしたる生命を、最高にして不可分なる個體を、抑も何人が代表しうるといふか。代表することのできるものは、不可分ならのではないのだ。プラトオの理念、ゲェテの詩、シェクスピイアの劇を、抑も何人が代表することができるのか。代表することのできないのは、人格が不可分だからである。意

識的、若しくは無意識的生活の中心だからである。人格は一般化ではなくて特性化であるからである。各々の特性はそれ自身によつてのみ代表せられる。他の何ものによつても代表することはできぬ。

代議士が高名の賢者であつても、若しくは無名の愚者であつても、それは私の問ふところではない。彼も此も、ともに自己以外の何ものをも代表することはできないのだ。僞瞞をやめよ。十八世紀末の、國民代表僞瞞學說を土とともに葬れ。

金錢の代議士等よ、國民の代表者なりと潜稱する代議士等よ、ウオルト・ホイツトマンの the never-ending audacity of elected persons —— 私は政治の腐敗をいふてゐるのではないのだ。政治の腐敗してゐることは、尙ほ貴族の息子が馬鹿息子であるごとくに、天日のごとく明らかなる事實なのだ。否、華族の息子と馬鹿とが不可分であるごとくに、政治と腐敗とは不可分なる二つであるのだ。

歷史を一瞥せよ。政治があつて腐敗があつたのではない。腐敗があつて政治があつたのだ。腐敗がなかつたとせよ、われ／＼の世界が、昔ありしごとくに原始共產時代であつたとせよ、小國寡民、使有什伯之器而不使。政治の社會的需要が存在しなかつたのである。こゝに大制不割。高名の智者は、踊らんとしてゐることができなかつたのである。

階級がそれ自身を知り始めた時に、政治が自らこの世界に生れてきた。階級は腐敗を意味する。階級は金の階級である。ミダスの階級である。神々が死んで、フエチシズムが生れたのである。政治の社會的需要、權力の社會的需要は、こゝにその一半の根據をもつ。他の一半は大社會の成立である。隣保組織が破れて、都會社會が出現する。こゝに政治の社會的需要の、他の一半の根據が存在するのである。大社會は、しかも金の社會である。金製社會である。政治の社會的需要は、それゆえに金とともに始まるのである。金の金によつて、金のために、政治が存在するのである。政治はそれゆえに腐敗とともにあるのだ。腐敗あり、政治があるのだ。腐敗なく政治なし。ロツクを眞似ていへば、尙ほユウクリツドの幾何學のごとくに正確な命題なのだ。

アリストオトルは政治と論理との一致を說いた。特權階級の論理なのだ。權力の擁護、財產の擁護、都會民、ポオリ

ス、そして同時に奴隷制度の辯護なのだ。政治のために辯んぜんとするものは、アリストオルトを地下に起して、清浦内閣を、特權階級を、自由民を、憲政擁護を、そして今日の賃銀奴隷制度を辯護せしめよ。

事實はしかし曲學の徒もこれを曲げることはできぬ。希臘において、羅馬において、政治の腐敗を見よ。特に政治が最高潮にまで達した羅馬について見よ。フオラムの驢馬は、民衆の前に口笛ふく代りに、寧ろ正直にも、フオラムを株式取引所とまで化せしめたのではなかつたか。

私は今日の政治の腐敗をいふてゐるのではない。今日の政治の腐敗を非難するほどに、私は明日の政治について、何んとかを期待してゐるのではないのだ。

高慢なる代議士よ、若しくは代議士たらんとする人たちよ。汝等が國民の代表者でないのだと私はいふてゐるのでもないのだ。汝等のごとくに國民から遠いものはないと私はいふてゐるのだ。その遠さは無限大である。國民から無限大の距離に、清浦内閣と、白薔薇黨とが存在する。何れが近くもなく、何れが遠くもない。國民の答はたゞ一つである。君を否定し、彼を否定すると。

君はしかし國民から遠いばかりではない。國民の敵である。國民は君のために幾度賣られ、幾度欺かれたか。

ちやんちやら可笑しい。清浦内閣が「選擧の公平」を標榜することがちやんちやら可笑しいごとくに、君が白薔薇をかざすことが、ちやんちやら可笑しいのだ。選擧公平が選擧干渉であるごとくに、白薔薇は國民の敵、賣民の標象なのだ。

六

汝等は尚ほ政黨政治、議會政治を口にするであらう。

議會政治とは何にぞや。代表政治とは何にぞや。政治的デモクラシイとは何にぞや。更に政黨及び政黨政治とは何にぞや。

アゼンスの評議會はない。國民集會は直接民主主義である。近代的民主主義は常に議會制度である。その極致にパアラメンタリズムがある。政黨政治が横はる。勿論それは國情によつて樣々の形をとつてきた。時の推移は、凡ての近代民主主義を、議會政治、政黨政治の方向へと引付けてきたのだ。議會中心である。三權分立といふと雖も、それは一場の法律論である。モンテスキユウの理想は、米合衆國において僅にその片影をとどめてゐないことはないが、それさへも、日一日と變化して、三權分立は今は有名無實である。議會中心はしかし同時に内閣中心である。内閣が上にあつて號令する。議會が下にあつてその手足となる。内閣と議會が別個の機關であるのではなくて、議會は内閣の立法機關である。言葉を適切にいへば、内閣の喝采機關である。それはまた同時に政黨政治である。議會政治とは常に政黨政治である。政黨の首領が内閣に列し、陣笠が議席にあつて その首領のために 喝采し、野次り、演壇を占領し、首相の演說草稿を略奪し、憲政擁護はこゝにありといふのだ。憲政擁護はしかしたゞ岡本一平の漫畫材料であるのではない。それは權勢擁護なのだ。權勢は利益である。政治が、民衆の表面においては煽動劇、本質においては利益であるといふたのはこのことである。

議會制度は近代文明とともに生れた。ルネサンスとともに生れたのである。シモン・デユ・モントフオオトは、代表制度の發見者である。その發見は都會民のためになされた。都會民は所謂デモクラアトである。Ein Bauer ist nicht Demokrat—— 農民はデモクラアトではないのだ。謂ふところのデモクラシイとは都會民の制度である。その精髓は商業主義である。工業主義は一層にこれを强めた。

領土的財產の時代においては、謂ふところのデモクラシイは存在しない。小國寡民は、謂ふところのデモクラシイを必要とはしない。商業主義の勝利、都會民の膨脹、大社會の要求は、謂ふところのデモクラシイとして、代表制度、議會制度を要求したのである。

私はアダム・スミスがいふたことをも、ダナイストのいふたことも、否定しようとしてゐるのではない。彼等に從へば國王が議會制度を許るしたのは、貴族の間における國王の權力を維持し、または强めるためであつたのだと。それはし

かしたゞなる王、甲の王、乙の王、個人的の意圖であつた以上に、議會制度の原因としては深き意義あるものではないのだ。事物の眞髓に徹せよ。中世紀的小社會生活と議會制度とは何のかゝわりもないのだ。中世紀生活のうちから議會制度が生れたのではないのだ。中世紀生活が商業主義によつて打破されんとした時に、大社會が小社會を征服せんとした時に、議會制度が必然の産物として生れてきたのだ。

商業主義の勝利は二つのものを結果する。階級と大社會とがそれである。富が一方に集中する。都會はその場所である。こゝに階級がある。商業は故郷を知らない。大社會の要求である。こゝに階級壓迫の機關が必要である。こゝに中央集權が必要である。

政治が壓迫的であると論んずることは私のよくするところではない。政治と壓迫とは不可分である。清浦内閣、貴族内閣、閥族内閣、官僚内閣がそうであるばかりではない。白耆微政治もまた同樣に、若しくはそれ以上に壓迫的なのだ。ロシヤのチエツカを見よ。勞農政治に尙ほ自由を見出さんとするものはロシヤへ行け。バクーニンの「國家と無政府」、ペルウチエの Histoire des Bourse du Travail が、オエルテルのサンヂカリズム論が、ボロボイのドストエスキイルについての書物が、そこでは發賣禁止なのだ。英國の勞働黨内閣にしても、五十歩百歩なのだ

大社會は壓迫を必要とする。壓迫なく階級なきごとくに、壓迫なく大社會なし。否、大社會とは、壓迫の必要とともに、壓迫の必要によつてのみ生れたのだ。

商業主義あり、經濟的權力の集中あり、政治史はこゝに生れる。中央集權であることが政治の本然の姿である。中央集權なく、大經濟生活なく、大社會なく、所謂デモクラシイなく、議會制度なし。

コムマアシヤリズムの自由のために政治上の自由が要求される。大經濟生活のために政治的デモクラシイが要求される。大國家主義地域的集中が、經濟的集中に對應する。economical Centraliz tion があり、Geographical Centralzation Nationalization がある。地域的集中制度こそ大國家制度、中央集權制度であるのだ。

英國では議會が政治の中心となつてから二百五十年になる。その間にサクソンの地方的自由の傳統が尙ほそのありし

目の面影を殘してゐないことはない。ノルマンの中央集權的政治はしかし議會政治の形において國民的地域的集中をその經濟的集中のうへに築きあげた。亞米利加においてもそうである。コンモンスのいふごとくに、代表の目的は國民派、若しくは國家化——nationalization——にあるのだ。亞米利加の歷史を一瞥せよ、國家の成立は三階段をなしてゐる。植民地、植民地聯盟、合衆國がこれである。こゝに國民議會が要求されたのだ。伊太利について見よ。サルデニア憲法における代表制度こそ伊太利統一の先驅なのだ。獨逸においても、その憲法は國民的運動とともにもちきたされたのである。

　資本主義のあるところ大社會なきはなく、大社會、資本社會のあるところ代表制度の存在せざるはない。エドマンド・バアクのごとき資本主義の代表的政治家が、ブリストルの選擧民に告げていふた有名な宣言は、議會政治の資本主義的精神の代表的宣言なのだ。

　デマゴオグよ、汝はブリストルの選擧民を代表せずして、英國國民を代表するといふか。英國國民とは何か。ブルヂヨア階級、都會民、——金錢閥の利害を代表するといふの卒直は、汝の僞善のために拙き政策であらう。それがしかし清浦內閣の「選擧の公平」と何の選むところがあるか。選擧が公平にして官權が選擧界を壓迫し、デマゴオグが「國民を代表」して國民は賃銀奴隷にと落ちた。

　議會政治を謳歌するもの等よ。階級合唱の議會政治を謳歌せよ。階級壓迫を謳歌せよ。中央集權を謳歌せよ。そは汝等の利益と喜びとを半永遠にするための、階級合唱の機關なのだ。

七

　荒唐無稽なることは、獨り政治の舞臺に限られてはゐないであらう。けれども政黨と民衆との一致を、若しくは同一視を說く位ひ荒唐無稽なことはあるまい。

　政黨的政治家が、政黨政治をもつてデモクランイであり、民衆のための、民衆の、民衆によつての政治であると說く

ことは自己製造自己販賣である。民衆をして尙ほこれを信んぜしめるところに、今日の政戰におけるトリックがあるのだ。

政黨とは非立憲である。政黨員の諸君が、官僚内閣を非立憲だといふてゐるが、政黨は凡て非立憲である。憲法上の如何なる機關でもないのだ。

政黨はその非立憲であるところに强味をもつ。上からの制度でなく、民衆の制度であるごとく見ゆるところに、政黨の魅力がある。十字軍が、一人の大將もなくして起つたように、政黨もまた一人の大將もなくして起るものゝように、人々は尙ほ考へてゐる。大いなる誤謬である。嘗つて眞實に民衆の間から起つた政黨はないのだ。米國における政黨―― extra constutiol organization ――が生れたのは、コウカス・クラブの間からである。一つの社交團體、一つのブルジョア精神のうちから生れたのだ。社會黨、社會民主黨、勞働黨、若しくは共産黨のごとき團體であつても、民衆の間から生れたのではなくて、首領の智嚢から生れたのだ。

人々は貴族政治を寡頭政治だといはんとしつゝある。私はそれに反對しようとする如何なる意圖もないのだ。政治はしかし常に寡頭的である。寡頭的でなくして政治なるものがあるか。政治とは中央集權の作用である。ボルシエウヰキの用語によれば、Zentralisierte Okonomie なのだ。中央集權は寡頭的である。地方的分權を打破して中央集權を要求する政治の原理が、若しも寡頭政治を要求しないとしたら、アウグスツスの墓石のうへに、人間の自由が生れるに至るであらう。奇蹟を信んじて奇蹟を行つたのは古代人である。現代の政治家は、奇蹟を信んずることなくして奇蹟を行はんとす。自ら寡頭政治を要求しつゝ、旗を高く揭げて、民衆に告げていふ、寡頭政治を打破すべしと。

エゼル等はいふ、日本における貴族の數は一千人である。一千人が國民を支配せんとすると、公等はアベエ・シイエのことを知るや。シイエは民衆に告げていふた、國王の權利と人民の權利とは、一對三千萬の方程式をもつて對照することができると。大正のアベエ・シイエ等よ、公等は國民の何千萬人を代表するや。

選擧民の數は今日三百萬である。六千萬人中の三百萬である。そして一方に普通選擧に反對するものが自警幟を揭げ

る。私はそれをいはうとはしない。買はれたる投票は、三百萬人であつても六千萬人であつても、神の前には同一である。

　政黨そのものゝ組織について見よ。政黨のごとくに寡頭的、政黨のごとくに英雄崇拜的なものがあるか。上に總裁と稱する萬能者がある。獨裁王である。加藤高明、高橋是清、みなこれ獨裁王である。獨裁王を圍むで、總務あり、院內總務あり、顧問あり、相談役あり、幹事長あり、黨務委員長、同副會長あり、政務調査會長、同副會長、理事、部長あり、また幹事あり、そして一般代議士あり、院外團あり、院外役員あり、かくのごとき官僚制度がまたとあらうか。總務、院內總務等々の高級役員、ビユロウクラツトは總裁のために太鼓を叩き、下級役員はまた總務のために平身低頭する。かくのごとき奴隷制度がまたとあらうか。

　獨りブルヂョア政黨がそうであるばかりではない。謂ふところのプロレタリア政黨にしても、何の撰むところもないのだ。ボルシエヴヰキについて見よ。オルビユロウあり、ポリビユロウあり、地方執行委員、中央執行委員あり、執行委員長あり、ロオザ・ルクセンブルクの言葉でいへば、卓子の前に腰掛けたる一握りだけの人間が、全黨員に、そしてまた全國民に號令するのだ。ラサアレを見よ。彼は勞働者の煽動家としては誠に天才である。六頭の白馬に牽かせたる馬車に乘つて、大統領として伯林に進入することが、若き多血なる勞働煽動家の胸に秘められたる理想であつたのだ。日本の貴族の數は千人だといふ。米國議會を動かすものは七人の委員である。英國における下院指導者、そして同時に「陛下の反對黨」を代表するフラント・ベンチの政治家が、如何に絕大の權力をもつてゐるかを見よ。ナポレオンの權力は、今やフラント・ベンチに移されたのだ。フラント・ベンチを合唱する政黨員の諸君、高橋是清、加藤高明、犬養毅の鞭の諸君、政黨は尙ほ寡頭政治ではないといふか。

　フオン、オオベンか。フオン、ウンテンか。下からの社會、下からの組織とは、自己支配である。政黨寡頭制ではなくて Selbst-herrschaft である。政黨組織ではなくて隣保組織である。

政黨はブルヂョアの非立憲的政治制度であるのだ。バアクのいふごとき公益のための政黨は、未だ世界の何處にも生

れたことはないのだ。凡ての政黨はノアクッションである。朋黨である。朋黨に非ずんば政黨ではないのだ。これはブルヂヨアとゝもに生れ、ブルヂョアとゝもに滅ぶべく運命づけられてゐるのだ。

寡頭政治打破すべくんば、政黨打破すべし。政黨政治打破すべし。

政黨は、カウツキイの指摘したごとくに、階級そのものではない。一つの階級は尚ほ幾つかの政黨に分裂する。宗教のごとき、民族のごとき、若しくは首領の權力爭奪のために、政黨は階級を分割する。政黨はしかし階級を超えることはできない。階級代表は凡ての政黨の根本原理である。權力爭奪なく、階級代表なく、政黨なるものはありえないのである。

議會階級代表の立憲的機關である。政黨はその非立憲的機關である。大國家、中央集權、大社會、資本社會においては、議會はその中央公定機關である。資本主義の公設市場である。政黨はその非公設機關である。われ〳〵は政黨によつて支配せられた――グウドノオの政治學にいふた言葉は、われ〳〵と政黨との關係をよく道破してあまりあるのだ。政黨が支配し、われ〳〵が支配せられる。民衆よ、翫味せよ。政黨の支配することは、民衆の支配することではないのだ。民衆が支配されることとなのだ。政黨は民衆の組織ではなく、民衆の支配者である。征服者である。更に絞取者である。民衆を僞瞞しつゝ、民衆を煽動しつゝ、政治家等は、白薔薇を胸にかゝげて、六頭の白馬に牽かせたる馬車に乘つて帝都に入らんとす。大小のラサアレ等よ、汝の白薔薇は、國民の血をもつて染めんことを願つてゐるではないか。

八

民衆戰ふべきか。旗進むべきか。大小のエゼル等、高名の智者等は、聲を勵まして高く國民の前に訴へつゝある。民衆欺かるべきか。賣らるべきか。私は民衆が如何なる態度に出づるかを知らない。政治的マラリヤ熱は、凡ての民衆を燒き盡すかも知れない。民衆燃えよ。燃えんとする時に燃えよ。欺かるゝもよし。賣らるゝもよし。燃えん哉。踊らん哉。

今日は政治の黄金時代である。政治熱は尚ほ幾何かを續くであらう。政治家等は、民衆の煽動家等は、今日における最もよき踊手である。今日に最も適したる踊手である。彼等をして自由に踊らしめよ。民衆をして政治の眞價を體驗せしめよ。民衆よ、躊躇なく政治に行け。朝甚除、田甚蕪。政治勃興して田園荒蕪せん。これ政治のたゞ一つの收穫である。田園をして荒蕪せしめよ。これ勢である。人民が、民衆が、そして新らしき民衆が、眞に彼自身を意識し始めるのはこの時なのだ。黎明と日とがこゝにつゞくのだ。人民はこゝに人民である。政黨の玩弄物でなくして眞に人民である。無偏無黨、王道蕩々は王のことではないのだ。

英國勞働黨と經濟組織の革新

堀江歸一

（一）露國承認の效果——勞働黨の本色は別に在り——ウエッブ・スノーデン、トーマス、ホッヂス氏等の著作——（二）サウスポート大會の決議——九個條の社會改造案——資本徵課金制度の提唱——租税制度の刷新論——國有政策の主張——（三）財政整理と資本徵課金制度——英國戰時財政の結末——公債に伴ふ弊害——勞働黨獨特の見解——スノーデン氏の說明——有閑階級撲滅の必要——（四）公債減却法としての資本徵課金——國民的負擔分配の公正——有產者と無產者との間に於ける不公平——資本徵課金に對する反對論とスノーデン氏の駁論——資本徵課金制度の實行的能否——ペシック・ローレンス氏の意見——（五）勞働黨の租税政策——四個條の原則——ポーツマス勞働黨大會の決議——四個條の決議と實際上の適用——英國消費税の負擔に關する狀態——所得税並に相續税に對する勞働黨の意見——相續に對する制限と社會改造——相續税と個人の機會均等——（六）勞働黨と經濟組織革新——一九二三年三月より七月に至る下院の資本主義論戰——資本主義撲滅決議案——スノーデン氏の說明——クラインス氏の意見——社會主義成效の三條件——ウエッブ氏の國民的最少限度政策

（一）

英國の勞働黨內閣が政局に當つて、何日を經たか、經ない內に、露國の勞農政府を承認することを中外に宣明したのは、誠に水際立つた手際であつて、如何にも情實に拘泥せず、行掛りに束縛されず、大膽率直に平生の所信を敢行する勞働黨の面目の正に發揮されたものとして、私の稱讚を禁ずる能はざる所である。蓋し從來の如く世界の諸國が一の露西亞を孤立の狀態に置き、露國民生をして再起の見込なきまでに疲弊せしめる一方に、歐洲諸國亦露國の天然資源の閉塞されることに依つて、經濟復興の機運を速進する妨碍を招いたと云ふが如き、啻に人道上に於て、非難されるのみならず、經濟上に於ても、亦愚を極めたとしなければならなかつた。英國勞働黨內閣が此點に於て、斷乎たる處置に出で、世界列國に向つて、嚮う所を示した

のは、近來の一快擧たることを失はない。思ふに今後他の諸國も亦英國の爲した所に倣つて、稍々露國承認の態度に出るであらう。而して之に次いで行はれ可き所は從來よりも堅實なる、又永續する基礎に於て、諸外國と露國との間に通商を開始することゝであり、又諸外國の資本を露國に放下して、其富源を開發し、以つて露國の民生に生活上の安定を與へると共に、諸外國も亦對露債權を有効のものにし、又露國富源の開發に依つて、利益に浴することゝである。兎に角對露關係に一の光明を投げた一事は勞働黨内閣成立當初の一成效とするを得るであらう。

然しながら、勞農露西亞の承認と云ふが如きは、勞働黨内閣としては、其小手調ともす可きものに過ぎない。假令ひ國際間に影響する所は甚大であり、又對露經濟關係の決定される狀況に依つて、意外の波瀾を國際經濟上に生ずるか、測り知る可からざるものがあるとしても、勞働黨としては、年來の行掛り上、年來の懸案に屬して、解決されなかつた問題に、解決を下したに止まり、唯、人道上の要求に一致した所業に出でたことを以て、異色とするのである。随つて勞働黨としては、斯る時局の問題を解決した故を以て、滿足す可きものでないと共に爲す可き所を盡したものでもない。勞働黨にして今回の如く政權を掌握したからには、之を機會として、爲す可きの事業、施す可きの政策は社會幾多の方面にあるのであつて、次第に依つては英國の經濟組織に一大革新を加へる機會に接するに至るかとも思はれるのである。勞働黨が在野時代に於て、主義の宣傳に勉めたことは、他の如何なる政黨にも譲るものなしとされた。勞働黨が現下の諸問題に對して、如何なる意見を懐いてゐるか、其黨議を以つて、如何なる政策の實行を希望してゐるか、自黨の天下となつた曉に、如何なる新社會を出現せしめようと期して居るのであるか、是等の點に於て、勞働黨の所見は既に世間に向つて、公表されてゐるのであつて、唯之を實行するに就て、如何なる手加減の施されるかゞ、實際の問題と爲るのである。

而して私が勞働黨内閣に於て、フヰリツプ、スノーデン氏の大藏大臣に爲り、又シドニー、ウエッブ氏の商務院總裁に爲つたことに、多大の興味を覺へる。其外に首相のラムセー、マクドナルド氏にしても、殖民大臣のジエー、エッチ、トーマス氏にしても其れ〴〵著作があり、殊に後者の「勞働の支配する時」と題する一書の如き、最も痛切に勞働黨の信條を論述したものと認められるし、勞働黨員で黨の推薦に依つて、オックスフオード大學のラスキン、コーレッヂに送られて、正則の修學を遂げたフランク、ホッヂス氏の如きは、炭坑國有其他の問題に就て、勞働黨の意見を發表し、專門學者をして三舍を避けしめる

の學殖を示した事實の生々しきものがある。私は今、スノーデン、ウエツブ、トーマス三氏の著作中、最近三四年の間に發表されたものを涉獵し、諸氏の財政經濟に對する意見を知るの一助に充てたいと考へる。蓋し是等の諸氏は單に在野時代に於て、處士橫議の態度を學んだ次第ではない、一朝の風雲に乘じて、臺閣の人と爲つた時に、直に移して實際の政策に充てる考の下に、言論に從つたと信ぜられるからである。

(二)

第一に私の揭げたいと思ふのは、千九百十九年サウスポートに於て開催された第十九回勞働黨大會に於て、スノーデン氏に依つて提出され、滿場一致の下に可決された決議であつて、其要領は左の如くである。

戰爭は巨額なる公債を國民の負擔として遺し、其元利金を支拂ふには、年々多大なる收入の徵收を必要とする。此財政的負擔の存續は產業上並に社會上の改造に對して、大なる妨碍と爲るものであるから、其結果として、國家財政に對して、徹底的改革を加へ、租稅制度に果斷なる改良を施す必要を生じた。而して戰時私人の暴利獲得は到る所盛に行はれ、巨額なる私人の財富は私的搾取に依つて、蓄積された事實に顧み本會は左の諸項を決議する。

第一、歷代政府が戰時財政を處理する爲めに、施した政策は非難す可きものである。不必要なる高利を拂つて、巨額の公債を發行し、斯くて假想的信用を起し、其結果租稅の收入に依つて、永久的所得を收める階級を出現せしめるよりは、政府は戰時蓄積された富に對して、將に重稅を課する健全なる政策に依賴す可きものである。

第二、國債を減却し、併せて成る可く速に國庫收入を解放する目的を以つて、資本徵課金制度を實行し、例へば一千磅以下の財產に負擔を免除すると共に、其以上の財產には累進的負擔を加へ可きである。

第三、國庫の收入は土地、蓄積された富、所得並に利潤に對する租稅に依つて、徵收され可きであつて、斯る租稅として公平のものたらしめるには、相續稅を徹底的に增率し、金額の大なる所得に重率を課することを必要とする。

第四、租稅をして生活の必要物を蠶食したり、多數人民の生活標準を低落せしめたりするように、賦課してはならない。隨つて食料に對する總ての租稅は廢止され可く、所得稅の最小限度は二百五十磅に引上げられなければならない。

第五、國家の租稅は貿易保護の爲めに、用ひられ可きもので

ない。蓋し保護關稅は必ず生活費を增加し、暴利獲得に便利を與へ、國際間の惡感を挑發するからである。

第六、暴利獲得者の利益の爲めに、人爲的に輸入貿易を制限する商務院の不公正なる政策は單に内面の物價を人爲的に騰貴せしめるに過ぎないのであつて、隨つて即時に廢止されることを要する。

第七、土地課稅に關する全體の制度は之を改正し、不勞利得の總額をして國庫の收める所たらしめなければならない。

第八、私立銀行の搾取から、社會を免かれしめる爲めに、政府は總ての中心地點に支店を備へる國家銀行を設立し、國民的任務の爲めに、營業せしめることを要する。

第九、上記財政上の改革を斷行すると同時に、國家は生産、運輸、分配の諸方便に關する國有政策を實行し、暴利獲得を絶滅せしめると共に、社會の利益を謀らなければならない。

以上決議の第二項に擧げられた資本徵課金制度は實に千九百十六年バーミンガムに於ける勞働組合大會の決議を採擇したものであつて、後者の全文を見れば、其趣意の那邊に存するや知るに難しとしない。即ち左の如くである。

國民中の壯丁が外國の侵略に敵對し、自由を維持し、資本を保護する爲めに、兵役に服した事實に顧み、本會議は國の蓄積された富の内、戰爭の遂行に伴つて生じた財政上の債務を決濟するに必要なる部分は即時に之を徵募し、斯くて巨額なる債務が今後殘存して、其利拂の爲めに、國民的並に國際的競爭に於て、此國の産業に負擔を加重し、貿易を減却し、國民を窮乏ならしめる弊を除くことを要求して、已まない。

而して本會議は更に其對議會委員に命令し、以上の目的を達することに努力せしめ、又政府に向つて、富の國勢調査を行ふことを要求する。

以上の決議文を一讀したならば、勞働黨が今日の經濟政策上に、將た又財政策上に如何なる意見を懷抱して居るものであるかを明にするに足りる。然し更にスノーデン氏の親しく說明する所を藉りて、其等の政策の何ものたるやを批判したいと思ふ。

（三）

勞働黨が從來財政整理の方案として、最も熱心に主張した所のものは資本徵課金の制度である。英國は歐洲戰時に際して、他の諸國よりも比較的多くの財源を租稅の收入に仰がうとし、租稅に隨分想ひ切つた增徵を施したのである此一事は何と云つても、英國民智の程度が他の諸國に比較して進歩して居り、隨つて戰爭に對する國民の理解の動かす可からざるものがあり、

斯る理解に基いて、國民の間に不滅不磨の愛國心の根强く植いた爲めに、行はれたのであつて、英國の爲めに大なる誇としなければならないが、實際の結果を見ると、軍事費の總額に對する財源の分賦は租稅に依るもの一割九分九厘であるに對して、公債に依るものは八割一厘の多きに上り、随つて公債の發行された高は夥しき金額に達し、結局戰前に於て、七億一千一百萬磅と數へられた公債の現在高をして、開戰當時に八十七億七千九百萬磅の多きに至らしめたのである。其後政府の計畫に依つて、多少の償還の行はれることに依つて、幾分の減却を告げたに相違ないが、固より僅少のものであつて、現に昨年十二月一日の現在高は七十八億三千九百萬磅に上る有樣である。斯る巨額の公債が此儘現存し、何時までも、償還されないとしたならば、其利拂の金額の大なることに依つて、國庫に大なる負擔を及ぼし、更に國民全體に租稅の壓迫を加へる弊害のあることは、何人も認める所であらうが、勞働黨としては他に一の弊害を擧げるのである。即ち斯く公債の現在高が多く随つて多數の人々が多額の公債を所有して、其利子に依つて、相當の所得を收め、斯くて衣食の計を立てると云ふことに爲つたならば、其れだけ社會に有閑階級を生ずる道理であつて、其弊害大なりとしなければならない。スノーデン氏は明に此事を論じて、

公債の存在は他人の勤勞に依賴して、懶惰の間に生活する無能階級の發生を促さゞれば、已まない。而して斯る階級は有用なる仕事から勞働を奪ひ、一身上の奉仕に、將た又奢侈品の調達に之を使用せしめる。斯の如き戰爭の傷痍を治癒する爲めに、必需品の生産を增加することの特に必要とされるときに、破壞的結果を生ずるの嫌大なるものありとする

とした。斯の如き勞働黨にして始めて唱へるを得る公明なる立論とす可きである。人は其額上に汗を流して、衣食の計を爲す可きである。如何に既往に於ける勞働の結果を蓄積したものであると云つて、財産の生み出す利益に依つて、衣食し、利益の計算以外に何事を爲さない人の生ずるが如き、社會を沈滯せしめるの嫌ある。殊に父祖の財産を繼承して、斯る生活を營む者に於て、弊害の大なるを見る。而して公債所有者に至つては、一般財産所有者の内で、經濟社會の變動に依つて、何等の影響だも蒙らない有閑、無勞、無刺戟の階級を成すものであつて、其發生の忌む可き、厭ふ可きは論を俟たない。

（四）

然らば斯の如く有害なる公債を減却するに就て、如何なる方法に據る可きであらうか。普通の方法を以てしたならば、公債

償還の歩みの緩々たること、牛歩も亦啻ならざるは、數年來の事實の示す所である。茲に於てか勞働黨は公債減却の非常政策として、資本徵課金制度を主張するのである。然らば如何なる論據に基いて、勞働黨は此制度を主張するかと云へば、即ち國民に對して國家の課する負擔の分配を公證ならしめる一事に外ならない。換言すれば勞働黨の主張は兵役徵募に依つて、國民に加へる身體上の負擔と資本徵課金に依つて、國民に加へる金錢上の負擔とを相對立せしめることに、根據を築からうとする。

戰爭は今日と爲つては、既に過去の事實であるが、四年十個月に亘る長期の大戰爭に於て、英國は遂に兵役徵募の制度を行ひ、斯くて兵員の補充に遺憾なきを得たものゝ、此重大なる義務を負擔したものは其數から云つて、全國の無產者階級に多かつたことは、疑もなき事實である。時には貴族の子弟で戰沒した者もある。現に時の首相アスキス氏の如きも最愛の子息の戰死した不幸に接した。斯くて英國貴族や紳士の國家非常の秋に際して、公共的義務に服する精神は充分に發露されたと稱されるものゝ、其數から云へば、決して多いものではない、一方に無產者階級に至つては、殆ど全階級の家庭を擧げて、兵卒を戰場に送り、其或る者は戰死し、他の或る者は身體に傷痍を負ひ、戰後國內に歸還しても、戰前に於けると同一の勞働能率を發揮するを得ない。戰時勞働市場は概して好景氣であつて、內地に殘存する勞働者の如きは、概して豐富なる所得を收めるを得たかも知れなかつたが、斯の如き戰爭に伴つて生じた、幻影の如きものであつて、今や戰後の反動來と共に、何れの邊に之を認める跡もなく、却つて失業に依つて、生活に大なる脅威を蒙りつゝある。斯く無產者階級に屬する人々が戰時には國家の爲めに其生命を擲つて、國難に殉じ、戰後に於ては、更に不景氣の爲めに、生活難に苦しめられる場合に、有產階級は如何なる地位に居つたであらうか。彼等の多くは、積年の資本主義に擁保されて、其所有に係る資本を利用し、斯くて此間に莫大なる富を獲得し、戰時利得稅の如きものに就て、必ずしも大なる負擔を感ぜず、戰後の今日に至るまで其所有を繼續して居るとしたならば、戰爭に伴ふ負擔を國民に分配する上に於て、此位ひ不公正を極めることはないとしなければならない。然も實際の事實は如何であるかと云ふに、戰時暴富を獲得した者の多々あることは、何人も認める所であつて、畢竟彼等は戰爭と云ふ國家的大消費を利用し、無產者階級の負擔と爲る所を逆に收めて自家の利得としたのである。資本主義に絕對的謳歌を表する者は或は之を是なりとするかも知れないが、勞働黨が之を非なりとし國民的負擔の公正を期する見地から、資本徵課金制度を主張し

戰時生命を以て、國家に貢獻した無産者の負擔に均衡を保たしめる爲めに、戰後財産を以て、有産者をして財政の整理に貢獻せしめようとするのは、當然過ぎる程、當然の事を以つて、許さなければならないであらう。

然しながら資本徵課金制度に對しては、種々の有力なる反對論があり、之に打ち勝たなければ、其實行亦容易なりとするを得ない。現にスノーデン氏も明に反對論の如何なるものであるかを知つて居る。即ち第一の反對論として、資本徵課金が貯蓄に對する刺戟を破壞し、其結果一國商工業の給養される富源を停廢するに至らしめることを擧げ、又第二の反對論として蓄積された富にのみ徵課金を課し、職業又は營業を通じて、人の獲得する大なる金額の所得に特別の課税を施さないことの不公正を掲げた。思ふに資本主義の立場から云へば、資本徵課金に對して、斯る反對論の行はれるを以つて、自然の歸結とするを得るであらうが、右二論に對して、反駁を加へるが如き、必ずしも勞働黨側に於て、困難とする所ではあるまい。左にスノーデン氏自身の駁論を紹介しよう。

第一、資本徵課金にして、一回然も總ての資本に對して賦課されるならば、而して及ぶ所にして蓄積された資本に限られるならば、將來に於ける貯蓄に對する刺戟に、何等の影響を及ぼすものではない。一方に多額の公債現在し、貨幣價値の低落を惹起して、資本價値に減損を齎すが如き、有害なる結果を生ずることを考へたらば、是れこそ資本徵課金よりも、貯蓄に對する大なる防碍物でありとせざるを得ない。

第二、此反對論に當るために、斯る大なる所得は宜しく之を資本價格に還元し、斯くて特別所得税を賦課す可しと云ふ説もあるが、資本徵課金の實行に就ては、必ずしも斯る配慮を爲すに及ばない、蓋し資本徵課金は特別の非常課税であつて、而して資本こそ斯る非常課税を施すに最も適した富の形態である。或は資本徵課金は從來放縱なる生活を營んで、其所得を浪費した者に負擔を免除し、勤儉であつた者に懲罰を加へる結果を生ずると云ふ非難を生ずるかも知れないが、同一の非難は所得税に生ずるし、或は總ての租税制度に於て、斯の如きは已むを得ざる所に屬するものであらう。

勞働黨の資本徵課金に對する信念は斯の如く堅固なるものがある。思ふに此の點に於ては、在野時代の昔日も、在朝時代の今日も、別に異なるものがないであらうし、又其身の居る所の朝であると、野であるとに依つて、所説に變更を生ずるようなことであつては、勞働黨たるもの、到底今日の信望を天下に收めるを得ない道理である。唯資本徵課金制度に對しては、從來

實業社會に强烈なる反對があり、之を以つて資本主義の經濟組織を破壞すると云ふ考へすら、行はれて居つた。現に過般の總選擧に於て、自由黨も保守黨も共に資本徴課金に反對の意を明にした所以亦此所に存するものと解されるが、果して天下の輿論は何時までも此制度を不可なりとするまでに、執拗なるものであらうかどうか。資本徴課金制度の行はれない半面に於て、從來の如く金利が高率であり、貨幣の價値が低落して居り苛重の所得税が繼續する狀態を考へたならば、實業社會の資本徴課金に對する意見に變徴を來すに至りはしないであらうか。此點は勞働黨が自家の主張を宣傳するに當つて、大に力を用ゆ可き所である。

勞働黨議員エフ・ダブリユー・ペシツク・ローレンス氏は從來最も熱心に資本徴課金制度を鼓吹し、說明した人であつて、氏の此問題に關する小著作は英國に於て、最も廣く世人に讀まれたようである。氏は今回の總選擧に於ても、資本徴課金制度に關して、何ものゝ留保をも爲さず、堂々之を主張して、當選したのであるが、氏は昨年十二月十四日發行のニユー、リーグー誌上に於て、此問題を論じ、

保守黨並に自由黨が共に出合はなければならない難關は一方に資本徴課金を排斥して、他の一方に之に代らしめ可き何ものをも持たないことである。即ち資本徴課金を實行しなければ、食物に對する課税も、産業に對する課税も共に今日の如く殘るであらう、教育も他の社會的任務も今日と同じく、窮乏の狀に居らなければならないであらう。勞働黨の强よ味は實に此所に在る。吾人だけが吾人の說明し、又正當とする政策を持つて居るのであつて而して其れは單なる言葉に止まらない。總選擧に際して、ネヴホール、チエンバーレン氏（保守黨の名士）は諸般の改革を實行するに、一億磅の財源を要するが、其れが何所に見出されるかと云ふ問題を提出した。或は氏の黨派では之を求めるを得ないであらう。自由黨も亦さうであらう。唯勞働黨にして能く之を見出すを得るのである

と述べた。總選擧の以前から、又其當時に於て、斯くまで熱心に主張した資本徴課金制度が果して暗から暗に葬られるであらうか、私は純眞なる勞働黨の面目に於て其然らさることを信ずると共に、又之を望んで已まないのである。

（五）

次に問題と爲るのは、租税制度に如何なる變革を生ずるかの一事である　此點に就ても、勞働黨の見解なり、意見なりは殆

と一定して、動かす可からざる趣きのあることが見受けられる。元來勞働黨の租税に對する見解は餘程廣汎なるものであり、又大膽なるものであつて、私共の如き平生型の定まつた財政學說に拘泥する傾きある者の眼から見れば、時に驚駭す可きものすらなしとしない。其要點を約言すれば、左の如く爲るであらう。

第一、私人の財産を所有する權利は一に國家の好意に基くものであつて、如何なる國にて於も、私有財産に對する絕對的權利と稱されるものゝ如きは、存立する道理を持たない。

第二、國家私人の私有財産を享有することが、公共の利益に反せず、又國家に於て公共の優越した要求を充す爲めに、其財産又は其れから生ずる收入を必要としない場合に限つて、私有財産を保護するものである。

第三、國家は二つの方法を以つて、私有財産に對して、其權力を行使する。其一は公共の目的の爲に、國家に於て必要とするときは、私有の財産を收用し、之に對して其狀況に依り、又は輿論に依り、適當を認める賠償を其所有者に與へることであり、他の一は國家の職務を履行するに必要なる方便として、租税を賦課することであつて而し之を賦課する權能には、何等の制限を存しない、唯斯くして收め得られた收入が公共の利益に充てられることを以つて、理由とするのみである。

第四、租税に關する勞働黨の議論は要するに私人の有する富や所得の大部分を以つて、社會から搾取したものであると認め、一方に財産所有の制度や、資本勞働の關係を革新し、個人から不勞の富や所有を收用する方便を奪ひ去ると云ふ考の下に、國家自から租税機關を利用し、斯る搾取の結果を搾取者に就て收用して、之を被搾取者の生活を改善する用に供することを必要とする。

勞働黨は租税の賦課殊に其負擔の分配に就て、以上の根本的信念を懷いて居るものであるが、之を實際上の政策に應用して、如何なる租税制度を形ち作らうとするものであるか。此點に就ては、スノーデン氏自ら勞働黨の黨務委員會の爲めに執筆し、千九百九年ポーツマスに於ける同黨の年次大會に提出され、而して黨の財政的綱領として、承認された覺書を揭げたならば、之を知るを得るであらう。即ち其覺書に於ては、民主的財政の基礎に充てらる可きものとして、

第一、租税は納税力に比例し、又國家に依つて、個人に與へらるる保護並に利益に比例す可きものであること、

第二、如何なる租税も個人の有形的又は原始的要求を充す方

便を算定するが如くに、賦課せらる可からざること、

第三、租税は富の不勞的利得を公共の用に移す目的を持ざる可からざること、

第四、隨つて租税は不勞利得に賦課され、私人の手に大なる財産の所有される勢を妨過する用を爲さゞる可からざること

の四原則を主張し、是等の四原則から出發して、(一)現行間接税は産業社會に苛酷なる壓迫を加へるものであるから、當然廢止され可きこと、(二)社會改良に要する經費は社會的に發生した富にして、而して今日地代、金利、利潤等の形に於て、富者の收用する所となるものに依つて負擔され可きこと、(三)隨つて高額の所得に對する超過税の賦課、國家の賦與した獨占に對する特別課税、相續税の增徴、土地價格に對する實質的課税を必要とすることが論じられた。

固より嚴格なる財政學上の見地から云へば、勞働黨が租税負擔の分配に就て、納税力說と共に、租税利益說や、國家保險說を併せ取らうとするが如き非科學的原則を發表して、憚らざることに就ては、議論の餘地ありとしなければならないが、其他の原則に對しては、急進を特徴とするの外に、何等異とするもののあるを知らない。而して近年殊に千九百九年の財政改革以來英國の租税政策に於ける方針が急進に傾いたことを考へたならば勞働黨の主張は必ずしも著しく現實に遠ざかれるものではない。即ち勞働黨が消費税に非難を加へるのは、其負擔の大部分が納税力の乏しき勞働者階級に歸する事實に基く。今千九百二十年から同二十一年に至る年度の統計に徴すると、酒類から二億四百九十萬磅、茶から一千七百萬磅、コ、アから二百四十五萬磅、珈琲並にチコリーから六十五萬磅、砂糖から三千二百二十萬磅、乾果實から百萬磅、煙草から六千二百五十萬磅の消費税が徴收されて居る。是等諸物品の内、茶、珈琲、コ、ア、砂糖、乾果實等を生活の必要品とし、酒類並に煙草を必要品に非ざるものとして、計算すると、五種の必要品に就て、徴收される租税の收入は實に五千三百三十萬磅であつて、其五分の四即ち四千二百六十萬磅こそ、個人として納税力の最も乏しき、或は全然之を持たない勞働者階級の負擔に歸する、而して勞働者階級と雖も、其酒を飲み、煙草を喫するに隨つて、更に酒に對し、煙草に對する租税をも負擔するものとしたならば、其彼等に對して、不公正なる負擔を及ぼすは勿論であつて、勞働黨の間に、消費税に對する徹底的改廢論の起るのも亦怪むに足らないであらう。

斯の如く勞働黨は消費税を輕く取扱う一方に、所得税に對しては、非常に之を重要視し、租税制度の根幹に充てようとする

蓋し勞働黨の意見を以つてすれば、租稅が個人の剩餘所得に賦課されて、始めて事の公正を得たりとする、而して剩餘所得は個人の一般的所得の內から、其適理ある生活標準を維持し、個人の場合に於ては、不幸窮乏に備へるに必要なる貯蓄を爲し、營業者の場合に於ては、事業の正當なる發展を遂げるに必要なる準備を爲すに就て、其れ〲の金額を控除した殘に、尙ほ殘存する所得であるとし、斯る所得に課稅するには、所得稅に依るの外に、何ものもなしとするの見地に於て、所得稅を推稱するのであつて、隨つて勞働黨をして自由に所得稅法を改正せしめたならば、生計最小必要額として、稅金を免除される所得の最低限が二百五十磅の附近に引上げられるのは勿論、超過所得に對する稅率が今日よりも重く爲り、家族の生活維持に就て、家長として有する責任の大なる者に對しては、其大なるだけ、租稅の負擔が輕減される等幾多の新規定の設けられることは、之を想像するに難しとしない。更に相續稅に對して、勞働黨の加へんとする改革の徹底的のものであることは、私共の想像し得る所であつて、此點に於ては、或は社會組織に多少の變革を及ぼすこととなしとしないであらう。蓋し勞働黨が社會組織の根本問題として、考ふる所は機會均等の原則を尊重することであつて、斯くて相續法の爲めに、此原則の蹂躙されることを恐れるのである。即ち民主政治の國に於ては、總ての兒童をして同一の機會に於て、同一の地點から出發し、以つて將來の計を爲さしめようとする。或は機會の絕對的均等は之を望むを得ないとしても、國家は少なくとも或る個人に法律を以つて、故意に重荷を加へるが如きことを爲さゞると共に、他の個人に對して其得るに値せざる利益を與へることを避けなければならない。然るに相續は社會に一の懶惰階級を作り、此階級をして啻に其祖先の遺した貯蓄に依つて、衣食せしめるに止まらず、自己に與へられた財產權を行使することに依つて、自己と同時代に棲息する者に貢納金を課するに至らしめる。思ふに民主的國家の依つて存立する一原則は「義務が權利に先だつ」(Duties come before rights) と云ふ一事であつて、此原則から社會に於ける壯丁は總て自己の勞働に依つて、生活を支へると云ふ義務を荷ふことが演繹される。財產は誠實に之を贏得した人に依つて、共有され可きものであるとすれば、財產の相續は社會に對して不公正であるばかりでなく、相續者其人に取つても有害である。勞働黨は今日直に財產相續の廢止を主張するものではない、唯既に相當の年齡に達し、又勞働能力を備へた者が懶惰の間に、生活を送るを得るが如き程度の財產を相續することを以つて、不合理であるとし、之に制限を加へようとするものである。

（六）

以上私は專ら勞働黨の財政意見を記述し、評論するに努めたが、一方に勞働黨は英國の經濟組織を革新することに就て、如何なる抱負を持つものであるか。之に就ては、私は千九百二十三年三月二十日スノーデン氏が勞働黨を代表して、下院に提出した資本主義撲滅に關する決議案並に其說明を紹うことを以つて、最も便利であると信ずる。此決議は同年七月十六日百二十一に對する三百六十八の多數を以つて、否決された。其際に於ては、世人をして英國に於ける資本主義の金城鐵壁は勞働黨の力を以つて、遂に拔く可からざるもの丶如くに思惟せしめたのであつたが、今や時勢は急變し、勞働黨をして政權を掌握せしめる事實に直面したものとすれば、勞働黨が右決議案の討議に際して、資本主義に對して、如何なる意見を發表したかは、單に學術上の興味を與へるに止まらず、實際政治の運用に於て注目す可き價値を生ずること丶爲つたのである。先づ決議案の全文を揭げれば、左の如くである。

資本主義が天然富源並に生產能力を正當に利用し、組織し或は多數の人民に必要なる生活標準を供へることに失敗した事實に顧み、又此失敗の原因が生產並に分配の方便の私的所有並に管理に存することを信じ、本院は立法上の努力が生產並に分配の機關を公共所有及び民主的管理に移すことを基礎とする產業的並に社會的秩序を以つて、漸次に資本主義的制度に代らしめる方針に致されるの必要を宣明する。

右の決議案を提出し、且つ之を說明する任に當つた人は實に勞働黨內閣の新藏相スノーデン氏であつて、氏の演說は下院議事速記錄六頁半の長きに及んで居るのである。而して其劈頭に於て、

余は資本主義的制度の主持者並に辯護者に對する直接の挑戰として、此決議案を提出するものである

と喝破し、直に資本主義の批判に移り、

產業主義の出現後六十年を經て、十九世紀の經濟學者は既に勞力節約を目的とする機械が一個の勞働者の一日の勞苦を輕減するを得たかどうかを疑つたが、今や富の生產に關する一切の可能性の如何に拘はらず、多數の人民は不衞生なる狀態の下に、苦痛を忍びつ丶、低廉なる賃銀を給與されて、勞働し、然も尙ほ勞働不能の者も亦少なしとしない一方に、社會の半面に於ては、如何にして其所有に係る巨富を消費するであらうか、想像だもするを得ない富裕の人が居る。即ち資本主義的制度は人民に住む可き善き世界を與へなかつた。蓋し此制度は之に伴う富の分配法に依つて、著しく富裕にして、懶惰なる階級を釀成し、而して此階級の消費は大なる程度ま

で、國の重要なる産業を支持する爲めに行はれず、却つて不生産的勞働を奬勵する爲めに行はれる。現に英國人口の十一分の四は富裕なる人の僕婢として、或は彼等の私用を足す爲めに、不生産的方面に使役されて居ると云ふことの如き、明に資本主義に伴ふ弊害の一ツである。

更に資本主義の下に行はれる富の分配は如何であるかと云へば、其八割八分は實に全人口の二分五厘に相當する少數者の所有に係り、六人中の五人は死後何等の財産を遺さない状態である。

として、種々の方面から資本主義に攻撃を浴せ掛け斯くて自家の主張に入るや、先づ其期する所の革命に非ざることを辯じ、社會主義とボルシエヴヰズムとの間に、何等の類似點なくボルシエヴヰズムは其の政治上の理論に於て、其實際に於て將た又獨裁政治並に沒收の理想に於て、社會主義と異なることを明にし、斯くて決議案の文面に在るが如く、生産、分配並に交換の諸機關の社會化を主張したのである。而して討論終結の七月十六日に於て勞働黨議員クラインス氏(新内閣の國璽大臣)が資本主義擁護論を反駁した演説に到つては、明に社會主義の英國に實行させる必要を宣明したものであつて、他國に於て此主義の實行に於て失敗を重ねた事實を舉げ而して其成效を得るには、社會主義と相離る可からざる三個の條件が備はらなければならないとし、其條件を以つて、第一國有財産の所有に關して、一般人民の同意を得ること、第二社會が何ものを必要とするかに就いて、社會の理解があり、而して社會の必要とするものを社會獨り管理すると云ふ事實の承認されること、第三成効を保證する協力のあることであるとし、英國が民主的管理の伴ふ條件の下に、國有主義を行ひ、斯くて私有財産制度を制限し、資本主義的組織を破壞することを以つて、經濟的革新の要訣であるとした。

公明正大を尙ぶは英國政治の特色であり、隨つて政治家は時局に關係ある問題に就て、意見を公表して、憚る所なく、而して其意見も亦一時の場當りや、間に合せのものでなく、理論に根據を置くことを常とする。殊に勞働黨の政治家に至つては、文筆を以つて、衣食の資を得る爲めか、其發表に係る言論文章の特に多きを見るのである。私は專らスノーデン氏の財政經濟に關する意見を紹介するに忙はしく、トーマス氏や、ウエッブ氏に就ては殆ど說明を試みるの餘裕を持たなかつた。然しながらウエッブ氏が多年同志と共に、フエビアン結社に據り、國民的最小限度の政策を勵行し、且つ之を普及することや、國有公有政策を鐵道、炭坑、水力其他の諸事業に適用することの必要を唱道したのは世間公知の事實に屬し、今更ら之を說明する必要を見ないのである。唯今日に於ては、如何に事の緩急を察じて、政策の實行に手加減を加へるかを問題とするのみであるが、何れにしても時の遲速は姑く措き、英國の經濟組織から、多年律され來つた資本主義から離れる緒に就いたことだけは、明瞭の事實である。

山本内閣の辭職より衆議院の解散まで

美濃部達吉

山本内閣が不慮の事變の爲に急に辭職せねばならぬこととなつてから後、今日に至る迄の政界の變動は、一般民心の激昂を招いたこと、殆ど憲政實施以來未曾有とも謂ふべき程で、而もそれは單に政黨政治家の仲間に於てのみではなく、平生は殆ど政治に無關心である學者、實業家、一般智識階級の間にも、之を憤慨する聲が頗る高い。新聞紙の論調は必ずしも常に國民の感情を正確に表現するものではないにしても、今回の如く全國の殆ど總ての新聞紙が其論調を一にして、内閣の存立を根本から否定して居ることは、是れまで全く例を見ない所で、それだけでも如何に現在の内閣が、國民の間に不人望であるかを推測することが出來る。私は平生書齋に閉ぢこもつて居つて、政治の實際問題には成るべく關係しないことを、主義として居る者であるがそれでも、國民の一員として、且つは憲法政治の研究を志して居る者として、今回の政局に付いては、多少の感慨なきを得ない　改造社から是に付いての一文を徴せられたに對し敢て辭退せず、出來るだけ公正な態度を以て、冷靜な批判を試みようと思ふ所以である。

山本内閣が辭表を捧呈したに付いては、例に依つて後任總理大臣の推薦に付いて、平田内大臣を派遣せられて、元老に御下問が有り、而して元老は清浦氏を適任者として推薦し、此推薦に基いて清浦氏に内閣組織の大命が下つた。

是れ迄は、普通の内閣更迭の場合と同樣の經過であつて、特に人心の激昂を招くべき程の理由も無い。併し是に付いても、元老といふやうな制度が果たして憲法上許され得べきものであるや否や、元老が事實上殆ど總理大臣推薦の專權を有つて居るのが適當であるや否や、内大臣が内閣組織の事に關與するのは、果して内大臣の正當の職責と見ることが出來るや否や等は、相

當に論議の價の有る問題である。

第一に、元老といふものが有つて、内閣の辭職の場合に、後任總理大臣の推薦に付いて、御下問に預る慣例となつて居ることが果して適當であるや否やと言へば、私は日本の現在の如き政治事情の下に於ては、已むを得ざる必要な制度であつて敢て非難すべき理由は無いと思ふ。

若し國内に唯二大政黨あるのみで、國民は其何れかに同情を有ち、國民の輿望の歸する所は、必ず其二政黨の中の何れかでなければならぬといふことが、略斷定し得られるやうな政治事情であるならば、一の政黨が政權を去れば、當然他の政黨が之に代るべきもので、何人を後任の總理大臣とすべきかに付いても、疑問を生ずべき餘地なく、内閣辭職の場合には、反對黨の首領に、内閣組織の大命が下るのは、當然であつて、さういふ場合ならば、元老といふやうな制度の必要も無ければ、特に御下問あるべき必要も無い。

併しながら、日本の現在の政治事情がさういふ有様を距ること、頗る遠い狀態に在ることは、言ふ迄もない所で、殊に高橋内閣の辭職以來は、政友會は現に衆議院に壓倒的の多數を占めて居るにも拘らず、政權の衝に當るに不適當であることが一般に認められて來た情勢であるのであるから、何人が内閣を組織することが、果して國民の輿望に適するかは、頗る不明瞭な有様に在つたことは、爭ふべからざる所である。

斯ういふ政治事情の下に於て、若し後任者の選定に付いて適當な御下問の機關が無いとすれば、それは實に、至尊をして獨り社稷を憂ひしむるもので、日本の國體の上から申しても甚だ恐懼すべきことであると思ふ。

如何なる機關が、其御下問に應ずべき機關として、最も適當であるかと言へば、それは結局現在の如き元老の制度が比較的最も無難であらうと思はれる。兎に角それは必ず聲望閲歷の特に卓越して、皇室及國民の信頼厚く、國家政局の全般に付いて相當透徹した識見を有つて居る、一二の少數の人々でなければならぬ。

現在元老たる地位に在る人々が果して此の資格を遺憾なく備へて居るや否やは、別問題として、現在の如き政治事情に於ては、さういふ種類の機關は、是非とも無ければならぬものであらう。

さういふ機關が存在し、而もそれが實際に大なる勢力を有つて居ることは、即ち政黨が未だ充分に國民の信頼を得て居らぬ證據であつて、政黨が廓清せられ、國民が擧げて政黨に信頼し

政黨の首領が內閣を組織することが、當然の事として輿論の承認する所となるやうな、情勢になつたならば、元老といふやうな制度は、自然に其必要が無くなり、假令それが形の上には殘るとしても、實際上何等の勢力の無いものとなることは、必然の結果であらうと思ふ。元老の存在は結局は政黨自身の無力に其原因を有つて居るもので、而して政黨が今日の如き狀態に在る間は、遂に之を無視することは出來ないものと思ふ。

第二に、內大臣が內閣組織に關與したことを以て、宮中府中の區別を紊亂したもので、內大臣の職責の範圍を脫したものであらうといふやうな非難を爲す者が有るけれども、是も私は理由ある非難とは信じない。

內大臣といふ制度は、日本に特有なもので、外國の立憲政治には全く類を見ないものであるが、皇室の神聖不可侵を國體の最高の條件とし、政治上の責任が聊も皇室に及ぶことを避けねばならぬ日本の國情に於ては、內大臣の制度も、相當に存在の理由あるものと思ふ。

內大臣は其身分に於ては固より宮中の官吏であるけれども、職務に於ては決して宮中の事務にのみ限られて居るものではない。內大臣府官制に內大臣は常侍輔弼の機關であることを定めて居るのは、決して單に宮廷の事務のみに付いて輔弼することを謂ふ意味ではなく、國務と宮務との雙方に通じて常侍輔弼の任に當ることを意味して居るのである。それは恰も樞密顧問が身分は國の官吏であつて、而も宮務にも關與すると同樣である。內大臣が單に宮廷の事務ばかりでなく、國務にも關與する職責を有つて居ることは、內大臣府に於て御璽國璽を尙藏し、隨つて國務に關する總ての詔勅が必ず內大臣府を通過するを要するものとせらるること、人民より至尊に捧呈する國務に關する請願書は總て內大臣府に於て審查の上奏聞するものとせらるることに依つても知ることが出來る。固より常侍輔弼と言つても、通常の輔弼機關としては、國務に付いては國務大臣、宮務に付いては宮內大臣が、有るのであるから、內大臣は平生は別段さはだつた職務を有つて居るものではないが、それでも至尊と國務大臣又は宮內大臣との間に立ちて、事ある每に側近に侍して聰明を啓き奉るべき職責を有つて居る者である。殊に內大臣の最も重大な職務は、內閣總辭職の場合、又は宮內大臣の辭職の場合に起るのであつて、此等の場合に於て、元老に御下問になることは、法令の規定の上には何等の根據もなく、單純な事實上の慣習に過ぎないのであるけれども、內大臣は、法令の正文の上に於ても、此等の場合に御下問に奉答すべき法律上の職責

を有つて居るものである。內閣總辭職の場合に於て、後任の總理大臣を任命する辭令書に、內大臣が副署すべきものと定められて居り、宮內大臣を任免する辭令書にも同樣に內大臣の副署又は署名を要するものとせられて居るのは、此事を征服するものである。

それであるから、內大臣が內閣の更迭に際して、後任の總理大臣の推薦の事に關與するのは、官制に依つて認められた當然の職責を見るべきものであつて、敢へて非難すべき理由は無い

第三に元老及び內大臣が御下問に應へて淸浦氏を奏請したことは、全く人選を誤つたもので、之より生じた政界の混亂に付いては、其推薦者たる元老、內大臣が等しく責に任じなければならぬといふことに付いては、如何にも其通りであるといふの外は無いが併し是も當時の事情としては、或る程度までは諒恕すべきものと思ふ。

若し所謂憲政の常道より謂へば、衆議院に相當の勢力を有する政黨の首領を推薦しなければならぬのが、當然であることは言ふ迄も無いが、政友會高橋內閣の辭職以來、絕えざる內訌が有り、殊に山本內閣辭職の當時に於ては、將に二派に分裂せんとする勢が見えて居つた際であつて、之に政權を委することは一般の民心庶期する所と思はれず、されぱとて憲政會の勢力は僅に衆議院の三分の一にも足りないのであるから、是も國民の信賴を値するものと認め難く、殊に山本內閣は、政策の行詰りの結果として辭職したのではないのであるから、其後任たるべきものは、矢張り山本內閣と類似の性質を有つて居る內閣であるのが當然であると考へるのは、無理の無いところであつて、元老及び內大臣が淸浦氏を推薦することに決したのは、恐らくはさういふ考が基礎となつたものであらうと思ふ。

それであるから、內閣組織の大命が淸浦氏に下つたに至るまでの經過に就いては、假令それが所謂憲政の常道に反することは勿論であるとしても、さまでに國民の憤滿を招くべき理由は無い。

若し淸浦氏が大命を拜受するにしても、又は拜辭し奉るにしても、政治家として、ふさはしい態度を取られたならば、假令多少の不平は起るにしても、斯くまで政界の混亂を來すことは無かつたであらう。

不幸にして內閣組織の經過、其成立の基礎たる原動力、閣僚たる人々の顏觸れ、內閣組織後の態度は一として國民の輕蔑と憤滿とを招く源たらぬものは無く、遂に政界未曾有の混亂を招

くに至つたのは、國家の爲に返すくも遺憾に堪へない所である。

內閣組織の經過に付いての第一の過誤は、清浦氏が一旦拜辭の決心を固め、之に公に發表して置きながら、數時間の後直に其決心を飜へして、再び內閣を組織せんと決心したことに在る。

清浦氏が如何にして其決心を飜へしたかは、暫く差措いて、それが如何なる理由に出たものにもせよ、既に一たび大命を請けて、之を拜辭することに決心し、而もそれを公然發表した以上、再び大命を拜受することは、政治家として絕對に有るまじ事であることは言ふ迄も無い。

大命の拜辭を決心することは、內閣の組織に付いて、全く成算の無いことを自覺した上でなければならぬ。況んやそれを自分の心中の決心にのみ止めて置かないで、之を他の人々に公にするに於てをや。既に內閣の組織に付いて成算なきことを自覺して居る以上、如何なる理由が有つたにもせよ、再び大命を拜受することは、甚しき無責任の行爲と言はねばならぬ。清浦氏は自己の一身を捨てて國家に奉ずるの決心を堅めたと吹聽して居るけれども、內閣の組織は清浦氏一身の問題ではなくて、實に國家の問題である。清浦氏の一身がどうならうとも、それは吾々國民の餘り痛痒を感じない問題であるが、一身を犧牲として國家に害毒を流されては、國民の迷惑は此上も無い。內閣の組織に何等の成算もなく、而も唯一身を犧牲とすることを以て其辯明の辭とするのは、責任を自覺しないことも甚しいと言はなければならぬ。

內閣の組織に付いての第二の大なる過誤は、研究會の幹部の地位に在る二三の人に、閣員の選定を一任したことに在る。是は實に最も甚しい失態で、大命を蔑にするものたるの非難を免れない。

此の如き失態は、是れ迄の如何なる內閣の組織にも、嘗て聞かない例であつて、是れだけでも國民の輕侮と憤滿とを招くに充分である。

併ながらそれにも超えて、國民の憤懣を招く原因となつたのは、研究會の幹部と稱せられて居る二三の人々が、自ら內閣組織の大命を受けたかの如くに、閣僚の選定に奔走し、遂に純然たる貴族院內閣を作るに至つたことである。

清浦氏及び研究會の人々は、此非難を以て事實の誤解に出でたものであると言ひ、研究會は會としては毫も內閣組織に關係

したものではなく、唯某々等二三の人が個人として相談に預つたに過ぎぬと言つて居るけれども、此の如き辯解が、少しも國民の疑惑を解くに足りないことは言ふ迄も無い。

　それ等二三の人が相談に預つたのは、唯研究會の幹部たる地位に在るといふことの理由にのみ基いて居ることは、更に疑を容れない所で、若し研究會との關係を取り去るならば、それ等の人々は政治上に全く何等の勢力をも有たない人々である。若し多少なりとも、政治上に勢力が有るとすれば、それは唯研究會の幹部であるからといふことにのみ基いて居るもので、其理由が有るからこそ內閣組織の相談にも與ることを得たのである。それが唯個人としての資格でないことは勿論である。

　內閣組織の原動力が專ら研究會に在ることが、實に清浦內閣の根本的の缺點であつて、國民の輕侮と憤懣とを招いた最も重なる理由は、此點に在る。

　それは既に世間にも善く論ぜられて居る所で、自分も其點に於て、全く同感を有するものであるから、今玆に詳しく述べるまでもない。

　清浦內閣は其組織の根柢に於て、此の如き大なる過誤を重ね、恕すべからざる缺陷を有して居るものであるのみならず、其關係には不幸にして一人として國民の信賴を繋ぎ得るだけの人材を見ないのであるから、內閣の成立の當初から、殆ど前古未曾有とも謂ふべき程に、國民の間に不人望であつたことは、敢て怪しむに足らぬ。

　若し清浦氏及び其關係にして、少しく冷靜に自ら反省し、又國民の感情の趨く所を察することが出來たならば、其內閣の組織に根本的の缺陷の有ることを容易に自覺し得たであらう。過てる者は其過を改むることが勇である。若し清浦內閣にして過を改むるの勇氣が有らば、何等の成算も無くして衆議院を解散するが如き暴擧を敢てせずして、速に罪を闕下に謝し、骸骨を乞ふの擧に出でたであらう。吾々も國家の爲に切に其事を希望したのであつたが、不幸にして、事玆に出でず、更に衆議院の解散に依つて、一層其過誤を重ぬることとなつたのは、遺憾此上も無い。

　今回の衆議院の解散は、其理由に於ても、其時期に於ても、甚しき不當のものであることは、既に世評の一致して居る通りである。

　單に憲法の明文から言へば、解散を爲すべき理由に付いては憲法は何等の規定を設けて居ないのであるから、如何なる理

由を以て、又如何なる時期に於て、解散が行はれたとしても、敢て憲法違反といふことは出來ぬ。それは恰も貴族院の或る團體を基礎として、內閣が作られたとしても、憲法違反でないのと同樣である。

問題は唯それが政治上適當であるや否やに在る。

而して政治上の問題としては、衆議院の解散は唯或る問題に付いて衆議院の意見が果して眞に國民の輿論に適合せるや否やの不明なる場合に於て、民意に訴へて輿論の判斷を求むるが爲にするものであることは言ふ迄もない。それは解散が唯衆議院にのみ行はれて貴族院には行はれないことから見ても明瞭である。

然るに國民の輿論が現內閣を信任するものでないことは、全國の新聞紙の論調に見ても、貴族院に於ける質問演說に見ても、連日の民衆運動に見ても、又は穩健着實を以て知られて居る有力なる實業家諸氏の辭職勸告に見ても、極めて明瞭であつて、更に疑を挾むべき餘地は無い。

それであるから、假令衆議院に於て不信任決議案が提出せられ、それが大多數を以て通過すべき形勢が明瞭となつた後であつても、此場合に於ける衆議院の解散は、到底不合理であることを免れない。

然るに政府は、それのみではなく、解散の時期に於ても、更に大なる過誤を重ねた。

衆議院の解散は、未だ不信任案の提出も無い間に、單に議場の秩序が紊れたといふ理由のみを以て、行はれたのである。

是れでは何の爲めの解散であるかは、更にわからない。眞逆國民に對して暴行を否とするや否やの判斷を求むる譯でもあるまい。茲に至つては、唯逆上の沙汰と評するの外はない。

要するに、今回の內閣は其組織に着手した初から、過に過を重ねて來たもので、國の前途の爲に如何にも心細さの感に堪へぬ。

政府は屢國民の思想の善導を唱へる。自分は思想の善導が果して政府の職分たるべきや否やを疑つて居るもので、寧ろ政府の當然の職責としては、積極的に思想を善導するに在るのではなく、消極的に思想の惡化すべき原因を除くことに在るべきであらうと思ふ。今の內閣は果して自ら思想を惡化する原因を作りつゝあるものであるといふ非難を免れ得るであらうか。

同志ニコライ・レニン

片山潜

最大の指導者、思想家、マルキスト同志レニンは、一月二十一日、モスコーで死んだ！私は一九二二年十二月、全露ソヴィエット大會の開會日に、會場たるモスコー大劇場の演壇で、始めて彼に會つた。大劇場は、ソヴィエット露西亜の代表者達で一杯であつた。諸の地方から來た代表達は、簡單な演說をなし私も、同志コロンタイの通譯で、數分間の演說を試みた。一九二〇年一月二日──三日の、アメリカの大檢擧以來、私にとつてはこれが始めの演說であつた。勿論私は歡迎され、同志コロンタイの反譯が終つて後、聽衆は殘らず立ち上つて、喝采した。次いで獨逸の同志が演說し、同志が通譯を始めた時、同志のレニンは物靜かに議場へ入つて來て、彼は席に就いた。前の通譯は簡單に切上げられ、議長カメネフは同志レニンを紹介した。同志レニンは演壇に就いた。聽衆は拍手して迎へ、總立ちとなつて、長い間引き切りなしに歡呼を送つた。この熱烈な歡呼は、いつ止むとも知れなかつた。この間レニンは、原稿を手にして、靜かに立つてゐた。

やがて聽衆は靜まり、レニンは靜かな口調で、一語一語明晰に、語り出した。モスコー大劇場に密集した聽衆は、どんな隅に居るものでもはつきりと、聽き取り呑み込むことが出來た。勿論聽衆は、水を打つたやうに靜かに、極度に緊張して彼の演說に聽入つた。レニンは決して高聲を發しないが、演說は明快で、甘かつた。そして他の多くの人達のやうに、誇張を用ひた

り、抑揚を多くつけたりはしなかつた。彼は演說の主題を說き來り、談半ばにして、英佛の政治家に嘲笑を浴びせて、巧みに聽衆の興味をつないだ。其と云ふのは、彼の主題が深酷な思想の含まれた重大なものであり、それに全露ソヴィエット大會の委員達は、ほとんど大部分、農民と勞働者だつたからである。彼は時に、無味乾燥な經濟問題にも觸れたが、演說は主として華府會會議に關する者で、隨つて國際平和と戰爭を取扱つた者であつた。かくて彼の演說の後半は、大喝采を博した。彼は演說を終るや、議長が閉會の挨拶を述べる間、一寸椅子にかけ、やがて立つてプラットホームを離れやうとした。傍にゐる人々はいづれも彼と握手をした。私が握手を交した時、彼は私の名を呼んで、挨拶した。彼は少しも氣取つたところがなく、いかにも親しみ易く、見てゐて心持がよかたつ。

極東會議が開けた時、レーニンに、會議に列して、勸告を與へて欲しいと申し送つた。彼は會議に臨むことが出來なかつたが、各國の代表若干名をクレムリンの彼の居室に迎へた。約三十名の委員は、夜の九時頃、彼を訪ねた。レーニンは非常に鄭重に我々を迎へ、一人一人彼に紹介され、彼は心からの溫かい握手を與へ、みんなは席についた。彼は一グループづゝと次ぎ次ぎに談を交へ、みんなをすつかり落付いた氣持にさせ、誰の言ふこでも親切に聽いた。勿論彼は、極東問題についての彼の見解を述べ、凡ての人々に極めて有益な、興味ある勸告を與へた。最後に彼は、全極東諸國の革命力を結合するの必要なる所以を、簡單に述べた。彼は、流暢に、非常に立派なアクセントで、明晰に、英語を話した。彼の部屋はあつさりとしてゐて、大きくなく、書籍が澤山あり、繪畫も少しはあつた。彼の机は相當に大きなもので、大きな椅子が澤山あつて、その中の若干は巨大な肘掛椅子であつた。壁には一農民革命家の肖像が懸けてあつた。

約一時間で我々は彼に別れを告げ、部屋の出口へ行つたが、彼は一人一人握手を交して、別れの言葉を述べた。私は彼に、すぐ良くなるでせうと言つた。と言ふのは彼は翌日ある保養地へ靜養に行くといふことを聞いてゐたからである。彼は、すぐ歸つて仕事をやります、と言つてゐた。

私が最初に最もよく彼を知つたのは、彼の著書、別けてもか

の有名な「國家と革命」を通じてゞあつた。その書によつて私は、無産階級獨裁の意義と、その反對論とを了解することが出來た。この書は、露西亞ボルシエヴイキ革命の基礎的原理を含み、無産階級獨裁の最初の、最善な說述を與へたものと、言ふことが出來る。マルクス、エンゲルスも無産階級獨裁の觀念を持つてゐたが、普通の讀者には、明白適確には分らなかつた。それに明確な說明を與へ、無産階級革命の達成のために、無産階級獨裁の必要なる所以を闡明にしたのは、レニンである。

レニンは、自身で實際に、ロシア革命にそれを適用して、無産階級獨裁の理論を實證した。彼のマルクス主義の理解の、偉大なる確實さはこゝに在る。勿論彼は、その立派に發展された無産階級獨裁理論の創論者を、彼自身だとは主張せず、マルクス、エンゲルスを以て、その創說者とした。彼はたゞ、彼自身の言葉、彼の明快な、論理的な、哲學的な樣式で、それを說明したに過ぎない。

レニンの偉大なる所以は、マルクス主義の知識深く廣きと、且つ、その理解の徹底的なるところに在る。而してそれが適用において、彼は決して的を外したことがない。彼はその革命的行動に於いて、曾て誤りを演じたことがないとは、凡てのボルシエヴイキの言ふところであり、彼の敵さへも認むるところであるが、全くその通りである。同志ソフイヤ・ガンチヤラスカヤは同志で、革命中ペトログラードの組合員であり、外國でコンミユニストとして教育された移民革命家の一人であり、瑞西、佛國、米國、英國で、ロシア共産主義の指導者と交つてゐた人であるが、彼は昨夏私に、レニンはいつも正しく、議論にはいつも勝つた、と語つた。他の人達は誰でも、いつか大きな誤りを仕出かしたが、レニンは曾つて一度も、誤りをやつたことがない。彼は勿論、主張にも他人の攻擊にも、極めて論鋒鋭く、特にその固く執つて動かぬところは、特性的であつた。例へば、ペトログラードの革命蜂起の期日と時間を決定した會議に於いて、彼は飽まで頑强に自說を固執し、遂に一切の反對を征服し十一月七日と決定した如きそれである。その後、彼の正しかつたことが立證された。

レニンは小供を愛したが、自分の子は一人も無かつた。最近

に病の床に在つた間、彼はその宿舎の門番の小供達を可愛がつた。ブハリンも大の小供好きだが、彼もやはり子供がない。レニン、ブハリン二人共、快活で悪戯づきで、特にブハリンは時々、ひどひ悪戯をやる。ある時執行委員會議に、ブハリンは卓子の上にあがつて、逆立ちをやつた。レニンは小供のやうに手を叩いて嬉しがつて、人を呼び集めて見物させた。二人とも明るい半面を持つて居り、ブハリンは非常に機智に富み、なかなか隅におけぬ漫畫家である。昨年のこと、我々は卓を圍んで、フランスに關する或る重大な問題を討議してゐた。するとブハリンは、赤色勞働組合インタナショナル執行委員會の佛蘭西委員同志スヴアリンの漫畫を書いた。それは素晴しい流行のスタイルをした舞女と並べて描いたスヴアリンの首の繪であつた。ブハリンはそれを側の人々に見せた。するとコムインタンの現幹事長の同志コロランがそれを取つて、とうとうブハリンに返さず、會議がすんでから、スヴアリンに遣つた。

　レニンはあまり娯楽を持つてゐなかつた。彼の唯一の樂しみは狩猟であつた。いつでも暇のある時は、銃を肩にし犬を引つぱつて、獨りでぶらりとモスコー近郊の森へ狩りに出掛けた。しかしチェッカではこつそり、密兵を送つて沿道を警戒させた。

レニンとブハリンとは純潔な家庭生活の人である。私は何も他の人達が不純潔だといふのではない。二人は最もよく夫人を愛し、他に愛を分かたないといふ意味で、純潔だといふのである。二人共書記を選ぶのに容貌に特別の注意さへ拂ひはしない！彼等二人は、理論に於いても、日常の生活に於ても、眞のコンムユニストである。

　レニンは最高型の雄辯家であつた。或る時の全露ソヴイエット大會に、農民代表等は政府の政策に大反對で、政府委員の演説は誰のも聞かぬことに決議した。さすがのトロツキーでさへ、聽衆を惹き付けることは出來なかつた。お終ひにレニンが演壇に立つて、開口一番、單純直截な言辭で農民代表等を叱咤し、諸君はいたづら小僧にがみがみ言ふ、分らず屋の親父だと難詰した。その時の農民の叫びは重税のための飢餓と窮困を訴へたもので、實際また彼等は政府のために、あらゆるものを取り去られてゐたのである。然しレニンは、單的な言葉で語り續けた。

「飢え？　諸君は何故働かない！　歸つて死物狂ひで働け！　何もぶつぶつ言ふ必用はない！働け！」そんな風な調子でレニンは農民代表に說いた。農民達は靜粛に、從順に、傾聽して遂に彼の說く所に滿足し、滿場一致恰かも一人のやうに、政府を支持した。この日彼は雄辯で勝利を博したのである。聽衆の反對の脊後には、貧困と飢餓との恐ろしい力がある。かゝる聽衆を說服した例は滅多に無い。しかしレニンは遂に彼等を納得させたのである。私の知つてゐる限りでは、演說で輿論の方向を轉回させた實例は、世界歷史に極めて稀である。デモツセネスはその雄辯の力によつて、希臘人をしてアレキサンダー大帝に反對させた。幾度も幾度も希臘人は大帝の權勢の爲めに屬にされたが、デモツセネスはその都度に、民衆を呼び醒して、希臘獨立のために勇氣を振ひ起すの要を覺らしめ、彼等を支配した。下つて米國南北戰爭の時、英國は南部同盟軍に同情を持ち、南部同盟を援助した。紐育の牧師ヘンリー・ワード、ビーチャーは、英國に渡つてリヴァープールで演說會を開いた。聽衆は彼に口を開かせまいとして、盛んに妨害した。然し彼は一句又一句、次第に聽衆の注意を集め、單なる自恃を以つて全聽衆を支配し、一歩一歩その立場を認めさせた。この一回の演說で北方アメリカは、英國の輿論をかち得たのである。或時フランクリンは言つた。眞の雄辯家は眞理を語る者であると。デモツセネスやレニンの如きは極めて稀である。レニンの偉大なるは、新らしい眞理を語つたが故である。

レニンは世界歷史に現はれた最大の革命指導者である。彼の偉いのは、革命戰爭にも平和にも、將師の將師たる所にある。彼は過去を知り、自己が革命軍の指導者、組織者として活動しつゝある現在を知り、且つ、またよく未來を知つてゐた。彼の論文「ソヴィエットの現在」は、無產階級獨裁が宣された後の、ロシア革命史のプログラムを說いてゐる。彼はまたかの新經濟政策を樹立した。この政策は僅か二三年前に採用されたものだが、ソヴイエット露西亞にとつて最も恰適な政策であることが實證されてゐる。思ふに彼は最も善く露西亞を知り、ロシア革命達成の最善の道を知つてゐた人である。その後の展開は立派にそれを證明してゐる。

彼の反對派に對する態度は、峻嚴痛烈を極めたもので、かのカウツキーとその徒黨に浴せた言葉は、別けても峻烈無比で骨を刺す如き皮肉があり、正宗の名刀の如き慨があつた。しかし同時に、自分の味方に對しては、いかにも溫かい友達であつた。が彼の最も偉大なことは、無產階級の友であり、その魂も、生命も、一切のものを、ロシア及び、全世界の無產階級に捧げたところにある。而して、全世界の無產階級が、その如き彼を知り、就中ロシアの農民が、最も尊い、勇敢な、指導者保護者として彼を信賴してゐたことは、更に偉大である。ロシア革命の成功の主因は正に是である。

　レニンは革命の眞の指導者で、如何にして革命を達成す可きかを知つてゐた。彼は單に哲學、歷史、科學、經濟學、その他一切の事を通曉してゐたばかりで無く、何にも優つて、共に相携へて革命の事に從ふ可き、人間をよく知つてゐた。彼は、大指導者、大組織者等を味方としたが、その中でも偉大なるは赤軍を創設編成して、全世界の帝國主義國家に對抗したかの同志トロツキーである。トロツキーは史上稀に見る革命指導者であり、將帥である。彼は多方面の敎養と才幹を有する人で、立派な文學作者であり、藝術、文學、戲曲、音樂の批評家であり古典に通じてゐるばかりでなく、近代文學、哲學の深い敎養を以てゐるが、それらにも優つて彼は、マルクス主義及びマルクス主義戰術の達人である。彼が國際關係の智識に於て一權威たることは、共產インターナショナル第三回大會に於ける三時間の大演說に於いて、立派に說明されてゐる。併して彼の最も偉大なる點は、赤軍の創設者としてゞあつて、それは來る可き勞資戰に於ける革命軍隊の典型たる可きものである。

　トロツキーが文字通りに將帥の將帥であると同樣に、レニンは指導者の指導者であつた。トロツキー、チチエリン、クラシンと云つたやうな人々を惹き附け、共通の目的のために働いた所がレニンの偉い所である。トロツキーは偉大な將帥、組織者、戰士であるが、どうかすると例へばブレスト、リトウスクや波蘭攻擊の際のやうな、大きな錯誤を遣る。然しレニンには錯誤が無く、そうしたトロツキーをよく引き締めて、ますますその能力を發揮せしめ、偉大なる行動をなさしめた。革命の初

頭に於けるレニンとトロツキーの握手は、ロシア革命の全成功の鍵鑰である。この二大偉人の提携は、全く、レニンの努力と才能によるものである。トロツキーを最も善く知る者は、恐らくレニンであらう。トロツキーは勿論自らよくそれを知つてゐる。偉人にして始めて偉人を知る！　チノヴイエフはレニンの小傳に於いて、レニンが狙撃されて瀕死の床にあつた時の、トロツキーの言葉を引用してゐるが、それを見ると、いかにトロツキーがレニンを愛敬してゐるか、本統に心の奥底から愛してゐるかゞ分る。トロツキーのさうした尊敬と愛とが、實に、ロシア革命成功の秘密を物語るものである。

レニンは全露西亞で最も評判のいい人であつた。現在もさうであるし、將來とも長くさうであらう。彼は勞働者、農民から最も愛敬され、彼の著作はバイブルのやうに全ロシアの人々に讀まれてゐる。最近レーニズムが稱道され、學者、科學者、知識人等は科學、歴史、哲學の分野に對する、レニンの貢獻を定式化してゐる。レーニズムの中核は、云ふまでもなく、マルクス主義及びマルクス主義戰術に對する偉大なる貢獻である。彼の著作の全集が企圖され、既に十七冊か十八冊公刊されてゐるが安價で誰にも容易手に入る。彼の片言隻語は忠實に研究され凡ての場合に、立派に適用されてゐる。レニンの唱へ出した「スミチカ」といふ言葉は、勞働者と農民を結合せんとする政策の鍵鑰で、この觀念は、新經濟政策の中心原理となり、立派に成功を斂めてゐる。昨年開催された農業手工品博覧會は、このスミチカの成果である。レニンの努力によつて、勞働者と農民の完全なる結合が成就し、刻々に生長發達してゐる。

新經濟政策の樹立以來、工業、商業、農業の發展、再建の道が開け、改善生長の跡著しきものがある。

レニンの論文はロシアの民衆に、偉大な感化と支配力を有つてゐる。最近、プラウダ紙上に、消費組合事業に關する彼の一論文が掲載された。すると一大消費組合運動が起り、全露に亘つて、消費組合事業の興味が擡頭して來た。嘗てレニンは革命運動の未來に關する一論文を公にし、印度と支那とが革命化されない以上は、世界革命は達成されないと獨斷した。而して彼は東方大學の擴張と極東諸國からの留學生の増加を希望した。そ

こでソヴイエツト政府は同大學の豫算を三倍以上に增加し、約二百萬金ルーブルを割當てた。この結果として目下千人以上の學生が東方諸國から來て居り、中に若干の日本人學生もあつて學生間に好き感銘を與へてゐる。日本人學生は次第に增加してゐる。どこの大學でも學生は立派な取扱を受けて居り、食物、衣類、その他一切の必要品を支給され、研究上、生活上の諸種の便宜が與へられてゐる。かくの如く、レニンの影響は到る處に見られ、凡ての問題、凡ての政策、凡ての戰術に現はれてゐる。

刻々に高潮しつゝある革命戰場の、かくの如き最大の指導者思想家、鬪士は、今や逝いて亡いのである！ 彼は數ケ月間、病床にあり、絕えず病魔に苦しめられてゐたが、その强き體質と、行きとゞいた療養で、二回の危機ものがれた。次第に恢復に赴いて、時々には長時間の散歩もし、數時間の乘馬もやると報ぜられたのは、つい數週間前のことである。しかし今や彼は我々世界の無產階級を殘して去つたのである！ 彼は平和にも戰爭にも、あらゆる戰場あらゆる分野に於いて、よく戰ひ、病床にあつても猶、雄々しく戰つた。

彼の病ひは、過度の活動と緊張とから來た疲勞衰弱に外ならない。彼の死は世界無產階級にとつて最も大いな損失であり不幸である。彼の死は全世界の無產階級によつて痛惜されてゐる。と同時に、彼の生命と事業とは、時の經つに隨つて生長し、世界革命は彼の言葉と事實とによつて鼓舞され、世界の無產階級は、ロシア革命の上に印した彼の精神と範例とによつて、指導されるであらう。

同志レニンは逝いて、今やこの世界には亡いのである！ 彼が公の席上に現はれた最後は、昨冬のモスコー全露勞働組合大會であつた。私が最後に合つたのは、クレムリンに開催された共產黨インターナショナル第四回大會の時で、彼は席上約一時間世界の形勢について演說し、右終つて後數分間プニットフォームの椅子にかけて、大會の役員等と交談した。その時私は彼と言葉を交し、握手し、さよなら！を言つた。それが最後であつた。モスコーの多くの同志達にとつても、やはりそうであつたといふのは、それ以來彼は病の床に就いたからである。同時に五人もの名醫が獨逸からやつて來た。私は獨逸からモスコー

くの歸途、それらの名醫達と同じ汽車に乘り合はせた。我々は數ケ月の間、たゞひたすらに不安な心持で日々の新聞に掲載される容體書の公報を見守つてゐた。それには右の名醫達の署名があつた。最近數ケ月、我々は彼が快方に赴いてゐるといふことまた前にも言つた通り、散歩をするやうにもなつたと云ふことを、斷えず聞かされてゐた。そして我々はその頃に撮つた彼の寫眞を見た。少し老けはしたが、然ししつかりとしてゐる彼を見て、それほどまでに恢復したのを、非常に喜んだ！　然しもう彼は我々から永久に去つて仕舞ひ、共產黨インターナショナルで彼の雄姿を見ることも出來なくなつたのである！　とは言へ彼がその生涯に於いて殘した精神と事實とは、我々彼の追隨者を導き、彼が爲さんとしたものの……………………。

　世界の共產主義者は彼の精神と彼の事實を銘記し、彼がその生涯に於いてなせる如く努力し、彼の…………………ならぬ！　それこそは、彼と、彼の尊き生命と事業に向つて、我々の爲し得る最善の事である。（一九二四・一・二四）

ニコライ・レーニン

山川均

一

―（ニコライ・レーニン）―

『世界ぢうで最も憎まれ、そして最も愛せられてゐる名前はニコライ・レーニンである。』『キリストは、憎むことは殺すことであると教へた。そしてレーニンに對するブルジョア世界の憎しみは、過去六七年の間に幾度びも幾度びもレーニンを殺したのであつた。一九一八年の九月一日には、レーニンは刺客のために二箇所を刺され、二日には、レーニンは死亡した！。翌一九年の一月には、レーニンはトロツキーのために逮捕されてクレムリンの監獄にゐた！。その秋には、レーニンは又々クレムリン宮に幽閉され、つゞいてレーニンは斬り殺された！。それでもまだ腹の虫が納まらぬとあつて、二二年の秋には、彼れはとうとう赤殺されてドン河の川底深く、さんぶりと投うり込まれたのであつた！』。

―（ンニーレ・イラコニ）―

レーニンはこの種の有ゆる殘忍な殺し方にも耐へて生き延びてゐた。けれども後にも先にもたつた一度、鉛の銃彈が、ほんとに彼れの肉彈を貫いたことがあつた。實際、十一月革命以來レーニンは絶えず暗殺の危險に曝され通ほしてゐた。しかしレーニンは一切平氣で、自分を刺客の的においてゐた。革命の翌年の八月末日には、レーニンはミヘルソン工場（今はレーニンの遺蹟に因んでウラヂミイル・イリツチ工場）で一萬五千の勞働者に演說した。工場を出て自働車に乘りかけると、一人の娘が何か書いたものを手に持つて、請願書でも出す樣子で駈けつけた。そこでレーニンは手を延べて受け取らうとする刹那、今一人の娘ドオラ・カプランが現はれて、續けざまに三發を放つた。そして其内の二發はレーニンに命中した。

一九一八年八月三十日、レーニンはヤロスラフスキー、アローノフなどと一緒にバウマンスクで演說した。この演說がすむ

と、彼は直ちにザモスリウオレチエに急いだ。そして午后六時からミヘルソン工場で演說した。會場はミヘルソン工場の勞働者は固より、モスコー、ダンロフ、スミルノフあたりから態々出掛けた男女の勞働者で一杯になつてゐた。『この飢えと困難との時に、すべての人々は何をおいても食物を得ることに思ひわづらはねばならなかつた。けれども吾々の指導者イリッチの言葉を聞くことは、ほんとのプローレタリアに取つては、パン以上に大きな必要であつた』當時を回想して、ミヘルソン工場の一勞働者は斯う書いてゐる。

レーニンの演說が終ると、暫らくは沸き返へるやうな喝采と絶叫が起つた。そしてやがてそれは力强いインタナショナルの歌に變つた。レーニンが演壇を降りて工場を出ると、インタナショナルの歌がまた一としきり歌はれた。『世界は新しき礎の上に立たん……。』この時、俄然として銃聲が轟いた。

銃丸の第一發は、レーニンの肩骨を射碎いてゐた。そして今一發は左の肺の上部を貫いて、頸の右側の丁度鎖骨の上で止まつてゐた。レーニンは自動車でクレムリン宮に運ばれると、獨りで階段を昇つたが、三階まで上ぼると其處でばつたりと倒れた。彼の左肺には血液が一杯になつてゐた。そして三日の間は出血がやまなかつた。それから八日の間、レーニンは生死の境目を辿つてゐた。

ミヘルソン工場の事變のある三週間前に、アローセフは社會革命黨やメンセヰキ黨に對して取るべき態度につき、レーニンの助言を求めに往つた。といふのは、當時尙ほ多くの人々は、是等の黨派に多少の望みを繋いでゐたからであつた。

『君は一體、エス・エルをどう思ふ？』

『ウラヂミイル・イリッチは、私の意見を熱心に聽き終へて斯う尋ねた。そこで私は、當面の問題に關聯した點につき、エス・エル黨に對する自分の考へを述べた。

『私の答に對する内心の不滿にむづ〳〵して、ウラヂミール・イリッチは頸筋から額の方へ、額からまた頸筋の方へ、二度ばかり頭を撫でかへした。そして身體を眞直ぐになほして、熱心に鋭く私に見入つた時には、彼れの兩眼のほか、何も彼も消え去つたようだつた。

『エス・エル黨はソヴイエットの權力に對する陰謀者になつてゐるのだ。』これが彼の言葉であつた。そして彼は說明をつけ加へて斯う云つた。

『彼等は暗殺をやるだらう』。

『彼は平氣な顏をして、寸分疑ひないといふ聲で、それも仕方がないといふ態度で斯う云つた。それは丁度仕事に慣れた

百姓が、「どうにも致し方がないと諦らめ切つて、乾草のことなんか云つたつて仕様がない、この雨ぢやどうせ腐るんだ」と云ふような調子であつた。

三週間の後には、エス・エル黨のドオラ・カプランはミヘルソン工場でレーニンを狙撃した。この時を追憶したアローセフは筆をつゞけて斯う書いてゐる。

『この時、私は後にも前にも初めての感じがした。一瞬の間は何かしら此の世のものでない豫言的なもの、秘められてゐた神秘の一角が、眼前に開かれた心地がした。が然し簡單明白なことだ。イリツチは實際、どうして之を豫言したらうか。それは注意深い百姓が、自分の仕事のことに通曉して居つてその乾草や穀物が、或る狀況の下には屹度どうなるかを理解してゐるように、彼はこの種の事柄に通曉してゐたからではあるまいか』。

レーニンが無產階級の運動の情勢に通曉してゐたことは慥かに、百姓が畑の仕事に通曉してゐるのと同じであつた。百姓が土の中で育つたように、レーニンは、ロシアの無產階級の運動の中で出來上つた人だつた。

二

ウラヂミール・イリツチ・ウリヤノフ（レーニン）は一八七〇年四月十日、ヲルガ河畔のシムビルスクに生まれた。一八八七年にその町の中學校を終へると、彼は首府の大學に這入りたかつたが、兄アレキサンドルが曾て大逆罪で處刑を受けたといふかどで、入學を拒まれた。そこで彼はカザン大學の法科に入學した。しかしカザン大學の學生生活は、ほんの一月しか續かなかつた。彼は學生の革命運動に加擔したかどで、一ケ月の終りには退學を命ぜられた。

四年の後、彼は初めて田舍をでゝ、ペトログラード大學に法律學と經濟學を修め、法學士の學位を受けて辯護士となつたが、たつた一度しか法廷には立たなかつた。

一八九〇年代の末年には、西歐の資本主義は初めてロシアの門を訪づれた。そしてどこからどこ迄も中世紀的なロシアの土壤には、そこゝに西歐の資本主義が植えつけられてゐた。そして資本主義がロシアに押寄せる一と波ごとに、それはマルクス主義の思想をも打ちあげた。これは當年の社會思想の上にもはつきりと現はれてゐた。即ち一方には、資本主義以前の民衆運動を代表したポピユリストの思想と、他方には資本主義以後の無產階級運動を代表するマルクス主義とは、當年のロシアの社會思想のうちに、その對照がだんだんと鋭くなつてゐた。

カザン大學を追はれてペトログラードに來たレーニンは、サマラにゐるうちに既にマルクス主義に染まつてゐた。二年の後には、彼れの周圍には少數の勞働者が集まつて『勞働者解放爭闘同盟』といふ一團體が作られ、レーニンはこの小團體を代表して最初の勞働者の同盟罷工を組織した。そこでレーニンはこの頃から、既に警察に附け狙はれ、多くは勞働者町に匿くれて日を過ごしてゐたが、一八九六年の末には逮捕されてペトログラードの監獄に繋がれ、翌年一月、勅令によつてシベリアに追放された。この時から一九一七年に至る二十年の間、彼は多くは亡命者の生活をつゞけてゐた。

シベリアの刑期は、彼は讀書と著述に費やした。彼れの有名な論著で、この間に書かれたものが少なくない。シベリアの流刑を終へて歸ると、官憲はレーニンが大都會や工業地帶や大學町に住むことを禁じたので、彼はロシアを去つて西歐に亡命した。亡命中に於けるレーニンの第一の活動は、この時既に十數年の亡命生活をつゞけてスヰスにゐた有名なマルクス主義者のプレハノフ、マルトフ、アキセルロツド、ポトレソフ等の一團と『イスクラ』誌を發行したことであつた。『イスクラ』誌は亡命社會主義者の運動の中心となり、露國社會民主勞働黨の中央機關となつたばかりでなく、全露國に亘る社會主義的宣傳の中心となり策源地となつて、露國革命運動史の上に、重要な任務を演じたものである。レーニンはその後『イスクラ』の誌上に、幾多の有名な論文を公けにしたが、その最初の重要な論文『何を爲すべきか』は、露國共産黨の綱領と戰術との基礎をおいたものであつて、後年に於けるボルシヱヰズムの神髓は、既にこの一小論文の一に悉く見出されると云はれてゐる。

露國社會民主勞働黨は一八九八年に創立せられたが、一九〇三年にはブルツセル及びロンドンで第二回の大會を開いた。この有名な大會で、黨は多數派(ボルシエヰキ)と小數派(メンシエヰキ)との二つに分裂した。そしてこの多數派(ボルシエヰキ)を指導したものはレーニンであつた。黨の分裂と同時に、『イスクラ』を初め機關紙は大抵メンセヰキの掌中に歸したので、レーニンはルナチヤルスキー、ボグダノフ、ウオロフスキーなどと『前方へ(ウペリヨオド)』といふ新聞型の小機關誌を發行した。當時プレハノフ、マルトフ、アキセルロツドを初め、名望ある先輩は悉くメンセヰキに屬してゐたので、レーニンは彼等を向ふに廻して、唯だ一つの『前方へ(ウペリヨオド)』の小機關誌によつて惡戰苦鬪した。然るに一九〇五年の頃になると、無産階級の活動分子は悉くボリセヰキに加擔してゐることが明かになつて來た。

一九〇五年五月、露國社會民主勞働黨は、ロンドンで第三回大會を開いたが、之ぞボリセヰキの最初の大會であつた。一九

〇五年の第一革命を背景に開かれたこの大會に於て、レーニンは初めて、來るべき露國革命に當つては、吾々は最早やブルジヨア共和國の實現を以て踏み止どまつてはならぬと主張し、來るべき露國の革命が、ブルジヨア革命と社會主義革命との境に立つといふ見解を明かにした。そして彼は大會の綱要書のうちに、無産階級獨裁、資本の沒收、世界革命の序幕としての露國革命といふような、一切の問題を明確に解決して居つたのである。

一九〇五年の革命後、レーニンは大赦を得て久し振りに故國に歸つたが、間もなく革命の慘敗につゞく反動の高潮期となつたので、彼れは再び亡命の人となつた。翌一九〇六年にはフインランドに、七年にはスヰスに、八年にはパリに留どまつてゐた。

スヰスでは、レーニンの跡を追ふたジノヰエフ、カメネフ等と落ち合ひ、ゼネヴアで『社會民主黨』といふ宣傳向きの新聞と、『無産階級』といふやうに研究的な雜誌を發行した。八年には一時パリに移つたが、一二年には同志と共にガリシヤの山地なるクラカウに居を定めた。クラカウは露國々境に近く、國内の運動との聯絡策應に便利であつたゝめである。當時故國の方は、ストリツピンの高壓政策の下に、無産階級運動はまるきり火の消えた有樣であつた。ヨーロツパに於ける亡命者の間でも意氣銷沈し、生涯を革命運動に捧げて來た白髪の闘士も、すべての光明と確信とを失ふてゐた。殊に亡命者の殆んどすべてはメンセヰキであつて、ボルセヰキはパリの一般社會からは指彈され、亡命者仲間でも幅が利かなかつた。當時巴里の或る滑稽雜誌が、レーニン、ジノヰエフ、カメネフの外に第四人目のボリセヰキを搜し當てたものには王國の半分をやるといふ、冗談の廣告を出したくらいであつた。然しレーニンは何時でも『失望してはいけない、この闇黑は過ぎ去り、濁つた波は引いてしまふ、そして五六年たつと吾々は滿ち汐に乘る時が來る』と云つて同僚を勵ますのが常だつた。

三

一九一〇年になると、レーニンの云つた通りに、汐合ひが變つて來た。そして一一年には、ロシアの勞働運動には僅かに復活の色が現はれた。當時レーニン等は、ペトログラードには『星(ツイツダ)』といふ公然の新聞を持ち、モスコーには『思想(ミイスル)』と題する月刊雜誌を持つてゐた。そして國會(ドンマ)には極く少數ながらも、一團の勞働者議員を同志に持つてゐた。そこで一二年の一月にはプラノグに協議會を開いて黨の陣容を整へ、レーニンはジノヰエフと共にクラカウに移り、『ツウエツダ』『プラウダ』の兩機關紙

には、毎號レーニンの戰鬪的な文章が載るようになつた。

　レーニンが實際の形勢を見誤つたことがあるならば、その一つは僅かに歐洲大戰の勃發當時に於ける、社會黨の態度を見誤つたことであつた。當時レーニンはクラカウに止どまつてゐたが、ジノヰエフが、獨逸社會民主黨はとても軍事費に反對し得まいといふと、レーニンはどうしても承知しなかつた。そこで、二人は賭をした。そして軍事費協贊の報導をのせた社會民主黨の機關紙『フオルヴエルツ』を手にしても、レーニンはまだ信用しなかつた。『こんな事がある筈がない、屹度これは贋物だ、ドイツのブルジヨアの奴等が、吾々を欺いてインタナシヨナルに裏切らせるため、特にフオルヴヱルツの贋版を發行したものだ』。レーニンは頑として斯う主張した。ヨーロツパの社會民主黨の墮落をレーニンが知らなかつた筈はない。しかし彼には國際社會主義に對する信念があつた。この信念は見事に裏切られた。そしていよ／＼社會民主黨が軍事費に贊成したことが分つた時、憤ほりと共に彼の唇を衝いて出た一語は、『第二インタナシヨナルの終焉！』といふ叫びであつた。この時から、彼は全ヨーロツパの戰爭社會主義者に對する、斷乎たる戰ひを決意した。

　開戰後、レーニンは初めスヰスのベルンにゐたが、間もなくツーリヒに移つた。ツーリヒでは、戰爭の熱狂裡から、七人の目醒めた青年勞働者を拾ひ出すことが出來たと云つて、レーニンは非常に喜んでゐた。當時スヰス政府は、レーニンに國外退去を命じようとして居つたが、レーニンとジノヰエフから、『スヰス在留中は溫厚に致す可く……』といふ一札を入れて、やつとのことで退去命令を免かれた。

　第二インタナシヨナルは死んでも、國際社會主義の精神は滅びなかつた。戰爭第二年の九月には、第二インタナシヨナルから離れた各國の反戰爭社會主義者によつて、彼の有名なツインメルワルドの國際會議が開かれ、つゞいて六ケ月後には、キエンタールの國際會議が開かれた。この新たなる國際社會主義の運動には、レーニンは固より重要な役割を演じてゐた。この二つの國際會議は、數年後に創立された第三インタナシヨナルの先驅となつたものである。

　一九一六年から七年にかけては、レーニンは矢張りツーリヒに止どまつて、靜かに故國とヨーロツパとの形勢の推移を眺めた。そして毎日午前と午后との二時間づゝは、きつとスヰス社會黨の圖書館で過ごしてゐた。しかしスヰスの社會黨の領袖連も組合運動の指導者等も、誰れ一人、レーニンに注意を拂ふてはゐなかつた。

一九一七年には、資本主義のヨーロッパは、地殻の殻を破ろんでゐたロシアの一角から爆裂した。三月十五日、ツアーの退位はミリユコフによつて、冬宮前の群衆に告げられた。幾百年の間、日の目を見なかつた『暗黒の民』のうへに、日光は洽ねく照り耀いた。ブルジョアの上にも労働者の上にも、地主の上にも百姓の上にも、搾取者の上にも被搾取者の上にも——。ロシアにデモクラシーが生まれたのだ！。すべての人は歓喜し、熱狂し、有頂天になつた。そしてブルジョアは労働者と、喜びのあまりに街上で相抱擁した。新しい光に照された彼等は、眩ぶしくて何も見へなかつた。

この一九一七年の四月四日の夜、レーニンはペトログラードに現はれた。

レーニンがペトログラードに歸つて來ると間もなく、社會民主勞働黨の兩派——ボリセヰキ派とメンセヰキ派——の間には、時局に對する聯合會議が開かれた。レーニンはこの會議に於て、初めてこの革命を無産階級革命に推し進めなければならぬと主張し、且つロシアに無産階級革命が起つたなら、全ヨーロッパは之に倣ふと主張して一同を驚かした。故國に歸つて來たレーニンが、すべての人々の目を眩惑してゐた眩ぶしい光のうちから、何人も觀取することのできないものを觀取したのは、この革命が、決して單なるブルジョア・デモクラシーの革命に踏み止まることは出來ぬといふ、必然の形勢であつた。彼に取つては、無産階級が政權を握らねばならぬといふことは、革命の第一日から決まつてゐた。唯だ剩すところは、時機の問題だつたのである。

しかし當時は尚ほ、ボリセヰキの大多數はこの革命を、單に專制政治に對するブルジョアの政治革命と見做してゐた。そこでレーニンの斯ような主張に對しては、ボリセヰキ派のうちからも猛烈な反對が現はれた。

七月には、リウオフの臨時政府は聯合國側の強要に引ずられて、ドイツに對して全線に亘る大攻撃を決行した。この無謀な攻勢が失敗に終ると、平和とパンに對する民衆の要求は俄然として高まつて來、ペトログラードには有名な七月の大反亂が勃發した。七月十六日になると、ペトログラードの民衆は悉く街上に出で、反亂はいよ／＼大衆的の性質を帶びて來た。この時レーニンの頭には『今だ！』といふ考へが閃いた。しかしレーニンは直ぐ打消した。『無産階級が今權力を握つたところで仕方がない』。この時から數ケ月の後に熟すべき條件は、この時はまだ備はつてゐなかつた。レーニンは固より、それを見落しはしなかつた。

七月の反亂の結果リウォフが辭職し、ケレンスキーが之に代はつて絕對權能を賦與せられると、臨時政府は一時の安定を得ると同時に、對內的には反動的の色彩がいよ／＼濃厚になつて來た。そして七月十八日にはボリセヰキに對する大檢擧が始まつた。そこでレーニンは再びフインランドに亡命した。

九月にはコルニロフ將軍のリーデターの陰謀が失敗した。そしてこの陰謀の蔭には、ブルジョアと臨時政府の或者のあることが明かになつた。この時以來、レーニンは初めて、一切の權力をソヴィエットの手に收める必要を力說した。

十月の末には、ペトログラードには民衆の自然の大示威運動が起つた。そして二十三日の夜は、ボリセヰキ派の中央委員會は、徹宵の會議を續けてゐた。しかしこの會議では、即時蹶起を主張したのは、レーニンとトロツキーだけであつた。十一月六日は、全露ソヴィエットの最初の大會の日と定められてゐた。そして十一月三日には、ボリセヰキの領袖は、閉ぢ込めた一室で歷史的の會合を開いてゐた。レーニンはこの會合で斯う云つた。『十一月六日は早過ぎる、吾々の蹶起には、全國的の基礎がなければならぬ、然るに六日には、全露ソヴィエット大會の代議員はまだ全部は到着して居らぬ、然し十一月八日では遲そすぎる、この時は既に大會が組織されてゐる、そして多くの民衆を包容する一大組織は、神速果斷な行動が取りにくい、吾々は大會の開かれる七日に事を擧げねばならぬ、そして大會に向つて、こゝに權力がある、諸君は之に對して如何なる態度を取るかと云ひ得るやうにしなければならぬ……』。

かくて十一月七日は、人類の歷史に、新しい角度を劃する日となつた。

四

レーニンの一生は、ロシアの無產階級運動そのものと、解き放しがたきほど密接に織り込まれてゐる。レーニンを生んだものはシムビルスクの田舍貴族ではなくて、ロシアの無產階級の運動であつた。

しかしレーニンは決して、その時々の都合のみで動いてゐる謂ゆる『實際家』ではなかつた。レーニンは何時でも『理論』を持つてゐた。彼はする事なす事、どんなことにも、必ず理論を持つてゐた。レーニンは理論ずきだつた。彼ははつきりとした理論なしには、何事をもしなかつた。理論家としてのレーニンは、理屈がありすぎるほど理屈つぽい理論の人だつた。しもレーニンは、自分一個の獨創の學說を樹てようとはしないで、徹頭徹尾、マルクスの學說をもつて終始した。レーニンは世界

を通じての一流のマルクス學者であつたばかりでなく、彼はマルクス説とこの公式とを、そつくり其まゝ現實に移そうとした。マルクスの學説に對するレーニンの解釋が正しかつたか、それとも誤つてゐたかは別として、レーニンほど忠實に、そして確信をもつて、マルクス説をそのまゝ實際に適用しようとした人は、恐らくはマルクス自身の外にはないだらう。或はマルクス以上であつたかも知れぬ。自分の學説を確信して、自分自身の生命を試驗に提供しようとする醫學者が、致命的な黴菌を呑みこんで何等の不安をも感じないように、レーニンは彼れの學説と理論——マルクス主義——に對して、少しの疑ひをも持つてゐなかつた。

そこで或る人々は、レーニンは自分の理論——乃至は空想——を、ロシアの民衆に强制しようとしたものである、彼は一億五千萬の民衆を、その學説を試驗する資料にしたもので、彼はロシアの民衆を、活きたまゝで解剖する材料に使ふたものであるといふ人がある。しかしレーニンがマルクス主義を忠實に實行しようとしたのは、それが自分の希望や興味に一致してゐたからではなくて、眞實に社會進化の法則を説明してゐると信じたからであつた。レーニンほど、實際の事實を見定める場合に、自分の希望や幻想に動かされなかつた人はない。そして彼の理論は、何時でもこの事實の上に立つてゐる。

レーニンは理論家であつた。しかしレーニンは理論家以上の理論家だつた所以は、彼れの理論が、何時でも、ぴつたりと實際に結びついてゐたところにある。レーニンに取つては、理論のない實際がないように、實際のない理論はなかつた。少くともレーニンに取つては、その理論から實際への移り目といふものはなかつた。しかしレーニンが實際の事實を見る場合には、非常に理論的であつた。レーニンが無産階級運動の取るべき方針を決定するとか、乃至はソヴイエツト政府の新しい政策を定めるといふ場合には、彼はその時々の實際の形勢を細かに研究した。彼は少しも自分の希望や都合に動かされなかつた。彼は殆んど數學の計算に均しい精密さで、有利な要素と反對の要素とをしらべ上げ、双方を合計すると幾つと幾つになる、そこで之から之を差引くと跡には幾つ殘る、だからこれ／＼の方針を取らねばならぬといふ調子であつた。

これがレーニンをして、何時でも大勢の趣かさるを得ない必然の途、唯一の途を打ち當てさせた。そして彼は何時でも、忠實にこの途に從つた。

レーニンは自分の理論をロシアの民衆の上に强課してゐるといふ批評は、レーニンがロシア革命をやつたといふ考へと同じ

ように、驚くべき英雄崇拜の思想である。人間といふ概念が、地球の上の人間を意味してゐる限りは、ロシア革命のような大きな歴史的事實を造り出したり、一億三千の民衆の上に、自分の理論——乃至は空想——を強制することの出來るような、そんな非凡な力を持つた生物は、少くとも人間といふ概念のうちには這入らない。レーニンを豪らいといふ意味が、若し斯ような十人並みの人間を飛び離れた非凡を意味するなら、レーニンは決して豪らい人ではなかつたのである。

若しレーニンが豪らいとすれば、それは十人並みの人よりも社會が動かうとし、動かさるを得ざる必然の途、唯一の途を、少しばかり早く見定めたところにある。そして一度びこの途を見定めると、レーニンは忠實にこの途に從つた。彼は決して傍目を振らなかつた。彼は決して脇道へは行かなかつた。彼は恐ろしい勢ひをもつてまつしぐらにこの途を突進した。

斯ようにレーニンが、歴史の必然の歩みをはつきりと見定めた力は、彼が理論家たる所以であつて、同時にまた、彼が實際家たる所以であつた。レーニンに於て、吾々は理論と實際との間に、寸分の間隙だもなかつたことを見るのである。

レーニンは歴史の必然を見定めた。そしてその從順な道具になつた。この意味では、レーニンは何時でも、必ず遁れる事だけを遣つたのであつて、彼の歩ゆんだ道は、少しの無理がなく少しの氣紛ぐれがなく、少しのあぶな氣もない理詰めの道であつた。レーニンは決して放れ業をせぬ、石橋を叩いて渡るほどの堅實な實際家であつた。たゞレーニンは何時でも、彼れの理論の鐵槌を以つてこの石橋を叩いて見た。そして一度びこの試驗に耐へたなら、それが今にも千仭の崖の底に崩づれ落ちそうに見える石橋であらうとも、彼は恐ろしい確信を以つて突破した。

レーニンは斯うして、一七年の十一月には、ボリシヰキの殆んどすべての領袖が蹶起に反對した時に、斷乎として無産階級の手に政權を收めることを主張した。彼は斯うして一八年の一月には、多くの人々がドイツとの開戰を主張した時に、獨りブレストの屈從的條約に調印することを主張した。そして一九二一年には、レーニンは同じ理由によつて、戰時的共産主義から新經濟政策に立ち歸る必然を力説したのである。

五

これは又レーニンをして、自分の主張に驚くべき自信を持たしめた。十一月革命の殆んど前日まで、カメネフ、リアザノフジノヰエフのようなボリシヰキ派の有力者は、與つてレーニン

の蹶起説に反對して居つた。けれどもレーニンは唯だ一人で主張した。『吾々は、一切の權力をソヴイエットにといふ標語を棄てなければならぬ、さもなくば、吾々は即時に蹶起しなければならぬ、その間には中間の途はない！』。『直ちに今勞働階級が政權を握つても、維持することは不可能であるといふカメネフ等の主張に對して、レーニンは『失敗することが不可能だ』とやり返へした。そして『一週間とは待てぬ、今やるか永久にやらぬかだ』と主張した。一九一八年の春には、カイゼルの軍隊はすばらしい勢ひで、フランスの戰線を破つてゐた。何人も、ドイツに革命が起るなどゝは思ふてゐなかつた。レーニンはこの時、『今年のうちにカイゼルはきつと沒する、それは絕對に確實だ』と主張した。そして九ケ月の後には、カイゼルは國外に蒙塵した。

一九一七年から今日に至るまで、ロシア革命は幾度びとなく重大な危機に遭遇した。ロシア革命といふ大きな歷史的の事實が、決してレーニンの力で成されたものでないにもせよ、少くとも革命を危機から救ふたものは、主としてレーニンの力であつた。そしてロシア革命が當面した幾多の危機のうちで、最も大きな危機の一つは、彼のブレスト・リトウスクの掠奪的講和の時であつた。トロツキーを初めとして、ボリセヰキの領袖の多くは、獨逸との開戰の避けがたきことを主張した。彼等は帝國の無産階級の名譽にかけても、ドイツの帝國主義的征服的の講和條件に調印することは出來ぬと主張した。若しロシアがこの征服的の講和條件に調印を拒んだなら、獨逸の勞働者は、果して軍國主義者の命令に從つて、無產階級のロシアに進軍するだらうか。之が多くの人々に取つての第一の問題であつた。トロツキーは『否』と答へた。しかしレーニンは『進軍するだらう』と云つた。

獨逸の勞働者が進軍するとしたならば、ロシアの軍隊は之と戰ふために進軍するだらうか。多くの人々は、固より進軍するだらうと叫んだ。しかしレーニンは靜かに『進軍しないだらう』と云つた。『戰爭は農民がやらねばならぬ。然るに農民は戰爭に反對の投票をした』。農民は何時戰爭に反對の投票をしたらうか。『彼等は足で投票した。彼等は戰線を棄てゝ走つてゐる！』レーニンは斯う答へた。レーニンに取つては、ドイツの征服的條件に調印するがよいか惡るいかは、事實の上から、最早や問題ではなかつた。況んやドイツと開戰するがよいか惡るいかは最早や少しの問題でもなかつた。農民は革命によつて土地を得た。彼等は過去幾世紀の間飢えてゐた土地を得た。しかし彼等はまだ、與へられた土地に手を觸れて居らぬ。彼等は今、戰線

から崩壊のように農村に歸つてゐる。農民として、先づ革命によつて與へられた土地に手を觸れしめよ。レーニンに取つては何も彼もそれからである。農民は革命によつて與へられた土地に、現實に手を觸れるまでは、革命を擁護する謂はれがない。戰爭は革命家の一團でやる譯には行かぬ。農民は戰線をすてゝ走つてゐる。それは最早や軍隊ではなくて、パンと土地とを欲する百姓に過ぎぬ。露國の軍隊は、新たな革命軍に組織しかへるまでは、決して再び戰はぬであらう。レーニンは斯う主張した。彼はドイツの講和條件に調印しなければならぬ理由を、二十一箇條に分けて、大學の講堂で講義をするような調子で説明した。

この頃のレーニンは頗る不評判であつた。ボリセヰキの領袖等は多くはトロツキーに左擔した。元氣なカール・ラデツクなどは或る日のソヴイエツトの集會で、『若しペトログラードに五百人の勇敢な人があつたなら、吾々は君を牢獄に投じたらう』とまで豫言した。『全く、誰かゞ牢に這入るかも知れぬ、けれども若し君がよく將來の形勢を明かにしたならば、君が僕を牢屋に入れるよりも、僕が君を牢屋に送ることの方が、遙かに事實に近いことを知るだらう』。レーニンは冷やかに斯う答へた。レーニンの確信は、如何なる反對をも跳ね返した。

レーニンは理論家にして實際家にしてそして同時に革命家であつた。彼は理論家としては、單なる理論家以上の何物かを持つた理論家であり、實際家としては、單なる實際家以上の或物を持つた實際家であつたように、革命家としてのレーニンは、同じく單なる革命家以上の何物かを持つてゐた。『プレハノフもまた革命家であつた、けれども彼は革命意志に滿ち充ちてゐなかつた、そしてロシア革命教師として極めて大重な人物であつたにも拘らず、プレハノフはロシア革命の算術を教へただけで、その代數學を教へることが出來なかつた。』といふラデツクの批評は、たしかに當つてゐる。

レーニンは何事につけても、中途半端ないい加減なことはしなかつた。彼はどこまでも徹底的にやりぬかねば氣が濟まなかつた。レーニンが巴里に亡命してゐる頃、同志の間には、マルクス主義とエルンスト・マツハの學説とを調和しようと試みるものがあつたが、レーニンはマルクス主義の純眞を傷づけるものとして非常に反對した。この時レーニンはもう四十歳であつたが、彼は之から哲學の研究に沒頭し、哲學上の有ゆる著書を讀破して一大論文を書き、同志の誤謬を論破した。これが一九一〇年に公刊された『唯物哲學と經驗的批評哲學』であつて、レーニンは社會主義の學理上の完全を保つために、自分で哲學者

となつたのであつた。

個人としてのレーニンは、非常に親切な人であつた。ゴルキーは『彼の厳格な哲學の中に、時としては殆んど女性的な他人に對する優しさの閃きがある』と云つて居る。レーニンがクレムリン宮から有ゆる地方に送る通達のうちには、ソヴイエットの執政についての重要な事柄が書いてあるうちに、某といふ百姓の婦のためには三人の子供を抱へて困つてゐるからどこそこからどこそこの停留場まで穀物を運んでやつて呉れとか、誰某れといふ年寄は帝政時代からの熱心な運動者だから、どうかソヴイエットの家屋の一室を借してやつて呉れとかいふような、細かな頼みが書き加へてあるのが常である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

レーニンは屢々死を傳へられたほどに、革命の初年この方、甚だしく健康を損してゐた。レーニンを不健康にした有力な原因の一つは、ミヘルソン工場で打ち込まれたまゝで殘つてゐる銃丸であつたが、今一つは、云ふまでもなく極度の過勞であつた。レーニンの健康は、過去六ケ年の間に、新しいロシアの建設のために文字通りに消耗し盡されたのであつた。

『もうあと十日で！吾々は巴里コムミユンだけ持ちこたへるのだ』レーニンは斯う云つて疲れた同僚を勵ました。ペトログラードの第三回全露ソヴイエット大會に於ける演説の冒頭にも彼は斯う叫んだ『同僚よ、巴里コムミユンが七十日の間續いたことを考へよ、吾々はもう、それよりも二日間長く持ちこたえてゐる！』ロシア革命は、七十日を七十倍にしたよりも長く持ちこたへた。レーニンはその肉眼をもつてロシア革命の七度目の誕生日を見た。レーニンはとうとう眼を瞑むつた。そしてレーニンが眼を瞑つた時、ブルジョアの世界は、七年の間ことさらに見ることを拒んでゐたこのロシア革命と無産階級のロシアといふ、歴史的事實に向つて眼を開かねばならぬ時が來たのである。

人間としてのレーニン

茂森唯士

一

レーニンはその生前から、ロシヤに於て神話説、豫言者說、聖人說をすら傳へられてゐたと聞く。彼が死んだ今日、それは一層盛んに流布されるかも知れない。我國に於てもレーニンをナポレオン型の英雄と見、稀代の怪傑と見る傾向は少からずあると聞く。既にさうした銘を打つた書物すら出かゝつてゐると聞く。然しレーニン自身は、彼の非人間化や偶像化を意味する神話說怪傑說は勿論、聖人說をも排斥するに違ひない。レーニンに對する前記のやうな見方はあたつてゐない。何故なら、彼はあまりに多く人間であるからだ。最も人間的な人間であるからだ。この彼のあまりに多い人間味からして、僕はレーニンを一個のリアリストであるとする。その言葉の最も高い、純化された意味でのリアリストであるとする。この一篇に於て僕は、リアリストレーニンの人間そのものゝ內容を、僕の手許にある限りの材料と、僕自身の批判と、茲に與へられたる紙數の範圍で、より深くより精透に色々の方面から解剖し、研究してみたいと思ふ。

現ロシヤ文壇批評界の花形ウオロンスキイは、そのレーニン論の中で、レーニンとゴーリキイの興味深い對談の一場面を次のやうに描いてゐる。

『マキシム、ゴーリキイが人々と一緒に休憩してゐる部屋に、例のやうに、步いて來るといふよりも寧ろ走つて來るやうな調子でレーニンが這入つて來た。一つの評議會が終つて、今一つが恰度始まらうとしてゐる。レーニンは、忙しさうに食ひ、自分で前なるコップにお茶を一杯注ぐ。それから彼獨得のすばしこい動作で、ゴーリキイが贈り物として持つていつた本を開いて、急速に頁をめくる、彼の態度には、直ちに內容を心の中に

把握した場合の、書物に對する確信に滿ちた容子が現れる。彼のそうした動作は、長年の間、書籍に親しんで來た結果として出來あがつたものに外ならぬ。

ゴーリキイはこゝろもち眉をひそめて、レーニンを眺めた。レーニンの眼は、いつものやうにキヨロキヨロと輝いてゐた。ところでこの二人の容子は、むしろ反對でなければならぬかのやうに思へる。レーニンの眼を藝術家ゴーリキイに移植したら、「獨斷家」「計畫屋」らしいところが少しは現はれる。ゴーリキイの眼は表情に富んだ、水のやうな眼である。ゴーリキイは角ばつた、丈の高い、不均衡なだまりこんだ、じつとしてゐる男だ。レーニンは、すばしこい、くりくりした、活動的な、生きた電線のやうな男だ。

マキシム・ゴーリキイは、露國のクラシックと、諸部門の科學書とを、ロシヤ語で出版する伯林の書肆「ゲビーナ」とが關係ある。その本は素敵に立派に印刷され裝幀されてあつたので、ゴーリキイの氣に入つてゐる、レーニンの手には、マキシム・ゴーリキイの偉大な技巧と趣味とによつて選集された、すばらしい印度の童話と傳說とがのつてゐたのだつた。

『成程』レーニンはうなづく。『素敵な本だ。だが、もつと輕文學か少くともつと實際的な書籍が多く出て欲しいと思ふネ、それがないと、飢えと破壞が起る。何よりも先づそうした本を考へることが必要だ。』

『だが、非常に安いんですよ、ウラヂーミル・イリイッチ、』とゴーリキイは抗辯した『まるでたゞですよ、一錢か二錢で買へますよ。』

『こんなものにどんどん金が費されたら、金が無くなつてしまふ……』

以上は或時或場所でのゴーリキイとレーニンの對話の一場面をウオロンスキイが描いたものであるが、この小話の中から僕たちの汲みとるものは何であるか、ゴーリキイ乃至は夫れ以下の更に最右翼の思想系列に連らなる反動思想家、若くは高踏的藝術の徒は恐らくいふであらう『人は麵麭のみにて生くる者に非ず』と。そして藝術を解せざるレーニン、功利主義のレーニンを高所から見下して嗤ふであらう。現に今巴里に亡命中の革命前派の露國作家クープリンは、一露紙に掲げたその「レーニン論」の中で次のやうに藝術なきレーニンを嗤つてゐる。

『レーニンにとつては、美も藝術も存在しない、それどころではなく、彼は何故人々がベートーヴエンのソナタや、レンブラントの繪畫や、ミロスのヴイナスや、ダンテの神曲から快感を覺えるかの問題に些の興味をも持たないのだ。』人間といふもの

は、性質として、得て無益のものに興味をもちたがるものだ……諸君の藝術的作品と稱するものは、全體階級爭鬪や、未來のプロレタリヤ政治に如何なる關係をもつてゐるものかね？」と何の惡氣もなく、大人のする、人の善い微笑をもつてレーニンはいふのだ。彼は單純性である。そして彼自身は殆んど無垢である。その無垢たるや、トロツキイや、ヂエルヂンスキイの大逆殺よりも、更に怖しい無垢である『道徳的白痴』の無垢であると。

クープリンのレーニン攻撃は次の一點に綜合される。即ち人生の一面の眞理である『人は麵麭のみにて生くる者に非ず』といふことゝ、階級鬪爭の非道徳とである。然しクープリンのレーニン攻撃をレーニンに代つて彼に投げ返すなら又次の二點ではあるまいか。即ち、人生の他の一つの、そして前者よりも更に力強い拔本的な眞理である『人は麵麭無しには生き難し』といふことゝ、階級鬪爭の非道徳を通じてのみ實現される無産階級の歴史的ディアレクチツクスの上に立つ、より高く深い道徳である。

レーニンは美を鑑賞し、藝術を與ふる前に先づ麵麭を與へ、衣服を與へ蒸氣機關を與へんとする。レーニンの一見偏狹な實務性と功利主義の背後には、苦惱せる勞働者に對する偉大なる愛と、偉大なる感情の暖かさがかくされてゐる。

二

近來、ロシヤの國土内では到る處で『我等のイリイツチ』といふ言葉が聞かれるそうだ。その言葉は未だ嘗てどこにも聞かれなかつたほど、深い敬愛と強い信頼と高い誇の感情のこもつた言葉である。『吾等のイリイツチ』それはいふまでもなくレーニンの本名・ウラジーミル・イリイツチ・ウリヤーノフの略稱である。このイリイツチに對するロシヤ人民の愛は非常である。『うつかりロシヤの領土内でイリイツチに對する惡口でも云らそうものなら打ち殺されてしまう』とは嘗てロシヤに遊んだS君の言葉であつた。カリーニンも、トロツキイも、カーメニエフも、リコフも、ルナチヤールスキイも、チチエーリンも、皆なそれぞれ人民に敬愛をもたれてはゐるが、それは到底イリイツチに對するの比ではない。その萬分の一にも及ばぬ。『レーニン』といふ言葉よりも『イリイツチ』といふ言葉は遙に純ロシヤ的であるが、この純ロシヤ的といふことが人民の心を惹きつけることは外國人の想像以上である。勿論イリイツチが純ロシヤ人でブロンシエテイン（トロツキーの本名）がユダヤ人であることが、かくもイリイツチに對するロシヤ民衆の尊信を深め

てゐる第一の理由であるとするのは當つてゐないであらう。然らばその理由はいづれに歸すべきであらうか。曾てロシヤを觀察した倫敦ヘラルド紙の主筆ランズベリーはそれに答ふる一つの理由をあげてゐる。

『…革命前にはツアーは『露國人民の小さき父』として知られてゐた、今日はレーニンこそ、新しい精神の象徴である。彼は事實に於て人民の父である、人民のために働らき、人民の爲に考へ、人民のために行動し、人民のために艱苦し、安全な時にも危險な時にも、彼等のために戰ひつゝある父である。幾千萬の男女は彼を愛し、彼のために死を希ふ。何故ならばレーニンは同僚であり、社會的自由と經濟的自由とのために戰ふ彼等の選手だからである。』

『人民の爲に』といふことと、彼自身『人民の同僚』であるといふことは、レーニンを語る場合最も高調しなければならぬ要點である。僕は曾て『レーニン論文集』の序文の中で、ロシヤ革命はレーニンの革命であるとよく言はれるが、この言葉の普通使はれてゐる意味、即ちロシヤ革命がレーニンといふナポレオン型の一英雄によつて、即ち一英雄の意志によつて成し遂げられたといふのなら勿論それは誤であると書いたことがある。今やレーニンの死を新聞紙で讀んでゐる多くの人達が此の誤謬を繰り返してゐはすまいか。最早彼を一個の偶像に祭り込まうとしてゐはすまいとか。レーニンと呼ぶ「怪傑」が飛び出して來て、怪傑の意志と怪傑の頭の中から生れた計畫とに多數の群衆が引つぱられてロシヤ革命が遂行された、といふ風に見てゐる者は少くないと思ふ。レーニンは、怪傑レーニンではなくて、ロシヤのプロレタリア大衆のタワーリシチレーニンであり、『我等のイリイッチ』である。ロシヤの革命はクワーリシチレーニンの指導の下に、ロシヤのプロレタリア大衆の歴史的ディアレクチックスの上に立つ創造力によつてのみ創造されたところに意義がある。即ちレーニンといふ一個人のために存在する大衆であり一個人の野望のためになされる革命でなくして、大衆のために存在するレーニンであり、大衆のために創造された革命であるところに眞の意義が展開する。此創造力に比較する時一レーニンの力は小さい。たゞレーニンの限りなき偉大さは、此創造力に對する絶對の信念と、此創造力の自然的若くは社會的法則に對する叡智と、ロシヤの實情に對する細微に入れる理解と、その創造力を現實に生かす爲の政治的建設的大手と實踐とである。此の故に彼はエム・カッツの所謂『社會革命の豫言者』であり、ランズベリーの所謂『革命の精神』であり、ロシヤ人民の所謂『我等のイリイッチ』である。次に掲ぐるマンチェスター

ガーディアン紙の通信員アーサー・ランソムのレーニンに關する一文は、ロシヤ革命がロシヤのプロレタリア大衆の革命であり、レーニンがブルジョア個人主義の完成的タイプとしての英雄主義者でないことを雄辯に語るものとして興味が深い。

『クレムリン宮から宿への道すがら、私は彼ほどの大人物で、しかもあれほど氣輕な人が他にあるだらうかと、色々考へ出さうとしたが、一人も思ひ出せなかつた……といふのはあれほどの偉大な指導者にして、しかも自分の人物を非常に小さく見てゐることに於いて、彼は實に未曾有の人だからであらうと思ふ。彼には全然、自分の野心といふものがない。そればかりではない。マルクス主義者たる彼は民衆の運動は彼れの在ると在らざるとに拘らず、動く可きところに動くものだと信じてゐる。そして彼はこの民衆の運動に信頼する。彼れの全信仰は、人民を動かすところの、基本的の力に在るそして自分自身に對する彼れの信仰は、たゞ自分は、此の力の指さす方面を正確に觀取してゐるといふ確信に外ならぬのである。彼は如何なる人の力も彼が必然と信ずるところの革命を、止めることも起すことも出來ぬと信じてゐる。彼れに從へば若しロシヤの革命が失敗するとしても、それは唯だ一時的失敗であり、そして如何なる人も左右することの出來ぬ力の爲である。そこで彼は、他の如何なる大人物にも曾て見なかつたほどに自由である。彼に對する民衆の信仰は、必ずしも彼の所論によるものではなくて、寧ろこの自由な、如何にも超越したところにある、彼はその哲學の上から、或一人の過誤の爲に一切が失敗に歸するなどとは信ずることができぬ。兎にも角にも彼れ自身にとつては、彼は永久に、彼の名と傳へらるべき出來事の、原因ではなくて唯だ代表者である。』（譯文山川均氏のものを拜借）

三

タワーリシチ等は、レーニンの言葉には唯だの一言も虚言や過誤はないと信じきつてゐる。

『イリイッチに行け、イリイッチには何でも打明けられる』と彼等は言ふ。そして少しも蟠りのない、極めて自由な心易さをもつてレーニンを訪問しては、色々の疑問の解決を仰ぐ。すると彼は、その問題を眞面目な態度で分析してから非常に卒直に、深切に親密にそして極めて簡單な短い言葉で返事する。この言葉の中には疑ふ者を叱咤し督勵するやうな調子がよく含まれてゐる。時にはタワーリシチ等は、この叱咤の意味を速座に捕捉しえない場合あるとしても、クレムリン宮を離れた時、靜かにひそかに、恰もヴァイオリンの絃を調べるやうにその會話を悉く

思ひ返へして、初めて疑問を氷解する。又レーニンは、タワーリシチ等にとつては遠慮もない、一見不合理で方角違ひと思はれることを語ることがあるが、それが幾日、或は幾月、或は幾年か經てゆくに、極めて正しい合理的な事實であつたことを發見して寧ろ驚嘆することがあるといふ。それが、一億五千萬の人間の運命に關する程の重大事件にせよ、乃至は一個人の一瑣事にせよ、恰も石弓の金的を射する如く殆んど例外なく的中さることは、全く驚嘆すべき事實である。此の事實から、レーニンの豫言者説が露國では傳へられてゐる。然し假令豫言者レーニンを承認するとしても、此の豫言者は神秘の衣につゝまれた魔術師的な豫言者ではない。遠き、或は近き將來の事實に對して驚くべき直觀の中に、精透なる科學的計算と測定の働いた最も新しく最も現實的な豫言者である。

その實例の二三を挙げやう。

帝政ロシヤに於けるプロレタリアのゲゲモニアの父はプレハーノフとレーニンとであつた。レーニンは過去三十年の間鬪鬪の困難に對して苦闘に苦闘を重ねて、遂に今日、プロレタリアゲゲモニア、即ち無産階級の最高權を確立するに至つたが、レーニンは一八九四年でのゲゲモニアに就て非常に興味のある論文を書いてゐる。

「國民運動派(ナロードニキ)の親友は何人であるか、國民運動派は如何にしてマルキストと戰ひつゝあるか」といふので、此の論文は官憲の壓迫のために公刊することができなかつた。漸く最近に到つて一部は警務局の古書類中から、一部は伯林の保存所から發見され、昨年ペトログラードで印刷されたが、此の三十年前の一小論文に於て、レーニンは既に一九一七年十一月革命の形態を、驚くべき明白さを以て豫言してゐたのである。同論文に於てレーニンは、國民運動派の誤謬を徹底的に完膚なきまで解剖してゐる。本論中に曰く『勞働階級といふ新生の星が上つた。此の階級こそ階級の解放者となり、ゲゲモニアの把握者となり、××の原動力となるであらう、更に彼は筆を進めて『現在に於て勞働階級はプロレタリアの歴史的使命に於けるゲゲモニアを知つてゐない。之を知つてゐる者は僅かに一二名に過ぎぬが、將來先覺勞働者が此の使命を自覺する時季が到來したら勞働者は農民を味方としてロシヤに共産主義的××を導くであらう。』レーニンは勞働階級の發生の未だ極めて疎らな、而かも國民運動派の勢力全盛であつた當時のロシヤに於て、之を豫言してゐるが、國民運動派が次第に凋落し、『先覺勞働者の使命自覺と共に、彼等が農民を味方としてロシヤに共産主義革命を實現した今日、レーニンの達見に誰か驚かないものがあらうか。

佛國の老無政府主義者ヴイタトル・セルヂユはレーニンの科學的直觀、即ち豫言について次のやうに書いてゐる。

『「資本主義の最後の段階としての帝國主義」といふレーニンの短い著述を讀む同志は私と同じやうな印象を受けることと思ふ。此の書は一九一五年に書かれたものであるが、それ以後と雖も少しもその價値を失つてゐない。世界大戰、ヴエルサイユの「平和」戰後の今日、改良派社會主義の沒落は、一九一五年のレーニンのすべての論證を、多々益々確認するのみである。彼の用ゐた方法の科學的價値はかくして物の見事に證明された。蓋し、自然の法則と社會の法則との働きに十分に精通し、且つ、それを理解するのみが、始めて能くレーニンの如く事變を豫見することができるからである。』

歐洲大戰勃發當（一九一四年か）に書かれたレーニンの小論文「若し革命の結果、社會黨が世界大戰中に國家の權力を握つた場合は如何にすべきか」に於て、斯かる場合にとるべき社會主義政府の一切の綱領と、一切の經濟的文化的施設を述べてゐるが、それは三年を經た一九一七年十一月彼によつて其まゝに實行された程適確な豫見であつた。レーニンは單なる豫言者にとどまらない。その豫言したものを、遂行する方法を知つてゐる勇敢な徹底した實行家であつた。

彼のかうした實例を擧げてゐれば限りがない、十一月七日が革命旗揚げの唯一の日であることを測定したのも唯だ一人彼であつた。ブレスト・リトウースクの講和條約締結にあたり凡ゆる反對議論を一蹴して、是に調印し祖國の革命を救ふたのも彼であつた。新經濟政策を實施して新しい建設の基礎を確立したのも彼であつた。偉大なる社會的實在の計算と、不屈不撓の實行的天才との融合點にレーニンが立つてゐる。

四

レーニンにはどことなくロシヤの土臭いにほひが浸みついてゐる、マルクス、エンゲルス、クロポトキン、カウツキイ、さうした人達から受ける何となくハイカラな、西歐的色彩は彼からは受けとれない。禿げた頭、廣い山のやうなと形容される圓い額、しよぼしよぼした、鋭い中に暖い光を宿した眼、笑ふ時の（レーニンは實際よく笑ふ）大きなあんぐりした口、がつしりした爺むさい小軀、それらはどこまでもロシヤの百姓である。この非印象的な男が一億五千萬の人民の運命を脊負ひ、世界の政局の上や社會の上に潑溂として躍つてゐるなどとはどうしても本當と信ぜられないであらう。

それについて面白い話がある。最近死んだ露國の有名な畫家

デニソフは、レーニンの肖像畫を描くために、コンミンテルンの中央委員アロセフに伴はれて幾度かレーニンの出席する色々の會場に出かけた。その都度畫家は呻くやうな歎聲を洩らした。『どうしても描けない、こりやどういふ譯だ、ありや一體何だ!』この氣の毒な畫家が同伴者アロセフに答へたその描けない理由の説明によると、レーニンが演壇に立つて、例の通り、一つの事實を、少しも氣取らない態度で聽衆の頭の中に一つ一つ叩き込むやうに論說し、攻撃し、復誦し、快活に、單純に、彈ね返るやうな不可解な力で說明してゐる時は、どうみてもレーニンの姿が堂々たる風采をした獨逸あたりの有名な大學教授のやうに見え、又次の瞬間には、薄穢ない、拔目のなさそうな、實務的なロシヤの百姓男の姿に映ずるのでどちらが本當のレーニンであるか補足するに苦しむからである、と、ところで是れは勿論レーニンの兩面で、彼に於てはどちらも、本當である。

カール・ラデツクもそのレーニン論に於て、メンシエヰキの領袖アキセルロツドのレーニンを評した一文中から「レーニンはどことなくロシヤ臭味がある」といふ言葉を引いて來て之を承認すると共に、「レーニンが他のボリシエヰキ首領と際立つて異つた點の一つは、レーニンがロシヤの實情に精通してゐることである。」と言つてゐ。レーニンがマルクスの著述は最初の一字から最後の一字までも暗記してゐるといふ事は有名な話しであるが、事實、資本主義の全歴史に精通し、マルクス學を理解してゐる點では世界有數の學者であり、理論家でありながら、一方ロシヤの歴史、現實、未來、國民性に對する理解に於て、彼程深く鋭く徹底的である者は一人もないのである。彼がロシヤに社會革命の勃發した場合の唯一の政治形態として豫定し十一月革命の唯一の合言葉であつた「全權をソウエートに」といふそのソウエート政治こそはほ、ボリシエヰキ革命以來露國に於ける唯一の政治形態であり、露國政權の主體であるが、此のソウエート政治こそ、レーニンがロシヤの國情に如何に通曉してゐるかを語るものである。何故ならソウエート、正確には、ソウエート・ラボーチフ・ソルダートスキフ・イ・クレスチヤンスキフ・デプタートフ(勞働者、兵卒及び農民の代表委員の評議會)の政治は、一社會學者や野心政治家の頭の中から捻出されたものでなくて、それは夙にロシヤ國民の傳統及び習性の中に胚胎して居たものだからである。古代から幾世紀の間、ロシヤに存在した農民の共有制度、換言すれば現在の露國の共同農村のやうに、土地を農民の共有として共同的に之を利用する制度「オブシチナ」は、その共同的な點に於て、その自治精神

に富んでゐる點に於て、正に今日ロシヤに實現さてゐるソウエート政治の胎芽をなしてゐるものである。これは決して僕一個の獨斷ではなく、ソウエート國家憲法の世界的研究者として名あるシユレイデル氏も、同じ理由から出發して、ソウエート政治がロシヤ國民の生活に深い根底を有することを論斷し、今日ロシヤの農民並に勞働者が殆んど例外なくソウエート政治の味方であることを、引證してゐるのをみても推斷に誤りはないと思ふ。

五

レーニンに關する著書は、僕の知つてゐるだけでも既に十指に餘り、爾餘のパンフレツト、小論文に至つては數ふるにいとまのない程書かれてゐるが、それらの中で、露國文壇批評家の花形ウオロンスキイの最近書いた「ロシヤ・人間・人類とレーニン」なる一篇は、短いものではあるが、そのレーニンに對する理解の深さに於て、藝術家らしい觀察の鋭さに於て、批評態度の鮮さに於て、他の大小紛々たるレーニン論の追隨を許さないものがある。到底ゴーリキイのレーニン論などの比ではない。殊にレーニンの中にあるロシヤ臭味、又ロシヤの實情に通曉せる事實等は次に掲ぐるウオロンスキイの一文によつて最も明瞭にわかる。

「或る獨創的な現代詩人が次のやうに言つた。

一レーニン……彼は必要な、そして恐しい仕事をする、彼は新しい國と人民とを創作する。實際創作するんだよ、君、」

「何故恐しい仕事なんです？」

「何故つて、彼が創作に用ふる材料——材料といふものは元來死んでゐるべきものだのに、彼は生きた人間を材料に使ふからだ……」

また、或者は主張する。レーニンは一億五千萬の人民を有する國を、否、全世界をも躊躇することなくその實驗に供する一個の實驗家である、と。

或は又、彼を、ロシヤをヨーロツパの中に棍棒で叩き込んだ、彼のピヨートル大帝に比較する者もある。

詩人キリユウエフはかう書いた。

「レーニン、それは修道僧に似た精神の所有者
彼の法則の中には大僧正の調子があり、
僧侶の經文を通じて蒔かれるごとく
破壊の種子が蒔き散らされる。」

彼は一個の苦行者と呼ばれ、狂信者と呼ばれ、書物書きと呼ばれ、築城家「机上計畫屋」と呼ばれる。

イリヤ、エレンブルグ（現ロシヤの詩人で批評家）はレーンを目して「まるで一個の機械だ——洋服につゝまれた集積された力だ、時代の豫言者は、指定された長さ、何年間でも書物の前に座り込んでゐることができる。」と言つてゐる。

　また、或者はレーニンを獨裁官だといふ。凡て此種の評言の中には、次のやうな考察が含まれてゐる。即ち、レーニンは、ロシヤに、或る新しいものを、無理やりに接木しやうとしてゐるのだ。その或るものは有用で爲になるものであるかも知れないが、ロシヤの過去にも現在にも有機的な關係をもつてゐないものである。或大理想、或偉大なる公式、或計畫、或完全な生活を、そつくりそのまゝ、何の取捨も加へずに持つて來るものであると。若しさうだとすると、成程レーニンといふ男は、あまり巧者ではなく、却つて拙劣で、陰氣でぎこちないが、同時に純眞で、單純で、不屈なること、海の如く、森の如く平原の如く、山脈の如く、空の如く、星の如く、草の如く、鳥獸の如き一個の大僧正であり、苦行者であり、書物書きであり、大膽不敵な實驗家であり、生きた人體の解剖者である、とされても仕方がない、ところが、これらが皆間違ひなのだから、不思議ではないか。

　コムミユニストの内部でも、レーニン程鋭く、確實に、徹底的にロシヤを知り、ロシヤを理解して居るものはない。偉大な愛は、偉大なる憎惡を生む、そしてレーニンはこの兩者を溢れる程もつてゐる。ツアーリと地主と官僚専制のロシヤに對する憎惡と、ロシヤの他の一つの側——勞苦せる勞働者に對する愛である。世界最大の國際主義者たる彼は、同時に又最も國民主義的な人物で、頭から足の爪先まで最もロシヤ的なロシヤ人である。彼の演説、彼の著書を、一見すればすぐわかる。彼は言つた。××××を壞滅して、それに代ふるにプロレタリアの獨裁と××主義とをもつてせねばならぬ。——だが又ロシヤは粗大な、啓蒙されてゐぬ亂雜な非人道的に壓迫され、打ちのめされ、文盲な、酒呑みの、無教育の、農民經濟の、國である。これらの特別の環境と特殊性とを忘れてはならぬ。——これはレーニンがロシヤで働きつつあるタワーリシチ達に常に教へて來たところである。

　非常なる現實感と、例外的なロシヤについての智識をもつた、この所謂「計畫製造家」この「苦行者」は吾々ロシヤ人等の持つてゐた凡ての半貴族的な、軟かな、感傷的な、幻影と空想とを破れることなく剔抉してくれた。お陰で吾々の中には、そんなものがなくなつた。そして吾々の弱い墮落した腐つたふらふらした小兒臭い甘つ酷い、纎のない、そこら中にごろ／＼

してゐた「自由主義」は、レーニンによつてロシヤ始まつて以來始めて容赦なく、また正確に解剖された。

レーニンは、吾々の抽象的な、ロシヤ的な人道主義がそうしたやうに、ロシヤの農民をピカピカに塗り上げたり、自分の理想に叶ふやうに持ち上げたりは決してしなかつた。彼は農民の資質を、小ブルジュアとして見たばかりでなく、又彼等を數世紀の間、封建貴族と、ツアーリの家來共の軛を双肩に負ふて來た一人の勞働者としてみた。農民のこの二元的性質を理解してゐたが故に、彼はロシヤに於て、資本主義から社會主義への轉換期に際してのコムミユニストの戰術と實行との基礎として、農民と强固に結合したプロレタリアの獨裁を、考案することが出來た。

レーニンは、ロシヤは二つの文化、二つの世界即ち歐羅巴と亞細亞の境界をなしてゐると見、資本主義歐羅巴は必死の努力で東方諸國と亞細亞とを自分の植民地化せんとした、之に對して、亞細亞では壓服する事の出來ない力を以て征服者に對する被征服者の鬪爭を開展せしめつゝあると見る。（註、一九二〇年コンミンテルン第二回世界大會に於けるレーニンの演說を指すならん）

歐洲大戰とレーニンとを考へてみよ、歐洲大戰に對する激怒嫌惡侮蔑排擊に於て、レーニン程痛烈を極めた者は他になかつた。ステプニアツク・クラスチンスキイ（註、地底のロシヤの著者）は、革命家の生涯中には、其全精力全思考全感情を一つの全能にして强大なる刺戟の中に集中して了ふ時期があると言つた。レーニンにとつては大戰がその時期であつた。この恐しき數年間、彼の聲がかくも强大に確信に充ちて昂奮し豫言的に響きわたつた事はなかつた。是は同じレーニンではあるが、同時に又巨人の如く成長しタイタンとなり、一個の反逆的な裁判官非妥協的な戰鬪者となつた今一人のレーニンだと言へる。レーニンの口を借りて語り出されたものは、明かにロシヤ自身であつた。蛆蟲の如く打ちのめされ、不具にされ、壓迫されて、皺枯れた滅茶苦茶な顏をした、溝の中のロシヤであつた。レーニンの「敵を倒さねば止まぬ主義」の、最も深い淵源は、即ち我がロシヤの勞働者と農民の感情であつた。

而かも今、吾々の眼前に於て、新しきロシヤ、ソウエートロシヤ、强壯な人民のロシヤ、勞働大學と共産主義教育のロシヤ、曾て陰欝を刻み込まれてゐた顏に、突擊する騎兵の樣な强い確信と決意を浮べ始めたロシヤ人のロシヤ、その靑い眼に冷靜と剛健とを生じて來たロシヤ人のロシヤが成長しつゝある今日、ロシヤが日々に强く日々に富んでゆきつゝある今日、レーニンが

單なる「机上計畫屋」であり、現實のロシヤを知らぬものであると誰が言ひえやう。

レーニンは親しみ易く、暖かで氣輕く陽氣で利かぬ氣の男だ。どんな事にも耳を借す、強固な人生の元氣に滿ちた男である。その眼は鋭く聰明で愉快で笑を留めかねると手で口を蔽ふてひとりでくすくすと笑ふ。彼にはプラトン・カラターエフ(註、トルストイの「戰爭と平和」に出て來る百姓)のおうようさとすばしこさとゆつたりした所がある。ロシヤの農民に似た恰度ヴオルガ河や、ロシヤの廣汎たる田野から生じた樣な何物かがある。それと同時、彼には都會の鋼鐵と花崗岩があり、工業都市の鐵の樣な反逆の意志と規律とがあり、教養あるものの一本氣、融通の利く所があり、追ひ廻される者の用心深さがある。こんな色々な、明かに兩立しがたい矛盾した性格が、不思議な調和の中に結合されてゐる。だが眞の時代の先驅者は、常にかうしたものである。』

六

ウオロンスキイは更にその透徹した觀察をレーニンの思想と性格の深部に向けてゐる。そして偉大なるリアリスト・レーニンを鮮かな手法をもつて描き出してゐる。僕達は彼に聞かう。

『言ふまでもなくレーニンは「思慮深い」。彼は常に同じ事のみを語つてゐる。色々な見地から、又時にはまるで思ひがけないやうな見地から、彼は或一つの根本的な命題の本質を繰返し繰返し検討する。プレハーノフは曾てから言つた事があつた「レーニンには鮮かな法律家らしい所が無い」と が彼のレーニンに對する他の見方が間違つてゐるやうに此の見方も間違つてゐた。レーニンは攻勢にある時でも守勢に出る時でも甚だ外見的な皮相な見地から眺めただけでも一個の辯護士に似てゐる。一般的に言ふと彼はその心が常に或一つの根本的な觀念に占められて居る人のやうに物を言つた。その觀念は「思想の思想」でありその廻りを、恰も太陽の軌道をめぐるやうに他の思想がめぐつてゐる。この太陽の樣な基本觀念は決して彼の意識を去らぬ。唯の一刻なりとも他の觀念に地位を讓る事がなく、常に心中に生きてゐる。こんな風に生活する事は困難であるに相違ない。特に長い間そうしてゐる事は、更に困難である。此の一つの觀念に專心することは、やがて天才のみが見る事をうる偉大な豫言的な地平線を展開する。これらの「思慮深き人々」は、凡てのものを一つの見地から見、彼等の根本的な觀念、思考、感情刺戟によつて注意が惹かれるもののみに眼を向ける。彼等の觀察力の鋭敏さ、彼等の事物を見る才能は、超人的な鋭さをもつ

たものである。然し一つの大きな觀念に專心するといふ事は、いふまでもなく、偉大なもの、尨大なもののみを見て、詳細な事に氣を留めぬことではない。レーニンはこの最もいゝ標本である。マキシム・ゴーリキイは曾て彼に就てかう書いた。「レーニンにとつては個人としての人間は殆んど全く興味がないように自分には思へる。彼は唯だ政黨としての、大衆としての、國家としての人間のみを考へる」。だがゴーリキイもその先きにつけ加へざるを得なかつた。「時々この嚴しい哲學の中に、人に對するまるで女のやうなやさしさのひらめくことがある」この後の言葉は全く眞實である。若し吾々がクレムリン宮から八方へ送り出されたレーニンの書簡を集めたら、そこには何が見出されるだらう。即ち英國に對して如何に行動すべきか、獨逸の勞働者に如何なる忠告を與ふべきか、――そしてそれと一緒に三人の子供をもつた或百姓のおかみさんに、N停車場からZ停車場に四プードのライ麥を運送する事を許す要求書――或は又ソウエート時代以前の、年老ひた獻身的な革命家に、ソウエート建物の一室を與へるやうといふ要求書が見出されるであらう。この書簡を書いた數分後には、彼は共和國の內外の形勢に就ての報告をするために大會に急ぐ。その途中一人のタワーリシチをとらへて靜かに話しかけ、さて質問する。傍を通る人は彼がから話すを聞くだらう。

「だが同僚（タワリシチ）、ぜひ手紙を呉れ給へ、いゝかい、短かい報告でいゝから僕に呉れるのだよ、でないと、僕はすぐソウナルコム（註、ソウエート、ナロードヌイフ、コムミイサーロフの略稱で即ち人民委員評議會）の重要な仕事で忙しくなるから、鼻の下にさがつてゐる事に氣がつかないかも知れないからね、君、きつと手紙を呉れるんだよ」そして「手紙を、手紙を」と強調する場合に、兩手を敏活に動かす。

一九一八年の或演說でレーニンはこんなことを話した、假政府の壓迫から逃れて（註、一九一七年七月ボリシエヰキ叛亂の直後）フイランドに隱れてゐた頃 彼は或一人の老嫗に逢つた。彼女はレーニンが乘つてゐた汽車に入つて來て、座席に座つて他の旅客に、元氣な昂奮した調子で何か話し始めた。レーニンは彼女が何を話してゐるかを訊ねると、隣席にゐたフインランド人がそれを譯してくれた、彼女は、もう鐵砲をもつてゐる男を怖がる必要がない、と話してゐるのであつた。彼女が森で薪を集めてゐると、一人の武裝した男が彼女の方にやつて來た。老婦は驚いて、薪の束をほうり出さうとしたが、その鐵砲を持つた男は、彼女に手傳つて、それを運んでくれた。

「もう鐵砲を持つた男を恐れる必要はない。」

勞働する人々は、もう武裝した人々を恐れる必要はない。レーニンは此の言葉のなかに凡ゆる意味を讀んだ。即ち革命の混亂はすべて過ぎ去つて了つたのだ。こゝに彼の一般から特殊に至る(歸納的な)性格が現れてゐる。彼の個人としての人間の中に大衆人を見る。論文に於て、演說に於て、實生活に於て、至る處に瑣事を捉へて、その一小瑣事の中に、その時代の、或は過去の事件の、或は刻下の現象の、主要な特徴の反映をつかむ彼の才能が見出される。

自分の黨内の勞働者を試驗して或質問を投げやうとする際には、兩眼を細めて、對者に寄りかゝる樣にして、一見甚だつまらない質問をすることがある。彼はそのひろい概括を說明するために必要な、小さな詳細を狩り集めるのである。

「量よりも質」——とはレーニンの標語である。そしてこの標語から彼の「臨機應變主義」彼の用心深さ、彼の運用の才、讓歩の妙が生れるのである。同時にまたこれから未來を洞見する天分が生れて來る。何か特殊の方法で未來を眺めない限り、あれ程正確に未來を洞見する事が出來やう筈が無い。彼は或る方法で、全く不思議な正確さと力とをもつて未來を見それを感ずるに相違ない。レーニンは疑もなく第二の視力を惠まれてゐる。そればかりではなく、彼は詳細にわたり、まるで現在行はれてゐる生活を見るかの如く、即ち現實の生活、現實の鬪爭を見るかの如く、まざまざと未來を眺める。此故をもつてレーニンは思想に於ても、共產主義には遙かに遠く、而も成熟し獨立した人々を征服し、支配し、捉へるのである。

エッケ・ヂー・ウエルズがレーニンとの會談に就てから書いたのも故なきに非ずである。『レーニンのおかげで私は、マルクスを見ずしてコムミュニズムは一つの創造的な建設的な力である事を理解しえた。私にはコムミュニズムの前途に橫はる巨大な困難を公然と承認する。この有名な小男と話すことに非常なくつろぎを感じた、彼の前には、新しき基礎の上に合理化され、築き上げられた、そして舊世界とは絕對に類似點をもたぬ新しき世界の幻像がある。』

から述べて來てから、ウオロンスキイは『その通りである、レーニンの前には新世界の幻像がある。そしてウエルズのやうな男でさへ、それを確信してゐる。このことの中にレーニンの「獨裁」の秘密の一つがある。』と述べてゐる。

七

ラデックは『レーニンはマルキシズムに一般勞働戰略を結合し、是を全露國勞働者の運命の進化に應用した……』と云つて

ゐるが、ウオロンスキイも亦これと似通つた意味を別の言葉で述べてゐる。『レーニンの（専心）と（狂信）とは彼れ獨得のものである、彼は冷たい抽象的な合理主義を、生きた個人の行動と結合した。即ちゴーリキイが「人間に對する女のやうなやさしさのひらめき」と言つたのがそれである。』ウオロンスキイはレーニンの精神の冷たい非愛情的な活動の下にかくされ、レーニンの事務的な實際的な行動の蔭に潜められた暖かい、具體化された「人間的な餘りに人間的な」感情について次の如く言葉をつゞける。

『レーニンのこの人間的な暖い感情は、革命前のロシヤの同志達、「アンダーグラウンド」な仕事に對する彼の態度に、即ち眞正の新しき世界の追求者に對する彼の態度に明かに現れてゐる。彼れ自身一個の革命家であり、「地下運動の勞働者」であるが故に容易にその同志を、案外な、父親の如き暖か味をもつておしつゝむ、この暖か味はまるで肉體的な暖か味と思へる程、深く濃まやかである。この感を受ける者は、ひとり地下運動の老闘士のみでは無く、彼に會ふ凡ゆる人々の實感である。此故に彼は「イリイッチ」であり、「俺達の仲間」であり、「俺達のもの」等、等であるのだ。これによつて彼は人々を結合し、接ぎ合せ、組織し、訓練し、指揮し、統一ある全體とし、決して折れる事のない、而も生きた鐵の如き力に統合する。

レーニンは彼と民衆との關係を、主に制度によつて決定するやうに見える、若し公正といふ事が、それに對して自分が賛成してゐると居ないとに拘らず、全く嚴格な裁判官的な態度を意味するならば、彼は「公正」な人の列には屬さない。そんな公正はトルストイも甚だしく嫌つたものである。これは個人の評價に於けるレーニンの誤りを説明するものであるが、この中に彼の最大の魅力があり、この中に感情と洞察と人民の心に觸れる力をもつた、崇高な究極的意味での公正さがある。凡てこれらは偉大な天分であつて、それによつて大衆をその周圍に集め、彼等を單に「動ける精神」として、即ち單に觀念的に撰擇するのみではなく、最も重要な「内部的な」表象、即ち彼等の感情、彼等の性向、彼等の全感覺的心理的な資性によつて撰擇する。

プレハーノフは甞てレーニンに就てかう言つた事がある。「レーニンはゴーゴリの小説に出てくるオシップのやうに、見つけたものは何でも、紙片でも紙屑でも、役に立ちそうなものは皆ひろげ上げて身につける。」と。無論これは間違ひだが、火の無い處に煙は立たぬわけで、レーニンが多くの型の違つた人々を自己の周圍に引きつけやうとした事は事實である。プレハーノフはその晩年に於て、聟選びの甚し過ぎる娘みたいな立場になつたが、そんな聟選みをしないレーニンは、世界の隅々まで、印度の一寒村にまで聞え渡つた。ゴーリキイは印度の村で「レーニンは世界で未だ見られなかつた誠實な人だ」と噂されて居

たと書いてゐる。』

八

敬愛する者に對する、熱を帶びた、快よい解剖と批判の鋒から轉じて、ウオロンスキイは、タワーリシチエスツウオ（同志意識）の熱情の深みからのみ湧きあがる強い感傷の文字を病めるレーニンへ向けてゐる。

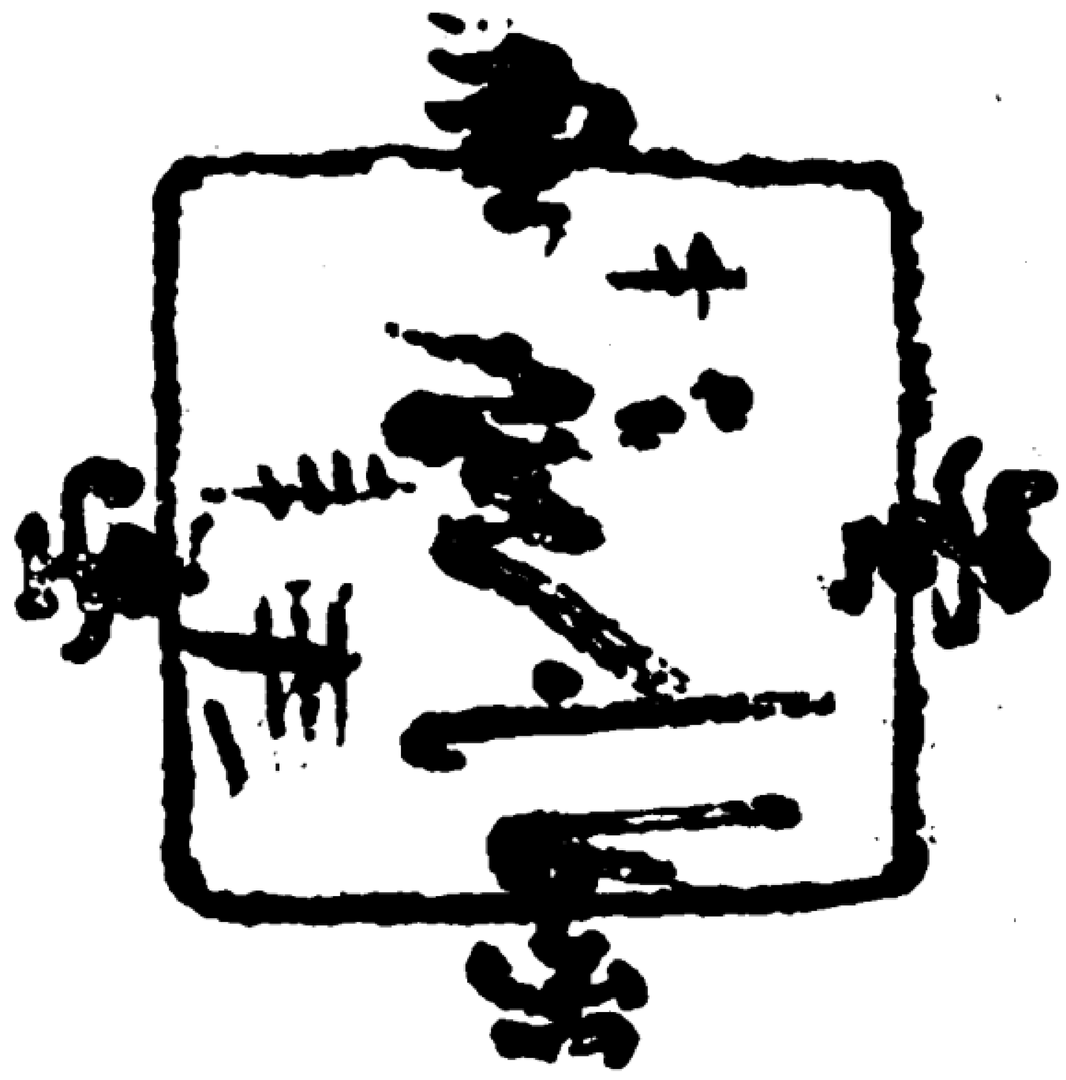
『……我々は、平常は、レーニンに關する他のこと、（以上述べて來た事と全く異つた事）を考へてゐる。我々には病氣と鬪はなければならぬレーニンのことを考へてゐる。ロシヤでもなく、人間でもなく、人間に對する彼の態度でもなく、彼れの個人的重要さでもなく、たゞ病めるイリイツチ、あの誠實な男あの人民の子のこと、あの眼、あの病氣の影を宿した弱々しい顏、あの小さいおしつぶされたやうな耳、あの不思議に圓い額あの子供のやうな寢台の暖かさから、母親の心遣ひと悲しみと喜びのもたらす無數の煩ひ小さな事から生れるあの單純な人間的な男、それを吾々は考へてゐるのだ。

また吾々は、まだ他のことを考へてゐる、即ちこれから先きまだまだ人生の困難と失敗、まさにそれに打克ち、永遠に爭鬪し征服しなければならぬ事があることを考へる。汽車の道ははてしなく曲り曲つて、永遠の彼方に至り、遙かに霧に覆はれた歷史の未來の中に消えてゐる。未來の夢は、人に悲しみと苦しみと喜びを與へ、その遠い地平線は、日沒のロシヤの涯しない山際の線のやうに、吾々を呼び招く、行進の道は人間が辿り登る道、勝利と敗北とを繰り返す道、僅かに第一步のみ踏み出された道、人間を必然の王國から自由の王國に行くことを可能ならしめ、あの盲目な、邪惡な、愚かな機會が勝を制せざるため。人間が理性的に、組織的に、彼の意志の力によつて、自然の無慈悲な、鈍重な力を征服するために、人間が眞に萬物の長たるために、世界の「呪はれたる問題」が解決を得るために、階級の鬪ひが、結合された人間愛に代へられる爲に、人間生活と智識の偉大なる書籍が、萬人に開かれる爲に、人間が偉大なる豫言者たり、偉大なる智識の眼たる爲に、踏み出された道は涯しなく續く。おづおづと第一步は踏み出された。がそれは長い灰色の遠い過去が吾々の背後にあるにも拘らず、第一步である。人間は尙弱く無力で茫莫として、平然たる宇宙の中を、おづおづと進みつゝあるのだ。』

九

レーニンは死んだ。然も死んだ彼は、凡てのロシヤ人の心の中に生きてゐる。凡てのロシヤの新しい事業の上に生きてゐる。それればかりでなく、一切の世界事象の上に―― 即ち世界の政治、外交、經濟、社會、思想藝術の上に潑剌として生きて躍つてゐる。

そこに僕は、リアリストレーニンの偉大なる生活の足跡を見る。（終）



北國花暦

室生犀星

嫁菜

雪の日に川料理せる川上に行きけるが、寒さ厳しくして鮒の刺身ちりぢりにちぢみ、しやりしやりと氷れるごとし。四山の雪また輝き鏡屋の舗さきに入りたらんがごとく、一木の枯やなぎの動けるありさま川風に鳴る電柱とともに心深きをぞ覺ゆ。——料亭の景色また池氷り燈籠に雪かぶり、障子のすきより雪ふぶき入り、壁間なほ聲あり、つぶさに見ればこれ凍えて割れるならんと思ふほどなり。されど鮒の刺身のしやりしやりとして、ちぢれて甘く哀しげ也。女出でて何のおあつらへあらんやとたづねしが、かやうに寒くては何かあたたかきものこそ宜けれと言ひしほどに、鱈汁にあらず、春さきのとは云へ寒のうぐひの汁をすすめけり。腹に紅きすぢ引ける石斑魚なりけり。吹雪ける日に網打ちて居る人を礒に見しが、このうぐひを捕る人々なりと初めて知りぬ。あぢはひ甘く雪解けごろのほんのりとせる心もちなり。添へるもの又青き冬芹の類にて二三寸がほど伸びしままなるを摘み來れるものならんか？——われ東京にありしころ一月ころ使して神田に伊豆房州あたりの嫁菜の柔らかきを求めさせ、哀しおしたしとはせりけり。雪かぶれるときはややこはけれど味ひ内に絞りて香氣あり、すなはち食してぜひたくなる氣もちとはなりぬ。さるを今田舎に暮してその

やうなる嫁菜の饗宴にあづからず芹をこそ愛でけるは、いくらか品下りけるありさまなり。

凡て東京にありけるときは一草になほ心とどまり、その嫁菜のごとき天(てん)の園生にあらんごとくさへ珍重せしが、その心は田舍にてはやや失せたらんごとし。まれに鯉賣の呼ばはる聲をきけば何となく書齋にこもりて樂しくは感じたるが田舍にては珍らしからぬ事とはなりぬ。東京に住居して田舍を想ふはぜひたくなるべく、田舍にたむろして東京をおもひ起すは心ちがひなるほど誇れる沙汰なり。いまやむかしの部にあらずといへども、都は都のありさま零落れてなほ殘る古渡り唐棧見たらんごとき心地するなり。田舍はこれまた古き更紗の類のごときものならんか、垢染み古びたれど更紗は更紗のこつくりしたる味ひあり、また棄てがたしとはなすなり。

さるほどに女中の手に水仙を持ち來り床の上に投げ入れ、花活けに挿しぬ。客人見ゆれば先づ花を活けるはよきことなり、花てふものは客の來らん前に活けんより客の顔をながめて始めて枝葉を剪り挿すべきものなりと言ひしが、女中はただ忘れたるが故に活けるのみとは答へたりけり。その水仙の葉には雪すこしく凍えつきたるが、はらはらと疊の上に落ち間もなく室内の火氣に融け露とはなりけり。これをも風流といはば言ふべし。見れば水仙の花の半ば凍えたらんごとく、悲しくちぢれたるも寒國の花の常なり。寄らば冷やりとしたる匂ありぬべしなどと、火に手をかざしつつ思ひたりけり。總て川魚のあぢはひは冬こそしみじみするなり。頭大けき鯰の汁に浮ぶ午蒡のうすくはやしたるが、舌ざわり少しく荒けれど、頭褒(あたた)しき鯰汁の言ひやうのなき箸つけるこころもち、外の面の雪とくらべて幽遠なりとこそ言はんや。先刻ほど氷りたると見し池の面に早や雪洲のごとくつもり、沈める水さへつめたく動かざりけり。ながむれど遂に一雀の來るだになく、森として聲なき冬の日のくれとはなりぬ。日ぐれて行く人もなく川の瀬の音のみ障子あくれば亂れ聞えて、あたり寒ければ端とばかり閉めけり。

さまざま草

朝より腹しくしく痛みしほどに午後過ぎ甚しき雪となりけり。隙間もなき牡丹雪とてその花びら大(だい)のもの、障子硝子を埋め遥(はる)かに一枚の洋紙を瞞したらんが如し。しまらくが程に四山見えずなり屋根はみな帆のやうに白くぞ見ゆ。行人の語るをきけば今年は大雪ぞと言へり。隣の庭の萬年青の實の幾粒か雪のなかより赤く仄めけり。かかる夜は艤舟に倚して犀川の雪景をながめんによろしかれと心ひそかに思へど、雪いよいよ烈しければ、詮方なく炬燵の人とはなりぬ炬燵の夢を趁はんに年あまりに若かれど、炬燵の夢幽かなるは忘れがたきものなり。

ふと昨日骨董店に見し抱一の葉蘭の畫に、一匹の蝸牛の這へる畫幅を思ひ出しぬ。葉蘭はむしろ黒ずめる青き姿して葉脈しづかに走り、葉の軸も又ためでたき筆ざはりを含めるなりけり。一枚の葉には褐色(くりいろ)の蝸牛の、角立てつつ靜かに這へるありさまは洵に好ましく愛づべき畫幅なりけり。これ幾干ぞと問ねしが百八十圓が程なるも最早や手付も貰ひたれば、いまおゆずり申さんはおこのわざなれ、眺めらるるはいかほど永き時間にても關はずと言ひけり。予しばらく眺めしほどに何ともいへず好ましく愛藏したき心湧き、靜まらずなりぬ。己れ欲しき畫幅を己れのものにせん根生こそ止みがたく又說き示すすべなきものなり。いづくの何人が買へりやと問ねしに、去るものもちなりと答へけるのみ、名はかてて言はざりけり。

われ炬燵櫓に足投げ上げ、彼の畫幅ありせば今日いちにちが眺めたいくつせんものをと、殘念に思ひめぐらしぬ。かかる世に己れ專らなる所有を喜ばんとするこころこそ、しかとたしなむべけれど、三個の冬帽を市に買はん望みを抱けるとどれほども異ならず、抱一の畫を求め己れ衣服を明春まで調へざれば事濟むなれば、あながちたしなむべきとには

あらざりけり。百金を投げ打ち一壺を購むると、春服を求めんと孰れも分ちがたきものなり。われ前者を選ばんかな。

むかしのさむらひどもの、世にめでたき腰刀に浮身を窶し、むらさきの下げ緒を選びたるこころ、このごろになりて漸くにわかりぬ。今人選ぶところなきものを身に着けたりけり。往昔足輕どもと云へども目拔き鍔ごしらへに黄金を鏤めたれど、今様の人カフス釦にさへ哀しきめつきをつけたり。むかしの娘ら腰刀に目を付けよき差料持てる侍かなと褒めたたへたれど、今様のむすめら唯に高襟なるを喜べるありさま概して當らずと雖も近かるべし。こころみに洋杖一本になほ數奇を凝らせる人ありや、市に五圓を投じてからんころんと甃石を敲き行くのみ、ひとり茶人といへる方外なるうつつけものの世に命餘りて、まれに珍らしき唐人杖をつきたりけるが、これとても凝つてはせんなきものに陥して見るべきもなし。趣味の道すたれゆくは風流を忘れたるありさまにて、風流を忘れたるとき人人の顔かたち安き陶器のごとく冷たくぞ見ゆ。されど一にも趣味、二にも趣味といへる人人のもの臭い仕草も業腹なれど、せめて硯持てる人ならば硯の石を選ぶくらゐの心構へありたきものなり。世に能書家ありて席にて文字書きたらんは誇にはならず、やはり筆を試み穗によき狸の毛など選まんは、何となく床しきこころせるにあらずや。——われ往昔の腰刀のことを思ふとき、さむらひの心悲しく優れて感じるなり。折たく柴の記に先づ地震臻りたるとき白石腰刀を取り立てるありさま中々に嬉しかりけり。かれら眠れるときも枕べに置きこれを離さずありぬ。今様の人の時計を愛し枕べに置く心と同斷せんには少しく意味ちがふなるべし。それ故に予の思ふは女子の指輪をめづる心の、いとことはりなりと思ふなりけり。千金の指輪が僞め己が玉肌を汚すものあれど、これを笑はん心おこらず、默して首肯き、うなづきて今の世を嘆き悲しむは良きにあらずや。己が欲しきものを求めんに己が肌おしひらくとも、何の咎めある世ぞ、むしろその指輪の五彩綾なす光をながめ、女はしづかに女らしく陰にて悲しみ咲くなるべし。

黄伊羅保

或日賓立内見に行きけるが、黄伊羅保の茶碗一つが眼に殘りしばらく去る能はざりき。兩手をもつて稍々ゆるやかに抱きごこちするくらゐの形にて、黄藥かかれど光らず、沈潜したる光澤のありさま、その輕きこと、又確く柔らかきこと、手中一片松の皮を翳せるごとし。予いまだこれほどの伊羅保を見しことなかりしかば、いま手にとりてつくづく結構なるものと思ひ初めぬ。

予が郷里に卯辰山といふのあり、二た割れと云へる禿山の底に幼時下りしことありしが、幼時心に何となう寂しくは思ひ、一草のなき禿げたる土をながめぬ。いま予が心に影さすものはその折の言ひやうのなき寂落たる風情なり。人に告げんほどの心にはあらず、又自ら釋きて見んよすがだになき心なり。やや刷け目立ちたる黄緒の底に三四百年がほどの古き露滴匂へるごとく、又山澗に泉を汲めるごとく思ほゆるなり。燒の閑き品下りたる赤伊羅保一個を持ち合せゐたりしが、予のその伊羅保のごときは洵に下卑たる劣品なることを知りぬ。むしろ黄伊羅保と言はんより赤伊羅のごとく、又赤伊羅保と言はんより黄伊羅保のごとき、ふしぎなる古雅極まれる間色の、沈んで寂び落ち盡したるところ見佗かさりけり。總て朝鮮の陶器は一見ただちに寂漠の感に富めるが、凝視せるうちに自ら啼り泣きせるごときものを感ず。三島茶碗や刷け目など古ければ古きほど何か寂寥極まれる心ありけり。——市元小者の來りけるときに、こは千金を打ちてなほ入手せざるものなりやと言ひしに、さればなり之れ程の伊羅保にして無傷のもの今の代に搜すすべなければ、むしろ千五百金がほどのものあらんか。——斯くこたへしが予も又た成程とうなづき再び手にして暫らくは置く能はざりき。予は元より内見と入れを好まず、己れの鑑識がほど金員を抛打つといへども、その二倍がほどに値付けざれば落ち

ざるが常なれば、いまいましく口惜しと思ふのみにて餘り好まざりけり。されど斯樣なる伊羅保を眺むるだけにても、內見といへども左程ないがしろにすべきものにあらずと思ひぬ。——家への歸途もはや日暮れ氷雨横さまにしぶきけれど、伊羅保茶碗のこと胸にわだかまり總じて寒さ身に應へざりき。後の日にこの伊羅保千六百金に賣れたりとかや。——。

借金

われの幼なき折と言ひても十七八頃なりしが、本屋に新刊の書物を見るごとに欲くてならず、家の名を言ひては取寄せたりけり。その他雜誌など本の數かさなり、何時の間にか半年の間に三十幾圓かの借錢とはなりけり。もとより家貧にして十八年が以前の三十幾圓は大枚の極みなりければ、いかやうにせん術もなく仕拂はさりければ、たゞ只すらに世にこの事知れんことを恐れたりしが、わが心知らぬ本屋の小僧の、月初め五日の朝には憎々しく口笛吹きて書附搬びたりけり。

われの一策を考へ出し、月初めの五日の朝には門前に出でて小僧の來るを待ち構へ、言を左右に托して家へは入れずに苦しき言譯をして立ちかへらしめぬ。かくすると數ケ月にして益々苦しくなり、しまひに小僧の曰く「母なる人に告げ母なる人より貰ひ受けん。」と遂に我が母に告げぬ。我もはや斯くなる上は詮なしとあきらめ、母が小言を覺悟せるほどに別に母より小言出でざりにけり。いかにせしならんと思へども心窺かに喜びしほどに、數年の月日經ち、もはや二十一歳にもなりければ、我の都に發たんとき近づき、或る時母に本屋の借金のこと奈何なりしやと尋ねしに、「あの金はもはや拂ひ濟してをきたり。あのやうなることをして再び年寄りの心さわがすなかれ。」と窘しめられけり。ありがたし

と思ふかたはら、今一度本屋に借りて見んかと出來心湧きたりしが、流石の我ももはや再び本を借りんこころはなくなりぬ。――その後十幾年も忘れたりしが、このごろになり母といろ物語りせし序でに本の事を言ひ出しあやまりたるが、母はあの時ばかりは困りたりけり。本屋はいツかな承知せず、さればと言ひて大枚の金子なれば輕々しくは拂へず、いかがせんと病氣になるほど窮りたりけるが、一計を案じ毎月一圓あてづつ支拂ひ、一年と五ケ月かかりて綺麗に支拂ひたり。その間毎月小僧の來るあり用意はしてをきしが、近隣の手前もありて恥かしき思ひをせりけり。ただひそかに思ひけるは遊巷の金にあらずして本屋の借りなりければ、すこし心は許りたりけり。今から思へば由なき借をせしものかな、かく言ひて笑ひたまひぬ。まことに三十金を一年と五つ月かかりて支拂ひたまひしは母ならざれば出來ぬことなり。それも川合の實直なる女なればか？

蟹

わが田舎なる門べに用水の流れの七尺程の幅せる川ありけるが、へいぜい滿々として町々を繞りて流れけり。ときをり水門下さるるとき水涸せちよろちよろ川となりたるが、近隣の童子ら集まり雜魚など掬はんと焦りながら、袖、裾など濡らしけり。石垣の苔蒸せるあい間に俗にいふ川蟹と云へる二寸ほどの甲羅せる大蟹の住ひ居て、童子等みなその石垣に手をさし入れ、足など引張り捕へんとすれど、十人が十人とも皆鋏にて指さきはさまれ、痛い痛いと叫びながら手を舞はしつつ懲りづまに、穴に手をさし入れけり。或るときは毛脛せる蟹の足もがれど、奥の方にしがみつきて離れず、半日がほどにて漸く捕ふるところ三五疋くらゐなりけり。

石垣や穴に這入りたる蛇の尾をつまみ引き摺り出さんとするときは、肉身砕けても穴より穴にとぐろを卷き容易に離

れるものにあらず、そのやうなる時には一どきにとんとはずみを食らはせば、するすると引き出されるものなり、されど蟹の場合はその甲羅に指をかけざる限りなかなか穴より捕へんこと至難しき限りなり。されば童子ら七八人くらゐ群がり川舍青葉茉々しく、みな右の手の袖袂を水にてぬらし、何といふ強きものぞ、われこそ捕へんものをと言ひつつ、これ又た鋏にて指さきをはさまれ悲しき顔をして手を引きけり。かくて童子らは爲すすべなく茫然と眺めるだけにていい加減のとき水門の戸の落され、まんまんたる水みなぎり流れけるなり。されば童子らその翌朝に昨日の蟹いかにせしぞ、足もがれたれば今朝は早や死にたるにあらざるか、いや足などもがるといへども仲々に死ぬものにはあらざるべしなどと口々に爭ひつつ石垣の上にたたずみ、程近き朝の學窓へと急ぐなりけり。——まことに足四五本が程もがれたる川蟹の、けさは早や蟲の息とはなりつつ、まんまんたる水みなぎる痛さに目まひを感じ、暗き石垣の奥より恐ろしき世のありさまに脅やかされる態は、眼をつぶらねども思ひ浮ぶなりけり。人間の世に地震ありけり。人間の我人みな怖がりたれど川蟹の恐ろしかりしありさま、地震に右往左往せし我が心とくらべものにあらざるほど恐がりたるなるべし。それだけにても今日は早や死にも果て、穴より川下に流れけんなどと思ひめぐらしつつ、われの門べに立ちしほどに午后過ぎ童子らの學窓より歸り來れど、もはや振り顧へらんとはせず、いと高らかに赤い夕日にてらされてと古き唱歌うたひつつ町角に消え行きけり。これ人の世のありさまなれど、よくよく思ひめぐらすとき却つて我人の身の上のことどものやうなる氣のして詮なし。哀しと見しは我がこころ多情なるにや？——。

豆腐

わが金澤の町に寺ばかりなる寺町と云ふのがありけり。或日所用ありて徒歩きせるに、とある大寺の山門に「とう

ふ」と記せる表札くらいある下げ札の掛けありて、折からそぼふる雨に濡れたり。おそらく廊裏遠く豆腐屋の呼び鈴の聞えざるなれば、左こそ下げ札せるならん。珍らしく京洛のむかし宇治殿の世のごとき心湧きけり。

その寺町の八百屋の店さきごとに、手桶を臺の上に置きお佛花の束を二錢づゝに賣りたるが、三百六十五日絶ゆることなかりき。われの幼き折には一束五厘なりしが、時勢進みて四倍とはなりにけり。又寺町は數盤つゞき、寺も庭もそつくり青き苔蒸せるが珍らしくも續けるが、その昔五百年が星霜古りたるもの多く、されば庭石燈籠卵塔場のごとき一面の青苔生えけり。削れば石の肌ほろほろ缺くるも、苔の根張りて剝けざるなり。それゆゑ寺町の雨はつねに緑色なりと言はんよりむしろ蒼然たる趣きなり。市中の鴉群の、ひるは市中の家根にあそびてあるも、昏れんとすればみな寺町へ歸へるなりけり。犀川渡りてその鴉群の點々として寂しき姿の、生ひ立ち寺町近きものの忘れがたきものの一つなり。高臺なるがため鐘の音の絶ゆることなく市中へ幽かにひびきを流しけること今もむかしも渝らざりけり。

ぽつぽおばさん

或る田舍の兒ども三つになりけるが、何故か知らねどもわが知り合のおばさんをぽつぽおばさんとは呼びにけり。そのおばさんの弟なる人の停車場に勤めければ、いつも來るごとにぽつぽぽつぽと戯れ言ひ、汽車走る眞似眸をなしけるに、いつころとなくぽつぽおばさんとは呼びならしけるなり。その兒ども父親の厠へ入りけるあとにてお父さんのきんたま高い高いところにありけると言ひ、天をな指さし客あるごとにいと眞面目なる顔をして教へたりとぞ——。

後世

大地震に遭ひたる後、わが腰と脊との間に鮒の如く絶えず臆病にぴりぴり震えたるものの感じして、そのために不意に腰のほとりに地震にあらずやと不圖思ふことありけり。よくよくの臆病者ならずやと嗤はれも計らざれども、地震にあひて泰然たるものより恐がりゐる人こそまことの心を持てる人なりけり。わがごとく慌てふためくは醜かれども、少し怖がりながら居る人の何となしになつかしきものなり。人間なれば右往左往して恐がるなれ。性なきものの何ぞ恐がらんものなるや。

へいぜい文筆とれるものの正直なる恐がり方の、まことに純情あふれるとや言はんや。去る書きものの大家の、折あしく地震の日に演べにありけるが、いと慌てて逃げ廻りたるをひどく遣つつけたる雑誌の風聞子ありけり。われその記事ながめつつ逃げ廻れる書きものの大家の心こそ同じからめと已が心にくらべ、却つてそれをみにくしと書きたる風聞子に組しざりけり。人間らしく逃げ惑ひたるを一笑に附さんとするいい加減なる風聞子の筆の先の、又何時の日か己れの身に加はるかは知らざれど、世にいい加減のことを書きならべることの、まことに後世をいつはることを嘆くは敢て北窓鎖談子のみならんや。われも又たともどもに嘆くものの一人なり。

此の書は、ソクラテス的勇氣、即ち合理的實行意志を以て、自分の内なる「賤民」を征服せんとする思索的努力を跡づけたものである。「轉身」の序文に約束した、自己超克の成績を幾分擧げ得たかと思ふ。自分は、惡の魅力から脱し切る爲に、善と福との嚴密なる一致の觀念に到達し

女性改造豫告

鳳凰天に搏つ

（長篇小説）柳原白蓮

筑紫の女王として艶名隠れなかつた白蓮夫人が、例の三角戀愛事件より全く世と

頭にコロタイプで出しました。

京二

イバニエス著　鈴木厚譯

定價貳圓六拾錢　送料十九錢　四六判上製

血と砂

忽ち十版

イバニエスの出現が西歐文壇近時の驚異であつたと共に、彼の出世作「血と砂」は寫實主義文學の廣大な沙漠の中に誕生せる革命的新彩に充ちた**ロマンチシズム**の先驅であつた。

「世界に二人とない闘牛士」として西班牙の首都でもてはやされた**ガルラアド**を主人公とし、それに配するに神の如き美はしき**カルメン**――そして、某侯爵の姪――の間に起れる三角關係に筆を起し、闘牛士の面白き生活、悲壯なる最後、そして我國には全く神秘の國であつた西班牙の異つた舞臺を展開せしむ。

彼は飄然として我國へ來り、又飄然として我國を去つた。彼の驚くべき燃犀、深酷の筆致によりて西班牙に横行する唯物主義的義賊が、いかに描かれ、そして八公、熊公の無産階級の世界的大歡樂郷が、闘牛場を通して我等にいかなる新しき興味をそそらしめるか。

それは全く彼の如き思想的に豐富な背景を有つ一大文豪でなければ能きない近代的の收穫であつた。新しくて、面白くて、舞臺が全く變つていて、作者の特異の性格でかきあげられて、そして世界中の大歡迎を受けたものだ。此一大小說の飜譯は總の點に於て我々に有意義の計畫である。（本書は彼の來朝のとき我社が新に飜譯權を獲得せるものです）

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京四八〇二



麗人記

高須芳次郎

美女の芳魂

十年前の春、私は『平家物語』などを懐ろにして、嵯峨の里を訪ひ、往生院の草門の前に起つて、祇王、祇女、佛御前らの戀愛悲劇を思ひ出したことがあつた。靜かな嵯峨の春は淡紅の櫻花と淺緑の芳草とに彩られて昔の俤を留めて居るが、曾て艶美の名を史上に殘した麗人らの芳魂は呼んでも歸らない。私は春風にほろほろと散る落花を身にあびながら、ぢつとその想ひを祇王、祇女らが住んだ昔に馳せた。私の胸には、いろいろの麗人が、ひつきりなしに浮んで、極彩色の大きな美人時勢粧の繪をぱつとひろげたやうに思ばれた。その眼、その脣、その眉、その動作、そしてその美しい姿態を私は掌中の寶玉のやうに幾度も幾度も心眼の上にくり返し見た。

私の思ひは、祇王、祇女のみに留まらないですべての白拍子の上に及んだ。また古い時代の遊女たちの上にも及んだ。現代人は、多く江戸時代の傾城、妓女に注意を向けて、古錦襴のうちに封じこめられて居る中世の麗人たちを餘りに早く忘れ過ぎた氣味がある。民衆生活の一面をさながらに髣髴した白拍子、遊女のロマンスは、たとひ、その時の隔りが餘りに遠くとも、現代の民衆に強い響きを與ふべき何ものをか藏して居よう。今の名妓、美姫に見出すことの出來ぬ尊い魂を白拍子らに求めることが出來よう。

古今東西、美しい愛情には、少しも變りはない。遠く奈良時代の昔に遡つて見ても、そこには、極めて素朴ではあるが、純愛の花を遊女兒島の上に見出すことが出來る。そのロマンスの歌は『萬葉集』卷六上の部に出て居る。その時分、太宰帥を勤めた大伴旅人と遊女兒島との間に綿々たる双思の情が深く成立つた。旅人は、兒島を妻のやうに思つた。兒島は旅人を一生の愛人のやうに思ひ込んだ。流れゆく月日のうちに、二人はいつまでも、その愛を續けてゆかう、泡沫、流轉の生に不變の契りを保たうとのみ心に祈つた。

けれども逢へば別れ、別れたものの行末がどうなつてゆくか、わからぬのが世の常である。兒島が永久を盟つた人の上にも、別れねばならぬ時が來た。旅人は今度、大納言を兼任して、九州の邊陬を離れて、都にゆくことになつた。それを知つた兒島は、どんなに失望したか知れなかつた。身分の相違は、兒島を苦めて、都まで路いてゆく事を許されない。彼の女は、今更、社會の低い階級に生れた自分のはかない運命を淋しがつた。

そのうち、旅人が都へゆく日が來た。兒島は、その日、府吏のうちに混ぜつて、それとなく、旅人を見送りながら、飽かぬ別れを惜んだ。

おほならばかもかもせんをかしこみと
　ふりたき袖をしのびてあるかも

やまと路は雲がくれたり然れども
　わが振る袖をなめしともふな

兒島がその愛人に對する切なる思慕の情は、この二首の歌に溢れて居た。彼の女は、思ふ儘に袖を振つて、惜別の情を示したいと考へたが、貴人に對して、さうしたことをするのは、禮に背くと氣付いたので、ぢつと差控へた。が、自制しても、矢張燃ゆる愛情は彼の女に禮を失ふことをも忘れさせた。兒島は前途遙かに雲に隱れて居る大和地をゆく旅人の姿を偲んで、覺えず袖を擧げて、愛する人の名を心に呼んだ。かう云ふ意味が、歌に浮び出て居る。それは、わが遊女ロマンスの最初のものである。いかにも淳朴な尊い愛の心がそこに見える。その頃の遊女は、賣笑のために生活して居たのではなかつた。寧ろ藝術本

位の生活を送つた。そしてそれには、相當の素養がなければならぬので、大抵卑しくない身分、家柄のものが遊女となつた。けれども平安朝時代になると、漸く賣笑本位の遊女が出て、品位を傷けた。それでも、一方には、矢張氣品が高くて、藝能の豐かな女も居たのである。

遊女のうちに、白拍子の名が出來たのは、鳥羽天皇の治世である。その時分、京に和歌の前、島千歳と云ふ二人の遊女が居て、男舞と云ふのを始めた。それは直垂に立烏帽子を着け、腰に刀を差して、男のやうな姿で舞踊したものである。この男舞を白拍子とも云つた。源義經の愛妾の母（磯の禪司）は、少納言信西の導きで男舞を始めて、白拍子の先驅をしたと傳へられて居る。

平安中期から鎌倉初期にかけて、名高い白拍子が出た。それは、他の素養ある遊女の一群と共に、日本情史を美しく彩つた。その中には、唯物慾に眼がくらんでしまつて、色も香もない女も少くはないけれども、今日の妓女などに見られない氣高いものも時々はあつた。そして音樂、和歌などの嗜みがあつて、宗教のことにも冷かでなかつた。江戸時代の妓女のやうな花やかさはないが、ゆかしいところが多かつた。

かうした關係から、白拍子、遊女は、交通が割合に自由の文化の芽が早く發達した場所に先づ現はれた。近畿では江口、神崎、京都、それから東海道筋の各驛が、白拍子、遊女らの最もよく集つたところであつた。江口の遊女のことは、大江匡房の『遊女記』や『日本記略』『江家次第』などに早く出て居る。當時、江口は西海から來た船の人々が、京へ赴く時、川船に乘換へた場所であつたから、殷盛を極めた。船中の旅人に向つて遊女が群を作つて舟で押寄せたほどであつた。

それらのうちで、今日まで名を殘して居るのは、聖僧西行と親しかつた遊女妙である。今も彼の女の像が寂光寺の什堂に、安置してある。また女歌人としての彼の女を永く記念するために江口の堤上に歌塚が建てられて居る。一切の執着から離れて風月や花鳥を侶とした西行と色慾の世界を彷徨うて、美貌と才藝とを以て多くの人たちを魅惑した妙との遭逢は色即是空、空即是色の感を私らに起させる。麗人記の話説は、茲から始ま

る。

聖僧西行と遊女妙

初冬の時雨が、舟船の人たちにわびしい思ひをさせた或日のことである。身に見すぼらしい黒衣を纏うて、まるで濡れ鼠のやうになつた一人の老僧が、或遊女の家の前に來るとぶるぶる寒さに慄えながら起ち留つた。

「折からの時雨で誠に困まります。どうか暫く休息させて戴きたい。」

と力ない聲で云ふと、家のうちに居た遊女は何と思つたか、冷かに老僧を見て、

「折角ですが、こゝで休息されては困ります。」

と斷つた。その女は、四十に近い年頃ではあつたが色が白くて眉目が未だ美しかつた。何となく、人を魅するやうな風情が未だ殘つて居た。それに氣品も卑しくなかつた。老僧は、女に斷られて、その儘、立ち去るかと思ふと、時雨にぬれながら、尙ほ立つて、何か考へ込んで居る樣子であつた。やがて老僧は女の方に向いて、

世のなかを厭ふまでこそかたからめ
　かりの宿りを惜む君かな

と當座の感懷を一首の歌に托した。女は少し意外だと思ふ風をして、暫く沈吟したが、優しい微笑を白い顔に見せて

世を厭ふ人としみればかりの宿に
　心とむなとおもふばかりぞ

と答へた。それには、老僧も亦驚いたらしかつた。

「成程、これは面白い。」

と老僧は覺えず、口のうちで感嘆した。

「どうも失禮いたしました。さあ御上人樣御遠慮なく、破屋へお這入り下さい。」

と遊女は始めて打解けた風で、老僧を一室に請じ入れた。その言葉調子は朗かであつた。

「御厚志辱けない。」

と老僧は雨にぬれた黒衣をその儘、家に入つて笠をぬぐと、超俗の風采が、始めて遊女の明眸に映つた。その老僧は、江口

の里に立寄つた西行であつた。

西行は旅から旅を漂泊して歩いたが、少しも、その窮乏を氣にしなかつた。花の蔭にも、また落葉の林のうちにも、彼れの世界はあつた。顔の色は風雨に黑み、髯が濃く生び放題にのびて居ても、屈托しない氣象、淸高な心持ちが、眉宇に浮んで居た。かうして彼れは初冬の風物に孤寥、幽寂の感味を見出しつゝ、いつかこの江口の里へ足を向けたのである。そして不時の時雨のために、彼れは未だ休泊したことのない遊女の家に腰を下した。

遊女は西行の凡僧でないことを知つて、快く西行を待遇したので、西行は、一夜そこに宿つて、爐邊に端然と座りながら、彼の女と語り明かすことになつた。西行の旅の話、歌の話から始つて、やがて彼の女の身の上話に入ると、彼の女は、その半生のわびしい生活について、心からの悲痛を物語つた。

「私の生涯は、始めから運命に呪はれて居たので御座います幼少から早く遊女屋へ賣られて、卑しい勤めを長い間、續けてまゐりました。それをお客の眼から見ると、浮氣で押通して、面白く、可笑しく、日を送る女のやうに見えませう。が、私はいつも心で泣いて居ました。嗚呼これほど、はかない生活はない。それに自分の手頼りになる人がないのに、色も香も急に衰えてゆく。末は一體どうなることかと考へますると、もう一日片時も勤める氣になれませぬ。それでこの兩三年は殊につらい思ひをしましたので、近頃すつかり勤めの方をやめました。」

彼の女は尙ほ言葉を續けた。

「さうなつて見ると、全く色即是空、朝夕聞く野寺の鐘の音が、身に泌みて、この世がつくづく厭になりました。早く髮を斷つて、尼になつたら、惱みの影も、悲しい思ひも、すつかり無くならうかと、そればかり、昨今一心に思ひつめて居ります。お上人様、どうかこの弱い小羊のやうな私に安心立命の光りを與へて下さいませ。」

彼の女は、かう云つて、只管西行の手に縋つた。その眼には、熱い涙が光つた。

「貴女の述懐を承つて、私もひどく胸を打たれた。が、人は

この世に生きて居る限り、悲みは永劫に絶えませぬ。出家しても徹底成佛の道を得るのは容易のことでない。私とても、未だ得脱したとは云へぬのです。それでつまりは形よりも心です。貴女が尼にならうと云はれるのは、決してわるいと思はぬが、また強ゐてさう致さるゝ必要もありますまい。唯心に大慈大悲の御佛を念じ、唱名怠りなければ、貴女の前に自ら得脱の道が開けるわけです。決して悲むに及ばぬことぢや。大きい悲みは、やがて大きい救ひの手となりまする。」

西行は、かう謙遜な調子で、彼の女を慰めた。

「只今の御話は、誠に有難く聽聞いたしました。今迄の暗い、わびしい心が、急に明るくなつたやうに思はれます。けれども私のやうに罪の深いものが、御佛の手にいつになつたら救はれることやら。それを考へますと、心細くてなりませぬ。それには、お上人様に今後長く導いて戴きたう存じます。この一夜の假りの宿を縁にいつまでも、私を忘れられぬやうに、お氣が向いたら、御音信を賜りたう御座ります。」

女はその心のうちをすつかり西行に打あけた。

「私にそれほどの力があるかどうか、私自身にもわからぬが、お互ゐに心を勵まして、御佛の道を辿つてゆきませう。清く澄んだ心に大自然は、惠みの光りを投げかける。咲く花にも、散る花にも、輝く月にも、黒雲に呑まれる月にも、自らの悦樂が感ぜられる。秋の悲みの奥にも、末枯の世界にも、またそれに相應した自然の歡喜が見出される。貴女が、かうした心持で日を送られるならば、決して心細いことはありませぬ。今夜は奇縁ぢや。これから彷徨ひあるく旅の空で不図、貴女を思ひ出す時がありませう。私はさうした時に必ず音信をします。」

西行の眞實に滿ちた言葉は、深い感銘を女の胸に留めた。それから話は尚ほ續いた。もう夜が大分深くなつたので、女は別室へ去り、西行は爐邊で、冷めたい夢を結んだ。程經て夜があけ離れると、西行は直ぐ起きて、旅裝を整へた。そして女に一禮を述べて立去る時、女は名殘惜しさうに、いつ迄も、西行の

後姿を見送つた。

その後、西行は漂泊の旅のうちにも、遊女の妙のことを忘れなかつた。そして彼の女と逢つた翌年、ある人に一首の歌を托して、音信の代りにした。

かりそめの世には思ひを殘すなと
　聞きし言の葉忘られもせず

この歌を詠むと、彼の女は直ぐに西行への返歌を人に托した。

忘れずとまづ聞くからに袖ぬれて
　わが身も厭ふ夢の世の中

かうして彼の女は、最初の望み通り、佛門に入つて、尼となつた。けれども彼の女の心は尙ほ動搖してやまなかつた。すべての執着を斷ち切つた筈の彼の女も、その心をどうすることも出來ないで、もがいた。

かみおろし衣の色は染ぬるに
　なほつれなきは心なりけれ

この惱みを聞き知つた西行は、心で彼の女の境地を憐んだ。そして淚なしに、この哀切な歌を見ることが出來なかつた。西行は彼の女の前途を案じた。ところが、彼の女は一心に寂光寺で行ひすまして、到頭「つれない心」に打克つた。そして即身成佛の道を見事に切り開いた。その時、彼の女の痩せた白い顔に隱し切れぬ喜びの色が始めて浮かんだ。

海道一の遊君

色即是空の悲みを體驗したのは、ひとり遊女妙のみではなかつた。祇王、祇女らの上にも、その悲みはあつた。また熊野侍從のやうに短い半生のうちに、平家の盛衰を眼の前に見て、生の幻滅をまざまざと味つた女もあつた。侍從は、海道第一の遊君と云はれたほどの麗人であつた。その兩親は、遠江池田宿のもので、久しく子がなかつたので熊野權現に祈誓をこめた末、一人の女兒を設けた。それは珠のやうに美しくて、聰明であつた。兩親はひどく喜んで、その女にいろいろの藝文を敎へた。そして妙齡の頃になると彼の女を白拍子に仕立てた。そして最初、その艷姿に懸想したのは、遠江の國司を勤めて居た平宗盛であつ

た。

　當時、平家の勢は、飛ぶ鳥を落すほどの有樣であつた。宗盛は、その威勢を背景として時めいた上に、貴公子に見る優雅な姿態と文藝の趣味とを持つて居た。宗盛は最初侍從の白拍子姿を一目見た時から深い戀心を起した。また侍從も、宗盛の地位と美貌とを憎からず思つた。かうして二人の間は深い愛で結び付けられた。やがて宗盛が任滿ちて都へ歸る時、侍從を伴ふた。

　京の生活は、侍從を喜ばせた。平家の人々が美しく裝つて、世をわが物顏に巷をゆく樣子が嬉しかつた。彼の女はまた鴨川の水や東山の姿などを見て、何となく、身を繪卷物のうちへ置いて居るやうに感じた。そして日常の調度、飲食、服裝までが、遠江に居た時にくらべて、華美、優麗を極めて居るのを快く見た。賑かな社交、物馴れた人々の應待やいろいろの風流は、また侍從の眼を樂ませるに充分であつた。

　侍從は、宗盛の愛を一身に集めた。『平家物語』には、かの女の美しさが、それほどであつたか、はつきり描いて居ないけれども、一笑、百媚を生ずるやうな女であつたと思はれる。それに舞踊や音樂にも、堪能であつたらしい。そのうち、侍從の母が重い病にかゝつた時、侍從は、ひどく心配した。一度歸國して母を看病したいと思つて、宗盛の許しを求めた。ところが、宗盛は「一日片時もお前を離すことが出來ない。老母のことは察するが、成るべく歸らずに京に留つて居てほしい。」と云つた。

　侍從は、宗盛の愛を泌々知らぬのではないが、死に瀕した母のことをその儘、知らぬ顏して打過ぎることが出來なかつた。花やかな生活を續けてゆくうちにも、侍從は、時々、國に居る母のことを思つたり、夢に見たりして居た。それだけに寸時も早く國へ歸つて、母の病を慰め、いたはりたいと思ひつめた。そうしたところへ、國のものが來て一家の消息を傳へ、母が頻りに侍從に逢ひたがつて居ることを告げた。侍從はそれを聞いて泣いた。

　「宗盛樣の御意に背くのは、いかにもつらいけれども、母がそれほど私に逢ひたがつて居るものを、歸國せずに居た

ら、到頭母に逢ふ折を失うて、その歿後に後悔しても仕様がない。宗盛樣も大切であるが、母も亦大切な人である。歸りたい、どうしても歸つて、一度母に逢つて話がしたい。

と侍從は固く決心した。

「たとひ、私が京に居らぬうちに、宗盛樣が他の美しい女へ心を移されようとも、そして左樣した時に私が秋の扇のやうに捨てられようとも、それは仕方がない。今の私には病める母がなつかしい。」

侍從は、只管宗盛の心を動かさうと思ひあぐんだ末、都の春に事よせた一首の歌を作つて、それを宗盛に示した。

いかにせむ都の春も惜けれど
なれしあづまの花や散るらむ

との歌を見た宗盛は、ひどく感心した。

「よく出來た。お前の心もよくわかつた。では一時、お前の望み通り、歸國を許さう。その代り、母の病が癒えたら一刻も早く歸つてくれ。この熱い思を察して急いでまた京へ上つてくれ。」

かう云つて、宗盛は快く侍從の歸國を許した。侍從は、飛び立つ思ひで故郷へ歸つた。侍從を見た母は、ひどく喜んだ。侍從も久振に母を見て、始めて安心した。そして看護に力めたが、母の病は、捗々しく癒えなかつた。侍從は、都のこと、宗盛のことなどを思ひながら、空しく時をすごした。

月日は、流るゝやうに過ぎた。その間に源平の戰ひが起つた。平家の一門は、戰ふ毎に破れて、都落の悲劇となり、壇の浦の衰滅となつた。侍從を熱愛した宗盛が源氏の手に捕へられたことが、いつか侍從の耳に入ると、侍從は、それが余りに急激な變化である丈にどうしても眞實のことと思はなかつた。何となく、そのすべてを夢のやうに思つた。

それがたとひ夢にしても、余りはかない夢、もろい夢、短い美しい夢であつた。平家全盛の有樣は、未だ侍從の眼のうちに、はつきり殘つて居る。宗盛の豪奢な樣子、よそながら見た重衡らの威風までが、はつきり、胸に印象せられて居る、侍從には、平家の滅亡が、余りに突然で余りに不自然であるやうに

思ばれた。彼の女が、さうした感慨のうちに日を送つて居ると、やがて梶原景時に護送されて、平重衡が、池田の宿へ來るといふ噂があつた。程經て、それが全く事實となつた。重衡は池田へ來て、侍從の家に立寄つた。侍從はまたそれを「夢でないか。」と思つた。

重衡の樣子は、以前と左程變らなかつた。けれども顏に焦悴の色が明かに漂うて居た。侍從が、重衡の前へ出た時、重い悲みが、彼の女を壓した。先立つものは唯涙であつた。やがて侍從は、自分を制して、やつと口を開いた。

「今日、かうした御樣子を見まゐらせようとは、まるで夢にも思はなかつたことで御座ります。運命は、平家御一門に幸ひするように只管祈つた甲斐もなく、わびしい時を迎へられた御心のほどを深く察しまゐらせます。そして私はあの宗盛樣のことを思ひまするど……」

侍從は、かう云つて、聲をあげて泣いた。が、漸く涙を收めて、重衡を慰めるため、一首の歌を詠つた。

あづま路やはにふの小屋のいぶせさに
ふるさといかに戀しかるらむ

重衡は、景時から侍從のことなど聞いて、暫く目を閉ぢて、感慨に沈んで居た。程經て彼れは、侍從への返歌を詠んだ。

ふるさとは戀しくもなし旅の空
いづくも終の住家ならねば

かうして、重衡はゆく春の哀れを身にしめて、翌日、侍從と別れた。侍從は、重衡のことから、宗盛のことに思ひ及んで、人生の幻滅を適切に考へさせられた。落花啼鳥、すべて侍從には、平家の末路を象徴するものゝやうに感じられた。彼の女は、花吹雪の下に起つて、ぢつと重衡の姿が見えなくなるまで、吾れを、忘れて、ぼんやりその方のみ見送つて居た。そして彼の女は終に地上に泣き伏した。

後、宗盛の死が、彼の女に傳へられた時、その悲みは、どんなに深かつたか。『平家』には、その消息が書いてない。恐らく、彼の女は佛門に入つて、宗盛の後世を弔つたとであらう。それとも出家しないで、第二の愛人を作つたか。それは、永久に秘密の謎として私らの前に殘つて居る。

尼となつた遊女愛壽の話

麗人の哀話は、いつ迄も綿々として盡きぬ。が、私は玆に別の方面を見よう。それは、鎌倉の將軍賴朝、賴家らにからむロマンスである。賴朝は、艷史と關係が深くない人のやうであるが、その實、賴朝は、遊女、白拍子に對して弱い人であつた。建久四年五月、賴朝が富士で狩した時、十五日は齊日だと云ふので、狩をやめて、朝から晩まで酒宴を續けた。その時分、鎌倉の繁榮につれて、駿河、相模地方に遊女の群が多く居た。それで賴朝がその部下の人々と騷いで居るのを見て、黃瀨川、手越などの遊女が、わけもなく一時に賴朝の許へ伺候した。余りに美女らが雲のやうに群つたので、それをどう扱ふかと云ふことについて、賴朝はひどく困つた樣子を見せた。やがて彼れは里見義成を遊君別當として、才藝の優れたものを選ませ、必要な時に自由に彼の女らを招くやうにした。また賴朝は、遊女の訴訟について、義成に裁斷を下すやうに命じた。

建久元年秋、賴朝が上洛の途中、遠州の橋本驛で、多くの遊女を召出して、歡樂の一日を送つたことがあつた。賴朝は輿に乘つて、景時らと連歌の作を試み、「橋本の君には何か渡すべき」と賴朝が先づ戲れると、景時は「たゞ松かはのくれて過ぎばや」と附けた。そして遊女らに多くの引出物を與へた。そのうちの一妓が、賴朝に侍して、一夜の寵を受けたので、後、賴朝の死を聞くと、直ぐに尼となつて妙相と云ふ法號で、一生清く行ひ澄ましたと傳へられて居る。水のやうにつめたい意志の權化であつたと見られた賴朝にも、かうした色彩ある艷話が時々あつた。

賴朝の子、賴家は多感多涙の貴公子であつた丈に、その艷話もまた少くない。そのうちで特に深い興味を惹くのは、意氣を以て優れた愛壽のことである。愛壽は、大磯の美女を代表したほどの優れた女性であつた。それで愛壽には、いつも多くの客があつた。が、それについて、愛壽は格別誇りはしなかつたけれども、彼の女の凛とした氣象は、時にその同列の遊女たちを凌ぐやうに思ひ誤られた。それらのことから、愛壽の全盛をひどく咀ふものさへあつた。

建仁元年六月、賴家が大磯に遊んで、名ある遊女らを召出し

た時、その中に愛壽が居なかつた。それは平生、かの女を憎んで居たものが愛壽の名を隱して書出さなかつたので、愛壽は賴家にその名を知られなかつたところから、選に洩れた。そのことを知つた愛壽は非常に殘念がつた。彼の女の美の誇りは、それがため、すつかりこわれたやうな氣がした。

「私の一生は、これで廢つた。何の面目があつてこの先、遊女を勤めて居ることが出來よう。」

と云つて、直ぐに落飾して世を捨てた。その哀話が、賴家に聞えると、賴家は愛壽を憐んで、

「それは始めて聞いた。私は彼の女の名を知らぬのだ、召出さなかつたのぢや。美を生命とし、意氣を尊ぶ女が、思ひ切つて出家したとは、いかにもその心根が可哀さうである慰めてやるが宜からう。」

と傳へて、愛壽に多くの引出物を與へた。ところが、愛壽は賴家の同情さへも受け入れようとはしなかつた。

「私は今になつて、そうした引出物を戴きたくはない。」

と云つて、それらをすつかり高麗寺へ寄進した。そして彼の女は、何處へか姿を晦ましてしまつた。その後、愛壽はどうなつたか、更にその消息が知れない。彼の女の鋭い意氣から察すると、人知れぬ土地に小さい草庵を結んで、世の中を冷眼に見ながら、唯佛に仕へて、淸い日を送つたことであらうと思はれる。全體の感じが、霜雪にもめげないで春の先驅をする寒梅一枝のやうである。

愛壽に似て一層美しいのは義經の妾靜である。靜が鎌倉で賴朝の前に引出されて、舞踊した時、愛人義經を思慕する情熱を示したことは、余りに知られ過ぎた事實である。彼の女が義經のあとを慕うて奧州へ赴く途中、栗橋で病んで、一生の思出に舞をしながら、悲壯な最期の呼吸を引取つた場面は、彼の女の性質を殊によく現はして居た。私は栗橋に遊ぶ每に、凛としたうちに淸い美しさを示した靜のことを思ひ出すのである。

靜の思ひ出は、やがて私に大磯の虎女を思ひ出させる。私は曾て大磯に赴いて、鴫立澤に西行の遺跡を訪ふた序に虎女の土像を見たことがあつた。その像はいかにも彼の女の端麗さを思はせた。それから虎御石を藏して居る寺を訪ねて、そこにある

楕圓形の大石を見た。その石は、十郎が毒矢を敵から受けた時十郎を遮つて、危難を免れさせたと傳へらるゝのである。ある詩人は、この石から思ひ附いて「虎女精靈誰又回。化爲片石道之隈。縱令李廣飮共羽。一箇貞心更不開」と吟じた。大磯に於ける虎女は、西行よりも、一層有名である。それほど、彼の女の一生は、人々の心を惹くものと見える。

俠妓の涙

虎女のことは、近松巢林子の『世繼曾我』や『大磯虎稚物語』などに出て居るが、その割に彼の女の行實がはつきりしない。人々によく知られ、傳へられては居るが、一體どんな生を送つたと云ふことは、おぼろ氣ならちに想像せらるゝばかりである。

虎女が曾我祐成と戀に落ちたのは、祐成の純一な愛に動かされた爲めであつた。その時分、祐成は、親の敵を討つことに心を碎いて極貧しい生活をして居た。虎女は、それを氣の毒がつて、祐成のために、いろいろ心を碎いた。ある日祐成が虎女のところへ來た時、近國の武士らが、何れも立派な服裝をして、見事な太刀を構へ、馬に乘りながら郭の前を通りすぎた。虎女はそれを羨しさうに見やりながら「嗚呼私にあの武士のやうな馬鞍や鎧太刀などがあつたら、どんなに嬉しからう。」と覺えず呟いた。他の遊女たちはそれを聞いて「女に鎧や太刀があつても何になるものですか、隨分可笑しいことを云ふではありませんか。」と笑つた。ところが、虎女は浮かぬ顏をして「さう思ひなさるのは無理でありませぬけれども、私は太刀や鎧を祐成樣に差上げたら、どんなにお喜びなさるであらうと思つたので、つい妙なことを云ひました。」と打萎れた。祐成は軒下で、ぢつとその樣子を見守りながら、虎女の眞情に泣かされた。そして虎女には、そのことを話さないで、暫く話して歸つた。が、祐成は、それをどの位、心強く思つたか知れなかつた。

建久四年五月、祐成らが賴朝の富士の卷狩に附けこんで、復讐の目的を遂げた時、虎女は六月一日、召出されて吟味を受けた。素より虎女には何の罪がないので直ぐに許された。が、虎女は淋しかつた。今までは、愛人が居たので、苦しい勤めのう

ちにも、樂しい時があつた。けれども愛人に先立たれて、唯ひとり後に殘ると、寥郭の秋に逢つたやうで、見るもの、聞くものが、すべて悲みの種となつた。それで虎女はこの世の執着から離れて、亡き愛人の後世を弔ふつもりで佛門に入つた。それから祐成の母の居るところを訪うて、心から慰めの言葉を述べた。それは虎女が十九歳の時であつた。

間もなく、彼の女は箱根に登つて、別當行實坊に賴んで、祐成兄弟の佛事を修めた。その時、彼の女は、祐成から最期の紀念として貰つた葦毛の馬一頭を唱導の施物に代へた。かうして彼女の心は少し落ち着いた。その歸途、彼女が、祐成兄弟の討たれた場所に立寄ると、流石に感慨が一時に彼の女の小さい胸にこみあげて來た。

露とのみ消えにしあとを來て見れば
尾花が末に秋風ぞ吹く

この一首の歌は、彼の女の心の底から湧き出た悲痛の聲である。秋は悲しい。が、孤獨を感ずるものに一層悲しい。尾花が心細くなびく前に起つて、ぢつと秋の風に吹かれながら、祐成の俤を心眼に描き出してくると、過ぎ去つた日の愛の囁き、その樂しさ、喜ばしさが思はれる。祐成の優しい樣子、深い眞實心が慕はれる。が、その人はもういかに呼んでも歸つて來ない。殘忍なのは冷めたい現實である。

虎女は、幾度か思ひ出の多い場所を彷徨ひながら、つきぬ感慨に耽つた。やがて彼女は思ひ切つて、歸路を急いで、大磯に戻つた。そして高來寺の山奥に分け入つて、そこに草庵を結び、祐成兄弟の後世を弔つた。一說によると、彼の女は、信州善光寺へ赴いて、そこで亡き人の菩提を弔ふたと傳へられるが、何れにしても、未だ水々しい美しさを持つた彼の女が、その長い未來を灰色の運命に委ねたことを惜まぬものはなかつた。麗人の生は、常にはかなく、淋しい。

虎女の後半生については、史實の徵すべきものがない。彼女が只管、佛三昧にその日を送つたと思へば、そこに何の波瀾もないけれども、落花の夕、佛前に經を誦する時、啼鳥の曉、看經の鉦を打叩いて、亡き人の成佛得道を祈る時、流石に愛慾の繫縛を斷ちきり得ないで、ほろりとなつたこともあらう。また生甲

變のない單調な生に倦怠したこともあらう。虎女の後半生を想像すると、いろいろの思ひが湧く。

ゆく春の戀

大磯の春に虎女の芳魂を想ふのは、また鎌倉の春に千手の艶容を偲ばずには居られない。晩春の風物は、誰れにも傷心の種を與へる。多恨の重衡が侍從に別れて、鎌倉に入つたのは、春が將に暮れてゆかうとする頃であつた。梅花散り、桃櫻散り、若葉の色が漸く鮮かになつてゆくのを見た時、重衡は重い旅愁を感じた。その旅愁を慰めたのは白拍子千手である。

當時、頼朝は、重衡に同情して、狩野宗茂に命じ、白川の宿の長者の娘千手を重衡に侍せしめた。千手は、妙齡の佳人で、琵琶、和琴の名手であつた。

ある夜、宗茂は、重衡を慰めるつもりで、その邸に饗宴を開いた。千手はその側に居て、重衡に酒を勸めた。その夜の空はどんより曇つて、晩春の靜かな惱まし氣な夜氣が、重衡を一層感傷の人とした。彼れは酒盃を啣みながら、かすかに夢のやうに浮んで居る月の姿を仰いだ。

「嗚呼春はもう逝くのだ。歡樂は短くて哀情は長い。」

重衡は、淋し氣に呟いて、千手の顏をぢつと見た。

「氣の毒ぢやが、何か朗詠を聞かせて下さらぬか。」

と重衡は所望した。

「はい。」

と千手は答へて、菅公の作を歌ひ出した。重衡は手を組んでぢつとそれを聞き入つた。

羅綺の重衣なるは、
無情を機婦に妬み。
管絃の長曲なるは、
不闋を伶人に怒る。

千手はそれを三度歌つた。最初は細い、柔かな調子で歌つた。次ぎには、太く、強い聲で歌つた。最後には、哀婉な趣深い聲調で歌つた。

「實に感に堪えた。私はこれほど朗詠を身に沁みて聞いたことがなかつた。御身は天性の藝術に秀ひでて居られるそこれについて、私は御身が殊に上手ぢやと聞い居る琴を一つ彈じてほしい。」

と重衡は、また所望した。

「誠にお恥かしう御座いますけれど……」

千手は、かう云つて、五常樂を彈奏した。その調べが高潮に達すると、重衡は感激したと見えて、吾知らず、傍らにある琵琶

を把つて、千手の琴に和した。それがぴたりと合奏の妙調となつて、一座の人々に嘆賞の聲を揚げさせた。何處からともなくそれを聞き付けて、鎌倉の武士が一群を爲して、勾欄の外へ集つて來た。折柄、夜は漸く更けて、月は暗雲に隱れた。一天今にも細雨を降らさうとする氣配であつた琴と琵琶の音は愈々冴えた。

ある武士がこの晩春の佳會を慕はしく思つて、不圖、戸を細く開けて、室内の樣子を窺はうとした時、一陣の夜風が吹き入つて、銀燭がぱつと消えた。が重衡は、それに氣付かないやうに、また千手に酌して貰つて、ぐつと酒を飲み干した。

「さあもう少し琴を彈いて下さい。」

と云つて、彼れは、感傷に滿ちた聲で詩を吟じ出した。その語尾は悲痛に慄えた。

燈は暗かり、
幾行か虞の君の涙。
小夜は、更けぬ
四面に楚の歌の聲。

重衡は、三度それを歌つて、自ら感慨に堪えないで、涙を流した。千手も泣いた。宗茂も亦泣いた。その夜、微行して、そつと一座の樣子を見て、千手や重衡の美音に耳傾けた賴朝さへも、その涙の中に引入られてしまつた。ゆく春の一夜は、かうして多感な貴公子と麗人とによつて、色彩の鮮明な場面を作り出された。亡びゆく春の悲み、消えはてゝゆく平家の悲み、愛慾のもろさを思ふ美女の悲み、それが一つにもつれ合つて、降りそゝぐ細雨のうちに哀婉の渦卷を作つた。

その翌日、賴朝の心付けで、更に伊王と呼ぶ美姐が重衡に侍した。伊王の樣子は、千手に劣らなかつた。かうして目ざめるやうな二つの花が、重衡の傷付いた心を慰めた。それにしても重衡が、千手、伊王に親むにつけて、彼の女らと別れることどんなにつらく思つたか知れなかつた。同じ思ひは、二人の女の胸にもあつた。

その後、重衡が鎌倉を出て、奈良で斬られた時、千手、伊王の二人は、世をはかなんでひとしく佛門の人となつた。そして信州善光寺で、重衡の後世を弔ふたと傳へられて居る。彼のをらの殉情は尊い。短い間の緣をかくまでに深く思つた彼の女らの愛の心は、何處までも純一で、熱烈である。そこに暮春の鐘の音につれて、ほろほろと散りゆく晩櫻の花のあはれさを見る。

春は短い、歡樂も短い、生も短い、戀は倘ほ短い。

或日の微笑

荻原井泉水

微笑

如何に實用一點張に見えるものでも、其内には趣味的な適用がある、又、如何に趣味的に案じられたものでも、其を實用化することが出來る、例へばスリといふ術は、手品といふ趣味的な技藝を實用的に應用したものではないか――私は自分のポケツトから見事に錢入をすり取られた事を發見した時に、其と同時に上のやうな一つの斷想を發見して微笑をした。スリ自身も亦、恐らくは、うまくしてやつた事を微笑してゐるであらう時に。

夜更の電車

夜が少し更けた郊外の電車は、追手に帆を張つた船のやうだ。それは浪を乘り切つて進むやうな上下動（ピツチング）をしながら、輕快に、元氣に疾走する。窓から見える遠くの家の灯火は漁火のやうで――涼しい風が黒い塊となつて、まともに面を向けられない程、吹き込んで來る時――それは此と同じ電車の内の或一時の、雜踏と混亂と喧噪と爭鬪とは如何に異つた氣分であることよ――晝のうち狂人のやうに聲を涸らして怒號してゐた車掌は、今、胸の釦を外して得意さうに腕組をし、輕く背を後ろへ凭せかけるやうに反り身になつて、脚を一寸重ねてゐる。それは順風に乘つて進む船の楫取が、楫につかまつて、欸乃でも唄ひ出す時の、その姿勢である。

彼女

細いすんなりとして美しい身體。彼女は何か一つの唄をうたふ爲めに此世に生れて來たのだ、而して、一つの唄をうたひ終ると、惜しげもなく捨てられてしまふのだ。――昔、アラビアの王樣が、一夜の爲めに召した女を一夜きりで捨てゝしまつた

といふ話よりも、もつと可憐に捨てられてしまふ──彼女は蓄音器の針。

一本の歯

私は何も考へられなくなつてしまつた。机の上には締切を急がれてゐる原稿もあるが、其を書き續けるどころではなく、ペンを捨てゝ、自分の顋をギユツと壓さへた。赤や黄色や焔のやうな色をした細い鋭いものが、チロ／＼と頭の中へ突進して來る、それが惡魔のやうに猛烈に、私の意志や情緒をめちやく／＼に破壞してしまふのだ、私は座つてゐるに堪へなくて、狭い室内を、動物園の檻の中にゐる獸のやうに歩いた、苦しい、とてもたまらない、私は横に倒れた、而して荒浪に翻弄される船の客のやうに悩ましく轉がつた。──あゝ、私はどんな重大な精神的な煩悶懊悩の試練臺に上されてゐるのであるか──否、否、私の口の中にある三十幾本かの歯の中の、たつた一本が、激しい痛を以て、私に叛逆をし出したといふに過ぎないのである。

其翌朝

歯が痛んで痛んで、どうしても睡ることが出來なかつた時、どれ程睡眠といふもの（平素は何とも思つてゐないもの）が尊くて、得難い寶のやうに思はれた事であらう。若し神に祈つて、其が得られるものならば、私は忽ちに敬虔な有神論者になつたであらう。それでも氷を當てたり藥をつけたりして、漸く睡ることが出來たと見えて、今朝は爽かに目が覺めて、痛みもすつかり忘れた時、私は此の平安な健康な朝が私に與へられたといふ事を神に感謝するでもなく、此清明な新鮮な朝を自分の仕事の爲めに捧げるのでもなく、私は新聞をとりあげて、東京市役所の吏員が不正を働いたといふ事や、劇場内の空氣試験の結果がどうであつたといふやうな、くだらない事實を讀んで、のほゝんとしてゐたのであつた。

校正

校正の朱筆を採つて、六號活字の實に細かい文字を一字一字克明に點檢しながら、山と川との別を正したり、烏と鳥との誤を直したりして、すつかり疲れきつた眼を休める爲めに、窓に倚ると──おゝ、是は何といふ大きな空の組版であらう、そこには鑄造したての活字のやうな美しい星が一杯に植えられてピカピカと光つてゐるではないか──しかし、星と活字とは、是は又、何といふ途徹もない比較であらう、けふの新聞で讀んだ

所に依ると、近頃、新しい恒星が發見されたが、其は太陽の數十倍の大きさで、其星の光が此地球にまで屆くのには何萬年とかゝるといふ程遠方にあるといふ事だ。斯ういふ話を聞くと、私達の頭では想像も出來ない宇宙といふものゝ大いさに驚される、而して、何となく淋しくなるのだ。ほんとうに私は何となく淋しくなつて、いつそ窓を離れて又、朱筆を執つた、而して小さな小さな六號活字の雨と兩と月と目との誤植を正さねばならないのであつた。

俯瞰

私達はかなり高い岡の上から眺めてゐた。下は一面の青田ばかりで、格別目をとめるべき物が無い、其中の細い路を、洋服を着た人が一人歩いてきたので、其人がしぜんと皆に見つめられるものになつた。「あ、右の脚と左の脚と交る〳〵に動かしてゐるよ」、剽輕な友は斯う叫んだ。私達は笑つた。まつたく其は機械人形のやうにも滑稽にさへ見えた。而して、自分が笑はれてゐるのにも知らずに、其田の中の人は、右の脚と左の脚と、其に連れて左の手と右の手とを倦むことなく規則的に動かしながら、きまじめに歩いてゐるのだ。私達は其をじつと見てゐると、何となく淋しくなつた。私達の誰もが皆、右の脚と左の脚とを機械的に動かして、自分自分の人生の路を歩いてゐるのだ。其は當人にとつては實にまじめであつて、しかも、其が高い所からは斯んな風に見つぶされるのだと思ふと――。

窓

朝食の時、新聞を手に取りながら、殺人や詐欺や電車の衝突や惡疫流行や、初號活字で標題をつけた社會面の記事に一通り目通した後で、私は他の面をひろげる。而して、そこに時事的の報道からは區切られて、小さな四角の空間の中に書かれた短い詩を求める。其の四角な區切りは宛も窓のやうで、其から廣々とした自然の展望に心を放つことが出來る。若葉のそよぎと小鳥の聲さへ感じられるやうだ。さうだ、壓迫される程な室内の蒸し暑さ、息苦しさの中に生きるものにとつて、僅かながらも新鮮な空氣と光線とを供給する此の小さな窓は、どうしても必要である――此の私感を新聞の編輯者の參考として呈したい。

小國民の悲み

私の從弟の小學一年生が、今日の書取で滿點がとれなかつた事にしよげてゐた。それはウマガヰマスと書くべき所をイマ

と誤つた爲めであつた。小學校の教程に假名遣ひといふものが如何に編入されてあるか私は知らない。けれども私は此事に或る殘酷な感じがした。僅か七つにしかならない兒童の無邪氣な頭腦が、早くも生きた言語と死んだ文字との間にある乖離に惱まされるといふ事が――。而して此子が大きくなる十年廿年の先の日本人がまだ〳〵かうした問題ばかりではなく、扁は何、旁は何などゝいふ事に救はれ難い苦勞をしなければならぬかと思ふと、私は文字の幽靈に捉へられて、當分は放たれさうもない日本といふ國に、或る悲慘な感じさへ禁じ得ないのだ。

風

暑い〳〵暑い日。窓を明け放しても少しの風もない日。私は汗しどゞになつて原稿を書いては重ねてゐたが、頭の中が煮えつまるやうであつた。其時、つといたづらな風が來て、折角書いた原稿をハラ〳〵と吹き散らしてしまつた。然し、誰が此風を――此のばかに涼しい愛らしい風を憎い奴だと云へやう。

影

道學者は秘密といふ事を大變な罪惡のやうに考へてゐる。然し、全く秘密のない生活といふものは、丁度、影のない道のやうなものだらう、あゝ其は何といふ殺風景な、殊に何といふ非繪畫的な事であらう。

壺

其の壺の色は實に好かつた。一口に云へば藍がゝつた青さであるが、其と似た色は地上の物にはない、先づ空の青さが是に近いだらう。けれども、透明な、寧ろ玻璃器を思はせるやうな秋の空の青さではない。又、輝かしく、眩しい程の光に富んでゐる夏の空の青さでもない。さりとて、潤みのある、霞がゝつた水分を帶びた春の空の青さでもない。もちろん、冷たくて薄く張つた金屬のやうな感じのする冬の空の青さでもない。然し、此壺をじつと見てゐると、ふつくりと柔い球面の感じと云ひ、極めて單純で、包容的な感じと云ひ、やはり青空の情趣に違ひない。此壺の作者も、きつと是を以て青空の心持を表現しようとしたものであらう、其にしても私達が嘗て經驗してゐる青空の色のどれよりも、更に美しく、更に深みのある色を燒き出したといふことは、すばらしい藝術ではないか。是こそ自然以上とも云ふべき、實に立派な創造ではないか――空の感じを現はす爲めに、土を以てするといふ事も、人間が試みた鋭い發見の一つである。空と土と斯くばかり離れてゐて、しかも是程に深い緣のあるものは無いといふ事も、此藝術に依つて實證さ

れる。

正直な店

兩側にぎつちり並んでゐる露店は、五十燭光の大きな電燈を下げたり、アセチリン瓦斯の焰を揚げたりして、それ〴〵の品物を晝のやうに明るく照らして、自分の店こそ、行く人の目を引かうと工夫を凝らしてゐる。而して商人はそれ〴〵に大きな聲を揚げて叫んでゐる――「さあさあ是はありふれた贋物とは違ふ、正眞のオツトセイの肉です、世の中に是程の强壯藥はない」と効能を述べ立てゝゐる隣では、「まあ手にとつてよく見て下さい、お買ひになるならんは第二の問題です」と上手な事を云つて、十八金の指輪を僅か一圓で頒たうと怒號してゐる、こゝでは空氣枕にもなりさうな風船玉を、どうしても破れないといふ證據に、やつきとなつて叩きつけてゐる。凡ての商人はあらゆる表現の手段を盡して――汗を流して、聲を涸らして――賣る事の功果を收めようと焦つてゐる。さうした商人の店の列が途切れる所に、然し其店の列からさして離れるでもなく、一つのひつそりした店が出てゐるらしい、六七人の人が淋しく立つて見てゐるが、其店は電灯もつけず、瓦斯もつけずに眞暗である。私は不思議に思つて、なほ注意して見ると、其店は地べたの上にぢかに汚ない蓆を敷いてあるが、賣るべき品物としては何一つ並んでゐない、而して商人は？それはボロ〴〵の單衣を着て、顔と髪との區別のつかぬやうに汚ない老いた女で、三つばかりの同じやうに汚ない子供を抱いてゐる、子供は小さな椀に入れた殘飯のやうなものを指でつまんでは口に運んでゐる。おゝ、乞食か！私はさう思つた。然し乞食ならば彼は乞食らしく「どうぞ御慈悲の御旦那樣よ……」などゝ哀れつぽい聲を出して惠みを乞ふたらばよからうに、此女は決してそんな言葉を出さずに、たゞ默つて膝に載せてゐる子供を、さあ是を見て下さい、といふものゝやうに、人々の眼に示してゐるだけなのである。而して、不思議な事には、其處に立つてゐる人が、殊に女達が、蟇口を開いて一つ二つの錢を、其の暗い蓆の上に投げるのを吝まないのである。其度に彼は「ありがたうございます」といふが、それは商人が品物を賣つた後に云ふ所の言葉の調子であつた。斯うして彼は他の商人が汗を流したり、聲を涸らしたりして、自分の品物の効能を述べ立てる代りに、たゞ默つて自分の生活其物をさらけ出す事に依つて、もつと有効に商をしてゐるのであつた。――といふのは、他の商人の品物に贋物がないとは云へないやうに、此の哀れな生活を賣る人にも、隨分贋物があつて、子供なども損料で借りて來るといふ事を私は聞いた事があるからである。然し、ほんとうは、彼のオツトセイの肉や、金の指輪に比べては、此の哀れな汚い女の方が、遙かに正眞（たとへ多少の誇張が混つてゐるにしても）であるに違ひない、さればこそ、目の高い都會の人の前では、彼のオツトセイの肉や十八金に較べて、此の汚ない女の店の方に數多くの金（其額は少くとも）が落ちるのである。

地上百首

土岐善麿

この大地(だいち)にわれは立てりとぞたのめしに立ちもあへぬか揺りくづれつつ

逃げまどふ焔の底にこれやこのわが肉身の顔をかぞへつ

そのひとみ親のすがたをはなたじとひた寄り仰ぐあはれ子らの眼

背丈にしあまる蒲團をかひばさみより添ふ子らのうなじを抱く

かき探る長櫃のなかの闇深くたちまちあかるく焔は近し

逃れないさとろうそくの灯に見廻はし欲しきものなしと思ひたるなり

妻子(つまこ)の手をひき急ぐ、病む母を背に負ひゆくにはぐれじとしつつ

横しぶく火の粉のながれ淀むまを片袖おさへつつ大路かけ過ぐる

いづくへ運びかゆかめこの焔に燒かれはつべき家財をすてつ

焔たちまち板戸にせまるくろ煙おもてあげあへずすべなし今は

危ふし今は逃れねと聲かけて眞闇をのぞくすでに影なし

遠くに近くに焔はいまはいちめんなりいづくに行くかこの八衢を

ふり仰ぐ空いちめんにどよめきつつ焔かたむき身は眞下なる

われらが家あるひは燒けずのこるかと煮みかはしつも夜のあけゆくに

逃れ來て露にひれ伏す大地の底ゆりあげて搖りやまずいまだ

露芝にむくろのごとくうち倒れあえぐ媼を助くるすべなし

ゆりやまぬ大地のうへのひとところいのちあづけて身動ぎをせず

×

漸く生きて人のちからを疑はずにいかにちさしと思ひ到れば

×

つぶれやの屋根ふみ越えてなまなましなきがら運ぶ肩に手にささへ

かい抱き孫は死なせじと死にましけむおもみ加はるつぶれやの下に

×

赤羽橋心光院に避難、流言頻りに來たる

戸さしせぬ庫裡のひさしの星月夜どよめき近く夜はいまだ深し

ひそひそとをしへられたるあひことば曉闇におり立つわれは

誰れぞと呼べば闇深く近よる老僧、顔さしよせてパンくれにけり

八十隈にしのぶものなしひとすぢの自動車のひかり大地を照らす

ひたと、さわぎ靜まる橋のかなた、かの追はれしは殺されにけむ

兩岸よりひた投げに投ぐる礫のした沈みし男遂に浮び來ず
人の顏はづかにあかるくみえそめてはじめて深く息吸ひにけり
本堂のたほれ柱に腰すゑていまは家なしとおもふいとしさ
諸の手をまろらにあはせくろごめの飯をいただく心かしこみて
庭隅に妻はかがまりつちの鍋くろごめを炊く朝はや暑し
しかすがに腹へるといひてくろごめの飯ふくみつつ喉をとほらず
くろごめの飯うまく炊くことすらに妻の涙をしのびかねたり
ひとすくひいただく飯の掌に指につくさへさびしきものを

×

事あれと待ちたのしみしその事のこれにしもあるかせん術を知らず
やけあとの地ざかひに張れるあかがねの綱さへいつか盜まれにけり
あへぎつつ逃るる路の炎天に水くれし子を忘るるなかれ

×

被服廠跡

折りかさなるむくろの下にひそやかに眼をあけにけむ人のいのちあはれ
つむじ風焰にむせて今ははや倒れたりけむひとりまたひとり
路ばたの溝のなかなるされかうべ黑黑と焦げて人顧みず

燒はらの窪みの濕りふみ越えてあやふく踏めり骨の堆みを

くろこげのむくろよく見ればよこ顏にいきのみの肉のすこしなほある

燃えさかる野天の竈の焰のなかかの腕はもよいつ迄も燒けず

投げ込むや筵のかばねもんどり打ちすなはちあらず焰のなかに

人やく煙のきはにかがまりて重油さしそゝぐ大き罐より

ひと堆み今えんえんと燒くむくろ燒きくづるれや焰もえさかる

燒きやきていまだ燒かれぬなき骸を運びくるかも燒原のかなた

×

下目黑の假寓、秋より冬に亘り、初めて郊外生活の情趣をあぢはふ。

あけがたの疲れかたみにねぎらひて別れかはすも露空を仰ぎ（夜警五首）

眼をとぢて藥のこゑ聞きをれば夜はひた深し露芝のうへに

梟のこゑやみにけり荷ぐるまのつづきゆくおとや林のかなたに

いたわりてわれに代りし少年を今宵は早く家に歸すも

まよなかの焚火かき探し燒茄子をわれにくれたるこれの少年

わが顏をめぐりはなれぬ蚊のこゑをなつかしみつつしばし眠らず

すやすやとかくも眠れる枕もと蚊とり線香をたきつぎにけり

歸り來て庭に廻はれば硝子戸にうから語りあい宵の灯あかし

うち揃ひいのちあることのうれしさを今宵もいひて床延べにけり
路ぞひの陸稲ばたけのゆふ霧に立ち待つ子らかなにを唱ひつつ
すそ埃はたきつつ入るこの門のわが家にはあらね歸」りたるなり
家路近くここをまがりて坂みちの疲れいちじろくけふも歸りぬ
通ひ路の陸稲ばたけの上り段つくろひてけふはこころ足りにき
わぎもこがあかつき起きの夏深み疲れにけむと顔あふぐわれは
窓さきの萩のほそ枝つみ折りて煙管とほしゐる母はただひとり
子をうみておとろへしるき白犬をかまどのしたのゆかに眠らす（子犬八首）
折りかさなり乳かきさぐり吸ひかねてすべりころがる母犬の股に
そのなかの赤まだらなるいつぴきの獅子毛のむくをみな愛でにけり
つくづくとわれの前なる子犬の顔ひらきたる眼のいまだみえねば
人に遣るふろ敷のなかの犬の子は首うごかすも縁にすゑられて
よろよろとそこ迄ゆきしがコロもぶちもあゆみかねたる青芝の斜面
貰はれて四匹はゆきついつぴきのいまは殘れる顔のさびしさ
この地のつめたさをただ感じつつうなじは延べてより添ふか母に
學校のそのほかのことは思ふなと朝花ダリヤ截りて持たすも（長女サチ子）
クレヨンの緑をにぎりぐいぐいと寫しにうつす向うの林（長男健兒）

うみたての鶏卵の錢はこばまねば庭すみ畑の茗荷掘りくれぬ

ぽぷらみな黄葉しにけりいまだ青き水田のふちのなんてんぽく一樹

わがものといふべきもののひとつはあれ杉の丸太の椅子をつくりぬ（椅子八首）

なまくらののこぎり持ちて杉丸太ななつに切ればななつになりぬ

さむしろを日南に敷きてけふもつくる杉丸太椅子脚できにけり

ゆらゆらと杉丸太椅子堅けれど腰すゑてみればこころたのしさ

朝毎にこころあせらず造りたれば杉丸太椅子かく成りにけり

釘うてばゆるぎとまりて丸太椅子わが腰はおけ大地のうへに

手造りの椅子をわが据ゑて空地はら草をみてあればりんどうの花

おのづから成るべきままになるべしと言にはいひてこころ悔やしき

手に選りて今はともしき馬鈴薯の泥かはきつつ芽をふきにけり（馬鈴薯三首）

靴ぬぎの石のよこさにころがりて青き芽をふける馬鈴薯あはれ

馬鈴薯の一つを父に似るとみればこれは母に似る長きとまろきと

庭掃くは子らのつとめと朝戸ひらきみなおり立つも百日紅のはなに

さくさくと大き利鎌の刈りすすむ青萱のおとに心はひそめ

朝露の青萱しとと刈りつみてわだちさやりゆくおとのすがしさ

ぽぷら林黄葉あかるくなりたればした路の斜面穂芒のみゆ

きのふかも種蒔きしかば油菜の嫩芽はや青しふた畝ならびて

あすの朝は霜ぞふらむとダリヤの花みな截りたれば瓶にあまれり

この朝は馬場の枯芝刈るころと芝刈りぐるま曳きいだしたり（競馬場三首）

遠圓く芝刈りぐるまさやさやと馬はひた曳く行きつつ戻り

青芝のあひだに茂る雜草をつみて老ゆべきわれにあらなく

遠く來てひたひの汗をふくひまも口疾に語るこの若やかさ

新しき火鉢の灰をつくるとて臬火たきをれば妻もおり立ちつ

かたすみのこぼれ松葉は掃きためて塵塚の霜に投げ込みにけり

時をおきてはづる稻田のおどし玉この靜かさをわが持たざりし

臼につくこのくろごめのいく粒かほのかに白みゆふべとなりぬ

欲しきもの今は心のしづけさに及くものもなく富士仰ぐわれは

おほ地のかすけき揺れに人はかくおびえいとしみいのち相思ふ

藝術と無產階級

マルチン・アンダーセン・ネックス

無產階級と藝術……この問題は革命と藝術の問題ではない。未來と藝術の問題である。未來の藝術は、どうなるであらうか？　無產階級は間もなく、その特質を發揮せる獨自の藝術を發展し得るものと、なるであらうか？　この問題は、階級鬪爭の多くの戰士達及び凡てのその知識分子が、考慮しつつある問題である。この問題に答ふるものは、無產階級自身であり、それは恐らく、遠き未來のことであらう。元來、藝術は——ある例外はあるが、それも結局この法則を立證するものである——革命の反映といふよりは、寧ろ築き上げられた教養の反映である以上、いま我々の前にある問題の解答が、多少遲れたとしても、別に差支へはないであらう。

私は一人の男を知つてゐる。彼は典型的なブルジョア自由主義の美學者で、無產階級藝術に對するその理論を吐いて、ブルジョアのお上品な貴婦人達を戰慄させる、かの文學革命家である。彼は親しく革命を研究するために、ロシアへやつて來た。彼は、ブルジョアジーの「恐怖の兒」としての、その名聲を維持するために、ロシアへやつて來ざるを得なかつたのである。併し、彼はどうしても革命に順應することは出來なかつた。それは餘りに粗野で、餘りに物質的で、餘りに露骨であつた。ところが彼は劇場を訪ねた時、そこで彼はまるで新しい劇術の展開されてゐるのを發見した

のである。裝飾は、三位一體か、三次限世界か、又は人間の奇怪な角度性を表象化したやうな、三角形ばかりで出來てゐた。後見役は、觀客の中に坐つて、誰にでも聞取れるやうな高聲で、台辭を朗讀してゐた。深酷な內部生活を表現す可き俳優は、兩脚を內側に廻轉させるだけの、快揚な象徵で、その役をやりとげてゐた。この日から、彼は始めてロシア革命を信じたのであつた。實際世の中には、さう云ふ人が澤山ある。その人達を革命に贊同させるためには、革命が眞の劇的樣式に表現されなければならぬのである。

我々の時代は、凡ての頹廢期における如く、强烈な文學的の時代である。文學的興味は、人にいやでも應でも革命的意見を抱かせる。これは古き事實である。更にまた、ブルジョアの革命騷ぎには、火遊びの惡戲がある。革命は彼等のその興味に對して、何を與へたか？ より多くの文學、變態性慾的の……芝居に對して、より多くの藝術。無產階級はその知識的指導者に向つて、一個の要求を呈出してゐる。而して既に、無產階級は、この指導者に對して、その要求をなす權利のあることを實證してゐる――その藝術は、奇警な發明を有する點に於いて、我々の藝術に優つてゐるのである。それは一切のレコードを破り、新奇なるもの、胸を打つ如き新奇なるものを生んでゐるのである。

不幸にも、新興無產階級にこの要求を爲すものは、獨り頹廢的ブルジョアばかりではない。我々コンミユニストの多くも亦、このブルジョアの、文學的バチルスに感染してゐるのである。古き諸の價値は、今も猶、我々にこびり付いてゐる。さうで無かつたならば、我々も亦何をおいても第一に、無產階級は新らしい文學的美術的樣式を發明するよりも寧ろ、現前に爲す可き事があるといふことを認めたに違ひない。

古き世界は文化を失ひ、殘つてゐるものはただ、藝術文學の形をした屑物ばかりで、それが文化と同一視されてゐるのである。我々は無批判に、この同一視を受け入れてゐた。我々が無產階級に對して、文化的要求を爲す理由はこゝに

在る。勿論、新文化を建設することは、極めて重大な事である。——新らしい無產階級文化は、舊世界の文化にとつて代るために、正に生れんとしてゐる。若し我々が無產階級をして、藝術を、而して新らしい藝術を生ませることが出來るならば、それは、新無產階級文化の一實證たるものであらう。

「無產階級は教養を持たない。」この問題について、私と議論した尊敬す可き一同志は、私にさう言つた。「例へば、無產階級は現在建築を持つてゐない。その教養は小ブルジョアの教養である。マルクス主義教化創造の仕事は、これから始めなければならないのだ。」と。よろしい、それならば小ブルジョアもまた、建築を持つてゐないし、近代ブルジョアも、やはりそうである。だから彼等も教養を持つてゐないわけである。

しかし無產階級は、事實、教養を持つてゐる。そして夫は古いものである。たゞ今日まで、その光輝を發揮しなかつたに過ぎない。とは言へ、無產階級は、これまでも若干な赫かしい實例を示して、未來を豫示して來た。最近五十年間に現はれた指導的人格の多くは、無產階級から生れたものである。更にまた、無產階級の强固な組織は、一個の教養なき階級によつて、創造され展開されたものである。無產階級は教養を持つてゐるばかりでなく、他の階級のそれとは全く異れる慣習を持つてゐる。自身一個の無產者である人は誰でも、かの諸の儀禮の破壞が、宮殿において行はれると同じに、茅屋に於いても行はれることを知つてゐる。勞働者の血緣關係、その善惡の共通觀念、その協同連帶、——それは昨日のものである。マルクス主義教化といふ言葉は、全然、無意味である。マルクスは無產階級の教養のなかから、太陽と光への道を拓り開く可き爆發物を結晶させた、偉大なる化學者である。

×　×　×　×　×

無產階級の歷史的時期は近付いてゐる。彼は、斷末魔の資本主義の抱擁から脫れねばならぬ。そうでないならば、彼

はそのために滅さるるであらう。未來は、絶對確的なものではない。無産階級には今日なほ强烈に、資本家的想念が克み込んでゐる。或種の地蜂は、大きな甲蟲の體に、卵を生み付けておいて、甲蟲にそれを孵化させる。甲蟲は豫め神經中樞を刺されて跛にされてゐるから、逃げ去ることも出來ず、たゞ食物を——その體內で肥え太つて、發育してゐる地蜂の幼蟲のために——とる範圍しか徊ひ廻ることが出來ない。これと同じに、資本主義は、勞働階級のなかに、その觀念を生み付けておく。勞働階級の大衆は、今日、無産階級史上のこの重大な日に於いて、資本主義の幼蟲を身に宿して、跛をひきながら徊ひ廻つてゐる。

若し無産階級が崛起して、この寄生狀態を脫却することが出來れば、その時こそ發展の道に就き、更に進んで發展し得るその權利を實證し得、來る可き時代の觀念的內容を充す可き階級となるであらう。而して、新文化の支持者となるであらう。新思想、新觀念、新行動は、その反逆について現はれるであらう。我々凡ての者の中に、より溫かきより歡ばしき血は流れるであらう。新らしき生産力の時代は、全世界に開け、藝術文學も亦それによつて利するであらう。しかしながら、その發展の條件は、何であらうか？

私は次のやうに言ふことを許されるであらう。この發展は、新らしい藝術樣式の創造を先行條件とはしないであらうと。知識の世界には、內容が善ければ善いほど、包裝は單純である、といふ法則がある。この法則はまた、藝術の分野にも適用する。言葉を換へて言へば、一國民、一階級が、知的觀念で充實してゐる間は、その觀念を表現するための特殊の樣式の追求を止めず、單的にそれを表現し、行動に變型する。裝飾が現はれる——藝術が始まる——のは、その知的觀念の內容に、多少とも汚染が來た後である。特殊の藝術的興味は、一國民又は一階級の發展に於ける、第二相——下降相であり、その衰微に比例して生長する。藝術的再生として表面に現れ來る新樣式、新手法は、實は頹廢の兆候で

ある。

私の解するところでは、藝術は久しい以前に、その最頂上へ登り詰めたやうである。しかして多くの事象は、その餘命いくばくもないことを示してゐる。古き文學的樣式、詩は正に死に瀕して居り、單純な、直截な散文が、最新の形態である。これと同じ發展は、一般に、劇及び小說にも現はれてゐる。三百年前、セルヴアンテスは、名作「ドンキホーテ」を以つて、誇張的な狂亂した騎士小說に、最後の一擊を加へた。劇も亦同じ革命を經た。破局(キヤイストロフ)は內部的、心理的(イプセン)となり、單純な効果が、求められてゐる。ヒステリカルな破局的心理を以つて、個人の運命を技巧的に仕組んだ劇に對して、今日、いさゝかでも興味を持つ者があるであらうか。無產階級は、その單純な、直截な資質によつて、藝術に影響を與へるであらう。ある國々に於いては既に、無產階級は彼自身の文學、社會的家庭的の詩を創造し始めて居り、それは單純性と、それにも拘らず日常の出來事にそゝぎかけるその光輝とに於いて、驚く可きものがある。無產階級は、とにかくその本性に沿つて發展させられないとしても、美學者の滿足を買ふために、輕業的な片輪な眞似はしないであらう。それをするにしては無產階級は、餘りに大地にひつき過ぎて居り、餘りに大地に根を下し過ぎてゐる。

舊世界の科學は、磅の端數や太陽の重量を、正確に計算することが出來る。しかし、飢えたる者の口へ麵麭を運んで來ることは出來ない。藝術は、空虛の帽子から、樣々の世に不思議なるものを取り出すことが出來、脚光の上にお伽噺を生かすことが出來る。しかし、飢えたる人類にとつては、日々の生活は、單調で、鉛のやうに重苦しい。私にとつては、たとへ無產階級が新らしい舞臺効果を創り出す能力を示さないとしたところで、飽までその本性に固執して居り、その連帶協同を維持し、多數の者に歡喜と、生命と、幸福とを與ふる間は、そんなことは何んでもないのである。

而してこの最後のものこそは、最大の藝術である。(終)

ウイルソン逝く

鶴見祐輔

一

ウイルソン氏が、とう〳〵死んだ。

自分は、今年の末まで、氏に生きてゐてもらいたかつた。それは、本年一月に、英國に勞働黨內閣の成立したことは、世界がやがてまた、自由主義に引き返へしてくる先兆であつて、今年秋の米國大統領選擧にも、その形勢が現はれるであらふと思つたからである。

しかし、天はウイルソン氏に、壽命を借さなかつた。彼は六十七歲を一期として、溘焉として、華聖頓の片隅で死んだ。それは、冬の日が沈んでゆくやうに淋しかつた。自分は悵然として、大息した。

政治家が死處を得ないとき程、悲慘なものはない。彼が若し歐洲大戰の末期、乃至は、平和會議の中途において死んでゐたならば、世界の民衆は、彼を人類解放の偶像にせずには、措かなかつたであらふ。不幸なる彼は、その星の一番低く垂れさがつた時に、死んでいつた。

それでも、彼は全く不幸であつた、とは言へない。彼の崇敬したる二人の先輩は、どうであつたか。初代大統領華聖頓の死んだとき、費府の有力なる一新聞は『華聖頓は死せり。神は祝福すべきかな』といふ惡罵をした。また今一人のリンカーンの晩年には、ある華府の大政治家は、私信を家鄉に送つて「今日上下兩院に於て、リンカーンを信ずるもの一人もなし。』と罵倒した。若しリンカーンが暗殺されなかつたならば、彼はウイルソン氏以上の惡名を帶びて死んだに相違ない。それは、米國に限つたことではない。ビスマークの晩年も、グラツドストーンの晩年も、みな淋しい影につゝまれてゐた。

二

華聖頓が生前誤解せられ、リンカーンが生涯誤解せられたや

うに、ウイルソン氏は、一生誤解され通して死んだ。殊に、彼が大統領としての末年は、群疑衆罵の府であつた。それを、あの人一倍感じやすいウイルソン氏が、じつと我慢して、弱音一つ吐かずに死んでいつたのである。今日ふり返つて見ると、彼は實に強い人であつた。

それは、彼が一生を通じて、敬虔なるプレシビテリアンであつたといふことゝである。彼は、カルヴイン以來の、信仰を固守して一度も動揺しなかつた。人間が、ある一つの信仰を守つて一生を送るといふことは、並大抵のことではない。大低の人は――偉人と稱せられた人でも――みなその生涯のどこかで、信念動揺の影が見へる。甚しきにいたつては、人格の統一を失つてゐる。

最近においては、レニンと、ウイルソンとの二人は、最後まで、その信條が動揺せずに死んでゐる。それは、懐疑的な、批評家的な性格を持つた人から見れば、一個のビゴットリーと思はれるかも、知れない。しかし、他人から見れば、獨斷でも、頑冥でも、本人に取つては、一生懸命の信仰である。かゝる信仰のために、戰つて、戰つて、戰ひぬく、といふことは、夫れ自身において、壯嚴な歴史的事實ではあるまいか。

その意味からだけ言つても、ウイルソンと、レニンとは、共に、永久的な痕跡を、人類文化史の上に刻みつけてゐる。これは、何人の悪罵をもつてしても、拂拭することは出來ない。

三

今日において、彼の功罪を批判することは、まだ早いかも知れない。しかし、自分は、簡單に彼の事業を論ずる前に、一言彼の『人となり』を記して見たい。

彼の最も顯著なる性格は、彼が信ずる人であつて、彼は疑ふ人でなかつた、といふことである。即ち、彼は批評的精神や、分拆的才能を、多量に持つた人では、なかつたといふことである。この點は、彼を、最近死んだ英國の政治家、ジョン・モーレー卿に較べて見れば、解る。モーレーの偉大は、その透徹したる批評精神である。彼は人生の末々まで懐疑の眼をもつて、見ることの出來た人である。ゆえに彼は、あの文章と政治的才幹とを持ちながら、ついに英國の首相にはなれなかつた。これは、注意深く、モーレーの回顧錄を點檢して見れば、すぐ解る。モーレーの一生は、しば／＼グラついてゐる。そこにモーレーの特色があり、偉大がある。しかし、かゝる性格の人は、人間の統率者にはなれない。人間活動世界の統率者は、もつと單純に信じきれる人でなければならない。疑ひの人は、聡明ではあ

り得る。しかし、民衆の先頭に立つて、これを指導することは出來ない。

ウイルソンは、一生信じて暮した。彼は幼にして、父祖から基督教の信仰を教へられ、死ぬまで、その神を信じて疑はなかつた。彼は、少年にして、政治の研究に興味を覺え、青年にして、米國憲法政治に關する、一個の確信を生じた。そして、最後の息を引きとるまで、この政治的信條を離れなかつた。彼は大學總長となつてから、デモクラシーといふものゝ眞諦に悟入した。そして、最後まで、その政治思想のために戰ひ拔いた。彼は軍國の大統領として、戰爭の慘禍を痛感した。そして世界平和の理想を體得した。そして最後の息を引きとるまで、その理想の貫徹のために、勇戰した。

ゆえに、人生を、批評的に、懷疑的に眺めて暮らす人から見れば、彼のごときは、戸惑ひして二十世紀に出てきた一個の、ドンキ・ホーテに過ぎなかつたかも知れない。しかし、人間がある一個の信のために死んでゆくことを、悲壯にして嚴肅なる人生の事實として觀ずる人の眼から見れば、彼が六十七年の生涯は、涙にあまる人間的記錄である。

四

彼は、信仰の人であつた。それは彼の熱情的性格から來る。彼は、分析的科學を好まずして、綜合的哲學を愛した。ゆえに彼は、古典をもつて、學生教育課目中の第一に數へた。また彼は、理知の探索よりも、直覺的悟入を重しとする性格であつた。ゆえに彼は、自ら政治學法律學の大家であり乍ら、學問よりも、大詩人の詩集を尊重した。彼は、實驗的説明的頭腦よりも、創造的思索的性質であつたゝめに、當時の風潮であつた唯物史觀に反對して、徹頭徹尾、純理想論をもつて終始した。すべて、彼に對する非難と反對とは、これ等の傾向に對する反對である。

彼は一生、外を見て暮らさずして、内を見て暮した。外界の現象世界よりも、内心の觀念世界に住みがちであつた。勢ひ、彼は、孤獨で、寂寥であつた。そして、情熱の兒であつたゞけに、この孤獨は、一そう苦しい重荷であつたに相違ない。彼は骨を嚙むごとき「淋しさ」の思ひを抱いて死んでいつた。

彼は、羞かみ屋であつた。見も知らぬ人の肩を、ポンと叩いて「暫らくだつたね」と洪笑するローズヴエルトの藝當は、考へても出來なかつた。史上の人物としてはロベスピールや、モーレーが羞かみ屋である。しかし、この羞かみ屋といふことを、臆病と誤解する人があるならば、それは、飛んでもない間違で

ある。子房一見婦女子のごとし、しかも、秦の始皇に鐵椎を投じた。この羞かみ屋たることが、ウイルソンの生涯を、一そう淋しくした。彼は、容易に友人の出來ないたちであつた。彼の親友は、一生を通じて、ヒベン（プリンストン大學現總長）と、ハウス大佐の二人しかなかつた。しかも、二人ともウイルソン氏に背いてしまつた。最後まで、彼を愛し、彼を信じたものは彼の家庭内の友三人だけであつた。

羞かみ屋であつたゞけに、彼の内心には、小供のときのまゝの、純粹な純白な情操が生きてゐた。彼は、一生を通じて、子供のやうな人であつた。大そうな惡戯好（いたづら）であつた。大そう笑ひ上戸であつた。大統領時代の忙い日にも、彼は、一寸した狂歌のやうなメリックを、紙片に鉛筆で走り書きして、机の抽出しに大事にしまつて置くやうな人であつた。そうしては、飛んでもないときに、それを高吟して、腹を抱へて笑つた。それから彼は冗談を言ふことが、大すきであつた。否、大得意であつた。彼の冗談は、全國の新聞を賑はした。彼は大病の床に呻吟した日にも、この冗談癖が已まなかつた。醫者が來て、病床の彼の胸を叩（ノック）したとき。彼は

『叩（ノック）なさらずともよろしい。病人は在宅です』

と謂つたのは、有名な話である。

また平和會議の當時伊太利の國賓として、旅行してゐたとき伊太利の外相で、平和會議の委員であつたソンニーノ男が、フユーメの町が、伊太利領たるべき理由を、ひつこく論じて同町には伊太利人が澤山居ることを、第一の根據とした。これに答へて、ウイルソンは笑ひ乍ら。

『アイ・アム・ソーリ・ザット・ウイ・キャンナット・キヴ・ユー・ニユーヨーク・バロン』

といつた。『紐育がさし上げられなくて、お氣の毒です』の一句は、冗談のうちに伊太利の論法を仕止める機智があつた。蓋し、伊太利人が澤山居るところは、皆伊太利領だとの論法から言へば、紐育のごときは、第一に伊太利領とならなければ、ならぬからである。

彼は、闘志滿幅の人であつた。彼は、自分の信ずる處の爲めには、如何なる者を敵としても戰つた。彼の一生の成功は、皆この闘志のお蔭であり、最後に彼の上院との大喧嘩も、この闘志が累したのである。しかし、何人も、彼を目して、怯懦であるとは、言はなかつた。それは、彼の傳記を讀む人は、彼の生涯が、戰闘の記錄であることを發見する。そして彼は、最後には、あの不治の大病と戰ひ乍ら死んでいつた。

たゞ彼の大なる缺點と目すべきことは、彼が、群雄を駕御す

るといふ點に缺けてゐたことである。これは史上の偉人に共通する缺點である。たゞ、或人はその弱點を暴露せずして終り、ある人はこれを暴露する。ウイルソン氏も、巴里の平和會議に出席しなかつたならば、この缺點は世間に出ずに、濟んだに相違ない。不幸にして、彼は、平和會議のときに、この缺點に累せられて、あのやうな苦境に陥り、しかも、健忘なる世間は、國際聯盟の論爭のみを記憶して、その以前の、七年間のウイルソン氏の内政上の比類なき功績を、看過してゐる。歴代大統領中、彼程、上下兩院を巧に操縦したる政治家は一人もなかつた。たゞ、最後に彼が、對獨平和條約で失敗したのは、あまりの鬪志と、この自分の能力に頼りすぎる缺點とのためであつた。

五

ウイルソン氏の、政治思想を略記すると、彼は、人道主義者で、唯物史觀の社會主義に反對した。彼は、自由主義者で、個性の完全に發展し得べき社會の實現をもつて、その究局の目標とした。彼は、デモクラシーの信者で、あらゆる意味における特權に反對した。彼は、國家の生命は底（ボトム）より來り、上（トップ）より來らず、と高唱して、平民の價値を高調した。これ等の、抽象的思想の結果として、彼が提唱し、且つ實現に努力したる具體的政治思想は、

政治責任論であつた。個性を認むる彼は、個人の責任を高調し、一轉して、デモクラシー内に於ける各個人の社會に對する責任を力說した。その思想が、彼の百般の施設に現はれてゐるが、就中、その顯著なるは、

大統領中心論である。

彼は、デモクラシーは統率者を要し、統率者は國家の公僕として、全國民に對する責任者であるとの思想から、當時の米國政治が、三權分立の思想に累せられて、責任の中心を缺ぐことに、米國政治の百弊の發することを、發見した。これは、彼の大學在學中に到達したる政治思想であつて、彼の一生は、この思想を中心として、卷舒してゐる。彼は、米國の政治的中心は大統領ならざるべからず、大統領は、國民に對する第一の責任者として米國の政治を綜攬すべきものである、と爲した。そして當時米國に盛行した、上下兩院の委員會制度を攻撃してこれ米國政界腐敗の基因であるとなした。

これは、彼が、夢にも大統領になるなどゝは、考へてゐなかつた壯年學徒として發表した政治學說であつた。しかるに、運命の奇縁は、彼を、米國の大統領となし、この政治思想を、實

際に、適用せしめたのである。彼は、國民の輿論を指導し、また輿論に指導せられつゝ、米國の政權を大統領の掌中に確保した。茲において、米國大統領の地位は、全世界に於て、最有力なる政治機關と化し、米國の內政外交、悉く、その中心的統制を發見するやうになつた。彼の、內政的功績を仔細に研究する人は、彼の成功の偶然ならざるを知るであらふ。蓋し、初代大統領華盛頓以來、彼程、多くの難問題を上下兩院をして通過せしめた大統領は無いのである。

彼の政治思想として、今一つ、記憶すべきものは、彼の世界平和の思想に對する貢献である。世界平和の思想は決して、彼の獨創ではない。ヒューゴー・グローシアスありカントあり、一々枚擧に暇がない。しかし、これを、實際的國際政治の上に具體的に實行せんとしたるものは、彼に初る。しかも、それは、露帝の平和會議のごとき、皮肉なる政略に出發せずして、眞率なる政治的哲學に胚胎してゐる。國際聯盟は、いまだ、大にその羽翼を張るに至らずと雖、百年の後には、世界は必ず、ウイルソンの遠見を謳歌するの日が來るに相違ない。ことに、彼の國際平和提唱の演說は、平和思想に關する不朽の文獻として、後世の史上に貽るであらふ。

彼の政治思想の外に、彼の文學觀、彼の歷史觀、彼の教育思想の三者は、彼を研究するものゝ、見逃すべからざる點である。今日は、岐路に入る故、これを論じない。

六

最後に、自分は、簡單に、彼の事業を論じて見たい。

彼の政治上における、第一の功績は、實際政治に理想主義を注入したることである。

實際政治の墮落といふことは、凡ての國、凡ての時代を通ずる、民人共通の苦惱である。たゞ、時あつて天才この間に現れ政界一洗の英雄的事業を試みる。英國はピットの石心鐵腸によつて、ウオールポール以來の腐敗政治を一新し、我國は維新志士殉難の血によつて、幕末溷濁の空氣を一掃してゐる。ウイルソンも亦　當時金權全盛の米國政界に驅はれ、理想は到底、政界に行ふことを得ずと失望したる國民をして、朝暾に向ふが如き希望を抱かしめた。彼が、大統領の廣居に立つて、宣傳したるその理想主義の大音聲は、如何に擧世億兆の心魂に徹したか。さらには、彼が、戰時米國の大統領として、全世界に向つて叫んだる、人類解放、自由擁護の獅子吼が、如何に、萬天下の道念を刺戟したか。政治は俗事、到底匡救すべからずと絶望したる全世界の民衆に、炬火のごとき目標を高置して、文運進化の大勇猛心を、奮ひ起さしめたる當時の光景は、今も尚ほ、我々の心胸に生々しい筈である。彼の、就任の演說、彼のリンカーン追悼演說、彼の十四ケ條の宣明演說、彼の對獨宣戰布告演說、彼の歐洲遊說中の演說、ことに休戰後第一の基督降誕祭

の日に出征米國軍隊に向つてなしたる演説、また、彼の國際聯盟演説、等のごときは、後世の政治史上に、殘るべき不磨の文献である。その文詞の莊重高雅にして、思想の昌明雄大なる、かの古しへのペリクリスと雖、三舍を彼に避けざるを得ざるべく、この一事をもつてしても、彼の史上における位置は確立してゐる。

第二に、彼の功績は、世界平和の思想を、國際政治の實際事業と化したことである。國際聯盟の成立は、世界文化史上の一大事業であつて、その誕生に貢献したる彼の名は、永久に人類感謝の目標として殘るに違ひない。

第三に、彼は、人道主義、自由主義、及び、デモクラシーの思想を、世界に汎布したるのみならず、これを、米國の實際政治に實行してゐる。彼の、關税改革、通貨法案の創立、パナマ運河問題の解決、勞働問題の改善、婦人參政權の確立、禁酒法案の成立、等比々として皆然りである。その內政的事功の饒多なる點において、歷代米國大統領中、果して、誰が彼の右に出るものがあらうか。彼がリンカーン以來の名大統領と言はれるのは、その來るところ所以があるゝである。

第四に　彼によつて、新米國の鍛冶が出來た。

華盛頓は、米國を生んだ。リンカーンは、十三州割據の米國を打つて一丸とし、米國民と稱する國家思想を統一した。而して、ウイルソンは、この米國民を、更らに一步を進めて、世界の一國としての新米國として鍛冶した。茲に初めて、米國は、完成したのである。米國が將來世界文化史上に爲すべき貢献はこの新しき鍛錬の內から發生して來るに相違ない。

第五に、彼は、これ等政治家としての功績の外に、學者として、教育家として、夥多の事績を殘してゐる。その著書中、『議院政治論』のごときは、永く米國政治學中の文献として存すべく、彼の『分離と統一』と稱する小冊子は、米國歷史論中の白眉として、後世に珍重せらるべく、ミアー・リテレチュアーのごとき小品文は、高朗なる隨筆として、推賞せられるであらふ。

また、彼が、プリンストン大學總長として爲したる、米國大學の民本化と、米國教育の人間化との事業は、教育をうくる凡ての米國民の、感謝のうちに生きてゆくであらふ。

七

さらば、往け、貴き戰士よ。六十七年の卿の受難は、人類共有の財貨として、世界民衆の胸底に秘藏せられるであらふ。そして、生前卿が宣揚したるごとく、『野より、丘より、森の小影より、靜かに寄する人類の吐息きが、拒きがたきデモクラシーの大風と化する日』、やがて、人類世界に廻り來る刹那には、卿の名は。いま一度、古文書のうちより取出されて、輝ける望みの主として、卿の愛したる清き貧しき人々に渴仰せらるゝであらふ。(一九二四・二・八)

英國のソヴエツト承認と其波紋

蘆田均

一

一月に入つて以來レーニンが逝き、英國の勞働黨內閣がソヴエツト政府を正式に承認した。この二つの出來事の間には何の因果關係もない、然し久しく健康を害して政務から離れてゐたレーニンの命數が數へられてゐた如く、英國の勞働黨が政權を握つて以來早晩ソヴエツトが承認されることゝ期待されてゐた。期待されてゐ乍らも、これ等の報道は新しく世界の耳目を聳動せしめる材料であり、双つ乍らロシヤの內政外交に、そして延いて、國際政局の上に大波紋を起させる出來事であつた。

一月廿一日モスコウの郊外ゴリキー村に星落ちて名實共に共產黨ロシヤの大統帥たるレーニンが此世から消えて行つた。勞農執權の確立は最早何人の覬覦をも許さないと傲語し乍らも年若いソヴエツト政府の基礎は、昨年以來外間に暴露せられた幹部內訌の後をうけて黨員の動搖も靜まらない此際、共產黨の長老にして內外に信望の高いレーニンを失つたことは戰慄すべき打擊であつたに違ない。ルイコフを後任としてソヴエツトの首長に推戴せん謀議の最中にもモスコー幹部の心中には政府統一の將來について暗い影が映らざるを得なかつたであらう。此刹那に於ける英國の承認は百萬の援兵を得たよりも彼等の勇氣を作振したことゝ想像される。二月二日、ソヴエツト大會に於て外務次官リトヴイーノフが英國承認の報道を披露した後に滿場一致で通過した決議は彼等が胸に溢れる喜と將來に對する新しい希望とを示すものである。この決議は英國の承認を以て英國勞働政府の歷史的第一着步なりと云ひ、更に『現時國際關係が常に各國勞働者を脅威してゐた際、英國政府今回の措置は特に顯著なる意義を有するものである。吾人は全力を盡して兩國民並に全世界の經濟的及政治的發展の爲めに凡ての懸案を解決し、

經濟關係の進展に努力すべきことを聲明する、而して本大會は英國民に對し兄弟として握手をする』と云つてゐる。

二

勞農政府承認の問題は一九一七年の十月革命以來世界政治家の心頭を去來した難問であつた。歐洲大戰の勝敗いづれとも決着を見ない眞唯中に、即時平和の題目を掲げて起つたロシア過激派が政府を乘取つたことは英、佛、伊、米、さては隔絕した東洋の日支兩國に取つても痛切に利害を感ずる大問題であつた。殊にそれが親獨的傾向を帶びた政策を執ると聽いて英佛等の政治家は期せずして反ソヴエツトの政策に一致した。『東方戰場立直し』の爲めに、將又危險思想隔離の爲めに當時聯合國が案出した對策は第一次に於て反過激派政府の援助（デニキン、コルチヤツク應援）であり第二次に於ては赤色ロシア包圍の計畫であつた。然しこれ等の政策が何等有利なる展開を見ない中に一九一八年末に獨逸は和を乞ひ巴里の講和會議開かれて聯合國が東方戰場に兵力を維持する必要が消滅し、僅に有名無實の封鎖政策を繼續して一九一九年も暮れて了つた。

此間に開かれた巴里の平和會議に於てロシア問題に關する討議は毫も纏つた結末に到達しなかつた。英國は會議以前よりロシア問題の解決に想到し、聯合國の二三に對して來るべき講和會議にロシアに存在する數多の政府――勞農政府及び反過激派の諸勢力を招請してロシア問題を討議すべきことを提議したが主として佛國の反對に逢つて之を果さず、其後一九一九年の一月には再び同樣の提案を試みて所謂プリンキポ會議召集の考案となつたが、勞農政府以外の諸政府（デニキン、コルチヤツク）が擧げて會商に反對したためプリンキポの會合は遂に水に流された。

一九一九年の末葉以來所謂ロシア包圍の綱は漸く弛廢の徵候を示し、同年十二月には英國勞働黨の代議士オグレヂー（近く英國政府の正式代表者としてモスコーに派遣せられる人）はコーペンハーゲンに於てソヴエツトの代表者リトヴイーノフと非公式に交渉を開始した。それ許りではない、英國議會の開院式で朗讀せられたキングス、スピーチには『露國との平和を樹立し、進んで經濟關係を開始することを要す、ロシアが其協力を拒む間は世界の繁榮は恢復すること能はざるべし』とあつた。英國の政策は爾來漸を逐うてソヴエツト承認の方向に進んだものである。而して之に對して常に反ソヴエツトの空氣を支持したものは佛蘭西であつた。

三

英國が斯の如くソヴエツトとの親交恢復を急ぐ理由は第一に獨露の結合と印度寶庫の安全を懸念し、第二には歐洲大陸の安定による貿易政策の打算よりし、更に英國民の先天的傾向たる自由精神に發源するものである。反之佛蘭西が焦慮するところは獨逸勢力に拮抗するロシア政府を擁立して戰前の勢力均衡政策に歸らうとする點にある。而してレーニン政府がブレストリトウスク條約を以て獨逸と單獨に講和した事實はフランス人の頭腦に拭ふ可らざる印象を與へた、ロシアは叛逆者なり脫走兵なりとの憤怒はソヴエツトの外債破棄、私有權否認の政策と共に對露債權國の巨頭たるフランスの反感を一層高調したことは自然の勢である。

一九二〇年二月英國勞働黨の領袖は過激派に對する武力干涉に反對し、戰爭を終止すれば、ソヴエツトの施政は漸次緩和さるるに相違ない、聯合國は武力を以てモスコー政府を倒すことに失敗したから、平和の交涉に依つて其危險を除く外はない』と主張した。當時サウスポートに開かれた勞働黨大會の翌日デーリー・ニユースは「善良な英國市民の多くは干涉に反對である。これが昨日の投票の眞意である」と書いた。自由黨のアスキスも亦二月十一日のペイスレーの演說で『四圍の狀況も國民の感情も共に戰爭繼續を必要とする程の力はない、宜しく速にロシアと貿易關係を復活し其周圍の關稅障壁を撤退せよ』と叫んだ。

斯くの如き英國一部の思想は在野黨の策略や政黨の御都合主義から割出されたものではなく　アングロ・サクソンの先天的傾向から迸り出たものである。凡そ一國の人民は任意に其政府を撰擇する自由をもつてゐる、假令善政主義の政府であつても之を他人より强制すべきものでないとの根本の政治思想は對露政策にも反映して內政干涉の嫌ある政策を强く排斥した。其上に英國人固有の實際的性質は、既成事實に對して迅速に適應する彈力性を具へ感情を混へずして、冷靜に事象の本點を凝視するの理智に富んでゐる。故に、外交問題を議するに當り屢々人道博愛の大義を振翳すけれども、其一隻眼は終始理利の抱合點を逸脫しない。

四

一九二〇年二月倫敦に開かれた聯合國の最高會議はソヴエツトとの交通開始に一步を進めたものであつた。其決定は(一)ロシアの邊境諸國をして自由にソヴエツトと平和を結ばしめるこ

と。(二)ソヴエツトが其テロリズムを止めない限り之と正式の外交關係を再開しない、尤も通商關係は可成く速に復舊することに努めよといふのであつた。この決定に基き同年五月廿七日ロシヤの代表者クラツシンは倫敦に到着し六月一日から聯合國委員と交渉を始めたが、クラツシンは會議の問題を商業取引のみに限ることに異議を唱へ、又舊債務の承認に就ては平和會議に於てのみ之を議すべきものであると主張した。かくて双方の委員は七、八兩月に亘つて押問答を重ねたが折柄ロシヤと波蘭との開戰の爲めに談判一時中止となり、佛、伊 日の諸國は會議より脱退した。

然し英國勞働黨は失業救濟の法策としてもロシアとの通商再開を必要であると云ひ、自由黨はロシヤの市場が獨逸の獨占に歸することを危惧して同様に通商開始に贊成の態度を示した。この交渉は幾多の曲折を經て一九二一年三月漸く通商取極、宣傳禁止の二大項目を主眼とする協定に到達したのであるが、之の爲めに英露兩國の間には英國實業家の期待したような大規模の貿易を行ふことは事實不可能であつた。これは主としてロシアの疲弊と經濟組織の破壞とに原因するものであつて、ロイド・ジョージが同年十月に聲明した如く「ロシアとの通商開始は英國人の一部の期待を裏切ることゝなつた。」

然しロシア側も亦諸外國政府と一日も早く常軌の國交を恢復することを切望したのは隱れなき事實である。一九二一年十月外交委員チチエリンは英米佛及び日本に對し長文の無線電信を送り或種の條件を以てロシアに對する列國の債務を承認するから速に國交恢復の問題を協議したいと申出した。この提案に促されて翌年一月カンヌに集つた聯合國の政治家は條約を尊重、私有權確保、宣傳禁止の條件の下にロシアと會商し其政府を承認することを決議しこゝに同年四月を期して歐洲の財政經濟復興の爲めにヂエノア會議を開催することになつた。

ソヴエツト政府の代表者はこの會議に於て列國の正式承認を得ることを主眼とし又ロシアの經濟復興の爲めに資金の融通を得んことを希望し。反之佛白英の諸國は先以てロシアより私有財産の返還、舊債務の承認等の保證を取付けた後に政府の承認を討議せんことを提議しヂエノア會議は遂に何等纏るところなくして散會した。海牙會議はヂエノアの延長と見るべきものであつたが、歐洲諸國はこれによつて双方主張の懸隔の益々大なることを知り得るに止つた。

五

前述の如く列國がロシアの承認を躊躇した主たる原因はソヴ

エツトの政府が少數寡頭政治であつて、武力專制とテロリズムによつて國民を制御し、一面外債を破棄し、私有財産を沒收する等、根本に於て從來の歐洲自由思潮と社會組織の觀念を異にするといふ點であつた。同時に又現在のソヴエツト政府が遠からずして覆沒せらるゝであらうとの期待も列國を逡巡せしめた一つの理由であつたに相違ない。然るに海牙會議以來一年有半ソヴエツトの政治的基礎は益々固く、他面その新經濟政策は共産社會革命の實現を暫く斷念して資本主義の存在を國内に認めた形となり、革命過渡期のテロリズムも亦漸く影を潜める姿となつた。而も英佛伊諸國がロシヤを必要とすることは決して痛切の度を減じた譯ではない。

波羅的海より高加索に亘りドヴイナ河より太平洋に擴がる一億數千萬の一團は政治的にも經濟的にも之を輕視することを得ない許りでなく、ロシヤを除外して歐洲の經濟復興を企て又は之を計算に入れずして所謂歐洲の均衡政策を説くのは無意味である。況んやロシヤの孤立は政治的にも精神的にも西歐洲に對する脅威であり、殊に英國の如く其殖民地の重要なる一部分が背腹相接する國に於てはロシアに對する傳統的畏怖心が深く浸潤してゐることは怪しむを須ゐない處である。

聯合諸國が斯の如くロシアを疎外してゐる間に獨逸は地の利に依つてロシアに經濟勢力を扶殖する許りでなく、ロシアに對する列國のオストラシズムは益々ロシアを驅つて獨逸の懷に逼込ましめる結果となり、露獨接近といふ恐るべき一大合縱が出現せんとする形勢は西歐羅巴の政治家をしてロシア問題の解決に益々焦慮せしめるようになつた。

ロシアも亦列國との國交恢復を切實に希望した。それは單に貿易とか、通商とかの物質的要求の滿足に便なるが爲め許りでなく、國内人心の安全の爲めにも其孤立の寂寞から脱却することを必要としたのである。この邊の微妙な心理はソヴエツト政府が常に多大の犧牲を拂つても外國の承認を得んことに努め、最近には世界に於ける反社會主義の頭目である伊太利のフアシスチーに對してさへもムツソリーニの伊露接近論以來勞農機關紙の論調が、急に一變し、又英國がロシアを承認したとの報道を上下歡呼して迎へた狀況に見ても略疑を容れない。

六

英國政府はロイド・ジョージよりボールドイウンに至る迄ソヴエツトに對して敵意を持つてはゐなかつた。唯トーリー、ホイツグの政治家に取つては昨日迄眞向に振かざした國際信義、私有權尊重なる主義を一擲して俄にモスコー政府に兩手を差出

すことが何となく面はゆかつたのである。然るに英國勞働黨は夙にロシアの正式承認を主張し年々の大會に於てもこれを外交策の一綱要として主張して來た。

現在總理兼外相たるラムゼー・マクドーナルド君は昨年公にした『勞働黨の外交政策』なる冊子に於てかういふことを述べてゐる。

ロシア問題には外交關係といふ政治問題と外國貿易といふ經濟問題とが含まれてゐる。政治問題としては勞働黨政府は即時にソヴエット政府を承認する。ロシアの革命は專制と抑壓と流血の殘痕をとゞめてゐることは事實であるがこれが爲めに外國政府がソヴエットを敵視すべき理由を見ない。若し反動革命が起つたとしても矢張り同樣の慘事が起つたに相違ない。諸外國が特にロシアに反感を抱いたのは其革命の主導者が或階級であり、之が爲めに他の階級が犧牲に供せられた事實並に其革命の目的が氣に喰はなかつた爲めである。

英國政府は從來誤つた政治的影響を受けて個人の利益を尊重しなかつた爲めに漸く一九二三年の八月になつて實業家をモスコーに派遣し直接交渉の途に當らしめる如き方法に出た。勞働黨内閣が成立すれば即刻モスコー政府と協議して通商を開始し英國の輸出を獎勵する方針である。勞働黨内閣がソヴエットを承認するといふことは決して英國の勞働運動がソヴエットの運動と合致するといふ意味ではない。外交關係は組合關係を成立せしめるものではない、單に公然の交渉機關を設けるといふ迄のことである。然し從來ソヴエット政府の態度は諸外國政府をして單に貿易委員を交換する程度に止めしめることを余儀なくせしめた。第三インターナショナルは世界の社會共產革命を目的とし、ソヴエットの使命は外國に於て赤化宣傳に從事したからである。勞働黨政府は其實際的見地より現實世相に直面しモスコー政府の存在を承認する。然しロシア代表者の詭計、妄舉を承認することは出來ない、彼等は外交使命の特權を享受すると同時に其義務を痛感しなければならぬ。ロシアは歐洲協調の一員である。政治的にも經濟的にも之を除外することは不可能である。

この思想に發足して勞働黨は其内閣を組織すると間もなく二月一日附を以て正式にソヴエット政府を承認する旨の公文を送つた。この通牒は第一段に於て英國がソヴエットを舊ロシア政府の繼承者として認め、第二段に於て革命前に於ける兩國間の條約を自働的に復活することを述べ、更に兩國間に懸案として殘れる債權債務を決濟すること並に互に宣傳を謹むことを以て恒久の友好關係樹立に欠く可らざるものとし、可成速に全權を

有する代理大使を交換して豫備協定を定めようといふことを申入れたものである。

　ロンドン・タイムスはこの通牒を解釋して、ロシアは正式の承認を得たがソヴエツトは今後諸懸案解決の義務を負ふてゐるのであるから、この承認は紙上の承認である。從つて問題は依然懸案の解決といふことに殘されてゐると評した。然しチエノア會議以來の經驗は、國際信義と私有權承認の問題を眞正面に振かざしてロシアと折衝しても其解決は容易でないことを示してゐる。ロシアも列强も茲に至つて全く行詰のどん底に低徊してゐた、最近歐洲の一二の國が利權の許與其他の名義を以てこの暗礁を避けようと努力した如きも實は窮余の窮策であつた。

　ラムゼー・マクドーナルドは先づソヴエツトを認めて後、懸案の解決を第二段の問題として取扱つた。之が爲めに彼は毫も國際信義の問題を輕視し又は英國人の財産權を尊重しないといふ意思ではない。單に局面展開の捷徑として此方法を執つたものである。共産主義政府たるの故を以て之を認めないことが政治的錯誤であると信じたるが故に彼は潔くソヴエツトに承認を與へた。かくすることに依つてロシアの政治家は必ず年來固執した利己主義の政策を放棄することを見越したものである。それは單純なるサイコロジカルソランダーではない、寧ろマクドーナルド君の堂々たるステーツマンツプを示したものである。政治は理に非ずして勢であるとの要諦を充分に會得した彼にして初めてテクニツクやロジツクを超越した大膽さが生きて行く。ソヴエツト若し區々たる法理論を以て之に答へるならばチエリンはフエヤー、プレーを解せざる政治家として世の非難を甘受しなければなるまい。

七

　翻つて惟ふ、英國政府のロシア承認は如何なる波紋を起すであらうか。素より將來のロシアの政治並に國際政局に對する影響を直ちに豫想することは不可能である。然し差當り眼前に投ぜられた事象に就ても二三重要な波動を認めざるを得ない。茲には先づロシアの內政上に及ぼす影響に就て考察しよう。

　昨年の秋季以來ロシア共産黨の內部に於ける意見の衝突が次第に外間に漏れるようになつたことは蔽ふ可らざる事實である。現に昨年十二月二十八日トロツキーはプラウダに寄書して『共産黨內の內訌は今に初まつたことでなく一九一七年の十月革命以前にも大論争があり、翌年の露獨講和當時にもブハーリン一派の左派は獨逸との戰爭繼續を主張してレーニンを倒さうとしたことがあつた。今日共産黨內の官僚主義が人望を失つた

のは當然のことであつて、之を批評する者を分裂派呼はりするなどとは沙汰の限である。若し黨の統制に重大な危機が迫つてゐるとすれば、それは官僚主義の幹部が負ふべき責任である」と述べてゐる。從來共產黨の政治は、極端な中央集權であつた。この堅固なる統一主義によつて革命を擁護するが唯一の方法であると考へられてゐた。レーニンはこの目的の爲めにソヴエツト及共產黨の要職を自己の腹心は與へて今日のソヴエツトを磐石の基礎の上に据えた。

然しこの制度は必然的に機關內部の新陳代謝を妨げ役員撰擧を空文に爲せしめ、幹部以外の智勇辯力の士をして幹部の施設に反抗氣勢を募らしめる結果となつた。この空氣に對抗してカーメネフ、スターリン、ジノヴイエフ等は幹部派を擁護し、トロツキー、サプローノフ、クレスチンキー等は幹部派を攻擊する急先鋒となつた。後一派を通例共產黨左派と稱してゐるが茲に云ふ左派とは從來の用語と其內容を異にするものである。最近の左派は專ら撰擧の自由、討論の自由を主張して幹部派以外の分子の擡頭を希望し主として共產黨內の青年を後援としてゐる。又現に行詰つた新經濟政策の展開策として彼等は「ネツプ」の擴張を主張し、現狀維持に固執する幹部派に對抗した。この兩派の爭は一時幹部の勝利に歸した爲めトロツキーは病を名として南露に去つた。恰もその際レーニンが死んだ、それはソヴエツトの執權以來最も重大なる共產黨の危機であつた。於是二月初に開かれたソヴエツト大會は一部不平分子の分裂はあつたにしても大體に於て期せずしてソヴエツトの結束團結を促したものゝ如くルイコフを人民委員會議長に押立てゝトロツキーも國防委員の職に止ることになつた。今又英國の正式承認を得たのであるからソヴエツトの政策は一層右傾することは疑を容れないことゝ思はれる。

然し問題はそれのみに止らない、ロシア共產黨の內部にはクラッシン一派の經濟派に對抗して純正共產革命の實行を主張する左傾派があり第三インターナショナルの本部を策源地としてゐる。この一派はロシアを共產的產業組織のまゝに維持して、資本主義の諸國と鬪ふことを主張し、レーニン以下の國交恢復政策及び新經濟政策を以て資本主義への降伏なりと罵倒するものである。從來ソヴエツト政府の施設は屢々この一派に屬するブハーリン等の反對の爲めに挫折した例に乏しくない。今回英國がソヴエツトを承認したことは純正共產黨の反對の氣勢を挫きソヴエツト現政府の信望を國內に高めることに多大の貢獻をしたことは想像に難くない。換言すれば英國政府の承認は現在のソヴエツト幹部の地位を鞏固にし、又將來その政策の右傾的

傾向を助長するに與つて力あるものと判斷せられる。

唯然し、プロレタリヤ執權の六年を過ぎモスコー政府の基礎稍確立すると共に共産黨の意氣も自ら沈滯して來た。ソヴエツトが有利な地位を占めると共に生活上の安定を贏ち得たが半面に於て黨員は共産主義に對する信念を失ひ黨内の結束に弛緩を生じたことは蔽へない。それは疑もなくソヴエツトの將來に横はる一大危機である。レーニンの如き大統帥者を失つた後外國との關係が益々順境に入るに從つてロシア國内の政治的統制に龜裂を生じるような虞はないか。これはレーニンの死亡と英國の正式承認とがソヴエツトに與へた暗い影の一である。

八

ソヴエツト政府の承認は素より英國が第一に先鞭をつけたものではない。獨逸は一九一八年のブレスト・リトウスク條約により、波蘭は一九二〇年のリガ條約により、其他波斯トルコ、波蘭、波羅的諸國は各々修交條約によつてソヴエツトと正規の國交關係にあるものである。然し獨逸は現在の歐洲協調に於て繼子扱をうけて居り爾余の諸國は未だ第一等國たる地位を認められて居ないものである、從つて今回英國の承認によつてロシアは漸く歐洲協調の待合室に入れられた形になつた。佛蘭西、西班牙、白耳義等が之に倣ふようになつて初めてロシアのムージックは昔の椅子を恢復し得ることになる。

伊太利はヂエノア會議以來既にロシア承認の決心を固めてゐた。伊太利がロシアに對して有する債權や私有財産は極めて少額であつたから、債務承認、條約尊重の主張は實益なき主義上の問題に過ぎなかつた。英國にして骰子を投げた以上伊太利が之に後れざらむとするのは余りに當然の徑路である。然し一九二二年の春伊太利とロシアとの間に一旦調印された條約はソヴエツト大會で批准を拒まれた歴史のある上に最近漸く調印の瀨戸際迄漕付けた新條約案も二月上旬に入つて又もやソヴエツトから調印延期を申込まれたとの報道がある。功を急ぐものゝ焦燥を諷するに足る先例である。

佛蘭西、白耳義は如何。この二國は歐洲大陸の均衡に最も重大の利害を感ずる國であり、ロシアに對して最大の債權を有する國の隨一である。若し自分の推測にして誤たなければ兩國は當分英露間に行はれる懸案解決の交渉を注視して其結果に依つて態度を決する心算であらう。換言すればソヴエツトは如何にして沒收した英國人の私有財産を返還するであらうか、戰前債務を如何に解決するであらうか、赤化宣傳をどの程度迄抑制するであらうか、此等の點に關するソヴエツトの態度を見屆けた

上、若し獨逸も英國に滿足を與へなければ佛白兩國は急速にソヴエットを承認する考はもつてゐない。唯玆に注意すべきことはロシアが沒收財産に對する現實有効なる補償として或種の利權を與へ又は債務の利拂の代りに特殊の利益を提供する如き形式に依つて西歐羅巴諸國と案外速に實際的解決案（例へば通商開始といふ如き）に到達し得るかも知れないといふ一事である何となれば歐洲の國際政局は此等の金錢問題以外に一層主要なる考量を要する問題を控へてゐるからである。いづれにしても英國政府の決心を動機として西歐資本家の利權熱は一層昂騰し來るべく今暫くロシアは各種企業家の暗闘の舞台と化することゝ想像される。

獨り米國は英國政府の決定に依つて毫も從來の對露政策を變更する必要なきことを聲明してゐる。米國人の赤化宣傳に對する反感は可なり深刻である許りでなく其外交政策も屢々道義的觀念に依つて左右せられる事實に想倒すれば、アメリカ人よりロシアの專制とテロリズムに對する惡感を一掃して米國をしてソヴエットを承認せしめることは相當に時日を要するであらう米國は物質的に毫もロシアを必要としない、こゝにも米國の地理的區域の地位を感ぜざるを得ない。

之を要するにソヴエットの國際的地位は英國の承認によつて更に堅くなつたこと丈けは疑ない。世界の各國は相率ゐて早晩英吉利の例に倣ふことであらう。やがて國際聯盟の一員としてロシアを迎へる時期も遠からざる將來に來ることゝ思はれる。けれども、英國の承認の如何に拘らずロシアの經濟組織が少くも一九一四年當時の極度に改善せられ延いて歐洲の經濟復興の端緒を啓す日は前途甚だ遠い。過去十ケ年間に根本的に破壞されたロシアの經濟組織と其中心活力をなしたる秀俊の技術者とは到底短時日に之を補充し得るものではない。從つて世界經濟安定の見地より見たロシア問題の整調は今後二十年三十年を待つて初めて所期の目的を達し得るものであつて一二年の間に之が實現を求めんとする如きは所詮實際に迂なる空想に過ない。

ロシアの前途は誠に多事多難である。プロレタリアより生れかはつた若きロシアは如何にしてこの難關を切拔け得るであらうか、中央集權の力はあつても民主思想の缺けてゐるソヴエット制度によりロシアの政治的統一を維持することは今後尚多大の試鍊を經なければならない。財政、經濟上の壓迫は依然として政治家の頭腦を惱ましてゐる問題である。然し暫く政治、經濟乃至國際政局等の問題を離れて靜觀すれば一億數千萬のスラーヴ人が今迄うけた精神的封鎖の羈を解かれ其豐な天分を以て文藝に美術に自由に吾等と交歡に入り得る時機の近づいたことは何としても喜ばしい事實であるに相違ない。やがて氷が解けて春の來る頃には今年は殊に晴々しい復活祭の鐘の音を聽くことが出來るであらうか。（一九二四・二・七）

ルイコフの片鱗

露國革命の生んだ巨人レニン、資本家からは悪魔のやうに恐れられ、勞農民からは神様のやうに敬はれたレニンも、遂に死の魔力には勝てなかつた。『俺は共産主義者でないがレニンのためなら何時でも死ぬ』とは勞農露國でよく聞かれた言葉だ、それほど人氣を背負つて立つてゐる彼であつた。だから誰がよく此聲望あるレニンの後繼者たり得るであらうかとは久しい間の解けない謎であつた。

　レニンは一九二一年の十二月頃から手足が痲痺した、翌年の三月には半身不隨に加ふるに手足の不自由を感ずるやうになり、五月となつてゴーリキー村に轉地療養して最近死ぬまで其所にゐた、此間一年有半と云ふもの彼は事實上執政の實務から離れてゐた。そして勞農露國最高の政治を彼に代行したものはルイコフとカメネーフとスターリンの三人であつた。レニンの死後に於ける組織は恐らくこの三頭政治であらうと一般に豫想されてゐたが、二月二日に開かれた聯邦中央執行委員會はこの豫想を裏切つてルイコフを全露人民委員會議長に選任してゐる。

　然らば此重任を引受けたルイコフは如何なる人であらうか。彼とレニンの政策との間には如何云ふ關係があらうか。

　ルイコフは一八八一年に東部露西亞サラトフの農家に生れた、本名をアレキセイ、イワノウイッチと呼び、革命運動家としてはチエイカ若くはグラソフといふ名を使つた。中學時代から既に秘密結社に入りカザン大學在學中にも捕縛されたことがある。それから彼は商館の番子をしたり通辯をしたりした、後には機關手となつた。かくて一九〇九年から一九一七年まで彼は專ら外國に亡命してゐる同志と露國内部との連絡の任に當つた。そしてアルハンゲリスク、西伯利へは數回流され三度も脱走した。千九百二年の社會民主黨分裂以來はボルセヴイキに屬し千九百五年には、レニン、クラッシン、ボグダノフ、ボストロオスキー等と共に五人の共産黨中央執行委員に選ばれた。

　一九一七年の革命後彼はペテログラードに歸つてケレンスキー政府の倒壊、ボルセヴイキの政權獲得に努力した。之より先き彼は既にレニン唯一のアッシスタントとして影の形に添ふが如くに隨つてゐた。で、彼はボルセヴイキ執權と同時に最初の内務委員長となり、次いで一九一九年最高經濟會議々長となり更に昨年人民委員・議長代理に選舉せられて今日に及んだのである。

　彼は其性、質實、眞面目で、演説家ではないが實務的の政治家だ。すべてが極端に走ら

ず其態度と云ひユーモアと云ひ彼程レニンに似てゐるものはないと云はれる人だ。中肉中背で、其眼は親切さうな青い色をして、そして金色のヴアンダイク式の髭を貯へ、話し振りは勞農新人の役人タイプそのまゝだ。

曾て伯林に行つて大手術を受けて歸る途中、彼の汽車が雪のため立往生をした。病後間もないルイコフだが、誰よりも眞先きに降りて機關車の通路を開けやうとて雪かきをした。そして汽車が動き出す段となり、汽車に歸るには雪の堤防を下りねばならなかつた。そこでルイコフは彼のオバーコートを尻の下敷にして鞄を頭の上に翳し乍らまるで小學校の子供みたいに大きな聲で笑ひ興じて滑つて行つた。眞面目で謙直な彼の半面にかうした快活な人間味のあるユーモラスな性質を彼はもつてゐる。

彼の最も得意とする場面は經濟だ。此點に於て彼はレニンの絶對的信任を得てゐた。だから勞農露國今日の新經濟政策は彼ルイコフの經濟政策だとも云へやう。そして彼がレニンの後を襲ふところに重大な意義がある。由來、最高經濟委員會なるものは純粹に復興又は建設の目的を以て創設されたものだ。即ち革命成就後に於ける新な經濟生活の神經中樞たる使命をもつものだ。政治的權力的の機關でなく經濟的平和的のさういふ機關に長であつた彼が、衆望を負ふて勞農露國の新統領として立つといふ事實は現在の勞農國が如何なる運命に向つて進展しつゝあるかといふことを最も雄辯に語るものだ。

一月の廿七日、モスコウで盛大に擧行されたレニン葬式のバンナーの一つに『イリッチは死んだ、だがレニン主義は遺つてゐる』といふのがあつた、全く其通りだ。レニン主義は現勞農露國にとりての標語であり生命である。そしてレニン主義の忠實なる信徒としてルイコフ以上の人はあり得ない。

果たして外電に依ると、彼は人民委員會議長として就任第一番の聲明をなして曰く、「余の任命に依り共產黨從來の政策は少しも變更しない……東方民族に對しては、同志レニンの政策を繼承し民族自決主義を原則とし、ペルシヤ、アフガニスタン、支那等の諸國との關係を鞏固にしやう。内政問題は經濟復興に最大の注意を拂ひたいのと、農村の物資運轉を活潑にし農業經濟の振興に依り產業を確立するであらうと。」

勞農露國は彼を新統領として宛ら氷上のトロイカ同樣、何處までも毅然に、レニズムの轍路を進んで行くであらう。

勞働者民主主義の問題、レニンズムに對する修正問題も、今や、レニンの死と共に一蹴され、それらの討議を許すといふ事は却てルイコフを中心とする勞農幹部の地位の確乎たると勞農執權のスタビリチイとを示す證左となるに過ぎないものとなつた。(鶴平名誉太郎)

私の貧困時代



貧乏の經驗

菊池寛

私が貧乏であつたのは、學生時代である。高等學校時代にも、金がないために、寄宿舍の便所に落ちていた獨逸語の辭書を拾ひ上げて、乾してから古本屋へ賣つたりしたが、それは一高式の冗談半分であつた。が京都大學へ行つてからは、學資が足りないので困つた。其處には、もう冗談がなかつた。私が、五日ばかり一文なしで困つてゐた時だつた。京都大學內のテニスコートの中を通りかゝると、五錢の白銅が落ちてゐた。雨に打たれたと見えて、少し赤くなつてゐる。私は、一旦行きすぎてから、それが氣になつて引き返した。其處まで私は覺えてゐる。何だか、それを拾ひ取つて使つたやうな氣がするのである。が、私の羞恥心が、使つた方の記憶を努めて消し去つたと見えて、今では使つたか使はないか覺えてゐないと云つても、疚しくないほど記憶が薄れてゐる。むろん、私は學校を出てからも貧乏であつた。結婚をするとき、歸國するのに三十圓しか持つてゐなかつた。木綿の着物とお祝ひに送られた高貴の羽織が一枚あつたゞけである。新婚の妻は、私の見すぼらしい姿を憫んだと見え、

歸京の途次名古屋で金縁の眼鏡を買つてくれた。十一圓八十錢であつた。が、學生時代からかうした貧乏時代にかけて、一番情ないことは、冬外套のないことだつた。夏外套を着ないとか、絹物を着ないとかは、趣味の問題だと云へる。が、冬外套を着ないのは、趣味でない。電車の中を見廻して、自分一人丈外套を持つてゐないことを知ると、恥しさと寒むさとで一層身がちゞまる。この頃、僕の家へ來る貧乏を以て任ずる人を見ても、みんな外套丈は持つてゐるやうだ。どうも、一般に外套も普及したと見え、電車の中で外套を着て居ないやうな人は、この頃一寸見當らない。かうした貧乏な學生時代、日中道を歩いてゐて、巡査に怪しまれて誰何されたり、香具師の大學生に間違はれたりした話もあるが、他日にゆづる。とにかく、貧乏といふものは、記憶になつてしまつてもあまり愉快なものでない。

貧窮の思出

吉田絃二郎

私が生まれたころは父が酒屋に失敗して間もなくであつたから、私は生まれながらいやといふほど貧乏といふものを知らなければならなかつた。母が私を懐に抱いて二人の姉たちの手を引いて、母の里へ金だの米だのを貰ひに行つたさうだが、そのころは母を一番可愛がつた祖父も祖母もすでに世にゐなかつたので、母が田の中で三人の子を連れたまゝ途方に暮れてゐたといふやうな話は、母が亡くなるまでくりかへしてゐた。小學校に通ふやうになつても授業料が拂へないで、居殘りを喰はされたことを記憶してゐる。高等の二年からみんな中學に行つたが、私は酒屋に奉公に出すとか、お寺にやるとか、職人になすとか言つて、無論中學にやつて貰ふだけの金はなかつたので、高等四年まで村の學校に通はなければならなかつた。高等を出た春或る建築所の製圖の見習に出なければならなかつた。そこで貯へた少々の金を持つてミツションスクールに出かけて行つたこ

ともあつた。

東京に來てからも月々家から貰ふ學資はずゐぶん少なかつたので、それも中途で送つて來なくなつたので半分苦學のやうなことをやらなければならなかつた。實際少かの金でも故郷から貰ふのは血が出るやうな金であることを知つてゐたので、貧乏な父や母に對して金を貰ふたんびにはんたうに心苦しかつた。

郊外のお寺の裏に住んでゐたところのことである。夏になつて蚊帳がないので、風呂敷や新聞紙で顏だけを防いで寢なければならぬこともあつた。しかしそのころは今より物價も安かつたので、十二三圓もあれば、どうかかうか一ケ月暮らして行くことができた。無論自炊であつたが、六疊の部屋が二圓九十錢くらゐで借りられた。六疊と三疊の長屋が三圓くらゐも出せば借りられるといふ時代であつた。たゞ一斤の味噌を二週間も三週間もの副食物にしなければならないこともあつたが、鰹節一本と味噌さへあれば食物に不自由は感じなかつた。一番寂しかつたのはほとんど書物といふものを買ふ金がないことであつた。

そのころは一般に學生が貧乏であつたやうだ。私と一緒に田中といふ男と、原といふ男が故郷から上京して來たが、みんな國の貧乏士族の子であつた。雨が降れば水が洩る靴より外には穿き物は持たなかつた。原と田中は築地の或る屋根裏見たいな部屋を借りて十錢?の辨當飯を食つて研數と國民英學會に通つてゐた。天井から壁から一面に西郷だの、ネルソンだの、ビスマルクだのゝ寫眞版が貼りつけられてあつた。貧乏ではあつたがみんな覇氣滿々といつた形で、肩を怒かしては町を歩いてゐた。田中が神田の下宿から麻布の方へ引つ越す時、私はたゞ一枚の銀貨を引つ越し料にやつたことがあつた。また私が引つ越しをした時も田中が私に銀貨を一枚くれた。そのころの銀貨一枚は吾々にとつてはかなりの金高であつた。田中は士官學校にはいつて麻布の三聯隊に勤めてゐたが、千葉で自殺をした。私がかけつけて行つた時、紙に鉛筆で「まことにすまぬ」と書いた。ほんとうにいゝ男であつたが。……原はアメリカに渡つたか、その後どうなつたか知らぬ。原も田中も詩人であつた。

初めて原稿紙に字を書いて生活費を貰つたのは農商務省の外國の漁港の飜譯を友人の世話でさせてもらつた時であつた。三月ばかり稼いで幾らかの學費を貰つたことがあつたが、非常にうれしかつた。尚一つは日露戰爭ころであつたが神田の何とかいふ會社へ、學校の休みに建築の圖を引きに行つた時、幾らか金を貰つたことを記憶してゐる。工業學校で機械學を三年ばかりやつたことがあるので、暑中休暇には職工監督兼設計者といふ格で、鐵橋などを架けに出かけたこともあつた。

早稻田を出た翌年、仕事がないので、或る中學に紹介狀を持つて出かけて行つたが、病後のからだを寒い冬の日、三十分ばかりも學生控室に待たされた揚句、何とかいふ幹事が出て來て『檢定も持たないで中學教師をするなんて不心得だ』と言つてたゞそれだけのお小言でおしまひになつたこともあつた。私は中學を出てゐなかつたので、檢定は貰へなかつたのであつた。

私の處女作『磯こよみ』を持つて歩いたのは約一年餘であつた。どこでも斷はられたが、島村抱月先生が早稻田文學に出して下すつた。その時は踊り上るくらゐうれしかつた。

雨の降る日、「タゴールの哲學と文藝」の原稿を持つて神樂坂の或る本屋へOといふ男をたづねて行つたが、かなり不愉快な目に逢つて歸つて來たこともあつた。そのころは今日よりも初めての原稿を世に出すといふことはずつと困難であつた。車代も持たなかつたので雨の中を濡れながら、侮辱せられた原稿を抱へて本郷まで歸つて行つた。

六合雜誌の編輯は四年半ばかりやつたが、ずゐぶん忙しくあつた。と同時に原稿生活の不安と苦しみはほんとうはあのころから始まつたのであつた。

救ひのない貧乏

神近市子

私共は矢張り大正九年から十年にかけて世帶をもち立ての頃が一番苦しかつたやうに思ひます。

二人とも半ば病人で、床はしきつぱなし、用事は代る／＼起きてすると云つた有樣で、仕事どころの騷ぎではないのに費用は相當にかゝるといふのですい分苦みしました。

友人の好意で友人が中澁谷に借りて置いたマッチ箱のやうな家を讓つて貰ひ、下宿からそこに移つては來たものゝ世帶道具をとゝのへるやうな餘分の金はなし、茶碗二つと鍋一つだけ新しくは買つてあとは私がもつてゐた古道具だの友人達に貰ひ集めたものだので間に合はせました。

服裝なども、S——は着たきりです。私の方はそれでも夏冬一通りのものは揃つてゐたのですが、それも大部分は質屋にあづけてある始末です。今でもよく覺へてゐるのは十二月になつてどこからか卅圓ばかり思ひがけぬ金が入つて來た時のことです。S——はそれでヤツと毛絲のズボンを買つて來て、暖い暖いと云つて子供のやうによろこんでゐました。

春になつて私の惡阻もよほどよく、同時にある雜誌社の飜譯をするやうになつたので、私共の貧乏も大分緩和されて來ました。それでも夏になつて今年四つの長女が生れた時、私共は一文なしでゐました。前夜身體の調子が變つたのでとり敢へず二三の不用のものを出して質屋に行つて貰つたのですが、その日は質屋が休みとあつて用が足りません。翌朝、S——は產婆を迎へに行く途中先づ質屋に寄らなくてはならないと云ふ騷ぎです。

仕事の事はそれからもズーツと可なり出たのですが、私共の貧乏は相變ずでした。夏をS——の田舍で暮らし、尙もう少し滯在することになつて、東京の家を整理して人にあづける爲め秋になつて一旦上京して來ました。その時も夏以來留守宅に寄起して貰つた久板卯之助氏に、留守居の人が來るまでのおかず代を上げることができなくて、古雜誌の類を賣つて五十錢かで佃煮などを仕入れて置いて行つたことを覺へてゐます。

田舍に行く時もさうでしたが、田舍から歸つても貧乏は相變らずでした。十二月のはじめに上京して、久板氏も一緒に中澁谷から世田ケ谷の庭に池などある閑靜な家にうつりました。その當座は私共は何もかも自分達の用事は自分達で足しました。朝の御飯を焚くのは早起のS——の仕事でした。けたゝましく鳴く鷄の聲などに眼をさますと、もう朝日が一面に椽側の障子に映り、物置の方では二人の男達の樂しげな話聲が聞へました。よく陽の當る物置の敷居の上に並んで腰を下ろし、釜下の火で暖をとつてゐる人達ののんきな姿を想像し乍らなほウラウ〳〵と無精に私は御飯ができ上つたと呼ばれる迄床の中にゐましたそして私が起き出して臺所で食事の仕度をするあいだに男達は座敷の掃除をすまし、ヤツと座はるやうになつた子供をあやし乍ら茶など入れてゐました。食事のあとは二人は田圃を越へて繪を描きに出かけるし、私は子供と犬とを相手に日向ぼつこをしたり、時には暖かい田圃道をぶら〳〵繪のできるのを見に出かけたりしました。

今でもその頃の靜かな生活のことを考へてゐると、新しく甘い追憶の淚がにじみ出ます。貧乏を云へば死んだ久板氏のことを思ひます。何時でも懷中には二圓か三圓の小使しかもつては

ゐなかつたやうな久板氏、夜歸つて來る時十錢か廿錢の土産をポケットから出した久板氏――私共は久板氏の「そんな貧しい土産をどんなに深い心でよろこんでは分け合つて食べたでせう！　貧しくはあつたが心に希望をもち、あせることも慌てることもなく靜かに慰め合つて暮してゐたその頃の生活を、遠さかれば遠ざかるほどなつかしく思ひ出ます。

けれど、そのうちに貧乏の辛さを身にしみて知る日が來ました。大晦日近くなつて伊豆方面を旅行して來るといつて出かけて行つた久板氏が、正月の半ば頃天城山の猫越峠を越しかけて凍死したといふ事件が生じました。

私共はこの時も一文なしでゐました。丁度飜譯の仕事が來てゐたので、それを雜誌社にとゞけて金を受取つて來る積でＳ――が出かけて行つたのですが、仕事を頼んだ人に逢へなくて金が受取れないことになりました。往く時の電車賃しかもたずに出かけたＳ――は困つて四十分を丸の內まで歩き、ある新聞社につとめてゐる親しい人に電車賃に五十錢借り出して歸りかけました。そしてその歸途に買つた夕刊の記事で、久板氏の死を知りました。

久板氏が伊豆方面に行くことになつたその間の消息を始めて聞かされ、新聞の人相書をＳ――に示されて久板氏の舊い友人達は遽かにさわぎ出しました。そして二三の人が假埋葬をしてある伊豆の湯ケ島村に急行することになりました。生活の愉樂を全く知らず、自分の信念に終始してしかもその終は決して幸福とは云へなかつた久板氏の最後の希望と想念とを近くシミジミと聞いてゐた私共は、どんなにＳ――がその一行に加はりうることを望んだでせう。けれど旅費が間に合はない爲め、その希望も放棄しなくてはなりませんでした。この事を私共はどんなにか遺憾に思ひました。――その當時は實際私共は可なりの間陰鬱にみぢめな氣持で暮しました。そして貧乏の悲しみをツクヾヾと味はひました。

友人達の貧乏話には猛烈なものがあります。親子三人二日も食事をしなかつたと云ふ人があれば、ふかし芋で生命だけはつないだが、瓦斯がたまつて苦しかつたといふ人があります。人間は食事をしなくても悲鳴はあげなかつたが、飼つてある猫に啼き立てられて困つたと話す人があります。

ある人は又小さな妹を親知らずでよそにやつた時の悲しさを云ひます。又ある人は產後四日目に身の丈けほど煉瓦を背負つて高いビルデイングの足場を上つて行く母親の姿を覺へてゐると云ひます。しかもその人はその母親を早く失つてゐます。

私共はそんな貧乏は知りません。知らないことを名譽とは考

へません•が全くその種の貧乏はしりません。社會惡に根ざす、むき出しの、人間の生存そのものを脅かしてゐるその種の眞劍なつきつめた貧乏は知りません。

私共の貧乏は、一面に濫費の惡習慣を脱することができないところから生ずる貧乏です。中間の階級にゐて、外には放縱あくなく浪費底ない階級の生活を間近く見、内には禁欲精進の生活への信仰を失つて、私共は自然欲望を刺戟され生活を模倣するやうになつてゐます。それで私共にとつて貧乏が苦しいのはそれが饑餓や凍死を持ち來る爲めではなく、それが見得を奪ひ體裁を取り去り、私共が自分達の生活を粉飾してゐるイリュウジョンを壞して了ふからです。從つて私共のこの種の貧乏にはてオイソ眞理がなく救ひがなく、それはどこ迄でも私共につきまとふ性質をもつてゐます。

私共はまだ一度も特に工面の好いと云ふ時期に出逢つたことがないといふのも事實ですが、又一面にこの浪費の習慣を捨て切らない爲め月の半ば以上は今日でもロクな小遣も持たずに暮します。その故かこの頃は貧乏も身について了つて、不自由といふことも忘れがちに暮してゐます。貧乏を忘れて暮してゐる氣持には、有福がもつ自由な何物にも捕はれぬ平氣さがあります。これが私がこの稿を書いてゐる理由で、さうでゝもなければ貧困の時代を脱した有福な人々ばかりが書かれる筈のこんな原稿は、未來永劫私などは書く機會を持つ筈はないのです。

貧乏首尾無し

若山牧水

小生の貧困時代は首尾を持つてゐない。だからいつからいつまでそれを定める由もない。そんな狀態であるために殆んどまたそれに對する感覺といふものをも失つて居る觀がある。從つてオイソレとその記憶を持ち出して來ることが困難である。止むなくこれを細君にたづね相談して見た。

流石に彼女にはあの時はあゝであつた、あそこでは斯うであ

つたといふ相當に生々しい感傷がある樣である。然しそれとても尋ねられたから思ひ出した程度のもので、要するに亭主同樣この永續的貧乏に對しては極めてノンキであるらしい。

早稻田の學校を出たのはたしか廿四歲であつた。學校にゐる間も後半期は郷里からの送金が途絶えがちであつたので半分自ら稼いで過してゐた。學校を出ると程なく京橋區の或る新聞社に勤めた。月給は廿五圓であつた。社命で止むなく大嫌ひの洋服を月賦で作つたが、ネクタイを買ふ錢がなく、それ拔きで着て出てゐたところ――さうだ、靴をば永代靜雄君のを借りて穿いたのだつた――社の古老田村江東氏が見兼ねて自分のお古を持つて來て結んで與れた。居ること約半年、社内に動搖があつて七人ほど打ち揃うて其處を出た。そしてまた間もなく同區内の他の新聞社に出ることになつた。ところが前のと違つてどうもその社内の空氣が面白くなく、前社同樣廿五圓の月給をば二個月分か貰つたが出社して事務をとつたのは僅々五六日であつた。

それから暫く浪人してゐてやがて短歌中心の文藝雜誌『創作』を京橋の東雲堂から發刊する事になつた。編輯を續けること四五ケ月、漸く雜誌の基礎も定まる樣になると月並で煩雜なその仕事がイヤになり、それをば他の友人に讓つておいて所謂「放浪の旅」に出た。三四年間の豫定で、各地の歌人を訪ねながら日本全國を廻つて來ようといふのであつた。

先づ甲州に入り、次いで信州に廻つたところ、運わるく小諸町で病氣に罹つた。そして其處の或るお醫者の二階に二ケ月ほども厄介になつてゐた。出立早々病氣に罹つた事が、いかにも出鼻を挫かれた氣持で、折角企てた永旅もまたイヤになつて東京へ引返して來、當時月島の端に長屋住居をしてゐた佐藤緑葉君の家に身を寄せた。初冬の寒い頃であつた。或る日彼の細君から「若山さん、二圓あるとお羽織が出來ますね」と云つて嘆かれた事を不圖いま思ひ出した。その前後であつたのだらう、北原白秋君の古羽織を借りたが借り流しにしたかの事も續いて思ひ出されて來た。

それから再び『創作』の編輯をやる事になり、飯田河岸の、砲兵工廠の眞向ひに當る三階建の古印刷所の三階の一室を間借して住む事になつた。あのどろ〳〵に濁つた古濠の上に傾斜した古家屋の三階の事とて二三人も集つて坐りつ立ちつすればゆらつくといふ實に危險千萬たものであつたが――實際小生が其處を立退くと直ぐその家は壞されてしまつた――その時はさうした變なところが妙に自分の氣持に合つてゐたのだ。その前後が最も小生の酒に淫してゐた頃で、金十錢あれば十錢、五錢あ

れば五錢を酒に代へ飲んでゐた。イヤ、それだけでなく帽子が酒になり、帯までもそれに變つた。

さうしてその頃小生の詠んでゐた歌は次の樣なものである。

正宗の一合壜のかはゆさは珠にかも似む飲まで居るべし

わが部屋にわれの居ること木の枝に魚の棲むよりうらさびしけれ

誰にもあれ人見まほしき心ならむ今日もふらふら街出であるく

其處此處の友は今しも何をして何想ふならむわれ早やも寢む

わだつみの底に青石揺るゝよりさびしからずやわれの寢覺は

明けがたの床に寢ざめてわれと身の呼吸することのいかにさびしも

寢ざむればうすく眼に見ゆわがいのちの終らむとする際の明るさ

夜深く湊に流るゝ落し水川くことなかれ寢ざむるなかれ

先づ啼くは濁る湊邊の鶺鴒ほの青き朝を寢ざめてあれば

かなしくも命の暗さきはまらばみづから死なむ砒素をわが持つ

青海のひゞくに似たるなつかしさわが眼の前の砒素にあつまる

あゝした落ちつかぬ朝夕を送つてゐながら斯くいふ小綺麗な歌ばかりを詠んでゐたといふことが今から見るといかにも滑稽の感を誘ふのである。

サテ、斯うして順々に書いてゐたのでは結局一種の自叙傳を書くことになつてゆく。間を端折つて結婚後の事を少し書き添へておきたい。すべて貧乏史の續きならぬはないが、多少その間に色彩の變化がある樣であるからである。

我等が結婚したのは小生の廿八歳の時であつた。當時彼女は新宿の女郎屋の間に在る或る酒屋の二階を借りて、其處で遊女たちの着物を縫つて身を立てゝゐたので取りあへず其處に同棲することになつた。謂はゞ亭主が女房の許に寄食した形であつた。小生は小生でその頃休刊してゐた以前からの雜誌『創作』を自分の手で復活經營したく頻りと金を集めることに腐心してゐたのであつた。折も折、其處へ小生の郷里から父危篤の電報が來て九州の日向まで歸らねばならぬことになつた。病氣は中風で次第に永引き、終には其儘眠つてしまつた。かたぐ〵で約一年ばかりも郷里に留り、大正二年六月上京して小石川の大塚

雑司町にさゝやかな一戸を構へた。その時はもう長男が生れてゐた。

其處で或る金主がついていよ／＼其の雑誌の再興する事になつた。なるにはなつたがなか／＼思ふ様に成績が擧らず、小生の受くる報酬なども一向に定つてゐなかつた。それに妙に小生の家には來客が多かつた。毎日五人か十人、而かも一向にこちらの事にはお察しのつかぬ人たちだつた。小生自身もまた前の頽廢期間の惰力から逃れ得ずに、相手さへあれば二日でも三日でも酒に浸つて醒め　かつた。從つて雑誌の方の仕事も進まず金主との間も面白くない、間に在つて唯だもう困るのは細君ばかりであつた。初めに云つた彼女の記憶といふのは概ねこの大塚雑司町時代に係つてゐるのも無理ならぬ話である。幸にツイ近所に同じ様に貧しい友、が住んでゐた。中の一人の若い畫工などは一圓でも二圓でも金が手に入れば必ず先づその一割を以て鹽を買ひ、五分を以て胡麻を買ひ、殘り八割五分の金で米を買つて行く。米と胡麻鹽とさへあれば人間決して死なゝいといふものがこの人の云分であつた。そしてさう云ひながら我等の間には明朝の米今夜の米の貸借が行はれてゐたのである。斯うした貧しい同志が相隣つて住んでゐた事はお互ひにとつて少なからぬ力であらねばならなかつた。

細君はたうとう病氣になつた。つてを求めて雑司ケ谷に在る或る慈善病院へ入れたが次第に永引き、やがて醫師のすゝめで相州三浦半島に轉地した。その頃流行に小生自身も疲れてゐたのでいつそ一緒に行くがよからうと一家して移つて行つた。此處に來ると細君は非常に安らかな氣持になつたらしい。代つて苦しんだは小生である。轉地と共に雑誌も休刊したので一定の收入といふものから全然離なれてしまつた。せつせと書く原稿料とても知れたもので、歌の選料亦た然りであつた。歌人仲間が短冊會を起して金を拵へ、細君の藥代として送つてよこして呉れたもその時であつた。が、此處でもまた一人貧しい友達であつた。が、此處でもまた一人の貧しい友達が出來た。これは寧ろ我等のあとを追つて移つて來た様な人たちで、同じく親子三人連で、そして同じく細君は病んでゐた。この夫婦の貧乏は我等よりもつとひどかつた。「オイ、これをこれだけ借りてゆくよ」と云つて主人公自身、我等の借りてる部屋の隅の炭箱から木炭を一掴み抱へて行つた姿など、今でもまだ眼の前にある心地がある。

下浦を引上げたは大正五年の暮であつた。

そしてその後をなほ語るとすればそれは寧ろ日常生活の貧乏

といふより雑誌發行者として窮貧談になる。即ち多く印刷工場を相手としての苦闘史である。休刊してゐた『創作』をその年から自分自身の手でまた〳〵再興して今日まで續けて來てゐる道中の話となるのである。

然し、どうしたものか小生には實のところ貧乏といふものがさほどには苦にならない。よく〳〵の貧乏性に生れて來てゐるのか、その時〳〵ですぐ忘れてしまひ得る幸福な性質を持つてゐるのか、その場はとにかく、その前後などを考ふることに於て、さほどには苦にならない。もう歳も歳だし、子供も大きくなつたし、それに三界無宿の身で、今少し何とか考へねばならぬのだが、考へるつもりではゐるのだが、どうもまだ身にしみて來ない。おしまいまでこれで押してゆくのかも知れない。

（おしまひ）。

困つた時のこと

宮島資夫

こんな事を書けつて云はれるのは、昔は貧乏した事があるが今は金持になつてゐる人間か、それでなければ何か貧乏にイリユートジョンを持つてる人間なら知らない事、誰だつてしたいと思つてしたんでない貧乏の事なんか、餘り自慢にならない話であるのに、斯くの如き題に近い事だと、必ず御選定に預る毋は如何に彼がよく貧乏したかと云ふ事を、大變よく知つて居られるようで寧ろ光榮にも感じたくなつて來る。貧乏だつて色々に度合がある。いつか水守龜之助と、辻潤と三人で話をしてゐて藤森君の噂か何かゞ出て、あの人もあんな事を書くけれど、本當に貧乏したのか知ら、と云つた所が、――水守龜之助がやりや電車賃もない位の事があつたらしい、と説明すると、『でーんしやちんのない位、なーんだ』と辻潤は直ちに一蹴してしまつた。電車賃がない位が貧乏なら、と云ひ出すと、人間と云ふものは、病氣の事でも、怪我の事でも、おきに自分の方がどんな

に重かつたかと自慢したがる動物だから、矢張り、貧乏だつて餘計に貧乏した が好いのかも知れないのだ。が然し、僕のようにいつまでたつても、いつまでたつても、貧乏ばかりしてゐる人間は、どこの所が最も困つたのか、どこの所が樂だつたのか、こんな事を訊かれたつて殆んど挨拶に困つてしまふわけなのだ。

が然し、十七八の時分には、僕も相當に身體も丈夫でもあつたし、人生と云ふものに對しても色々な幻影を持つてゐたからどうせ生れて來た限りには、金を儲けるならうんと儲けてもみたい、貧乏するなら、九尺二間の裏長屋に飛び込んで、泰然として貧を味いたい、三日天下の三日乞食など〻云ふのも、決して惡いものぢやない。いや寧ろさう云ふ暮しがしてみたい、と考へた。二十そこ〳〵になつた時分に、日露戰役の株の暴落時代に質屋になつて、僅かばかり、成金の一歩を踏み出しかけた當時にも、今つから、こんなに金を儲けては大變だと云ふような氣になつて、慌て〻使つてしまつたのであつたが、それから後はその當時に考へた程樂に金の儲かる世の中でもなく、だん〳〵だん〳〵、困つて來て、どうにもかうにもならなくなつて來てしまつたのだ。水道部の人夫をしてゐた時分には、何しろ日給が三十五錢であるのに、月の中に三四日は休む爲に、晦日(みそか)になつて、手に入る金は、せい〳〵八圓位である。米だ、一圓に三升ぢかくまで上つた當時、八圓貰つても二斗四升であれば、日に五合以上は喰なければならない勞働をしてゐては、米だけがやつと買へる位な金錢では實際どうにもかうにもならなかつた。一緒に死にかけた女には先に死なれ、生きてるんだか、死んでゐるんだか自分でもわからない、道德もなければ希望もないし、問題さへもなくなつて、たゞ空氣を吸い、飯をくい、身體を動かしてゐる生活を餘儀なくする時になつて、貧乏は骨の髓までしみこんで來た。その後益々やりそこなつて、魚屋をしては失敗し、――と云つて損をするほどに資本があつたわけでもないが――何をやつてもやりそこない、とう〳〵遂に、夜店の古本屋になつてしまつたのだが、それも資本金があつたわけではないのだから、之こも雨か降つて店が出せなくなつてると、全く、一粒の米もなくなつてしまつたのだ。仕方がないから青い顏をして、漢方醫者の古い病院あとの貸室の一室で、游ぼんやりと座つてゐても、だん〳〵腹はへつて來る。一日位なら飯を喰はずに座つてゐられるが、二日目になると腹のへり方は猛烈になつて來る。どこへ行つても、米一合も貸してくれさうな奴もゐないのだから、すきつ腹をかゝへて、色々考へた揚句には、必ず宮田脩氏の所へ出かけて行つて、ロクでもない本

を買つて貰つて、金五十錢で米を一升、炭を五錢、野菜を五錢、醬油がいくらと買つて來ると、もう金がなくなるのだ。一日二日喰はずにゐた揚句は、五合位のめしは一ぺんでなくなつてしまふのだから、折角の五十錢も、朝の露のように果敢なく消えてしまふとまた腹は減つて來る。一日十錢づゝ拂ふ約にきめた間代も拂へなくなつて來て、とう／＼考へて考へた揚句、また宮田修氏のところへ出かけて行つて、門の中の、昔の伴部屋をどうか貸して、おやない、あすこに是非當分置いて下さい、と賴んだ事もあつた。昨日も宮田さんのお婆さんの告別式の受附をやつてゐると、目の前に、その伴部屋が、ちやんとある。何しろ床もなければ、明りもろく／＼射さない伴を入れとく部屋なのだ。隣に座つてゐる安成二郎と貧乏話をしてゐると、お互ひに貧乏に緣切れは出來ないらしく、彼れも貧乏の歌をよく作り無暗に貧乏したいような顏をしてるが、僕も遂に伴部屋で暮らさせて貰はうかと思つたほど、誠に貧乏に緣の深い事をつくづくと考へ、つく／＼と話し合つた。宮田さんのお婆さんの告別式に座りながら、目の前の伴部屋を眺めてると、改造から賴まれた「困つた時のこと」は、これを書かうと考へたので、これを書いたわけである。その當時、僕の日々の生活費、米がいくらいつて、石油がどの位でおかずが、いくら、合計あはせて、金六七圓の計算書を、宮田さんに提出して、伴部屋借用の件を願ひ出た。宮田さんの手許には、まだあの計算書が、保管されてあるといつも話してをられたが、簡易生活の見本が見たい人々はあの計算書を一見するのも好いと思ふ。が然し、さあ貧乏なんて云ふものは、飯も喰へなくなる程度まで進むと、こちらの料見はだん／＼闘々しくなつて來て、喰へなけりや―のたれ死をするまでだつて云ふ所までやつて來ると、世の中にはいものも、恐ろしいものも何にもなくなつて來て、大變愉快なような氣持になる事もある。おつかないと思へば、枯れ薄だつてこはいだらうし、こはくないと思へば大砲彈だつてこはくはなくなつて來る事が出來る人間だ。貧乏したつて最も困りなんかしやしなかつた、とでも云はなければ、常に繼續し、現在に到つてゐる、この貧乏生活が、益々恐ろしくなつて來るだらう。それだから、西出朝風が書いた。「半生の飢と戀」と云ふ歌集は、辻潤と二人で、頭を合せて讀みあつた愛讀の書物である。もう少し貧に徹したら、困つた時のことなんか、きつと書かなくなるだらうが、まだ人間が青臭い證據をこゝに提出してしまふまで〻ある。

貧乏物語

德田秋聲

――私の貧困時代――

貧乏の話などは誰も好んでするものもないし、又誰も好い感じをもつて聞きはしないであらうが、しかしながら私のやうに物心を覺える時分といふよりは寧ろ産れる時代が既(すで)に不幸であつたものに取つては、貧乏といふ語は純な生活氣分か、懐しい少年期の生活の總てゞあつて、しかも自分が直接貧乏世帶に面してゐる譯ではなく、寧ろ有福な家の子供たちよりは、實生活に觸れる機會が少かつた、くらゐだから、貧乏は貧乏なりに、少年としての物持なども損はれずに、比較的呑氣な暮しをといつてもいゝのだけれど、中學時代からはさすがに貧乏の惱みを直接經驗しない譯に行かなかつた。でも私は慈愛ふかい母と兄とに甘やかされて育つたから、やくざな驕慢兒として、何等の制肘を受けることなしに、幸か不幸か文藝なぞに耽ることが出きたかはりに、文學青年として又ひどい貧乏生活の渦中に飛込んでしまつた譯であつた。だから最初五六年――といつても別に富有になつたといふ譯ではなく、年と共に益々勞作の苦しみが増して行くのであるが、しかしまさかに家賃が幾月も滯るといふやうなことはなくなつたけれど、五六年前まではやつぱりさう云ふ極りのわるい生活がつゞいて、質屋の暖簾なども絶えず潜つてゐたのであつた。それらの長い貧乏生活の話をすれば際限もないことだが、貧乏のなかに育つたゞけに、生活にはまるで無成算であつた。そして其れでも何うにかやつて行けた獨身時代――は日本も今よりはづつと貧乏であつたし、生活程度も一體に低かつたから、貧乏といふものが、大抵の人には憾りではないまでもさう恥かしいことでもなかつた。勿論現在では社會組織の缺陷が明かになつて、各人の慾望と主張が熾烈になつて來たから、金持の方がむしろ肩をすぼめてゐるくらゐだが、一方また物質文明の發展と國民經濟の膨脹と共に、清貧なぞといふことは自慢にもならないし、清貧その物の體面を保持する

についても經濟觀念なしには生きられないのである。

封建時代からの持越しで、藝術は貧乏と離るべからざる因緣をもつてゐたのでもあつたし、文學者といふと誰れも相手にしてくれないくらゐ社會からは特殊あつかひにされてゐたものであつたが、今は作家が經濟的に非常に惠まれてゞもゐるかのやうに世間から思はれて、所得稅なども過分に取られ、青年の文學志願や、文學者との結婚なぞも父兄に危險視されなくなつた。

私の貧乏生活の一例をこゝに一つ二つ擧げると、私が風葉君に引張込まれて、紅葉先生の近所に三四人の共同生活をやつてゐた時分、その頃月々賄ひをしてくれてゐる先生の方への名々の食料支拂ひ――屋賃、石油代なぞも入つてゐたのであらう――が六圓内外であつて、私なぞはそれすら滯りがちで、先生もこぼしてゐたことがあつたが、こぼす方にも無理はないので先生は「讀賣新聞」から百圓の月給をもらつて、それで當時の文壇の第一人者としての玄關を張つてゐたのである。先生は生活には極くきちんとしたところのある人で、それで多勢の家族を養ひ、多少の貯蓄もされながら、無駄はなかつたにしても、相當體面も張つてゐたのであつた。私たちは煙草が吸へなくてみんなで穴錢なぞを集めて、その頃の三四錢のバイレートを一つ買つて、分けて渴を癒したことなぞもあつた。

それから家庭をもつて、餘程たつてからのことであつたが、毎年のことで、大晦日なぞは今から考へると、よくあんな事をして凌いで來たものだと可笑しくなるくらゐ、あわてゝ本屋へ駈けつけたり、田舍新聞をあさつたりしたものであつたが或る年京都から小説を賴まれて、書いて送つた、その稿料の來るのを、私は毎日待つてゐた。百圓くらゐのものだつたらうと思ふが、それがなくては大晦日の成算に大きい狂ひが生じてくるのであつたが、ある日その新聞の社長と懇意な無想庵氏がやつて來て、社長から電報が來て、立替へておいてくれろとのことだから、僕の方で何とかしようと言つてくれたのであつた。しかし氏の迷惑は知れきつたことだし、氏から立替へてもらふことは心苦しいことなので、それは斷つて本屋を運動して、やつといくらか息を吐いたなぞは、寧ろ好い方であつた。

貧乏なれて來た私は、貧乏生活の趣味をよく知つてゐる。今でも子供がなければ、むしろ懷かしい其の頃の生活の方に或る心安さを覺えるであらうと思つてゐる。

花嫁にこたへた當時の貧

岡本一平

僕の貧乏時代といふと美術學校の卒業期に結婚し、その結婚してから新聞社に勤め出すまで二年程の間が一番酷かつたらしい。

酷かつたらしいと人の事のようにいふのはその時代の僕の性分に所謂江戸つ子式の小才と小狡るいところと小利己主義といゝ加減なニヒリズムの捨鉢かあつて折角向つて來た貧乏を四つに組み止めまともにかゝると態度を執らなかつたからだ。

向つて來た貧乏をひらり／＼と體を更はした。體を更はされた貧乏は僕の後に立つ當時の花嫁に獅嚙みついた。花嫁はまとも以外に手を知らぬ女だから組んで充分に內懐に喰入られた。花嫁は食べたり食べなんだりする日の爲めに胃酸過多症で齒がもろけて仕舞つた。他にも原因があるがひどいひすてりにもなつた。その影響を可成り後まで受けた。

當時の苦しみを今も時々彼女から聽く事であるが、いくら聽いたとて貧乏を素通りさせたものには貧乏の思ひ出にはよりか寧ろ世間知らずの女が貧乏を引組んだ有樣をグロテスク彫刻か何ぞのように離れて眺められて——彼女をそうさした責任が自分に在るを認めるのは辛いがその辛さも時間を經ては居るし、今は割合によくしてやつてるからといふ差引勘定が胸にあるので、なつかしき頃合ひの懺悔に變る——愉快だ。相濟まぬ次第である。

「獨りでやりますから」とおやぢに廣告を吐き、ずん／＼勝手な嫁を貰つて赤坂青山に住み付いたが當時あてにする收入は帝劇の背景を描きに行く事だけだつた。一日働くと一圓五十錢になる。朝九時より夜十時までだ。それから徹夜すると確かに二圓貰へたように記憶する。

これが一と月あれば五十圓近くになり當時無名の畫家として

相應に暮らせるのだが帝劇の背景は從來の大道具の手の長谷川と洋畫派のこつちと併用されて居た。で、新劇の多い時は日雇の日數も殖へるが舊劇の多い時は長谷川に獨占される。今月は袖――舞臺左右に立て出す端物の背景――の塗換へだけだなぞといふ宣告を受ける時は一月に一日か二日で終ひになるので閉口した。

われ等の洋畫派が大勢がゝりで――中に今巴里で仕上げてる藤田嗣治も居た、近藤浩一路、田中良、なぞも居た――一枚の背景に甲論乙駁の藝術的（？）に手暇がかゝるのに引かへ、長谷川の背景先生は弟子一人位を使つて眠むそうな眼はして居るが日光陽明門でも、播州赤穗城の遠見でも、大河端の景でも立勝してさつさと一夜に仕上げて仕舞ふ。そして仕上げれば一枚二十五圓乃至五十圓になるなぞといふ話を聞かされ世の中に妙な金もうけの抜道がある事を始めて知つた。

小使に取つて貰ふ辨當が一本拾五錢だつたと思ふ。昔はまづ〱我慢して夕飯だけには壜正を一本つける。一本拾五錢だつたと思ふ。とてもあき足らなくてもう一本つける時はその分を日當から引いても今日の所得はなほなにがし殘ることを胸算用して果敢なく飲む。管督の先輩畫家をぬすんで物置の布團の山の蔭にもぐり込み夢地心になる。羽目一重隣は女優達の舞踏の練習室だ。華美な音樂に氣取つた足取りが入り亂れる。勝手にしろと捨鉢の氣持ちで一睡。頓て管督畫家が尺度の先で布團の山の隙を突いて歩るく。われ等は石垣の中の鰻のように突き出されのろりと働きに出る。

背景部の前がすぐ食堂の東洋軒のコック場になつてゐる。コツク頭がよく賣れ殘りの鮭のフライやアイスクリームを呉れた。繪の具でどろ〱になつてるブルーズを着て溝端にうづくまり並んでそれを食ふ。長谷川方がわれ等にどぶ鼠連をといふ名をつけた。

夏の午後三時頃にもなると恥も外分も無くどぶ鼠達はコック場の窓をひとりでに氣にするようになる。

月末に勘定を貰ふと一同揃つて日比谷の角のそば屋の樓上を占領する。親がゝりの同窓は取つたものを自分の小使にすればすむのであれこれと豪奢を極める。それが妻子の生活費になるわれ等も負けぬ氣を出して身を切るような豪奢を極める。鴨ぬき天ぷらぬきなぞを數々注文する。來月は芝居に飜譯ものがかゝるそうだからわれ等の手にかゝる背景も多からう。それで埋合せが出來ると心をなだめ乍ら。

一同窮して當興行のエハガキを描いて石版刷りにして賣店に賴んで賣つて貰らつた事がある。印刷が遅れがちで並べるのが

興行半を過ぎたり描いたものが妙に新らしい圖案風になつた。そして額とては當の彼者に仲間に肯切れぬ。殘品許り出來及び印刷屋に借が數百圓出來て仕舞つた。主任の和田英作氏に賴んで拂つて貰らつた。

右の仕末ゆゑ、みそかは毎月越しにくかつた

それでおめ〳〵親のところへ助けて貰ひに行つた。それも前の廣言の手前十圓だけ。その十圓を切出すにも、本論に入るに先立ち近頃わが畫の評判のよい事、近き將來に發表の兆がほの見ゆる事、現代の藝術に對するわが抱負、わが力量なぞをまことしやかに吹聽しておやぢの介殼の蓋をゆるめその際へさし當つて十圓と容易らしく持出した。これが毎月々々は實に苦しかつた。

それならばわが生活の方を引しめるかといふとそれは別ものだつた。うまいものを喰つてうまい酒を飲んで飽滿な氣持で居る事は所謂江戸子であつた自分に取つて眞な信仰生活だつた。女房、子の顏を見るよりこのしやれた飽滿な氣持ちに居れぬ事が罪惡のように思つた。

世の中がさびしくて堪へ切れぬ時は何とか何とかすかして家の有金を持出した。そして日本橋の花村に驅けつけた。その時代は鮟鱇のきも鍋とあはびの腸(わた)のふくら煮を肴に熱燗をひきつける事がわれを救ふ無上の手段だつた。

自分がそうする許りで無く見榮坊の自分は家へ訪ねて來る友人達に貧乏や不如意を見透される事は非常に辛かつた。で家人を纎維してあらゆる馳走の容態を取つてくらつた。

就中、わが實家の身内のものにこの弱味を見せる事は致命的にいやだつた。で家で何ともしようのない時は兎に角家人に金を算段させて、ふいと彼等を東京の歡樂場所へ誘ひ出した。

そして自分も飲んだ。貧乏が自分に體をかわされ自分の後の花嫁に獅嚙みついて行つたといふのはこの事をいふ。花嫁は簞笥の中も彼女の身體もすつかりまゐらして仕舞つた。

右の如くあつたが、今考へて見ても、彼女を犧牲にし、鮟鱇の肝と、あわびの腸で酒を飲んだ、あの當時の生活は是正されべきものとは思はれぬ。あれでなければ僕は破烈して居た。それ程物心ついてよりの因習の深い懷疑はこの四五年前までその觸爪を自分の髓の中から外づさなかつた。僕に若し過去に多少なりと仕事らしいものがあるとしたら、それは何が何やら判らなくつてやけ糞の力であれば廻つたその痕跡なのだ。近頃少しほつとした。

出獄後の世の中

堺利彦

貧困と搾取の復興

東京市の大部分が燒野原になつたといふ事は、もちろん獄中で聞いてゐた。然し市谷刑務所から裁判所と私の宅（麹町八丁目）とに行く道には、多少の破損があるだけで、燒けた處は一つもなかつた。從つて去年の暮、私が保釋で戻つて來た時、私は少しも『燒野原』の光景を知らなかつた。

其の新しい目に、この變りはてた東京の姿を突然見せて驚かしてやらうと云ふので、暮の三十日、改造社の上村君が自働車を持つて來て、まご〳〵してゐる私を其の上に引きずりあげ、一日中、燒け跡の見物をさせてくれた。それが私として『出獄後の世の中』の第一印象であつた。

然しそれは、燒け跡の東京には相違ないが、もう決して『燒野原』ではなかつた。バラックの東京、トタン屋根の東京であつた。『破滅』の感じよりも寧ろ『復興』の感じの方が强かつた。さすがに人間といふ奴はエライものだ。僅かのあいだに、よくもこれだけの『生存の努力』を成し遂げた、といふようなことが考へられた。

變化の起る時には、隨分意外な大變化が、急速の間に起るものだ。そして手のつけようもないと思はれて、其の大破壞と大動亂との跡が、存外早く、何とか片づいて行くものだ。生存の必要に應ずる努力は、直ちに駸々たる『復興の勢ひ』として現はれて來る。私は先づそんな感じで頭の中を一パイにしてゐた。

然し、其の駸々たる復興の勢ひを貫ぬいてゐる、現在の精神は何か。フランス革命後の復興には、現に所謂新しい炎々たるブルジョア精神が封建精神に代つて現はれてゐた。明治維新の復興も其の通りで、有らゆる舊弊舊習を一掃するといふ革命の精神が漲りわたつてゐた。『四民平等』などといふ痛快な標語が進軍の先頭に掲げられてゐた。所が、今度の復興はどうだ。そこに何の新らしい精神があるか。勿論、革命と震災火災とは違ふ。震災火災の復興に新精神を求めるのが無理なのだらう。けれども、人間が如何に受動的とは云へ、これだけの大變動を、これだけ急激に受けてゐながら、そこに何等の新しい精神を生みださないとは、餘りに不甲斐なさすぎるように思はれる。

尤も、よく觀察したら、矢張りそこに樣々の『新しい精神』の現はれがあるに相違ない。『反動精神』の現はれのみが顯著に人の目に映つてゐるけれども、餘りハッキリと見えない處に於て、新精神の種々の働きが生じてゐるのだらう。手つとり早い所で、普通選擧の機運なども、正にその働きの一つに相違ないと思はれた。私は獄中で獨り考へてゐた。この震災は必ず急速に普選の機運を促進するだらうと。そして其の豫想だけは確かに適中してゐた。

けれども、今この『駸々たる復興の勢ひ』の間に、例へば『四民平等』と言つたような、明白な、大膽な、新しい指導精神のないことは確かである。『バラック』の東京は復興しつゝある。『トタン屋根の東京』は復興しつゝある。遠からずして『本建築の東京』も復興するだらう。『永久』の東京も復興するだらう。然しそれと同時に、『貧困の東京』も復興するだらう、『搾取の東京』も復興するだらう。否、それらが一層增大し激化するだらう。新しい東京は依然として

古い東京になるより外はない。『貧富懸隔の東京』『階級對立の東京』が一層惡い形に於いて再現するより外はない。何といふ情けない事だ

貧民窟の大掃除、都會の村落化

私はこのついでにヰリアム・モリスの名著『ニュース、フロム、ノーホエア』の中の一段を思ひだす。此の本は人の善く知る通り、未來の新しい自由社會の想像記であるが、其の中に『貧民窟の大掃除』『都會の村落化』といふ一段がある。私は今、手許に其の原書を持つてゐないので、曾て私のこしらへた抄譯本に依つて此の記事を作るのだが、たしか此の『貧民窟の大掃除』といふのは、貧乏町の住民を悉くロンドンの商業區域に引揚げさせておいて、其の不潔な矮小な悲慘な貧乏家屋を一切燒拂つてしまつたと云ふのであつた。そういふ意味で大都會の大部分が燒拂はれることは、何といふ痛快な事だらう。

モリスの本の中に出て來る或る老人は斯ういふ話をしてゐる。『昔はこの家の前から馬に乘つて、東に向つて一時間半ばかりダクを打たせても、まだ倫敦の市中を離れぬダダびろい市中であつたが、そしてその廣い市中の大部分が謂ゆる貧民窟で、其の貧民窟は罪もない男女の苦患の物干で、生みてはナブリ殺し、生みてはナブリ殺しの人間の芥棄場で、それを日常普通の生活として何とも思はぬほどの墮落を極めてゐたが』其の恐ろしい都會が今は少しも殘つてゐない。『只だ昔しの記憶を喚び起すのは、年々一度、五月に催される貧民窟大掃除の紀念祭で、其日には昔し貧民窟の中心であつた其の土地で、音樂やら、舞踏やら、面白い遊戲、樂しい會食、あらゆる歡樂が演じられる。そして奇麗な娘達が昔しの『變革の歌』を歌ふ事が習慣になつてゐるが、其の娘達は歌の意味など少しも分らないで、只だ面白そうにそれ

を歌つてゐる。『東京の燒跡の謂ゆる『藝術的バラック』のカフェーか何かで、氣障に青年共が女給相手にフザけたりしてるのとは、譯が違ふ。

モリスの詩的な想像に依れば、『都會の村落化』が斯ういふ風に說かれてゐる『昔し商工業の中心などゝ誇つてゐた處は、今では皆な消え失せてしまひましたよ。元來それらの都會は只だ賭博場であつたのですからな。』十九世紀の終りには、地方の村落は殆んど破壞されて、家は傾き、木は切れ、仕事は少なく、賃銀は下り、產物は悉く中央都會に吸收されて居たのですね。然るにそれがどうです、此あたりは殊に變化が速かつたのだが、革命の後、丁度野獸が餌を追ふように、人民は群を成して自由の村落に溢れこんだのです。ツマリ都會が村落を襲して侵入したのです。そして昔の世の侵入軍と同じように、其の新らしい周圍に感化されて、素朴な田舍人となつたのです。そして其の人々が多數の勢ひを以て更に都會人を感化したので、今では都會と田舍との差別が段々に少なくなつて居ます。』

モリスの美しい詩的空想を社會進化の實際として見るわけには勿論ゆかないけれども、將來の變化に對する物の考へ方は、このくらい大膽にあつて欲しいものだ。モリスは更に曰く『此の英國は、最初山林曠野の間に、封建の候伯が處々に城寨を築き立てゝ、其の城下に農工商が集まつてゐた。それが次には、不潔な大工場と賭博場との周圍に、哀れな貧乏人の群集する國となつた。そしてそれが今では、國内一圓の花園になつて、其あいだにあちこち人の住居があり、小屋があり、工場があり、到る處、皆な奇麗な、清潔な、居心地のいゝ場所となつて居るのです。』

こういふ事を考へあはせると、今や復興しつゝある東京の將來に對して、又だいぶん違つたまぼろしが浮かんで來る。

櫻の花に雪が降る

扨、現實に立返ると、こゝには清浦内閣が成立してゐる。そして政友會が分裂して、『護憲三派』の提携が現出してゐる。『寸進尺退』と云つたやうな、潮のさしひきの繰返しだと思へば、固より大して悲觀するにも當らず、さりとて何ほどの期待にも値しない。

然し、それにしても、大體の進歩は矢張り爭はれない。貴族とブルジョアとの生ぬるい爭ひが、兎にかく其の間に普選を近づかせつゝある。ブルジョア政黨の一部が他の一部と爭ふ結果は、可なりに小ブルジョアの特長を發揮させる事になる。從つて幾分の革命的氣燄が厭應なく擧つて來る。次いで勞働黨發生の機運が其の間に動いて來る。

これが若し日本の社會だけ獨立した發達をするのであつたら、當分の間、小ブルジョア政黨がプロレタリヤの要求を代表するといふ狀態を生ずるだらうが、世界の形勢は最早やそこに止まる事を許さない。兎にかくプロレタリヤの政黨が起らずには居られない事になるだらう。只その謂ゆるプロ政黨が、果して本當の勞働黨になるか、或は勞働黨と稱する、實質上の小ブルジョア黨になるかが、問題だ。

四月になつて雪のふる事がある。櫻の花が咲いてるのに、何といふおかしな事だと、不平を云つて見ても仕方がない。氣象上の必然として、屢々そういふ事實が生ずる。然し、そうした雪は早く解ける。そして雪は降りながら大して寒くはない。尤も、咲きかけた花や、延びかけた若芽が、其の雪の爲に一時甚だしい傷害を受ける事は隨分ある。それは十分覺悟して置くべきだ。

穩健著實な勞働黨

イギリスには勞働黨内閣が出來た。一度奴等にやらせて見ろ、そして味噌をつけさせてやるがいゝ。自由黨にはそう

いふ腹の底もあるだらう。然し勞働黨としては、其の自由黨の腹の底を知らない振りで平氣で乘りだすだけの、自信と勇氣とを持つてゐる。

イギリスの勞働黨が果して何處まで其の『社會主義的理想』を守り得るか、行ひ得るかは別問題として、兎にかく早速に勞農ロシヤを承認した手際は、有らゆる方面からの稱讚を博してゐる。そして日本すらも、ロシヤ承認に急がねばならぬと感じさしたらしい。

總てに於いて正面からイギリスに刃向ふ事の出來ない日本としては、勞働黨といふ者をそんなに惡い者だとは、まさかに云へない事になつて來た。イギリスのやうな『穩健着實』な勞働黨なら至極結構だと云ふより外はない事になつたらしく見える。

『一度奴等にやらせて見ろ』といふやうな時期が日本に來るのは、容易に考へられない事であるが、兎にかく勞働黨くらいなら作らせて見ろといふだけの時期は必ず、近い中に來るだらうかと思はれる。それにも『味噌をつけさせてやれ』若しくは『名義だけ與へてやれ』といふ策略はあるかも知れないが、日本の勞働階級もそんな他人の腹の底などは知らぬ振りで、平氣で乘りだす勇氣と自信とがあるだらう。

禿頭翁レーニン

レーニンがとう〳〵本統に死んだ。

彼は二回まで狙撃されて死ななかつた。その後、又、幾同となく電報で殺されても死ななかつた。然し今度はとうとう本統に死んだ。

彼は實に思きり働らいて死んだのである。働らけるだけ働らいて死んだのである。年齢から云へば、まだ十年やそこら大いに働らける筈だつたとも考へられるが、既にあれだけの激度を以て革命後數年間の働らきを續けた以上、自分としても恐らく遺憾はなかつたらう。

事業の成績から云つても、既にあれだけの遙かに豫期以上の事を成し遂げた以上、いつまで自分の手で遣りつゞけねばならぬとも考へなかつただらう。勿論、あの困難の續出してゐるロシヤの國情を思へば、自分としてもまだ大いに働らきたい事があつたに相違ないし、又周圍から見る時には、まだ〱彼れの手腕と學識と德望とに依頼したい事が多かつたに相違ない、けれども、彼が實際の政務から遠ざかつた後、既に少なからぬ年月を經過してゐる。彼れの退隱が幾多の不便を生じたであらうといふ事は容易に豫想し得られるが、さりとてそれが爲に勞農ロシヤの基礎に少しでも動搖を來したと見るべき事實はない。彼は確かに安んじて目を眠る事が出來ただらう。

尤も、退隱はしても、病人ではあつても、彼が苟しくも生存してゐる以上、猶ほ內訌を防ぎ、不和を鎭めるだけの力はある。けれども彼が死んだ以上、そこに必ず動搖が起つて來る。斯ういふ見方をする人もある。これに一理が無いでもない。然し我々は今現に、一面に於いてそれに類似した種々の宣傳的報道に接しながら、一面には勞農ロシヤが堂々として、リコフを內閣議長に任命し、イギリスの正式承認を獲得し、着々發達の健全を示してゐるのを見る。レーニンが居なくとも、英雄が無くても、偶像が無くても、この勞働者の大國家の在立に何等の支障のない事が明白に分つてゐる。それでこそレーニン生前の働らき振りが一層床しくなるのである。

私は今これを書きつゝ、私の室內にある彼れの肖像の三つ四つを眺めまわしてゐる。いづれを見ても英雄らしい風采がない。人を威壓するやうな態度がない。勿論、君子らしい所や神樣らしい所も全くない。彼は只だ一個の禿頭翁で

る。殊に田園に於ける閑居の趣きを見せた彼れの寫眞は、宛然たる一個の百姓親爺である。彼れの妻も亦た實に百姓の女房といふ姿である。直接にレーニン夫人を見て來た人の話に依ると、あれこそ本統に『糟糠の妻』と云ふのだらうとの事である。革命家と云へば、鬼のやうなアバレ者だとばかり思つてゐるらしい世間の人達は、このレーニン夫婦の淳朴さを何と見るか。

丹波屋食堂（大阪文明の侵入）

私の宅の近所麴町六丁目に丹波屋といふ鰻屋がある。これは徳川時代からの老舗だそうで、麴町の通りに唯一の洒落れた料理屋であつたが、此ころ見ると、小いバラックになつて、表に『丹波屋食堂』といふ看板が出してある。『食堂』の二字が此の家には甚だ不似合の感がある。

元來『食堂』と云へば、ホテルの食堂とか、寄宿舍とか、そういふ意味にばかり使はれてゐたものだが、近頃になつてから大阪京都あたりでボツ〱『食堂』と名づけた飲食店を見るようになつた。これは只だ新らしい名稱で人の目を引かうとふのでもあつたらうが、幾分かは其の新らしい名稱に伴なふ新らしい實質もあつた。即ち『食堂』と稱する飲食店は、總てに於て當世風であつた。簡易とか、安直とか腰掛制度とかいふ特色があつた。部屋借りの獨身者が每日食堂に行くのに適する處といふ意味もあつた。舊式の『めし屋』に對する新式の『食堂』といふ形もあつた。

『平民食堂』と云つた樣なものを大仕掛にやると面白い、といふ話は十年二十年前から每度聞いた事がある。けれども東京では『食堂』と稱する飲食店が一向に出來なかつた。東京で『食堂』といふ言葉を聞くようになつたのはツイ數年前からの事で、市の公衆食堂慈善團體の簡易食堂、社會政策と稱する平民食堂などが、特殊の施設として出現した。

それから最近になつて『銀座食堂』などいふのが出來たが、それは確かに上方から輸入した形式らしく見えた。そして今度の震災で急に『食堂』が流行となり、遂に麹町といふ古風な場所柄の、殊に丹波屋といふ古風な鰻屋にまで、其の名稱がつけられたのである。

丹波屋食堂がどのくらい簡易な當世風を示してゐるかは、まだ實驗して見ないが、兎にかく震災がそうした風に、種々の改革の機會になつてゐる事は明らかだ。殊に大阪文明の東京侵入がこれを機會として、先年來の大勢を激化したらしく見えてゐる。

ヨーロパ文明の輸入にも、必ず右の形勢に似たものがあるに相違ない。

未曾有の現象（十歳の自殺）

十歳の子供が自殺したといふ話を新聞で見た。これは人間の歴史に於いて未曾有の現象であるそうだ。自殺は有らゆる生物の中で人間だけに限られる特殊の活動だそうだが、それを十歳の子供がやるようになつたとは、實に驚くべき人間の進歩と謂ふべきである。そして其の個人に就いて見れば、實に驚くべき早熟の天才と謂ふべきである。

未曾有の震災以後、『未曾有の重大事件』が幾つも發生してゐるが、『十歳の自殺兒童』も亦正に其の一種である。まだ〳〵これから色々の『未曾有』が展開される事だらう。

非國民と非軍閥

馬に騎つた憲兵の姿を市中で見かけるたびに震災前と後との相違を何となく思ひださせられてゐたが、今日の新聞に

は又、『非國民ふたり』と題して入營の途中から逃走した二青年の捕はられた事が報ぜられてゐる。

又、去五日の『讀賣』には『薩長の爭ひを見て陸軍に愛想がつき、幼年學校生四名が退校願』を出したといふ記事がある。そして『猶數名の退校者が續出する形勢だ』とある。退校者の中には宇都宮大將の息子もある。薩長の爭ひと云ふのは、主として田中前陸相の橫暴に對する不平だと記されてあるが、思ふにそんな單純なものではあるまい。「こんな思想が學生の心に喰ひ込んできたからは、これから先が不安心」と、幼年學校長は嘆息してゐるのは、同情に値する。

震災以後、軍閥は餘ほど得意の時代に在るものとばかり思つてゐた私共に取つては、こういふ報道は餘ほど意外に感じられる。『出獄後の世の中』の現象として、確かに著るしいものゝ一つである。

× × × × × ×

『出獄後の世の中』はまだハツキリと私の目に映らない。私は出獄後、まだ一度も公けの會合などに出た事がない。近日中、勞働總同盟の大會と、南葛勞働組合の殺された人達の葬式とがある筈で、その二つにでも出席したら少しは直接に世間の空氣に觸れた氣がするだらうかと思つてゐる。（二月七日）

四黨派對選擧宣言

總選擧に臨む我黨の態度

床次竹二郎

憲政の基礎を確立し、政黨政治の達成を期するの一事に就ては、所謂護憲の三派も、政友本黨も、別に其目的に變りはない。只だ其目的に到達する迄の道程に於て、自から手段方法に對する意見の相違を生じ、態度の扞格を餘儀なくさるゝに過ぎぬ。

政友本黨の總選擧に臨む態度は、その結黨式に於ける宣言政綱に聲明せる通り、飽く迄穩健着實を旨とし、急進矯激を避けて、一日も早く目的の彼岸に達せんことを企圖するのである、政黨に基礎を置かざる超然内閣の存立を許すべからざることは、玆に改めて云ふ迄も無い、而も翻て何故に存立を許されざる超然内閣の出現するかに想到すれば、そこに相當複雜な事情があり、憲政の過渡期に随伴する不規則な勢力の錯綜するのを發見するに困難で無い。此不規則な勢力の中には藩閥の餘力もあれば、官僚の爪牙もあり、其間に權變を事とする策謀の士が介在して、政權の運用を亂るの結果を齎らすのである、殊に政黨其者の不純と不信とは、最近著しく國民の信用を失墜し、それが爲めに政黨政治の達成を阻害しつゝあることも決して尋常

一樣で無い政權爭奪に急なるの餘り、公黨の本領を忘れて、權謀術數に耽るのもそれであり、又利權を漁ることに熱中して、國民の道義心を傷けたることも、政黨不信の聲を大ならしむる一の理由である、此不規則な勢力を一掃し、不信の政黨を革新して、眞に公黨の本領を發揮し得る政黨の出現を見ざる限り、憲政の基礎は確立せず、政黨政治の實現も、名のみ徒らに美しくして、其實之れに伴はざるものと云はざるを得ぬ、政友本黨が、憲政濟美の一階歩として、政界の革新に重きを置き、先づ黨弊の刷新を出發點とし、名實共に完備せる政黨政治の實現を主張するのも、主として、政界根本の病弊に着眼する所があつたからである。

昨今世に行はるゝ憲政擁護論を見れば、憲法上參政機關の一たる貴族院を無視し、貴衆兩院を横斷して、結局衆議院を萬能とする一院制度の創設を主張するかの如くである、果して然らば、二院制度を根本の原則とする帝國憲法の精神に戻り、其結果は甚だ寒心すべきものありと云はねばならぬ、帝國憲法の儼存して、其改正を見ざる限り、二院制度を支持尊重して、何處迄も其協調融和を計り、それに依て、政權の圓滿なる運用を期するのが、畢竟憲法の精神に合し、同時に又、國政の運用を完全にして、國利民福に忠なる所以ではあるまいか、即ち政界を縦斷して、上下兩院を通ずる一大勢力の出現を促すは、立憲制度の確立に緊要欠くべからざる一要件と見るべく、政黨政治の達成するや否やも、專ら此點に繋がるものと云つて差支があるまい、或は上下兩院を縦斷したる場合に於て、事實上一院制度と同樣なる歸結に陷ることを指摘する向もあるが、貴衆兩院の横斷より起る事實上の一院制が、貴族院の存在を壓迫し、無視するに反し、縦斷より來る事實上の一院制は、貴族院の存在を尊重し、貴族院が貴族院としての特色本能を發揮することを妨ぐるもので無い、暫く英國議會の實例に徴して見ても、從來縦斷の實を擧げ來れる結果として、立派に二院制度の妙用を發揮し、憲政は之れが爲めに美を濟し得るの域に到達したのであつた、多年保守派の壓倒的勢力が、英國上院を支配する事實はあるも、其事實は些しも二院制度の弊害を立證せずして、却て二院制度の長所美點を雄辯に物語つて居る、過去に於ては、我邦

の貴族院自身、政黨の埒外に超然たるを本義とし、極力其主張を支持する傾があつた、然るに時勢の進運は、何時迄も貴族院の門戸を閉鎖して、國民との交渉を避くるを不可能ならしめ、貴族院も亦、出でゝ其基礎を國民の上に求むるの必要に迫られたのである。近年籍を政黨に置くものゝ次第に增加する傾向を生じ來れるは、取りも直さず時代の進運に促されたる一轉進であり、斯くして貴族院自から活くるの道に進まんとするのである、此意味に於ても、政界を縱斷して、貴族院の基礎を國民の上に置かしむるは、憲政の濟美に進むべき當今の一要務と云はねばならぬ。

元老の存在と献替に就ても、是非の論が相當に喧しいのは事實である。若し我邦の憲政が發達して、凡て政權の授受を總選擧に決するの機運到來するに於ては、自から元老の献替を不必要とするに至り、其存在は最早何等の問題とならぬ、而も政黨の不信今日の如く、政權の運用完からざる現狀の下に、元老の存在も暫く之れを容認せざるを得ない事情がある。凡てが過渡期にある今の時代に於て、假りに現存の元老なしとするも、必ずや元老に代るべき何者かを必要とし、從つて現存の元老を排斥することが、些しも政黨政治の達成を促す所以の道とはならぬ、或は元老排すべしと云ひ、或は特權階級斃つべしと云ひ、其言議必ずしも壯ならずとは云はざるも、退て之れを實際政治の見地より批判すれば、徒らに大言壯語して、矯激却て大事を誤るの譏を免るることが出來ぬ、人心を安定して社會各階級の協調諧和を計るは當今何よりの急務である、從來或は憲政の形式論に沒頭して院外運動を起し、或は誤りたる平等論に立脚して、階級鬪爭や小作爭議の挑發を敢てしたるは、其結果遂に議會政治の否認となり、憲政の擁護に非ずして、憲政を破壞する不謹愼の行動なりと云はざるを得ない、今の時局は形式や空理を論じて、爭鬪を事とする秋で無い、世間往々政友本黨の穩健着實を因循姑息と誤解するものあれども、俗論に媚びず、時流に阿らずして、其所信に進むは、眞に勇氣あるものに非れば克くし得ず、薄志弱行の徒の思ひ及ばざる所である。我等は我等の此精神が、多數識者の贊同を得るものと確信する。

清浦内閣の本質と解散の意義

濱口雄幸

緒言

清浦内閣は種々の政綱、政策を羅列して、國民の前に實行を誓つて居る樣に見へて居るが、吾人は清浦内閣の政綱政策を論ずるよりも前に、内閣成立の根本義に關する重大なる議論を持つて居るのである。此の議論は予一個の議論にあらずして、實に滿天下國民全體の議論であると信ずる。若しも内閣組織の根本義に於て、或は累を皇室に及ぼし奉り、或は大命を蔑ろにするの嫌ひがあり、或は憲法の精神に反するが如き事實があり、或は民心を險惡に導くが如き傾向があるとすれば、現内閣は一日たりとも其存立を許すべからざるものであると思ふ。

斯くの如き内閣に對して施政の方針を論じ、政綱、政策を議するが如きは砂上に樓閣を築くと同樣、實に無意義の甚しきものである、故に吾人は先づ以て清浦内閣成立の根本に關する國民的疑惑の存する所を開陳して、吾人の主張を明かにしやうと思ふのである。

第一、清浦子が大命を拜し内閣を組織するに當て進退の節を誤り累を皇室に及ぼせるは、皇室の尊嚴を保持し

國體の精華を發揮する上に於て遺憾に堪へない。

淸浦子爵は本年一月一日内閣組織の大命を拜するや、愼思熟慮の末、大命拜辭の決心をなし、三日午前十時華族會館に於て、之を研究會幹部の代表者に聲明し、直に拜辭の奉答をなすが爲參内したに拘らず、再度の御諚に依り再び御受けすることに決意を飜したと云ふことである。而して三日午後三時赤坂離宮を退出するや、華族會館に於て研究會幹部の代表者と會見して、此事を報告した後、自身新聞記者の前に聲明して曰く。

『實は大命を拜辭の決心なりしも、今日赤坂離宮に於て、攝政殿下に拜謁し、殿下から時局について御下問を賜はつたが、自分は此の時局困難に際して、御思召に副ひ奉ることが出來るや否や甚だ憂慮致して居る次第を言上致した、然るに殿下には『此際であるから努めて國家の爲に盡せよ』との御言葉を賜つた。已にこの御諚を拜した以上、一旦は拜辭する意志であつたけれども、最早臣子の分として、一身の利害を顧みることが出來ない。奉公の爲め力を捧げねばならぬと思ふ』

と云ふ事を發表して居る。この事は一月四日都下の各新聞紙に、一齊に掲載せられた天下周知の事柄であつて、今日に於て之を否認する事は出來ない筈である。即ち最初の大命は之を拜辭する決心であつたが、二度目の御諚によつて、拜受の決心をしたと云ふことに歸着するのである。茲に於て重大なる問題が起つて來る。苟くも責任を知り、臣節を解する所の政治家であるならば、假令、重ねて優諚を拜しても、國政擔當の成算が立たない以上は、飽く迄も之を拜辭申上げて、他の賢者に讓るのが當然の事であると確信する。

又、若し時局擔當の成算があるならば、再度の優諚を拜する迄もなく、最初の大命によつて何故に謹んで御受け申上げて、宸襟を安んじ奉らなかつたのであるか。

然るに愼思熟慮の結果、大命拜辭の決心をなして已に此事を研究會幹部の代表者に、正式に聲明し、扨て愈々之を拜辭するが爲に、參内したと云ふならば、是れ即ち時局收拾の成算が立たなかつた爲であると推測するの外はないのである。

斯くの如く一晝夜に亘つて愼思熟慮の結果、成算なしとして

拜辭の決心をしたものが、一朝參內して、再度の御諚を拜するや、忽然として、卽席に時局收拾の成算が出來たと云ふが如きは、常識上斷じて有り得べからざる事であつて、結局する處、成算は立たない見込みはないが、併し、再度の御諚に接したから御受けをしたのであると、解釋するの外はないのであつて、國民の多數は正に左樣に信じて居るのである。

果して此の如く自分では、時局の收拾の見込みが立たなかつたにも拘らず、再度の御諚があつたからと云ふ事を理由として、強いて內閣を組織した以上は、其內閣が若し時局の收拾と民心の安定に失敗したならば、或は恐る、其責任を皇室に着せ奉ると云ふが如き、恐懼に堪へざる所の觀念を國民に起さしめ、元來政治に超然たるべき皇室を、萬一にも畏くも政治の渦中に捲き込むと云ふが如き虞れが絕體にないと、何人が保證し得るのであるか、心ある者は憂慮に堪へざる所である。

斯くの如きは畢竟、大命拜受後に於ける、淸浦子爵の行動が進退其節を誤り、累を皇室に及ぼすものなりとの非難を受ける所以であつて、國體上洵に由々しき大事と云はなければならぬ。

第二、內閣組織に當て一部閣員の選定を第三者に委託したるは大命を蔑ろにするの嫌あり。

淸浦子が大命を拜して內閣組織を決心するや直に硏究會の領袖と會見し、內閣組織に付て援助を求め、硏究會が幹部會を開いて援助の決議をなした後、閣員の選定を彼等に委託し、一方委託を受けたる領袖連は、日夜華族會館を始め各所に密議を凝し東奔西走して閣員の詮衡に沒頭し、案の成るを待て漸く內閣の組織を了したのは、其當時の新聞紙にも傳へられ公然の秘密として天下の齊しく認むる所である。假令閣員最後の決定は淸浦子自ら之を爲したりと辯明せらるゝも、今回の如く第三者をして露骨に且公然と閣員の詮衡に干與せしめたのは前代未聞のことである。

抑も內閣組織の大命を拜したる者は正しく淸浦子爵一人であつて硏究會の領袖たる二三子ではない。然るに神聖にして不可分なるべき大命の一部を、事實に於て擅に他人に分割委讓したのは、天皇の大權を蔑視するの非難を免れない、此非難は淸浦

内閣の存續する限り決して絶ゆることがない譯である。

聞く所に依れば、首相は貴族院に於て議員の質問に答へて『閣員の銓衡を他人に委讓したるが如きことは絶體にない』として之を否認した趣である。首相が之を否認したのは或は當然かも知れぬ。何となれば之を是認するに於ては淸浦内閣は直に倒壊しなければならぬからである。然し乍ら淸浦首相の否認に拘らず國民の多數は首相の辯明を信ぜずして、大命委讓の事實を信じて居るのである。

淸浦首相が議會に於て極力之を否認しつゝある間に、研究會領袖の一人は野黨聯合三派からの訪問者に對して、驚くべき事實を告白して居るのは、洵に皮肉の對照と云はなければならぬ。即ち其人の告白に依れば『世間では研究會が淸浦内閣の組織に干係したと云ふけれどもそれは事實ではない、唯某伯某子等が組閣に干與した事はあるけれども、之は個人の資格でやつたのであつて研究會を代表してやつたものではない』と云ふ辯明である。此辯明は研究會に對する世間の批難を緩和する上に於て何等の效果がないのみならず、却て淸浦首相の辯明を裏切つて、大命委讓の事實を肯定するものである、即ち研究會は自らを救ふに急にして淸浦首相を死地に陷れたもので、洵に正直な告白であると吾人は思ふのである。

問題は、第三者に對して閣員の銓衡を委讓した事實がありや否やと云ふ點であつて、其委讓を受けた某伯某子の資格の如きは問ふ所でない。已に研究會領袖の口から某伯某子が組閣に干與したことが明白となつた以上は、大權蔑視に對する國民の非難が、更に一層深刻になつて行くことは云ふ迄もないことである。

第三、淸浦子が大命を拜するや直に研究會の諒解を求め研究會を中心とした貴族院内閣を組織し、全然衆議院に基礎を有せざる内閣を組織したのは二院制度の精神に反するものである。

凡そ二院制度の國において内閣を組織して政治を圓滿に行はんとする以上は、場合によつて貴族院の諒解を求め其援助を受くる事は何等差支へないと思ふが、然し内閣組織は何處までも衆議院に基礎を置くことが憲政の本義である。抑も内閣の基礎

が衆議院にある以上は、或は政策の上に付て貴族院に諒解を求め、或は主義政見を同ふする若干の貴族院議員を閣僚に列せしむるも敢て妨げはないと思ふのである。

豫算の修正、法律の制定等に至つては、憲法の解釋上から云つても、議會の典例上から云つても、兩院同等の權限を有する事は勿論であるが、之は法律論であつて政治論ではない。憲法の解釋論であつて憲法の運用論ではない。政治論と致し、憲法の運用論と致しては、政府の實體は國民輿論の府たる衆議院を基礎として之を組織し、貴族院は受動的に政府の政策施設を批判監視して、一國の政治をして、常に中正穩健の態度を失はざらしむることに努めなければならぬ。若し然らずして、衆議院を差措いて貴族院自ら積極的に政治の局に當るが如きは、貴族院當然の畛域を超へて自ら其本領を沒却するものと云はなければならぬ。

新聞の報ずる所によれば、淸浦首相は一月十九日上野精養軒に於て開かれた肥後俱樂部の組閣祝賀會に於て演說して居るが其一節に斯樣な事がある。

「貴族院が内閣を組織するは憲政の逆轉だと申すものもあるが、國家に兩院制のある以上、衆議院が内閣を組織するのが不思議でない如く、貴族院が内閣を組織するのも別に不思議とは云へません、申す迄もなく貴衆兩院の權限は同一であつて其間何等の輕重はありません云々」

過日貴族院に於ても議員の質問に答へて略同樣の意味を答へて居る。吾人は淸浦子の如き老成の政治家が此の如き意見を懷いて輔弼の重責に當らるゝ事を國家の爲に悲しむものである。淸浦子の兩院權限同等論は法律論と政治論とを混同するものであつて、前述の如く法律論としては洵に其通りであるが、政治論としては貴衆兩院は各々其本分があつて互に相侵すことを許さないのである。

帝國憲法の起草者たる伊藤公の憲法義解にも次の如く書いてあるのである。

貴族院にして其職を得るときは政權の平衡を保ち政黨の偏張を制し橫議の傾勢を抑へ憲法の鞏固を扶け上下調和の機關となり、國福民慶を永久に維持するに於て其効果を收むること

多きに居らんとす云々

此上下、諧和の、機關、と云ふ事が洵によく貴族院の政治的本領を說明し盡したものであつて、貴族院は何處迄も此上下調和の機關たる本分を守つて一步も其範疇を越ゆる事なく一意專心、國政の運行を圓滿ならしむるに努むべきであると信ずるのである。然るに淸浦子は此兩院の政治的本分を轉倒し、衆議院を差措いて貴族院內閣を作り政綱政策を提げて衆議院に臨んだのである。是即ち受働的調和的なるべき貴族院をして、其本來の立場を踏み越えて國民の前に政治上直接責任の衝に立たしめ、元來は發動的なるべき衆議院をして却て批判的受働的の地位に居らしめたものであつて、帝國憲法が二院制度を採用したる精神を蹂躙し、政治上の秩序を破壞し惡例を將來に貽すものと認めなければならぬ。

然るに之に對し淸浦首相は更に辯明し『世間では貴族院內閣〱と云ふけれども決してさうではない、自分は曾て此內閣を貴族院內閣と申したことはない』と云つて居るが、自ら稱して貴族院內閣と云ふと云はざるとに拘らず、現內閣は其成立の根本義に於て貴族院の中心勢力たる研究會の援助を唯一の條件とし、それを基礎として始めて成立した內閣であると云ふとは組閣の經過に照して極めて明瞭な事柄である。之を研究會中心の貴族院內閣と云ふに於て何の差支へがあらうか。否立派なる貴族院內閣である。一體貴族院內閣であるや否やを區別する標準は必ずしも、內閣員たる貴族院議員の數のみで決する事は出來ない。其內閣組織の經過に鑑み、內閣の基礎が何れに置かれてあるかと云ふことに依つて決せらるべきものである事は言ふ迄もない。此見地よりすれば淸浦內閣程立派なる貴族院內閣は未だ曾てないと申さなければならぬ。

第四、淸浦內閣が一般國民と沒交涉なる一部貴族の爲に擁せられて恰かも天下に號令するが如き態度は國民間に階級意識を喚起し階級間の嫉視反目を助長し國民思想上、極めて憂ふべき事態を釀生するの虞がある。

我國現下の時局は多事多難を極むと雖も、其內政も憂慮に堪へざる難問題は思想問題に如くはないと思ふ。外國より傳來せる危險思想の宣傳は內政上の原因に基く所の人心の倦怠や巧利

主義の跋扈と相俟つて國民思想の動搖を招き、動もすれば階級間の嫉視反目を激成せんとするの傾向があるのは洵に憂慮に堪へざる所である。吾人が普選の卽行を絶叫するも、各種社會政策の實施を主張するも、將た又貴族や富豪の自制を希望して已まざるも悉く是れ人心の安定を圖り、思想の善導に資し、國家の基礎を安泰ならしめんが爲ならざるはないのである。

然るに何事ぞ、清浦子爵は貴族院に於ける一部の華族とのみ相談し、彼等に都合よき内閣を組織し、甚しきに到つては閣員の詮衡までも彼等に委讓し、これ等華族が實權を握つて居る所の研究會と云ふ大なる團體を内閣背後の勢力と恃み、此勢力を負ふて傲然として一般國民に臨むが如き態度を取るに至つては我々は寧ろ其大膽不敵に驚かざるを得ないのである。

清浦首相は我國民思想の現狀を知れりや、今日の如く動搖せる思想界が清浦内閣成立の爲に更に一段の動搖を見るに至り、古來我國民精神の誇りとせる一致團結、忠實從順といふ惇風美俗の上に重大なる汚點を印し、彼の忌むべく恐るべき所の階級間の嫉視反目を助長するの傾向なきにしも非ず。國民精神の作興を高唱し、思想の善導を標榜する清浦内閣としては自家撞着の甚しきものと謂はざるを得ないのである。

先般首相は貴族院に於て中川男の質問に答へて『階級鬪爭云々と云ふが、之は自分には判らぬ、詰り閣僚を貴族院の適材に採て内閣を組織したと云ふに過ぎぬ。是れ獨り自分の内閣に止まらず、他の内閣に於ても適材を貴族院に求めた事は、無論あつたことである、之が爲に階級鬪爭が起るとは一切了解が出來ぬ云々』と云ふ意味を云つて居るが、若し首相にして問題の眞相を正視したならば此の如き答辯は出來なかつた筈である。

試みに問はん、現内閣は如何にして出來たのであるか、又何人が作つたのであるか。

貴族院の中心勢力たる研究會の、其又中心勢力たる有爵議員の實權を握つて居る少數の人々が清浦子の大命拜受前後から頻りに奔走して、常に清浦子と接觸、相談し或は幹部會の決議を以て清浦内閣を援助するに盡力し甚しきに至つては前陳の如く閣員詮衡に干與する等、華族の本分を忘れ貴族院議員の畛域を越へて政治に干與したる其結果が卽ち現内閣の成立を見たので

あると、萬人一般に理解して居るのである。それが爲今日の如く識者の憂慮となり、國民の憤怒となつたのである。隨つて國民非難の焦點は、今日迄の處に於ては華族全體ではない。又有爵議員の全體でもない、有爵議員中の一小部分の政權慾其ものが國民非難の標的となつて居るに過ぎないのであるけれども、凡そ世の中に勢ひと云ふものの程恐るべきものはないのであるから、今にして全國に瀰蔓せる國民の憤怒に對し、首相自身の決行により有效なる緩和策を取るに非ざれば、勢の激する處或は有爵議員全部に對する非難となり、或は華族全體に對する反抗となり玆に愈々階級闘爭の端を啓くの虞が全くないと斷言する事は出來ないのである。

　第五、浦清内閣は須く總辭職を決行し國民の苦痛を救へ。

　以上は清浦内閣組織の根本に關する國民的非難の顯著なものである。我國政界の事は兎角公明正大を缺くこと少からず、之が爲國民に不快の念を感ぜしむることが極めて多いのである。特に政權の移動する場合に於て、此不愉快なる印象が極めて多く且つ深いのである。最も公明正大なるべき政治の局面が、常に權謀術數に依つて暗黒の裡に展開せられて行くと云ふことは國民に取つて洵に堪へ難き苦痛であつて、世道人心に及ぼす惡影響は實に恐るべきものがあると思ふ。

　今日識者の最も憂慮して居る所の思想の動搖、民心の惡化の如きも一つは玆に原因して居ると考へらるゝのである。清浦子は久しく政治の表面から遠ざかられ、冷靜公平の立場から多年の間、政局の推移と時勢の變遷とを見て居た人であるから、此邊の事情はよく承知でなければならぬ筈と思ふに拘らず、内閣成立の根本義に於て天下の大議論を惹起し政局の大紛糾を招きたる事、今回の如く甚しかつた事は未だ曾てない、已に清浦内閣出現の爲此如き紛亂を招徠した以上、之を根本的に解決するの責任は一に係つて清浦首相の雙肩にありと信ずる、依つて此責任を果たすの途は一日も速に内閣の總辭職を決行するの他はない。

　第六、無慾非立憲の解散と之に處する國民の覺悟、

　然るに事玆に出でずして憲法上の大權を濫用して戰を國民に挑むだ其頑冥は終に赦すべからざるものである。其成立の根本

義に於て衆議院に一人の與黨を有せず、解散なき貴族院の牙城に立籠つて衆議院の解散を行つた。首相の告白によつても、解散の結果多數の與黨を得るの確信がない事は明かである、確信なくして解散の詔勅を奏請するは輔弼の責任に於て其罪が決して輕くない。加之議會の休憩中に解散を決行するが如きは我國の議會史に未だ其先例を見ない。而も尙は施政方針の演說をなすに至らず、議員の質疑を聞くに及ばず遽々然として之を行うたのは實に言語同斷である。首相は護憲三派の黨議が已に不信任に決したのを理由とするやうであるが不信任案は、未だ公然議會に提出せられたのではない。若し解散を行うとすれば何故に不信任案の上程を俟ち堂々と其所信を戰はした後に於て之を決行しなかつたのであるか。議員の口を緘し、舌を縛し、暗中より突刺するが如きは其卑怯未練實に唾棄すべきものである。

淸浦首相は當日の議場の光景を見て國務の進行を阻碍するものと非難し解散の一理由として居るやうであるが、當時議場の光景は吾人も亦之を遺憾とするけれども、議員に非さるものが議場に闖入した一事は議院內の問題に止り議院對政府の問題ではない、之によつて議會を解散するの理由とはならぬ。若し夫れ議員騷擾の事實に至つては其責寧ろ首相にある、卽ち列車顚覆事件に關する濱田國松君の質問に對しては其性質上、當然首相が答辯すべきもので濱田君も亦首相の答辯を要求したに拘らず首相は小松鐵相をして答辯せしめ自ら答辯の衝に當らさるは無責任の甚しきものであるのみならず、其當時首相の態度は、眞摯と嚴肅を欠き議員の反感を招いた事が尠くない、是當時の議場が騷擾を見たる眞因であつて斷じて議員に於て其責を負ふべきものではない。

之を要するに淸浦内閣は辭職すべくして辭職せさるのみならず、却て暴虎憑河の勇を振つて不當背理の解散を敢行したのである、政局の紛糾、民心の動搖は蓋し當然の歸結であつて其責任は一つに淸浦首相の負ふべきものである。而して今回の總選擧は、斯くの如き非立憲なる淸浦內閣を是認すべきや否やを民意に問ふたものであるから全國民は斷然として振ひ立ち、憲法治下に於ける正當の權利によつて、特權內閣及び之を支援する一部特權階級の僭越不遜を膺懲し以つて憲政濟美の實を擧げる可く自己の所信によつて勇往邁進するの必要があると信ずる。

我等の態度

古島一雄

我等聯合軍の旗印は甚た簡單明瞭である、一部の特權階級から擁立されたる内閣を倒潰すると共に之を支持する總ての勢力を打破すると云ふのである、我等革新倶樂部は從來既成政黨の打破を絶叫して來た、今も尚ほ之を信じて居る、併し政黨以外の勢力殊に貴族の一部が政柄を壟斷すると云ふ眼前の事實に面しては先づ之を倒すを何より急務とせねばならぬ、一部の人々を見ればコンナ勢力の增長して來たのも之を質せば既成政黨の罪だから、イッソ一緒に叩き潰すがよいと云ふかも知れぬ、併し我々は政黨否認論者ではない、少なくとも日本現在の政治狀態に於ては先づ政黨を改造して之に依て憲政の運用をよりよくする事に依つて救ひ得らるものと信じて居る以上、貴族政治と共に政黨政治を同時に焚き蕪すと云ふ事は出來ない、豺狼路に當る安んぞ狐狸を問んやだ、先づ貴族政治を退治して然る後政黨の改造を計らうと考へて居る、故に先づ憲政の第一義に向て既成政黨と足並を揃へて行く事を決心したのである。

從て我等は倒すまでの共同動作と、倒してから後の政黨改造の二題目に就て考へて居る、倒すまでの利害は一致するが、倒してから後の利害に果して一致するか、否な如何にせば之を一致せしむる事が出來るかと云ふのである、ナゼコンナ事を考へねばならぬと云へば言ふまでもなく既成政黨の離合集散の歷史が只だ政權爭奪の一點張りで繰返されて居るからで今度の政友會の分裂でも實を言へば内輪の政權爭ひが高じた果で此儘で果

して政權に有付く事が出來るや否やが主要なる問題であつたのだ、若し高橋に大命が下つたら政友會は分裂せぬのである、否な若し當時淸浦が逃げ出して一臠の肉が三派の前に投げ出されたら何となつたであらう、果して今度の樣に三派聯合が行はれたであらうか、否な淸浦が有松を參謀とすると云ふ噂の起つた時、內々飛立つばかりに喜んだものもあつたではないか、我等は政權爭奪を絕對に惡いとは云はぬ、或る意味から云へば政權爭奪は政黨の生命である、併し夫は自己の政策を行ふ爲めの政權爭奪であらねばならぬ、然るに從來政黨間に行はるゝ政權爭奪はまた黨利黨略を主とする政權の爭奪であつて、之れが爲めには政策は固より總てのものを犧牲とするのみか甚しきは憲政の第一義をも沒却するから非難せらるゝのである、離合集散固より可なり、政權爭奪も又た可なり、只だ離合集散も政權爭奪も一に政策に依て決せられなければならぬと信ずるのである。

處が此度淸浦內閣出現に依て偶然にも憲政の第一義に對して一致が出來たのだ、嚴正なる批判家の目よりすれば動機に不純のものがあると云ふだらう、否な政黨以外の人よりすればチャンチラヤ可笑しいと皮肉るものもあらう、併し不自然より成れる多數の政友會が分裂より起る政界の分解作用が即ち政黨其物が從來の態度より一變して馬の首を立直すべき一轉機になつたのである、政界革新に志ある者は此のチャンスを見逃してはならぬのである、政友會にしても若し政權慾一點張りであつたなら、當然起るべき分解作用を敢行しなかつたらう、之を知つて之を敢行した所を見れば必ずしも動機の如何を追究する必要は無い、政黨の第一義に目を醒ましたなら、既往問ふ勿れ動機問ふ勿れ、政黨として其本然の性質に歸らしむる事は即ち政界革新の第一義である。

故に我等は先づ第一に三派をして元老征伐に徹底せしめたいのだ、三派の決議を見ても政黨內閣制の確立を期すとあつて、元老に關する事は一切避けてゐる、成程政黨內閣制が確立が出來れば元老容喙の必要も無くなるのだから元老云々の事は言はなくともよいと解釋せらるゝが、黨首の演說などを見ても一言も元老に言及せず何だか氣兼をして居た風がある、コンナ事ではイケぬ、元老は現存して居るのみならず、甚しきに至つては第

二の元老を氣取つて之を志して居るものさへある、現に社會の木鐸たる新聞紙までが准元老などの文字を平氣で用ゐて居る世の中だ、先帝時代の元老は兎に角にも維新佐命と云ふ功勞があつた、若し萬一向後元老を造るとすれば全體何を標準として元老に推薦するのだ、結局俗吏の成上り連が互に競爭運動をするのだ、其結果言はずと知れた果を宮中に及ぼす事になる、現に宮中の吏僚が樞機に干渉するなど不埒千萬な行爲をやつて居る上に、若し元老の後繼者などが出來たら憲政擁護も何もあつたものでない、三派は此際第一元老に對する色氣を去つて猛然として之れが退治に徹底することが必要だと考へてゐる。

　第二には貴族征伐だ、三派の中でも階級打破と云ふと、すぐ辨解がましく言譯をするものさへある、コンナ調子ではダメだ解散出來ぬ鐵壁の中に立籠つて其特權を揮ふ一小集團が六千萬國民の生活を支配すると云ふ眼前の事實に對して其特權階級を打破する事に何の不思議がある、其特權を奪去らねば國民は彼等に脅威せらるゝのだ、伊藤公は曾て憲法草案を起草せる時に當て貴族院に特權を與へて衆議院に當らしめんとした、然るに文治武斷の兩派に分れて自ら政局に立つに當て、此特權は忽ち山縣の利用する處となり常に貴族院に苦しめられた、之れが爲め伊藤は常に詔勅を仰いで之に對抗した、是は伊藤の變法手段だ、政黨政治は斷じて斯る手段は許されぬのだ、之れが出來ぬとすれば貴族の特權を除ずして如何にして政黨政治の確立を期する事が出來るか、二院制度の精神は既に沒却されて居る以上三派の政治家は更に此に徹底せねばならぬ。

　三派中の政友會たるものは、一日も早く普選の即時斷行を聲明する事だ、近頃政友會では選擧中普選問題も自由問題となし、總選擧後の代議士會で決行するといふ内議を決したと聞いて居て、現に政友會の重なる人からも普選の氷は自然に解けるから安心してくれと云ふて居る、山本でさへ普選斷行と決心し、清浦でさへ申譯ながらも獨立生計とまで來て居るのだらう、春風と共に自然と解けるものは當然の事であるが、我等から見ればソンナ生温い事を言はず、解けるものならサツサと解かすがよいと思ふのだ、新政黨に若し人ありて一足お先きに失敬したら何とする、達磨さんが衣を脫き棄て、一平民となつて選擧に打

て出ると云ふ其心事から見ても政友會が普選斷行を叫ぶのも其志を完ふせしむる所以で、又實に政友會が生き行く唯一の途である、否な三派の協調の上に一大精神を注ぎ込むものだ、先づ此根本問題に向て一斷を下したら、世間が三派に對する不安は忽ち一掃せらるゝのだ、政權爭奪の術合より脫して政策上の一致が見られるのだ、根本一たび定まらば自餘の問題は節々刀を迎へずして解決するのだ、而して更らに國民生活の安定を計る事とを基としての內外の諸政策に向て其一致點を求めるがよい、で三派の領袖は皆な言ふ、清浦內閣何にかあらん、鎧袖一觸だと、眞に然りだ、然らば一觸後何ふする、政策の一致なくしてドコに聯立がある、ドコに合同がある、一腐の肉の前に猜々として牙を磨く醜狀はもはや見るに忍びぬ、一日も早く政策に一致せよ、而して正々堂々天下に向て其主張を公にせよ、政黨政治の一大要諦は公明正大である、卽ち先づ元老を退治するの外は少なくとも先づ貴族院改正と普選斷行の大旗をかゝげ而して更らに國民生活安定の基調の上に內外の諸政策を決定するのである、我等は此に聯合軍の一員になつて居る以上、飽迄も忠實に此聯合軍の結束を現在にも將來にも牢固たらしむるに全力を竭す考へである、從て無遠慮に苦言も呈するのだ、我等の同志は既に三派協調の精神を基調として更らに全國の勃興せる新勢力の糾合に奔走しつゝあるが序でに一言しておきたいのは三派が一日も早く協力して高橋政友會總裁を無競爭の安全地帶に置く事である、コンナ事は一事の樣であるが、此一小事を行ふ事が、現在の政黨間に於ける風儀を品よくする事に於て偉大の力がある、由來政黨の選擧競爭と云ふものは我利々々亡者の爭ひと思はれて居る世の中に此の事が行はれたら天下は其美はしき情緒の感激の淚を惜まぬであらう、此一滴の淚が卽ち全國の血を沸かすのだ、此血が各政黨の脈管に漲つた時には喜び三派協調の力を示すのみならず、政黨政治の妙諦が全國民に感孚するのである、人心の動く光に獨り理義のみならんや、至純なる情熱が憲政擁護の大精神を燃す時、所謂大正維新の大業が創設せらるのである。

此の昏盲の闇を滅せよ

——現政局の批判——

横田千之助

一、大權の分割委讓

佛陀の言葉に、

消除三垢冥
廣濟衆危難
開彼智慧眼
滅此昏盲闇

といふ一頌がある。實に現在の政局に對する吾等の大願は此の佛敎の一頌の精神に含蓄せられてゐる。

然り、我等は此の昏盲の闇を滅せんが爲めに、現內閣反對、憲政擁護の大旆を翳して、直往邁進しつゝあるのである。然らば何故に此の淸浦內閣に反對するのであるか、今更其の理由を開き直つて宣明することは、餘りに大人氣なく、馬鹿くさく、明白に過ぎてゐるが故に、殊更に眞劍にその非違を抉剔するの阿呆らしさを感ずる次第であるが、改造社の囑望に委して、玆に政局の推移を大要檢討して見やうと思ふ。

振古未曾有の大不敬事件勃發と共に山本內閣は恐懼總辭職を決行した。次で組閣の本義からいふならば、當時絶對多數黨たる我政友會に大命降下あるべきが憲政の大道であつたにも拘らず、君側の大官その措置を誤つて俄然大命は淸浦子爵に降下し

たのである。

官場數十年、吏僚としての聰明逕に、その名を成して、身を樞密院議長席に置く淸浦子が、よもや、總理の重職に眷戀して、進退を誤りその終りを完ふせざるが如き暴擧には、斷じて出られまいとは、國民一般の一致して推察した所であつたが、思はずも昏盲の魔手何處よりか伸びて、哀れ見るも悲慘な淸浦內閣は非理のうちに成立したのである。洵に子個人の爲めに天下は悲しんだ。而して翻つて國家の爲めに國民は激怒せざるを得なかつた。

それは抑も何故であつたか!!

淸浦子は大命を拜受し、その臣節を盡すとの美名の下に組閣に着手するや、獨力閣僚を選定する能はずして、貴族院研究會と相野合し、玆に大權の分割委讓といふが如き醜事を敢して、閣僚の人選一切を研究會に委托したのであつた。玆に於て貴族院の一部は田舍芝居の興行師然として、晴の大舞臺に見るに忍びざる淸浦子以下の馬の足役者を踊り出させたのである。その醜其の態、勿論何人か喝采拍手を送るものがあらうか。國民は直下に此の興行を中止せしめ、僞瞞の踊子を放逐せねばならぬと叫ぶに至つたのである。况や之れ國家といふ晴れの舞臺である。七千萬民の福利を增進し、生命を支配せしむるには、餘りに微弱醜劣なる內閣組織であることは、洵に遺憾の極である。

大權の分割委讓!!

何といふ恐懼に堪へぬことであらうか。神聖にして侵すべからざる尊き大權を擅に私議分割して、之れを貴族の一部に委讓したといふごときは怖らく世界の立憲的政治史上に於て未だ嘗つて見ざるところであるのみならず、此の事たるや大權を私議するものである以上、瞭らかに大權の冒瀆であり、賣國私得の行爲に等しいものである。蓋し、之れ丈けを以てしても、淸浦內閣は國民の前に速に愧死せねばなるまい。

二、忠道の破壞

忠とは身を殺して大君の宸襟を悩まし奉らざらん事を期するものであらねばならぬ。

臣節を盡さんことを自己の專賣特許の如く心得てゐる淸浦子

爵の行爲はし果て之れ忠たり得るものであらうか。

清浦子爵は一旦大命拜辭の事を聲明して置き乍ら、その舌の根の乾かざるうちに鞠躬如として宮中に伺候し飜然その聲明を反古にし、忽ちその趣意を抛棄して、優諚降下を名として、所謂猫眼内閣を組織するに至つた。然も聞くところに依れば、恐れ多くも、攝政宮殿下に對し奉り、組閣の困難を訴へ恐懼大命を拜辭したるに、更に優諚降下ありたるを以て、臣下としての誠忠を表明し、その節を盡すべく組織の決心をしたのであるといふ事であるが、倘し、之れが事實とすれば洵に宸襟を惱し奉つた不忠の行爲であることは玆に贅する迄もないことである。

然るに後日清浦首相自身も、平田内府も共に口を揃へて優諚再降下の事は全く無根であつて、清浦子は大命を一旦拜辭したことは斷じてないと吹聽してゐるが、倘し又之れが事實とするならば愈々重大なる虛僞であらねばならぬ。何となれば、研究會は優諚再降下ありたるを以て清浦内閣の組閣に參與したのでもあるからして、此の事なしとせば首相は瞭かに研究會を欺いたのである。兎に角にも、一點の闇なき聖慮を曖昧にし奉るごとき言動をなして國家の大政を掌握するが如きに至つては、之れを小にしては研究會を傷け、之れを大にしては國民を損ふことこれより大なるはなく、遂には帝國をして危殆に瀕せしむる怖るべき動機を作るに至るやも知れないと思ふ。

此の間の消息は、今や天下周知の事實なるが故に、聊かも贅言を盡す必要はないが、洵に國家の老臣獻替の誠を竭さず、濫に大權を私議し、朝廷の重臣宮中府中の別を紊して、擅に政局に容喙し以て聖明を壅蔽し奉るものであると云はねばならぬ。

蓋し清浦内閣成立の事情と、其前後清浦子及宮中大官の行爲言動は我が光輝ある日本の國民精神の基本たる「忠道の破壞」である。之れ恰も彼れ等の行爲は清盛の暴虐に等しく、忠道を沒却し聖明を壅蔽してまでも所謂貴族内閣の非望を遂げたものである。全く名聞利養の他なき匹夫野人の我慾を强行したと同じきものである故に、吾々は、蹶起以て「滅、此、特、權、内、閣、」の大旆をかざし、その非違を糾彈せんとするものである。

三、封建的貴族意識

現内閣は貴族院と苟合した時代錯誤の特權内閣であるが故に、根柢より立憲の大義を壞滅するものであるが、抑も貴族院なるものゝ本質から論じて見ても、彼等の無上の權威としては「不解散」といふ城壁がある。

然るに彼等は此の不解散の鐵壁内に立籠つて強いて政權を奪取せんとするは、強大なる塹壕に身を潜めて毒瓦斯砲を放つて國民を狙撃せんとするに等しいものである。實に彼等に取つては有利なる武器甚だ多く、國民は身を以て免るゝことすら出來ざるほどに武器が與へられゐてない

即ち現在の我國民は貴族から捕虜になつてゐるのである。此の桎梏を立憲の巨彈を放つて擊破せねば「新日本」の潑溂たる進歩は覺束ないのである

偶々貴族の暴戾を露骨に現はした清浦内閣は出來上つた。之れと共に國民一齊に封建の餘沫拂拭して、勃然として階級意識のめざめを呼起した。斯くて今度といふ今度こそは、

「我等國民は貴族院の少數特權階級の爲めに瞭かに捕虜になつてゐる事」

を完全に意識し得たのである。

元來、貴族院は、僅か九百内外の世襲主か一部の勅選議員と多額納税議員の少數者と共に過分の特權を享有し、七千萬國民の上に傲然として横行濶歩してゐるのであるが、彼等貴族院は憲法上殆んど衆議院と同等の權利を行使し、多年國民の政治意識を睡ましてゐたのである

彼等は議會に臨むや、場合に依りては下院以上の權利を振り廻してゐる。例へば豫算審議期日の如きに就て見ても衆議院以上の長期日を要し、又政府が豫算案法律案の説明をなすに當つても七千萬の代議員たる衆議院より以上に貴族院を重んじ僅か九百足らずの一部階級の前に委曲を盡して説明諒解を求めるといふやうな始末である。

斯る矛盾撞着、非立憲の現状に對して、政治意識の發達せる多數の國民は、貴族院の横暴を見て窃かに反感を抱持してゐたことはいふまでもない。

貴族院改革の烽火!!

是れ實に當然の事である。然も今回の如く貴族院を土臺とせる超然内閣が成立した以上、方にその改革の機運は正面より勃發し、以て天地に澎湃せざるを得ない。

抑も、憲法上より見て、現在貴族院の地位組織より考察すれば、今日の如く貴族院議員が、或は公正會、或は幸無四派或は研究會など稱して、一種の黨派的團體を組み、その團體の意見を纒めて一種の黨議として決定し、以て政治上の方策を樹立するが如きは不當であり、憲法の精神に背馳するものであると思ふ。貴族院議員は、各自獨立して個人の立場に於て、自由なる意見を吐露し、囚はれざる經綸を論じ、一旦衆議院が非理を働く場合には之れを監督するのを本領とせねばならぬ。此の故に貴族院自らが正面に出でゝ内閣を組織し、大命降下者から政權の委譲を受けて、猥りに閣員に列し政權を壟斷するが如きは、憲法政治の根幹を顚覆せしめ、其の本然の使命を忘却して、自ら死地につかんとするものである。彼等貴族が自ら好んで亡ぶことは國民の關知する所ではないが、之れが爲め立憲の大義を亡ぼすに至りては斷じて國民の忍ぶ能はざるところである。

貴族院の改革は最早や論議の餘地なく、國民の等しく希望するところであるのみならず、貴族院内部に於ても、一部聰明の人々から既に自發的に之れを提唱してゐる。例へば近衞公爵を中心として、副島伯、中川男等はその急先鋒として活躍を開始してゐると傳聞してゐるが、然らば貴族院は如何に改革されるであらうか。之れ實に華胄界の新人等が、その「階級」を次の時代に容れ得らるゝやう努力する所であつて、貴族の死活の大問題であるが、一方國民の階級意識のめざめと相照應して内外から壓搾して、玆に一大刷新が行はれるゝの日も遠くはあるまいと思ふ。

國民は既に「貴族院」と稱する「名稱」そのものに對してすら反感と憎惡とを抱持してゐる。

國民は貴族の横暴と政權壟斷とを斷じて許すことは出來ない。然し乍ら只、憲法第十五條に

「天皇ハ爵位勳章及ソノ他ノ榮典ヲ授與ス」

と規定され、天皇の榮譽大權に基いて國家の功勞者に一定の榮

典を與ふることになつてゐるから、その「階級の存在」を、今日の場合には否認することは出來ない。

然し乍ら、今日の貴族は往時に於ける封建意識に立脚した「所謂理由なくして尊敬を受くる貴族」とはその根本に於て相違してゐる。

封建意識の中に在る貴族なるものは、即ち「殿様」「殿様の息子」と稱し、よしそれが馬鹿であらうと何であらうと因襲的に尊敬したものである。然し乍ら今日の貴族は封建意識の脫却した立憲的貴族であるからして、何等平民と異るものでない、今日の貴族とは「天皇より榮典を與へられたる人」といふ標示に過ぎない。

然らば、彼等貴族自らが主觀的立場より自己反省をしたならば、

「自分等は、その身未熟、未だ充分國家に功を樹て得ざるにも拘らず、身に餘る榮典を享受したのであるから、むしろ省みて自ら恐懼し、國民の靴のひもを結ぶのが任務である」

と、國民の前にその身を謹むことこそ本意であらう。それにも拘らず、一度彼等は此の榮典を荷負するや、俄然として國民以上に尊き種族であるかの如く己惚れ、封建意識の貴族に成りすまして、誇り顏に天下を横行して憚らず、洵に斯くの如き輩は神聖なる天皇の榮譽大權を冒瀆すること甚大なるものである。

貴族院の改革も速かに行ふべしだが、それに先ち先づ彼等が立憲治下の貴族と封建意識の中の貴族との相違を充分に自覺し、速かに封建意識の貴族根性を自ら抛棄せねばならぬ。

四、閥僚政治の罪弊

偶々貴族院の一部は、自ら貴族の誇りを封建意識の中に培養して、現下の政變に處し、俄然その惡性を現はし、木偶の如き淸浦子爵を舁ぎ出し、時代錯誤の老人を囮として以て政權を壟斷したのであるが、之れ諒かに貴族の本分を忘却した行爲であるが故に、確かに榮譽大權を冒瀆したものであると共に、一面國民に向つて階級的挑戰を好むで試みんとするものである。咄、何たる愚かなる所業であらうか。彼等は大正の聖代に、烏帽子垂

直を着用し、足輕を多數養成して引具し、地震で破れかゝりの天主閣に籠城して、七千萬の立憲的國民と戰ひ、窃かにその勝利を夢みてゐるのである。愚者の所業茲まで徹底すれば、むしろ滑稽である。

更始一新!!

我等は此の奇怪なる錯的政治現象を機會として方に生れ出でんとする滑稽なる濕着黨を撲滅し、本來貴族の面目を矯正し、更に此の際進んで、彼の忌むべき屬僚政治の一大惡風を徹底的に掃蕩せねばならぬ。

現下の政局を俯瞰すれば、實に混沌亂麻の如きものである。斯くまでに至らしめ、然もそれを整理する丈けの偉大なる政治家が無き結果として、官場の空氣は結滯凝結して恰も、娼婦上りの妻女が破れ世帯に臨むが如き醜惡なる屬僚政治に墮してゐるのである。

此の秋にあたり、須らく大局を達觀し、內治外交の一大刷新を加へ、將に迷路に陷らんとする帝國の政治を憲政の常道に蘇生せしめ、大に國運の發展を期すべく、一大努力をなさねばならぬ。

悲しい哉、規模狹隘なる政策を胸裏に抱藏し、雄大なる經綸を天下に獅子吼する大政治家の乏きことを。

人ありていふ!!

「地球を抱いて月を枕に虛空に寢る」と。方に此の徹底的氣魄を天下に伸べ雄大なる政治を行ふ偉人はないか、我輩、時に之れを憶ふて感慨無量なものがある。

翻つて屬僚政治の弊風を見る!!

偶々貴族階級の貴公子等が、上院に於ける多數黨の援護を受けて大臣の椅子をかち得るや、その味をしめて、國政は屬に委してあづかり知らず、十日に一度盲印を捺し、得々として大臣試驗にパッスせることを誇り得て以來、彼等は俄かに「大臣」たるものゝ易々たる職業なることを知り、爾來、頻りに之れを涉獵するに至つたのである。

「屬僚政治下に於ける大臣の要職は、棚の牡丹餅よりも甘く、その仕事は箸を持つよりも易し」

といふ有樣を呈し、いよ〳〵屬僚政治を增長せしむるに至つた

のである。翻つて、黒田子、靑木子、水野子、其他上院各團體幹部の內部的統括の勞苦は實に容易ならざるものであるが、それによつて表面に現はるゝ大臣なるものは、幹部の勞苦に引かへて、一切は屬僚委せであるから、左團扇を使ふ丈けの仕事に過ぎずして、全く平安人形の右大臣左大臣の如きものである。

蓋し、「人形大臣」を立憲國に存在することを許すといふ惡風は、全く屬僚政治の惡弊の結果にして、此の惡風を忍んで將來にのこすに至らば、遂に日本をして、救ふべからざる狀態に陷らしむることは自明のことである。

屬僚政治の打破!!

之れを我輩は國民と共に徹底せしめ、木偶大臣を破壞し、單に盲印を捺すことのみを以て大臣の仕事とせず、大臣自ら施政方針を樹立し自ら之れを天下に演說し、大臣反て屬僚の頤使に甘んずるが如き變體失體を顯さざる實力を保有する閣僚を我が新日本の內閣に得度いものであると思ふ。

五、過渡的政治の終末

政友會は、以前原敬氏の時代に於て、貴族院の一部の人々と相携へて國政燮理の任に當つたたことがあるが、之れが爲めに一部貴族を增長慢心せしめ、延いては屬僚政治に油を注いだやうな結果に至つた憾みがある。洵に之れを今日よりいふならば或は政友會の責任ともいふ事が出來やう。

政治上の責任は公明である。過去の歷史を顧みるときは、甚だ遺憾であると思ふことが一再に止らない。所が、多くの政治家は、此の遺憾なる歷史上の事實を種々に詭辨を弄して蔽はんとする傾向があるが、我輩は斷じて斯る不公明を忌むものである。

個人に於ても缺點がある。況や多數の人々が政治上の集團をなした場合に於ては、その集團が黨議として決定する所の主義政策なるものは純理想的であり、完全であるものでない。殊にその時の政情に相應する政策を樹立するのであるから、之れを後日にして顧るならば必ず不滿足であるに相違ない。此の不滿足

を殊更に蔽はんとするは、政黨自らが國民を僞瞞せんとするものに他ならないのであるからして、我輩は過去の政友會の政策中の非を非とするに敢て憚らないものである。

政情は源泉であり、流水の如きものである。溪間を流るゝ時は岩に激して飛沫となり、深潭に至れば湛然油の如く大河に至れば滾然滔々たり、大海に至れば濤波を成す。

地、所、位、の三者に依りて各々の現象を異にするものである。政治も又是れである。從つて政治現象の批判は、現下に直面して前後を斷ずるべき性質のもので、大海の濤波を以て溪谷の飛沫を非議すべきでない。

此の公明なる立場よりして、政友會現在の所信に立脚して過去を眺むるならば、屬僚政治、貴族の增長は過去の政友會が一部の責任を負ふべきことであるは勿論である。

然し乍ら、過渡期に於ける實際政治は、斯くあらねば成し得なかつた事情がある。蓋し原敬氏は過渡時代に於ける大政治家であつた。彼れの偉才は古今の政治家を壓倒してゐる。然し、最早や過渡的政治家は原敬氏を以て終末を告げた。大河の水今や大海に入つた。今日の政治家は自らその志すところが違つて來てゐる。

世間やゝもすれば、

「加藤內閣及び山本內閣と淸浦內閣とは何れも超然內閣であつて、同一性質のものであるにも拘らず、政友會が前二者を是認して後者を非議せんとするは矛盾してゐる」

とて我々の態度は批難するものがあるが、それは皮相の意見であると思ふ。

今少しく我輩をして語らしめよ。

彼の加藤內閣の時代に於ては、確かに政友會が之を援護したきらいがあるかも知れぬが、その當時の事情を顧ると、原敬氏が不慮の最後を遂げられた結果として、高橋內閣が成立したのであるが、偶々政友會內に於て、改造非改造問題の紛糾を招いた結果、高橋內閣は此の問題の爲めに總辭職を決行したのである。然るにその後繼內閣としては當然反對黨に渡さるべきが常道であつたけれども、當時反對黨は、寺內內閣樹立の當時に於ける政友會のそれよりも一層微力であつたため、遂に加藤內閣

が成立したのであつた。而して又原氏の時代よりヴェルサイユ講和會議が始まつてゐた。次で海軍力充實の問題、更に進んで華盛頓會議、宮中の大事としては良子女王の御事あり、引づゞいて、

聖上陛下の御不例、

攝政の問題懸案となること約一年間、

等大小苦心多き問題は先から先へと渦をまいて起つて來て元老故山縣公をはじめ重臣連は非常なる苦勞をしたのであつた。

斯くて華府會議の開催を見た爲めに、かねて問題となつてゐた貴族院の不合理なる專恣横暴を制する閑がなかつた。此のことたるや既に原内閣の時に考へられてゐたのであつたが之れを遂行するの機會なくして終り、加藤内閣の時代に至つては、華府會議の結末をつけるといふ問題の爲め、之れを援助せねばならぬ立場に在つたので、此の時も政友會は忍ぶことになつたのである。

政友會が貴族院の横暴と不合理なる政權慾とを牽制すべく志したのは決して今に始まつたことではなかつた。只實際政治の事情の下に忍び忍んで今日に到つたのである。

然しながら「佛の顔も日に三度」といふ事がある。我々の隱忍をよいことにして、貴族院の一團が遂に政權の舞臺に乘り出して、木偶を安置して、國政を弄ぶといふ如き現狀を呈し、妖怪の天地を旭日の日本に築かんとするに至つては、最早や堪忍袋の緒も切れざるを得ないではないか、況や加藤内閣等に對して忍んだやうな政治的事情は現内閣に對しては露ほどもないに於てをやだ。

翻つて彼の寺内内閣の時に於て見るに、當時絶對多數黨たる大隈内閣が倒れた後に出現した超然内閣であつたけれども、此の時には我が政友會は極めて少數黨であつて議會の三分の一にも達せぬ黨員を有したに過ぎなかつたゝめ隱忍せざるを得なかつたのである。

又、山本内閣に於ては、その組閣の方針が既成政黨打破、新黨樹立の色彩を帶び、殊に少數とは云ひながら犬養氏の一派が之れに參加して居り、一少部分の貴族を包含してゐたに過ぎなかつた。のみならず、振古未曾有の大震災直後に當面してゐ

たゝめ徒らに政爭に沒頭して、罹災者の窮狀を拋棄する譯には行かぬ事情があつたので、之れまた暫く隱忍を餘儀なくせられたのである。

斯くの如く、寺內內閣以來、最近の加藤、山本の兩內閣に至るまで忍び得る丈け忍んだのであつたが、今や、佛の顏も日に三度である。今に及んで、此の貴族の橫暴、超然內閣の成立を防止せねば、百年の後と云へども、立憲の正道を確立することは出來ないであらう。否立憲の正道を蹈外すのみならず、僅か二百足らずの華族議員が大名政治を行ふて得々たる珍現象を永久に容認せねばならぬ破滅に陷るであらう。

護憲の大旆を推し立てゝ、天下と共に徃かんとする所以は實に此の間の消息に基くものである。

六、政治現象と政策の更改

政治理想と現實に於ける政治現象とは常に多大の間隔がある。理想政治家の言論と實際政治家の行動とは常に花實の相違がある。

我が政友會は比較的他の黨派よりも、政權を掌握してゐた時代が長かつたゝめ常に實行者の立場に在つたのである。從つてその政黨史は常に進みつゝある國民に相反映せしむるときは、自他共に甚だ不滿足なものである。

然り、實情は常に理想より後れてゐる爲めに、我黨の政策は知らず〱の間に國民の主張の奔りを制掣し、國民感情の發露を制抑した憾みがある。然しながら、之れありとて國民を無視したものでは勿論ない。

過去數年間政友會を稱して「ブルジョア政黨」と名づけられ「不合理なる多數黨」と云はれるに至つたが、深く之れを考へて見れば、即ち實際政治の任に當り、余りに長く政權を取つてゐた關係から、時代と共に進み行く國民の理想と若干の懸隔を生じた爲めである。然し、政治は理であり勢であり、寸前暗黑の前途を料理するには、その現狀のまゝに自から在り得ないのは當然である。理勢の赴くところ、新らしく政黨の本領は掲げらるべきものである。

舊き日本の政治家は、政黨の主義、主張、本領といふものは

立黨の當初に定められたる一定の信條を永久不變に守つて行かねばならぬもの〻やうに考へてゐて、前の政策や本領を改むることを變節と云ひ、豹變と稱して、政治道德上の罪惡かの如く考へるものがあるが、我輩をして云はしむれば、政治は理であり且つ勢である。政治は水の如きものであるからして、國民思想の流れに從つて當然流轉せねばならぬと思ふ。

政治上の政策や本領なるものは、宗教の信條とは趣きを異にしてゐる。眞理は不變である、けれどもその眞理泉源から流れ川る現象は常に寸時も同一に止まるものでない。

政黨は政治學の原理を講釋するのではない。即ち刻々に流轉して行く政治現象の統制と秩序ある發達を促すべき役目を勤むるものである。故に昨日の政友會は必ずしも今日の政友會ではないのである

政黨の政策と云ひ本領といふものは、常に現實の政治現象を見て、これを統制する爲めに作られたものであるが、一旦新たなる政治現象が發生した場合、從來の政策、本領では之れを說明し或は統制し得ないとするときは速かに、その政策本領の更始一新を促さねばならぬものである。

例へば！！現今に於ける著しい政治現象としては、日本の少數階級が橫恣にも政權を壟斷して跳梁を極めてゐた。之が爲め國民の反感はハチキレさうになつてゐた。偶々それが淸浦內閣に於て爆發するに至つたのである。此の場合、然も貴族の專恣のみならず、淸浦內閣はその大命拜受の當初に於て、非立憲的、間違ひだらけの變態的政治を惹起せしめたのである。玆に於て階級意識の急激なる目醒めを呼び起し、國民思想界に未曾有の衝動を與へ、全く未だ曾つてなき國民の思想感情を挑發したのである。此の新たなる政治現象に對して政黨は如何なる態度を取るべきであらうか。然り、玆に政界の一大換氣法を行はねばならぬのである。之れが即ち政黨の使命である。今や過去に於て定められたる政策を超越して更始一新の宣揚に努力せねばならぬのである。獨り、之れ政友會のみに止らず、何れの政黨と雖も政策の末節に拘泥してはならない。

「政策を超越せねばならぬ」といふことは、即ち新政治現象に對して既往の政策では說明し、統制し得ないからであつて、政

黨の政策なるものが、一定不變なる宗教の信條の如きものでない所以である。

政友會は内閣の根本政策の是非を見て必ず進退を決したかといふに、既往に於ても必ず然らでなかつた。彼の第三次桂内閣の時に於ては、桂の政綱が果して我黨の政綱と合致するか否かといふ如きことを見ずして、直に桂内閣は宮中府中の別を紊るものとして、彈劾し「玉座を以て胸壁とし勅を以て彈丸とする」と有名な警句を以て闘士尾崎行雄君が大獅々吼をやつた例もある、爾來、十有余年、時代は益々進歩し、憲政は世界の發展に伴ふていよ〳〵確立せねばならぬ秋にあたり、桂内閣以上の不埒横暴なる内閣が出現したのであるから、政策の如何の如きは敢て問ふ所でないのである。

七、地租移讓と因襲打破

政友會は今や、すべての舊殻を脱して、政黨本來の面目に歸らんとしてゐる。而して從來我黨を目してブルジョアの味方でありプロレタリアの敵であるとした世間の謬想を速かに打破し、あらゆる因襲の桎梏から脱脚せんとするものである。

我が、高橋總裁が敢然貴族の位地を去り一平民となつたのも、即ち自ら因襲を打破するに至つたものである。

然り、華族であるからとて盛夏に涼しさを感じ、嚴冬に溫かさを感ずるといふやうな自然の恩惠が平民以上にあらう筈はなく、平民の味ふ牛肉も、華族の味ふ牛肉も同じ程度の滋養物としかならないのである。從つて、高橋氏が平民となりしことゝ、それ自體にて於は何等特別に惠澤の除去さるゝべきものはない。けれども爵あるものが爵を抛つといふことは精神的桎梏を脱する點に非常なる衝動を與ふるものである。

封建的殿様氣分が深く身に浸み込むで、有爵者といふ主觀的プライドを抛つことは本人に取つては非常なる苦痛であるに相違ない。この主觀的プライドを抛つことが何故に苦痛であるかと云へば、即ち因襲に基くものである。此の因襲を脱脚することは大なる精神的苦痛であつて、容易に脱し得らるゝものはない。それを高橋氏が自ら抛つて封建的貴族意識の中から脱れ出でた所に氏の偉大なる所が生ずるのである。

政友會は高橋總裁の辭爵に依つて、あらゆる政黨的の因襲をも抛ち、蓄積した政黨の舊き要素を洗禮し、更始一新、國民と共に永久に生きんとする精神に立ち直つて來たのである。我黨は今や囚はるることなき、新時代の政黨として天下に立つた單なるブルジョア政黨では斷じてないのである。否我黨は自由黨以來、農民を根幹とした無産階級の自由民權伸長に努力して來たのである。最近の主張に於て見ても、

地租移讓の問題と因襲打破の主張

とは瞭かにプロレタリアの味方たるべき政黨であることを表示してゐるではないか。

地租移讓は大震災の爲め四十八議會の問題たる事を遷延せしめねばならぬ、財政的事情を生じたけれども、抑も地租移讓の根本精神は奈邊にあるかと云へば、漸進的土地改革の前提であつたとも云ひ得やう、歐州に於ける小アンタントの諸國の如き完全急激なる土地改革は我が國情に添ひかねるものがあるけれども、政治家としては將來の國民思想の赴くところを考察して、その出現する時代の爲めに前提的の政策を樹立するに志さればならぬ。昨年であるが我黨が之れを提唱するや、貴族院の一部と元老の一部とに反對の聲が起つた。此の時、我黨は無産農民の仇敵は貴族である、斯る無産農民の福利を增進すべき政策を蹂躙する貴族ありとせば速かに之れが改革を斷行せねばならぬとして、既に當時栃木縣下の演說會その他に於て所信の一端を披瀝したのであるが、今やその所信を一層早むべき直下の政治現象を見るに至つたのは不幸中の幸とせねばならぬと思ふ。

政友會の政策は、單にそれのみではない、第四十六議會に於て因襲打破の建議案を提出した。此の根本精神たるや地租移讓が經濟的平等政策たるに對比して、之れは階級的差別觀念の平衡を猶らさんとする政策であつた。兩者共にデモクラシイの徹底であり、平等大慈悲觀の如實的示現である。

我黨が、此の提唱をなした當時、政友會内一部では尙早であるとし、世間では橫田は「新らしがる」と云はれたけれども地租移讓は大化の改新に於て土地國有制を斷行したのに比すれば未だ微溫的であり、因襲打破は華族撤廢論に及ばさるが故に未だ漸進的なものではないか。此の二つの政策が新らしいので

なくして政友會その他我國の政治上政策が悉く古くして生優しいもの許りであるから、特に目新らしく感ずるのである。倘しこれを數十年後の日本の政治家から見るならば、我々の思想や我々の政見は、むしろ滑稽兒戲に類するものとして憤飯に値ひするものであるに相違ない。

九、元老の取越苦勞と現内閣

余談は扨て置き!!

現下の政局批判に歸つて見ると、元老が淸浦子爵を推薦した理由は要は時局を紛糾せしめず、平靜なる政局を希望する立場から之れならば大丈夫であらうといふ觀測の下に淸浦子を推薦したものであらう。俄然不評判な山本内閣が失態に失態を重ねて瓦解したのに次で、議會に於ける多數黨は不自然なる多數黨であるとして國民が反感を持つてゐるから之れに組閣させても時局は收拾出來まいし少數黨は微力であるから獨力組閣は覺束なし、さりとて官僚政治家は勿論人氣も實力もなく實業家、智識階級は柄でなく、せめて老淸浦を立てたら何とか丸く收まるであらうといふ意味で推薦したのかも知れない。

元老は老人である、老人といふものは取越し苦勞の多いものであるが故に成るべく政爭を避けさせやうとしたのであらう。當面には御慶事を控へ總選擧も近づいて來てゐる、内治外交共に紊亂してゐるから、之れに對して雄大な政策を行ふ内閣が出現するまで、卽ち總選擧のつなぎまでに淸浦位ひを微溫的に立てゝ置いていよ〳〵總選擧の結果、政治的分野が決定して後憲政の常道に立脚して、立派な内閣を奏薦しやうといふ老婆心から出でたものであらう。

從つて我輩は決して元老を惡いとは思はない、元老攻擊は余りに老人の心理を理解しない、純理論的政論であるとして、暫らく之れを收めて置きたい。

望月の缺けたる事もなしと思ふて、萬能を自負した政治家も昔はあつた。然し乍ら、それは封建的思想の下に英雄政治、專制政治が行はれた時代の夢である。人間の力は微力である、元老の注文通りに政界が收まると思ふのは、あまりに複雜な政治現象を見くびつたものである。況や元老は神佛ではない、六根淸

淨、無碍神通力、第九識に徹底した大圓鏡智の持主ならイザ知らず、元老とても畢竟人智の持主に過ぎないから、見當外れのことを行ふのも又止むを得ずとして深く責むべきでないと思ふ。

生死罪濁、煩惱具足は萬人共通である。生々流轉寸前暗黑、政局の將來を卜知するものは只佛天あるのみである。人間の微力なる克く大自然に拮抗することは出來ない、水の如く流るゝ政局の轉換に乘じて雄大なる政策を行ふことも要は眞如緣起の一大波瀾に過ぎない。

脚下を見れば護憲三派の融合が什うの恁うのと云ふ。然れども、日月歡替して止らず、斯くの如きは年月の流れに洗はれて自然に吹き飛ばされるのみである。心ある政治家は、敢て之を憂ふるものではない。

淸浦殿樣內閣の下に時代錯誤の政黨が、さもしい根性を出してゐる。護憲軍は之れを撤擊せんとする。政治は爭ひである。爭ひは波瀾を生む然し乍ら、此の波瀾あればこそ、民心の噴火口を大海の一方に向け得て結局無事なるを得るのである。

政爭なき世界は死の世界である。政爭は人間が生くる爲めに必要なる尊き爭ひである、然るに、此の爭ひを不合理に導き、嫉心妄念の非立憲的階級鬪爭と化せしむるのは、全く之れ不合理極る議會の解散である。淸浦內閣は、理由なき解散を行つた。

憲法上に於て解散を行ふ場合といふのは、只民意が不明であるときに限らるゝのが正當である。然らば現下の政局は果して民意が不明であるか否か、衆議院の護憲三派は瞭らかに現內閣不信任を表明し、全國の新聞雜誌悉く筆を揃へて非立憲內閣を痛擊してゐる、是れを以て未だ民意が不明であるとなすのであるか、日比谷の燒打を行ひ、流血の慘を行はずんば不信任の程度が白熱したと云へないのかも知れないが、言論の巨彈を奪ふて直接行動を暗に獎勵する結果を齎らさんとする責は何處にあるであらうか。

明瞭なる國民の意思を曲げて解散し、足輕の力をかりて虛名の大臣椅子にカジリ付かんとする陋劣なる貴族連が、眞に政治の妙諦を發揮し得るや否や、洵に之れ妖雲聖明を蔽ひ、昏盲の闇帝國を包むものでなくて何ぞや。

起て、國民諸君、

三垢の冥を消除し、此の昏盲の闇を滅するは帝國の將來を安泰に導く唯一の方途である。政治は理であり勢である。政治は泉源であり、流水の如きものである。鎧袖一觸現內閣の如き、溫着黨の如きを葬るは洵に首途の血祭りに過ぎない。

八、附熱隨炎の溫着黨

現下の政局に一大變動を與へたのは政友會の中に多數脫走者を出し彼等が新たに一黨を成して清浦內閣を援助せんとする狀態を呈してゐることである

不肖、横田一個としては、脫走者の諸君の內には長い間相握手して胸襟を披瀝し、天下を談じた人も少くない。從つて、今茲に袂を分つたといふことに就ては洵に遺憾であると共に、惜別の悲み、自ら胸を突くものがある。從つて脫走した各個人に對しては舊交依然その間何等相反噬する所は少しもない。然し乍ら政黨の一員として、政治上の論爭となれば堂々として、彼等を排擊するに躊躇しない。我輩は此の立場からして、脫走組の黨派を「穩着黨」とのゝしり、或は「溫着黨」と排擊せんとするものである。

我が政友會は、自由黨以來「穩健着實」を以て標語としてゐる、卽ち立憲的言論を武器とし、議會を楯として、常に穩健着實の政策に向つて進んで來た、然し乍ら横暴なる勢力に屈服することは「健」と「實」とを失ふものであるからして、之れには奮迅の勇を鼓して拮抗せんとするものである。

然るに、脫走組は、此の「健」と「實」とを忘却して、非立憲的清浦內閣を支持し、官憲の力を賴むで自力を恃まず、憲政を蹂躙して虛黨僞黨に甘んぜんとするが故に、我輩之れを名づけて、「附熱隨炎の穩着黨」といふ。何となれば彼等は穩健を穿き違へて不合理なる沈滯を希求し、着實を僞瞞して政權に執着せんとしてゐるからである。

彼等新政黨は、自由黨以來の穩健着實の標語を拋棄して脫走し、國民の反感怨府の的となつてゐる清浦內閣を助けんとしてゐる。もし彼等にして護憲派と一致協力して現內閣に反對したならば、直下に此の內閣を倒潰せしむることが出來て、眞に穩健着實なる立憲的後繼內閣を出現せしむることが出來るにも拘らず、彼等は一時の安逸を偸まんとして迷妄の巷を彷徨し非立憲の世界に輪廻しつゝあるのである。何といふあさましい根性であらうかと、むしろ悠然たらざるを得ない。

加ふるに近來、彼等は一黨を成すと共に農村振興の事を非常に力說してゐるけれども、之れ全く虛構の言にして、曾つて彼等

が政友會にあつた當時、一昨年末より昨年初頭に至るまで政友會の黨議として、農村振興、地租移讓、農務省の獨立等を決した節に之れに反對したのは現在脱走組の領袖連であつたではないか。且つ又行政財政の根本的整理を議した當時にも、その言行の不可能なることを口實にして熱心に反對したのも又彼等脱走組の領袖であつた。斯くして今日彼等は去つたのであるが、幸ひにして彼等の脱走を期として我政友會は立黨當時の大精神に還元し、自由黨以來の眞實心に復歸した。

彼等脱走組は、現在第二維新の政治改革に當面し、かゝる政治上の一大エポックを劃する秋に於て、之れに對應する頭腦の持主でないのであるから、最早や現代の政治を論ずる資格がないと云つてよからう。

改革の機運に乘じて、眞に偉大なる力を發揮することこそ政治家としての本領であり男子の氣慨である。自由黨は板垣、星、原、といふが如き革新的政治家の手によつて、その生命を今日に潑溂たらしめた。明治初年民選議員を提唱した板垣氏の果斷次で星先生の立憲的政治革新等は非常なる努力を要したものである。更に伊藤公が政友會創立に際して、藩閥の巨頭としての境域を一擲して政黨に投じた英斷は、想像するだに壯快である。斯くして原氏を經て今日に至る我政友會は依然として穩健着實を本領とし、然も果斷と勇氣とを兩翼として波瀾多き前途の政界に臨まんとしてゐる。之れ眞實の穩健着實である。近來時代錯誤の穩着黨に自由黨以來の精神を爪の垢程存せしめてやり度いと思ふ。

之れを要するに!!

現内閣は組閣の當時既に大失態を演じその閣僚の選定に於て大權の分割委議といふ暴擧を敢てし、次で、窃に政友會脱走組と相抱擁して政權を持續せん爲めに不當なる解散を敢てして次の總選擧に臨まんとしてゐる。既に、組閣の根本精神たる選擧の公平を行ひ得ざるは十目の見るところ十指の指す所悉く然りである。然らば選擧の公平を行ひ得ざること明瞭となつた以上、現内閣は精神的に存立の意義なきのみならず、何の目的を有する内閣なるか不明である。恐らく清浦首相と雖も、何故に首相たるやの意義を見出すことは出來ないであらう。

此の間、我が產業政策、教育、外交は、退嬰して、政務は紊亂荒廢せんとしてゐる。

最早や現内閣は形骸を存せるのみで、完全に精神的死滅を來してゐる。

清浦内閣が一日長く存すれば、國民は一日深く禍を受く。咄妖雲消へて去れ……。(大正十三、一、九日稿)

總選擧後に於ける各派消長の豫測

總選擧後に於ける各政派勢力の消長の豫測といふが如きは、勿論困難ではあるが、貴族内閣の出現、政友會の分裂、新政黨の出現など政界異常の混迷狀態を現出した折りではあり、傍々興味ある問題と思ひ政治家、學者の諸家に御願した處、左記各氏の御解答を得た。

○　阿部次郎

そんな選擧委員長向きの問題は僕にはわかりません、たゞ政友本黨なるものが多くなつたらそれは官權の力でそれが馬鹿に多くなつたら干渉が行はれた證據になるとは豫測(?)してゐます選擧の結果によつて、公平々々と繰返して居る連中が嘘をついたかつかないかを見定めるため、彼等の顏をのぞいてやるのがいまから一寸たのしみです。今、選擧公平監視會のやうなものを組織したら面白いでせうね。

○　末廣重雄

政友會の前議會に於る大勢力は大正九年の總選擧の際官憲の庇護と政商より搾り取つた金の力とによつて作り上げられたのである。然るに今や尾羽打枯した在野黨となりしかも俄仕込の憲政擁護論では國民の同情を得難いから來るべき總選擧に於ては定めし其勢力の大減少を見るであらう政友本黨は政權の餓鬼の醜團ではあるが軍用金が潤澤であるやうであり淸浦内閣の標榜する選擧の公正は頗る怪しいものであるから或は其勢力の增大あるやも計り難い憲政會は政友會と政友本黨との爭に乘じ漁夫の利を占め黨勢を挽回する見込があるが問題は政友本黨と憲政會の孰れが衆議院の第一黨なるかにある。革新俱樂部や實業同志會は問題とするに足らぬ。

○　馬場恒吾

政友會憲政會革新俱樂部卽ち今憲政擁護をやつてゐる三派の連會が衆議院の多數になる事丈けはたしかです。これが矢張淸浦内閣に反對すれば淸浦子は再び解散する勇氣たく辭職する外たからん。

○　北昤吉

選擧後の各派の勢力の消長は嚴密には豫測は出來ぬ。併し今の選擧制と選擧民の心理では矢張政友本黨が第一黨とならう。そうして憲政會も二三十名は殖へるだらう。政友會の態度は健氣だが代議士は少々減じても增すまい。特權内閣に反對しながら無條件の普選卽行に徹底しながらである。革新俱樂部は先づ現勢の儘だらう。

○　下村宏

日本といふ國では與黨になれば多數、野黨となれば少數となることを例としてます。然かし今度は僅かに此の原則を繰り返へすことはないでせう。

先づ先引解散前とあまり大差ない處に落付きはしないか、只憲政會が積年の不遇に對する同情は相當有利なりと思はれる何れにしても豫測し得べきものではない只何れの黨派も創痍だらけで一向に感心しませぬが折角清浦内閣の出現により幾多の缺陥が曝露せられこゝに將來皇室に累を及ぼさず眞に憲政の常道に入るべき曙光は見えたのですから三派合同の與黨より多數なるべきは勿論第一黨の勝利も所謂護憲三派中よりかち得なければならぬ問題は結局國民の自覺であります次は勝つまでの三派よりも勝ちし後の三派です少しは高處に立ちて邦國の大計を達觀すべきです。

○　關　和知

選擧が比較的公正に行はるゝと見て

憲政會	百五十人内外
政本黨	百二十人内外
政友會	百人内外
革新	五十人内外
實業同志	二十人内外
無所屬	二十人内外

以上の觀測に候

○　堀江歸一

御照會の件に就ては、只今の處何等の推測を下し難く候。

右

○　室伏高信

政友本黨は選擧干渉によつて第一黨たらんか。次は憲政會、政友會は百以下に落ち、革新俱樂部は現狀維持、外に鐘紡黨五、六名、庚申式御用議員數十名。

○　土田杏村

合理的のものは豫測も出來ようが、近來の政界は全然豫測を超越して居ると思ふ。政府當路者や政黨は勿論信賴すべくも無いが、社會的教育の徹底して居ない現時の民衆をも、どれだけの程度まで信賴してよいのか、私は近來甚だ懷疑的となつて居る。勿論政府の大干渉あるものと考へて、政友本黨が第一黨となり、政友會は低下し憲政會は高上し其の勢力相等しく、革新には大した變化があるまい。但し三派聯合すれば依然として議會の多數を制することが出來るであらう。

○　田川大吉郎

一、聯合三派は、少くも二百七八十名は出されるでせう。

政友會と、憲政會と、どちらが其の一位を占められるかは問題です私は多年の關係から言へば、憲政會の一位を占められることを望みますけれど、今回の戰ひの性質とその影響から言へば、政友會の一位を占められることが必要でありませう、

一、政友本黨は、理に於ては、少くなるべき筈ですが、さうも往きますまい、日本國民の志操は存外薄弱だから、

それでも殘り百八九十名を、政友本黨が殘らず占めらるゝとは思ひません、この中五十名は、中立者の分でその中にも、やゝ多數の獨立論者があらうと察してゐます。

○　　千葉龜雄

やはり政友本黨が、一番數が多く且つ勢力が强くなるではないかと思ひます、まだまだ國民の頭には政府黨があることの有難味がぬけませんから次は憲政會が多少大きくなると思ひます、憲政本黨と政權を爭ふべき地位にあるものは、政友會よりも憲政會であるやうに誰も思ひますから、革新俱樂部は縮小されなくとも、あまり大しやうにも思はれません。

○　　安部磯雄

今度の總選擧で各黨派に著しき消長が起らうとは考へません政友本黨は兎に角多少政府の援助を得るに相違ありませんが一方には最も不評判な清浦內閣の與黨と見られて居るため差引勘定現狀維持といふ所でしよう然し政友會が普選卽行といふことに決心し護憲三派が此旗幟で選擧に臨めば政友本黨は大分苦境に陷るだらうと思はれます何と言つても普選は今日の輿論ですから選擧後の內閣(三派聯立內閣にしても或は三派の內一つが組閣するにしても一が普選を卽行するといふ希望が生ずれば選擧の結果は憲政會、政友會、政友本黨、革新俱樂部といふ順序になるかも知れません。

○　　青野季吉

憲政會は少しへるかとも思ひますが、大體、憲政と革新とは現狀維持でしやう。政友本黨とは、一番興味があつて、それで一寸見當がつき兼ねますが、どうも政友會がふえそうな氣はいたしません。實業同志會も若干は出しましやう。それにこんどの選擧では無所屬で、注目に値する人が多少は出ると信じます。何しろ今は、政黨の分解時代新分子の擡頭時代ですから、水野內相が干渉をやらうとやるまいと、選擧の結果はかなり待たれます。政界の忠臣藏「護憲」がまだ客を呼ぶか、今の有權者が、どんなマゴツキかをたするかそれも見ものです。民衆の政治的關心の胎動は確かにこの一二年來の現象ですからそ　も、どれだけの形になつて現はれるか、相當興味があります。

○　　上田貞次郎

遺憾ながら本年の選擧も別段の事はなからうと思ひます卽ち政府黨たる政友本黨が第一黨となり政友會は多少減少憲政會は幾分增加して兩者伯仲の勢になるでしよう私の最も興味を寄せるのは實業同志會が交渉團體の定　までこぎつけるか何うかといふ事です。

文藝の職業化に就て

里見弴

古いことは姑く措いて、御維新以後、日本では、こゝ數年の間に、文學の仕事が著しく職業化されて來てゐる。――これを甚だ卑俗な言葉で言ひ換へるなら、どうやら「わりの合ふ仕事」になつて來た、とでも云ふべきところだらうか。以前には、慥にそれは「わりの合はない仕事」だつたのだ。勞の多いわりに、物質的に報はれるところの少ない、よつぽど好きでゞもなければ、馬鹿々々しくなるか、食へなくなるかで、とかく永もちのしにくい仕事だつたに違ひない。つまり、謂ふところの「道樂商賣」で、わりに合はふと合ふまいと、とてもやめられないほどの好きでこそ、窮乏も意とせず、俗人の輕侮は二三倍にしてもとへ戾してやると云ふやうな意氣で、おのづから別乾坤に遊適してゐた態がある。これを以て口を糊する「職業」と觀じることを、肯じなかつたか、潔しとしなかつたか、兎も角も金錢には緣も遠く、從つて、假令負惜みにもせよ、それに淡白でなければ、事實やつて行けなかつたのだ。

ところが、大正の聖代に及んで、所謂「文運の隆盛」と云ふやつが來た。但し茲では、この言葉の意味が、優れた作家の輩出と云ふ點よりも、むしろ、文藝の社會的浸潤に、より以上の重みを懸けてはゐないだらうか。この立論は、あながち現存の諸作家を譏るの意ではないが、然し、紅葉、露伴、一葉、二葉亭と云ふやうな、しつかりした、立派な作家たちをもつた前の時代と思ひ比べるならば、現在が決して滿足すべきものでないことは慥だ。翻つて、文藝が、社會

の各方面へ透浸して行つた點を考へると、現狀の如き、蓋し日本初つて以來のことに違ひない。而もこの傾向は、日を逐つて益々顯著ならんとしつゝあるのだ。賀すべきか弔すべきか、遽に斷じ難いのであるが、姑く世の常識に從つて、結構なことゝして置いて、さてその功は、過去の作家と現在の作家とのいづれに歸すべきだらう。重層的な結果と見るのが至當に違ひない。更にその功績の過半は社會にある。文化の發達にある。——文化的生活は、一面に於て、人々から時間を奪ひ、讀書の根氣をも消耗させてゐる筈であるのに、而も他方には、教育の普及や出版印刷等の業務の圓滑を促したてゝ、吾々が際會してゐるやうな「文運隆盛」の時を現前せしめたのだ。通俗低級なりとは云へ、四十萬と云ふ、十年前には新聞でさへも覺束なかつた發行部數を誇り得るやうな婦人雜誌などが現れて來たのだ。十餘年以前、予に仕拂はれた最低の原稿料からみると、今日の最高標準は、實に四十倍に達してゐる。いかに一般の物價騰貴が足早だつたとは云へ、まさか十年間に十倍にはなつてゐまい。假にさうであつたとしても、作家の報酬が、こゝ十年間で、約四倍されたわけだから、冒頭に述べたところの、以前わりに合はなかつた仕事も、今では相應わりよくなつたと云ふ事實の報告を、頷いて頂けるだらうと思ふ。即、近頃では、文筆の仕事も、他の職業と比べて更に遜色のない、相應の「稼ぎ」になつたわけである。現に五六年前から、作家に對する所得税の徵收の、俄に嚴重になつて來たのも、茲に緣つて職業としての公認を經た態で、當時予の實感は、六分の滑稽と三分の迷惑と一分の得意とが混合したやうなものだつたと記憶する。

以上は前置きである。予の考察は、斯樣にして文藝の仕事が職業化されたことから起る、利害得失の上に懸つてゐるのだ。それにはまづ、文藝作品の生れて來る動機について考へてみる必要があらう。

作家の心理として、一番純粹な創作動機は、と云へば、無論いゝ作を創ると云ふ一事しかない筈である。餘念があつ

てはならない筈である。そのためには、己の全精神を一作ごとに傾倒してかゝらなければならない。讀者も、批評家も、編輯者も、そんなものは一切念頭に在るべきではない。——それが正當な態度だ。要するに、己の滿足をもつて大專としなければならない仕事で、その點、需用を俟つて始めて制作の意義を生ずる他の營利事業とは、根本的に相異つてゐる。而も、物を與へて金錢を得ると云ふ表面の事實に至つては、他の商買と更に撰ぶところはないのだ。相異はたゞ、制作中の心理に存するだけだ。士魂商才と云ふ言葉があるが、だから「藝術家魂」を失つて了へば、純然たる商賣人に違ひないことになるのだ。

更に少しく見地を換へて云ふと、よい作品ならば、必ずそこに作者の全人格が、——魂が打ち込んである筈だが、節を爲り操を鬻ぐを、賣るべからざる大切なものを賣るが故の不徳となすのならば、魂を賣る文藝の仕事ほどの惡事は、他にちよつと類がないわけだらう。然し、よくしたもので、「藝術家魂」の強い人ほど、「商賣人根性」の持合せが少ない。少しでも餘計に原稿料を取らうとしたり、前借を踏み倒したり、さう云ふ慾深の現はれはあつても、心持の底に俗でないところがある。金錢に淡白らしく裝ふほどの俗氣がないか、或は、心底から淡白になり切つてゐるか、兎も角、立派な「魂を商ふ」ほどの人ならば、必ずやその魂が「商魂」であり得る筈はないのだから、本屋の番頭や編輯者などから、どんな風に思はれやうとも、更に痛痒は感じないわけである。反對に、俗な魂を商なつてゐながら藝術家然とした金錢に對する無關心を裝つたりしたところで、たゞもうお笑ひぐさである　商品が魂であるだけに、見る人の眼には、決して間違ひの起つて來ない點から、前にも「よくしたもので」と云つた次第である。

そこで、本論にはいつて、文藝の仕事が職業化されたのは、いゝことか惡いことか、——云ひ換へると、どう云ふ好結果を生じてゐるか、どう云ふ弊を醸してゐるか、その點について考へてみたい。それはまた、今日の文壇の側面觀に

もなると思ふから。

まづ好い方面から云ふなら、第一に擧げたいのは、それによつて、世の中に一つの「公平」が形造られつゝある點だ。よく人が冗談めかして云ふことだが。——世に文士くらゐいゝ商賣はない、元手と云つたら原稿紙とペンさへあればいゝのだし、書くことゝいへば、きまつて惚話か、さもなければ失戀の泣言なんぞを長々と聞かされる、讀者にこそいゝ面の皮だ、——などゝ。玆でそんな口を利く人々にまで相手になるにも及ばない話だが、しんにさう思ふなら自分がたればいゝことで、要するにくだらないやきもちに過ぎないとしても、とかく世間に、文筆の仕事を、樂な、大阪辯で云ふ「ぼろい」商賣のやうに考へてゐる人の多いのは事實だ。けれども、勿論、決してそれは眞相ではない。ずつと突きぬけて了つたなら、或は、仕事の時が、この上もなく樂しい、愉悅にばかり滿されてゐるやうなものになるのかも知れないが、今の予の如き、矛盾不調和と不自然とに苦しい生活を喘いでゐる心境では、仕事の辛さは實に容易ならざるものだ。單に外形の苦勞だけでも、旣に拙著「朱き机に凭りて」のうち「貧乏商賣」に述べたような有樣で、いくら豫想外に多分の仕拂をうけた時でも、未だ嘗て、こいつはうまい商賣だ、と云ふやうな、北叟笑みを經驗したことはない。これは獨り予のみの實感ではあるまい。この意味では、總ての作家は、悉く左傾的ならざるを得ない筈だ。たゞ彼等は、他人の財布を覗き込んで、金勘定をするやうな、さう云ふ劣さと暇とを持ち合せてゐないから、靜に己の天分に安じてゐるまでのことだ。殊に、近頃の仕拂額ならば、そこに安じてゐることも、あながち德川時代の職人根性の遺風であるところの、卑下屈伏にはあたらないのだ。慥に「公平」に近づきつゝあるのだ。

次に作家の物質生活が、十年以前に比べて數段の向上を見たことは、それが公平であるなしに拘らずとも、それだけとしても誠に結構なことに違ひない。なんでもしてよい、と云ふより、なんでもしなければならない筈の作家が、金の

ないために、なんにも出來なかつたと云ふことは、外國に聞えても、決して自慢にはならない話だ。一體に堅忍主義の色をもつて支那の格言にさへ「居は人の志をうつす」と云ふくらゐで、薄暗い下宿屋の二階や、せい〴〵棟割に毛の生へたくらゐの借家からばかり「文學」が生れて來るのでは、甚だ心細い次第で、作家の物質生活は、豐な上にも豐な方がいゝのだ。

第三には、作家の氣持に、「大人らしさ」と云ふか「成熟味」とでも呼ばふか、とかく以前の文學者にはありがちだつたところの、一種の「あそび氣分」を驅逐するに役立つてゐると思ふ。文學などゝ云ふものは、單に婦女子の玩弄物で、所詮男子一生の事業とするに足りない、そんな氣持から、ほんの片手間仕事扱ひにする傾や、或はどつち道それで生計は立たないのだからと、有產者が道樂にいぢくつてみたりする風があつた。現に予は、若年より文學に親しんだが、母から養家の資產が一生遊んで食つて行けるくらゐある由を聞かされた二十一歲までは、そこに身を立てやうと云ふ決心がつかなかつた。勿論その意味は、貧困を恐れたからではない、若年の頃はさう金錢の心配などしないものだ。予の危んだのは、筆が、賣ることを目的にした藝術に向つて動き出す點にあつた。つまり藝術至上主義の、勿態なさから來てゐたのだが、かれこれ資產を蕩盡した今日になつてみると、文筆の勞によつて衣食することの强みを感じること甚だ切なるものがある。

以上ほゞよい方面を說いた。同じ點で、然しながら弊も生じて來る。例へば、最後に云つた職業的藝術家の强味と云ふやうなものも、一方に弱味があればこそ生じるので、これは第二段、缺點を擧げる條に再說するつもりだが、締切が迫つたから、今月はこゝでひとまづ打切ることにしよう。

時評

商人政治への過程

長谷川如是閑

政治家と云ふ職業上の分業が成立したのは、比較的新しい事である。中世紀及び其以前に於ける政治は職業上の分業ではなく、職業に對立する非職業であつた。言ひ換へれば、政治は職業と云ふ生活樣式を否定する階級の生活態度であつた。希臘時代の政治家は實際に於て職業を持たない者の仕事であつたが、希臘末期に於ては、非職業階級の政治家がプロトクラシーの發達の爲に、職業に基く經濟的勢力に依る政治家の出現を促すに至つたが觀念的に政治家を職業を否定する生活態度の階級の仕事とする事は變らなかつた。プラトー、アリストートル等が職業を有する者は政治に關與せしめてはならぬと主張したのは、その傳統に依つてゐるのである。

かやうな觀念が成立した所以は、政治する者は征服した者であつたからである。言ひ換へれば、奴隸使役者であつたからである。原始的には奴隸使役者は征服者その儘の者であつたが、社會が征服者と被征服者即ち主人と奴隸との組織的構成の上に安定するに及んで、その奴隸使役の組織は、軍國組織から次第に經濟組織へと轉化するに至り、その結果さういふ組織の下に於ては、奴隸使役の關係は軍國的關係ではなく經濟的關係となるのである。希臘の社會も亦寧ろこの後者であつた。軍國關係が經濟關係に轉じた結果其外側に於て、あのやうな文化現象が生れたのである。從つて、希臘の社會が經濟關係の因果律に支配されて、プロトクラシーを生むに至つたのは當然である。而して此金權政治に於ては、政治家は從前の職業否定の遊食者よりは寧ろ職業による經濟的優越の結果の遊食者の手に移るのである。

即ち政治は職業の利害が有力に作用する現象となるのである。

近代に於て、貴族の手から商人の手に政治が渡される事となつたのは、やはり希臘時代の經過を繰り返したものである。封建貴族は丁度原始民族の軍事的優越に依る組織と似た根抵の上に存在するものであるが——無論複雜な經濟事情が封建貴族の軍事的優越と結び付いた事は、原始民族の簡單な經濟事情が其軍事上の優越と結び付いたのと比べて、殆んど質的に異る程であるが、然し兎に角封建貴族の發生は原始的權力關係の現象の繰り返しである——其勢力が商人に依つて取つて代らるるに至つたのは、經濟事情が、軍國貴族の組織を其經濟事情に隸屬せしむる傾向を取つて進化した故である。軍國組織が經濟組織に隸屬すると云ふ事は、決して右の場合に限つた譯ではないが、軍國的組織の中に於ては、經濟組織の有機過程に勢ひ二次的に、なり、組織的に壓迫せらるる譯であるが、其結果軍國組織其物の生活を來し、組織の壓迫に堪へて發生した自然の生産力の占有者の生活上の優越に軍國的優越が從屬せしめらるゝ結果となるのである。德川幕府が崩壞したのは、町人若くは農民の經濟力に依賴する事が、組織的に困難となつた爲である。而して其結果、それまで幕府又は諸侯に壓迫されてゐた經濟力の支配者たる商人及び地主の優越が、成り立ち、彼等の政治が持ち來されたのである。希臘では其時にプラトー、アリストートルが金權政治を攻擊したのであるが、それは丁度幕末の儒者が、明治の初年に、世は澆季となつたと歎息したのと同じである。

それはつまり政治が、職業を拒否する生活態度の階級の手から職業に立脚する階級の手へと移された事である。希臘時代でも、金權政治はさう云ふ過程によつて生れたのである。しかし近代の政治は職業が所謂資本主義的組織を生じたと云ふ特別の事情を有つてゐる。元來職業も始めは古代の職業と同じく、非職業階級の生活態度と正反對の生産的生活態度の本質を有つてゐたのである。即ち封建貴族の生産壓迫に對し、社會的生存を擁護する生産行動が職業であつたのである。けれども、希臘時代でも又近代でも、此職業が金權政治にまで轉化するに至る爲には、そこに必ず新たな經濟組織の發生があつたのである。それは即ち職業を生産行動と密着せしむる組織が崩れて、職業の生産的性質を保持する者と、職業から其生産行動を除外して、生産物の『所有』のみを保持する者、その分離が起つたのである。それは元來交換、貿易の發達に伴つて起つた現象である。交換が生産の社會的終極ではなく、生産物所有の目的として行はるゝに及んで、そこに商業と云ふ純然たる貨幣獲得の職業が發生し、生産者と離れて生産組織の支配を掌握する機關となつ

のである。此機關が即ち政治を單純な軍國的支配者の手から奪つて、商人の手に渡さしめた組織なのである。而して此組織の世界的に定成したのが近代の資本主義である。（古代に於ける資本主義は一國的であつた故に希臘の資本主義的發達は孤立的であり常に隣邦の軍國的優越に對して絶對に資本主義的優越を保持する譯に行かない譯である。反之今日の資本主義は國際的であり、凡ての文明國が資本主義に立脚する故に、一國は他國の軍國的優越によつて其資本主義的優越を破壞される恐れが殆んど皆無となつた。アメリカの軍備は薄弱でも隣邦にアメリカの經濟的優越を軍國的優越で破壞する力を有するものは一つもない。故にアメリカの資本主義は希臘羅馬の資本主義のやうに、より未開な國家の軍國的優越によつて破壞される樣な事はない。ドイツの軍國的優越の成功しなかつたのも、軍事的優越が經濟的優越に敵し得なかつた一つの證據である。これがため、近代の政治は、一たび商人の手に移つた以上は軍國的勢力又は蠻人の侵略等によつてそれが商人の手から奪はれると云ふやうな事が全くないと云ふ安全地帶に置かれてゐるのである。）

近代に於ては、政治は斯の如くにして職業階級の手に移されたが、この組織は、政治を職業化したやうではあるが、然し、此組織に於ける職業は、中世紀に於ける職業が生産行動と密接した生活態度であつたのと異つて、生産行動を職業から引離して、その生産物の『所有』を產む過程たらしめた組織である事は前述の如くである。於是資本主義の下に於ける商人は、生産行動を回避する事、軍國貴族と全然同一であつて、其地位は職業の管理者ではあるが其管理者は全く軍國貴族の產業管理と本質的に異る性質のものではないといふことになつたのである。即ち金權政治は、本質的に貴族政治と異つたものではない。希臘の市民や中世の貴族は、職業を否定する階級であつたが、生産力を搾取する點に於ては、近代市民（商人）と何の異る所もない。又近代市民は、古代貴族の支配を、今日本で流行してゐる樣に、盛んに否定するが、決して中世貴族と本質的に違つたものではない。職業から生産行動を排除した部分だけを職業としてゐる近代商人の生活態度はその點で軍國貴族のそれと共通點を有つものである。從つて政治が兩者の何れに在つても、善惡共に同じ性質を保つてゐるのである。貴族が商人を排斥する如く、商人は貴族を排斥するが、それは全く同じ本質の『政治』を奪ひ合ふといふ外に意味のあることではない。

何故に同じ性質を有つ政治が一方に在る時には他方に排擊され、他方に在る時には一方に排擊されるのであるかと言へば、畢竟貴族と言ひ商人と言ひ、共に社會的變態の生んだ階級であ

つて其生存目的は、かの生産行動に生くる職業者と異つて、生存の本能を鬪爭本位に置く階級だからである。生産行動に立脚する人々は其生存本能は、鬪爭的に働かずに必ず互助的に働く。言ひ換へれば、創造的に働く、農業、工業、學術等に關する行動は、一つの生活分業の本能的追求であつて、そこに何等鬪爭的衝動があるのではない。米を作り、薪を集める者は、それに依つて隣人の生活を保障する動作に專念してゐるのであつて、何等隣人を排擊する衝動を含んでゐない。反之貴族及び商人の行動は共に他人の生産力を專有する事に依つて隣人に對して力を有たうとするのであるから、そこに何等の創造慾があるのではなく、只獲得慾があるだけである。創造する爲には決して隣人に打擊を加へる必要はないが、獲得する爲には隣人同士互に打擊を加へ合はなければならない。米を作る者は誰もに苦痛を與へる必要はないが、米を占有する事によつて利益を得んとする者は、相手方に損害を與へれば與へる程、こちらに力と利益とを得るのである。貴族と商人とは、共に其後者に屬して居るのである。

それ故に、政治が商人の手に移つたと云ふ事は、決して政治が不生産者から生産者の手に移つたといふ意味ではない。又これを社會生活の利益の上から言つても。貴族の手から商人の手に政治が移つたと云ふ事は、同じ物を同じ者が取り扱つてゐるのであつて、どちらが必然に社會的に利益であるかを斷定する事は出來ない。從つて日本の現在の政治的鬪爭は、社會的生活の上からは、同一階級間の遊戲であつて、何れの勝利も決して善惡を決定し得る力は無い。商人が勝つて貴族の負ける事が、貴族が勝つて商人が負けるよりも社會的に善であると云ふ結論は何處からも出て來ない。

貴族が負けて商人の勝つ事が、社會的絕對と云ふ意味ではないにしても、然し社會の進化過程に於てはそれが歷史的に必然であらねばならぬといふことは言ひ得る。それは、政治が一步一步生産過程其物に密接する傾向として必然なのである。

元來政治は、原始的には生産過程と殆んど別の物ではない程密接してゐたのである。『政治』といふ名が與へられた時には、既に希臘のそれのやうに、生産過程と政治過程とは、百姓の生活と武士の生活とが異ふやうに異る過程となつてゐたが、『政治』と云ふ言葉の生れる前、政治の原始的現象として存在してゐた政治は、つまり社會的集團の生産過程の秩序に過ぎなかつたのである。消費が生産以上に法律秩序の對象となつたのは、無産階級以外に、特に消費專門の階級即ち軍國貴族階級が發生した結果である。それから、政治が遂ひに消費階級の享樂の生活理

想を完成する機構となつたのである。そこで政治が生産と離れて、權力過程の機構となつたのであるが、此過程が更に逆轉して、再び生産に密接する機構に移らうとしつゝあるのが、政治の進化である。貴族の政治は生産に對しては、全く壓迫である外何等の有力な作用を持ち得なかつたが、商人の政治は、軍國的壓迫による生産力の占有が不可能となつた爲に發生した生活組織であるから、軍國的管理よりは、もつと生産に密接した管理方法である事は言ふまでもない。のみならず生産力を獨占する爲には生産そのものの機構をより有力にする程、占有の力が増大する譯であるから、商人政治の特徴は、生産上の機構から全く政治上の壓迫を排除しやうとする傾向を取つたのである。政治は傳統的に生産を壓迫するが故に、商人は政治を此傳統から解放しなければならない。それから近代的自由主義は生れたのである。これは共産社會的絶對狀態のやうに商人自身は考へてゐるが、決してそんなものではない。それは畢竟生産を壓迫した軍國的管理を排除して、より生産的の管理を生む中途の過程に過ぎない。

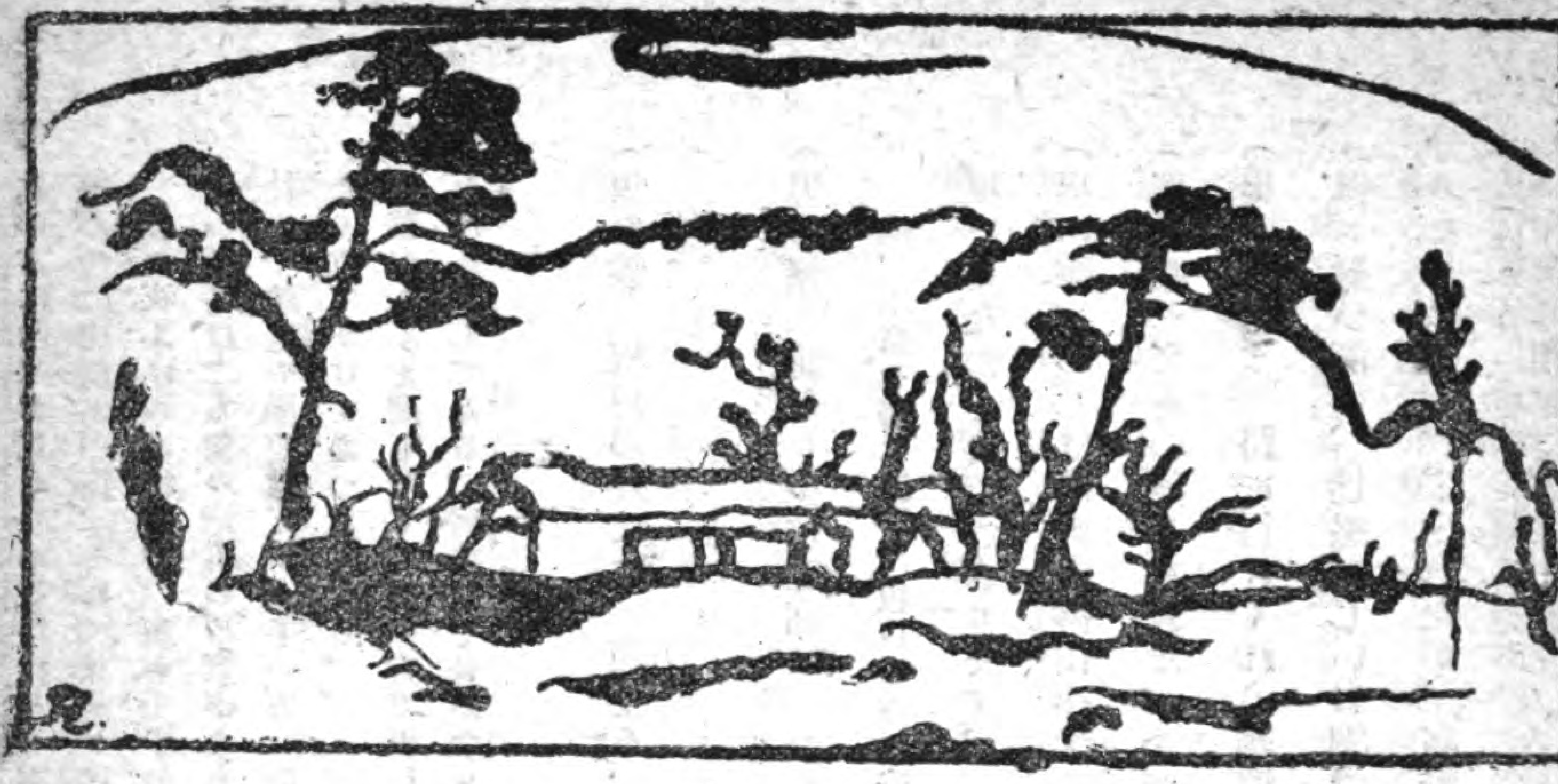
のみならず事實に於て資本主義の政治は、彼等の考へてゐる程生産と密着した政治ではない。その事は近代に於ける資本主義的管理が夥しく生産能力の増加率を遞減せしめた事によつても明かである。機械の發達が急激な生産増加を來したが、しかし人間的生産能率は却つて減退してゐるのであつて、殊に資本主義的管理の生んだサボタージュの作用は驚くべきものである本來の生産心理は量と質とに於ける能率の増加を生産者自身が本能的に衝動的に働き出したのであるが、資本主義的管理の結果生産者のさう云ふ本能が全然減退したので、所謂能率増進法と云ふやうな機械的方法が必要となつた位である。資本主義の管理は決して軍國主義の管理よりも人間的生存本能を毀損する事が少いとは言へない。どちらにも奴隷はある。奴隷のある限りサボタージュはある。言ひ換へれば生産本能の毀損がある。資本主義時代の政治は、この資本主義の管理と密接に關係するものであるから、それと生産との關係も亦、保障的であるよりは、障碍的なのである。

然しながら、軍國主義より商人主義への轉化が、生産壓迫から生産促進に移つた事は、大きい進化の表はれである。これだけ政治が、生産を壓迫する機構から、生産に隷屬する機構に移つた事を示すのである。而して此傾向こそ社會的生存の爲の絶對である。生産が軍國的壓迫から解放されずに、永久に其傾向を續けたならば、恐らく野蠻が再現したであらう。されば商人主義の政治は近代文明の母である。たゞ、此近代政治は、前述

の如く、權力の獲得運動である點に於て軍國政治と異るものでないから、結局は軍國文明と同じ狀態となつて、二十世紀初頭のやうな大帝國主義を生んだのである。近代的自由主義の父たるスペンサーがこれに驚いて、現代國家の「野蠻再現」を攻擊したのは、自分の生んだ子の當然の生ひ立ちを罵つてゐたのである。

されば現に日本で爭はれてゐる政治的喜劇は形は馬鹿らしいが、政治の進化の必然を追ひかけてゐるのであつて、そこにあらゆる悲劇喜劇が演ぜられた後は當然商人の勝利となるに決つてゐるのである。總選擧は畢竟如何なる黨派が勝つても負けても、つまり商人政治への機構に從屬するに相違ない。

それは畢竟、政治がもつと生產に密着すべき途中の波瀾である。それに一歩進めた總選擧が最近のイギリスの勞働黨內閣を生んだ總選擧である。これは貴族に打擊を與へた商人に生產者が打擊を與へたのであるが、これ又前述の必然の過程のやはり中途の現象である。只政治の有機的進化がそこまで到達した事は此度の英國の例が始めてなので興味のある所以であるが、それも決して堅固に成り立つた譯ではなく、根本的に生產者の手に政治が移つたのでは決してない。けれども必然の過程を追つてゐると云ふ點で重要なのである。



戯曲

無明と愛染（二幕）

谷崎潤一郎

作者記す、――前の方はほんの少し訂正しただけで殆んど前號掲載の分と同じであるが、一幕物を二幕に直した體裁上、なほ又後半だけを切り離しては感じが出ない氣がするので、ここに再び始めから組んで貰ふことにした。右讀者の御諒恕を乞ふ。

人物

無明の太郎
その妻楓
遊女愛染
高野の上人

時　南北朝の頃

所　或る山奥の廢寺

第一幕

凄じく朽ち古びた寺の本堂の内部である。上手に腐りかかつた板戸、下手に破れた襖がある。

奥の方に内陣が見えてゐるけれども本尊の佛體は毀ち去られてあとかたもなく、わづかに須彌壇と光背だけが残つてゐる。須彌壇の傍に厨櫃が一個、それに凭せかけて五六尺の厨子に這入つた不動明王が置いてある。

秋の夜ふけの心持ちで、楓が上手の方に据わり、護摩壇を爐の代りにしてあかあかと火を燃やしながら、小鳥の肉を炙つてゐる。彼女の傍には二人前の酒肴の用意があらかた整へられてゐる。楓は哀れなみすぼらしい姿をしてゐるが、上﨟の着るやうななまめかしい袿や、鏡臺や櫛笥などが下手の方に散らかしてあり、柱や壁のところどころに獣の皮だの、獵の道具だの、物の具だのが吊るしてあつたり立てかけてあつたりする。

幕があくと間もなく、表の方で板戸をほとほとと叩く音がする。楓はちよつと耳を傾け、返辭をするのをためらひながら小鳥の肉を火にかざしてゐる。再び叩く音がする。

(男の聲)(板戸の外にて）頼まう、……頼まう、……

間。

(男の聲)(前より少し聲高に）のう、もし、お頼み申す……、お頼み申す、……

楓、小鳥を傍に置き、板戸の方へ寄りながらひそひそ聲で、

(楓）どなたさまでござります、

(男の聲）わしは高野の御山へ参る旅の僧ぢやが、……

(楓)(默つてその聲をききながら考へてゐる）……

(男の聲）……路に行きくれて難澁してゐる。憚りながら一夜の宿を頼みたうて訪れたのぢや。

(楓)(疑ひ深い、迷惑らしい口調で）それはまあ、さぞお困りでござりませうが、生憎今宵は主も居らず、歸りの程も分りませぬので。……したが、高野へおいでなさるお方が、人里はなれた此のあたりへどうしてお越しなされました。

(男の聲）山のおくがに住む人々は世の中の騒ぎを知らぬと見える、——山の下では在々所々に火の手が上つて、京方

と吉野方と、また合戰が始まつたのぢや。それ故愚僧は道を廻つて山越しをせうと存じたのぢやが、……主どのが留守ぢやとあらば是非ないこと、せめて雨露をしのぐよすがに、此の御堂の緣先をお借り申すことは出來まいかの。

話の間に楓はをづをづ立ち上つて、板戸を細目に明けて見る。

(楓)さあ、それゃならぬとは申されませぬが、……(いよいよ迷惑な調子)この夜寒にそのやうな緣の端では、あかつきの霜が身にしみて、手足が凍えてしまひますぞゑ。

(男の聲)いやいや、愚僧は霜のおく朝も雪の降る夜もいとひはいたさぬ。たゞ足腰を休ませて貰へばよいのぢや。

(楓)(だんだん板戸を繰りひろげて僧の姿をしげしげと見守る)そしてお師さまは、高野の御山の、何と云ふ御寺へおこしなされます?

(男の聲)わしは高野の一乘院の住職をしてをる、――此のたび一字を建立せうと思ひ立つて、ことしの夏から秋へかけて京大和路を勸化のために廻つたのぢやが、三月あまりも寺をあけたほどに、一と先づ山へ歸らうかと存ずるのぢや。

(楓)ああ、一乘院の上人さま、――(獨りごとのやうに云つて、誰かに聞かれるのを憚る如く內陣の方を返り見ながら、やや打ち解けた言葉づかひになる)仔細あつて此の家へお泊め申すことは出來ませぬが、さればと云うて麓の里へはまだ五六里もござりませう。……(云ひながら又ちよつと考へる)もし、夜の間でよろしければ、此方で火になとおあたりなされて、休んでおいでなさりませ。

(男の聲)おお、さらばそちらへ參つても大事ないと申さるるか、それは何より忝ない。……

上人が這入つて來る。四十前後の痩せた僧形で、笈づるを負ひ笻杖を携へてゐる。楓は戸外に氣を配りつつ板戸をしめ切り、爐ばたへ上人を案內す。

（楓）ではまあ此方へおいでなさりませ、ここが一番温うござります。

（上人）飛んだお造作にあづかることぢやが、ほんの一時休ませて下され。

楓はしきりに柴をくべて一層あかあかと火をおこす。その間に上人は笈づるをおろし、いぶかしさうに部屋のありさまを見廻しながら爐の傍へすわる。

（楓）（恥しさうに食べ物を片よせながら）何ぞおふるまひ申し上げたうはござりますれど、これは主の夕餉のしるなり、それに此のやうな生ぐさい物では差上げることもかなひませぬ。本意ないことながら、どうぞお免し下さりませ。

（上人）いやいや、そのやうな心づかひには及び申さぬ。かうしてぬくまつて居られれば此れが何より極樂ぢや。――したが、見れば珍しい住居のやうぢやが、そなたはいつから此處に居られる？

（楓）いつからと云うて、もう長いことでござります。たびたびの合戰に都の家は燒き拂はれ、身の置きところに困じ果てて知らぬ國々をさまようた揚句、此の山おくに無住の寺を尋ねあててから、今年でもはや七年の秋を過しまする。始めのほどは假りの宿りぢやと思うてゐたものの、もう此の頃では尾の上をわたる鹿の啼く音もなつかしく、茅にそよぐ風のひびきもさほどにさびしうはござりませぬ。

（上人）それではそなたは、以前は都のお人ぢやと見えるの、

（楓）さやうでござります、――主はもと、京の三條堀河のあたりで、さるやんごとないお方さまの司人をいたして居りました。そのお邸も兵どもに火を放たれて、殿のお行くへも分らずなつてしまひましたが、……

（上人）はてさて、それはお氣の毒な話。さうして主どのは、今では何をして居らるる？

（楓）何をせうとて此のやうな土地になりはひとてはござりませぬ。御覽の通り鳥や獸を射て來ては、これを喰べたり

販いだりして、その日その日を送つてゐるまででござります。

（上人）成る程なう、——愚僧もこのたび世の有りさまを見て參つたが、打ちつづく戰亂に有りがたい伽藍の堂塔は毀たれ、月卿雲客の館は燒かれ、都はもはや荒れてしまうて、やがて大方は淺茅が原ぢや。嘆かはしいことながら、かやうな亂離の世の中には人里放れた山家のすまゐもなかなか心のどかであらう。では主どのは、こよひも狩りに出られたのぢやな？

（楓）はい、……毎日のやうに狩りくらしては、夜に入つてから戻つて參るのでござりますが、狩りの獲物は鳥獸ばかりではござりませぬ。あれ、あれを御覽じなさりませ、あそこにある黃金作りの川鞘の太刀も、金襴地の直垂も、あの錦嚢のほとりにある唐綾の袿も、みんな主が麓の里から獲て參りました。

（上人）なに、何と云はるる？

（楓）御出家さまに嘘を云うては御佛の罰が恐ろしいほどに、何をか包み隱しませう。わたくしの夫は今では無明の太郎と云うて、此のあたりに鳴りひびいた盜人でござります。夜道に出ては人の命や寶を奪ひ、宿りを求める客人があれば、大方生きては歸しませぬ。お泊め申せぬ譯と云ふのはそれゆゑでござりますが、……

（上人）（別に動ずるけしきもなく）ほほう、では此の寺は山賊の住み家でござつたか。さてさて長い旅路にはさまざまなことに出遇ふものぢや。そこにおはする不動明王も、定めし驚いておいでであらう。

（楓）まだあそこには御本尊の盧遮那佛も、もろもろの菩薩の像もござりましたが、薪の代にするのぢやと云うて、主が斧で割つてしまうて、もう何一つ影をとどめては居りませぬ。御佛をさへ恐れぬ夫の手にかかつては、御出家ぢやとてきつと無事ではござりますまい。早う主の歸らぬうちにお立ちなされたがようござります。

(上人) 雲水の身の心やすさには、ぬすびととなりとて探するほどのこともあるまい。今宵はからず此のところへ參つたのも何かの緣と云ふものぢや、愚僧に思ふ仔細もあれば、その太郎どのとやらに會はせては下さらぬかな。

(楓) 思ふ仔細と仰つしやりますのは？

(上人) かうして國々を行脚する間には、或るときは夜盜に行きあひ、或る時はもののふに脅やかされ、劍の下をくぐつたことも數知れずござつたが、それが結緣のたよりとなつて、多くの人を佛の道へ導いた例がござる。いかなる者にも菩提の心はあるのぢやほどに、愚僧の力で及ぶものなら敎化して進ぜたいのぢや。あるじ殿とてよもや鬼ではござるまいが、……

(楓)(さしうつむいて淚ぐみながら) あ、ありがたうございます。夫も昔は物の道理をわきまへた男、鬼でも蛇でもござりませねど、まことの鬼が外にゐるのでござります。

(上人) まことの鬼が外にゐるとは？

(楓)(上人が覺えず聲高になるのを、手を振つて制する) もし、お氣をつけなされて下さりませ、今その鬼があの奥の間で眠つてゐるのでござります。

(上人) はて、何を云はるる？ いかほど末法の濁世とは云へ、鬼が居るとは信ぜられぬが、……

(楓) 外面如菩薩內心如夜叉と法の言葉にもあるものを、鬼でなうて何でござりませう。わたくしの夫はあの鬼ゆゑに盜みを働き、人の命をそこなふやうになりました。鬼の色香に迷はされて惡業道へ誘ひ込まれてしまひました。……

短き間。上人はちよつと挨拶に困つた風情で、物思ひに沈みながら墨染の袖をつまぐる。楓は眼をしばだたきつつ二つ三つ薪をくべる。爐の火が白くぶすぶすとくすぶる。

（楓）世は潮りごもゝ乱れようとも夫の情があるものならば、片山里の侘住居も悲しいことはござりませねど、仇し女に男を取られ盗人の手助けをさせられて、何の生きがひがござりませう。これ、これを御覧じなさりませ、かうしてここに二人分の夕餉をととのへては居るものの、此れも夫と彼の人とがさしむかひで食べるのでござります。わたくしはただ下様の召し使ひも同じこと、朝な朝なの水仕事に濡れそぼつ袖の干るひまもなく、折り焚く柴の夕のけぶりにむせぶ涙の乾くをりとてはござりませぬ。……（間。すすり泣く）此のやうな憂きめに會ひますのも、前世の業の盡きない故でござりませう。

（上人）してその女性はいつから此處に居られるのぢや、

（楓）おととしの冬の雪のふる夜でござりました、戰に逐はれて此の山の中へ逃げて參り、わたくしのもとへ宿を求めに來たのでござります。妾が都を立つた折には父の三位や母御前と一緒ぢやつた、熊野へ詣うでる途すがら、思ひもかけぬ兵火に遇うて供の者どももちりぢりになり、惡い野伏や山伏に父も母も討たれてしまうた、もはや寄るべのない身ぢやほどに、暫が間かくまうてくれと申しますので。……

（上人）ほう、ではやんごとない殿上人の姫ぢやと見ゆるの、

（楓）邸は京の白川にある、みづからの名は愛染姫と云ふのぢやと、そのやうに申しては居りますが、何であの女が姫御前でござりませう。そだちは室は神崎か、いづれは遊女のなれの果てぢやと覺えまする。たとへ妾は上﨟のやうに﨟たけて、みめかたちは美しうても、あの女の心は鬼でござります。あるじを色香に迷はせたばかりか、多くの人を此の古寺へおびき寄せて、生血をすすり寶を掠める恐ろしい鬼でござります。

（上人）さてさて、安達が原の黒塚の話をきくやうぢやの。——したが、人は誰でも煩惱の奴となることがあるものぢ

やが、いつかは懺悔の心をおこして解脱を願ふやうにもなる。そなたの夫とてやがては愛着の夢からさめる機縁もござらう、末世の時代にも神佛の加護はあるのぢやほどに、……

（楓）御佛の慈悲がどのやうに廣大ぢやとて、四重五逆の罪を犯し、生きながら地獄に墮ちた人々の救はれる時はござりますまい。夫は自業自得ゆゑせんないこととは申しながら、あさましいのは私でござります。業の海より業の海へと浮かびただよひ、川瀬の車のめぐるやうに輪廻生死の境をめぐつて、いつになつたら無礙の光を仰ぐことが出來ますのやら、……もう此の世には望みのない身ぢやほどに、せめて來世は淨土に生れたうござりますが、女人は罪の深いものぢやと聞きましたゆゑ、その願ひさへかなはぬこととあきらめてをりまする

（上人）なるほど、女人は五障のさはりがあつて悟りの道に入りにくいとは申すものの、さはりと云ふのはつまりは妄執が多いからぢや。そなたにしても朝に夕に嫉妬の炎を胸に燃やして、生死の因を造つてゐるのが何よりも惡いのぢや。そなたは人を鬼ぢやと云うたが、佛を疑ひわが身を呪ふそなたの心こそ鬼ではないか。鬼はおのれの中にゐるのぢや。

（楓）このやうな憂いめ辛いめに遇ひましたら、わたくしとても鬼になるでござりませう。御佛の力を疑ふと云ふではござりませねど、今の身の上では貴い教を聞くをりもなく、行を修めるひまもないのでござりますものを。實を申せば、私はとつから上人さまのお名前をきいてをりました、高野の御山に一乘院の聖と云うて、有りがたいお師さまでおいでになる、生あるうちに一度まみえて功徳にあづかりたいものぢやと、つねづねあこがれて居りましたが、勿體ないことながら、かうしてお目にかかれますのも淺からぬゑにしでござりませう。どうぞ上人さまの法力で、心の鬼を退散させて下さりませ。後世安樂のたよりを得させて下さりませ。

（上人）おお、それはちかごろ奇特なことを承はる、それについて思ひおこすのは、恥かしながら愚僧も昔は心の鬼に

さいなまれて、煩惱の火に燒きこがれたことがござつたのぢや。そのきづなを絶ち切つて偏へに如來の力にすがり、三密の行を修するまでには一方ならぬ苦しみをなめたものぢやが、今ではやうやう不退轉の志を固めて、金剛不壞の身となり申した。そなたは在家の女ゆゑ行を修めるいとまはなけれど、さる先達の言葉にも、眞言念誦を怠らずば破戒の僧尼も往生を得、造惡の男女も淨土に生るると申してある。

(楓)ではわたくしのやうなものでも、濟度の御手にすがれるのでござりませうか。

(上人)無論のことぢやが、それには信心が第一ぢや。さうして明けくれ光明眞言を唱へたら、たとへ此の世で即身成佛は出來ずとも死ぬる時には諸佛諸菩薩の來迎をうけ、來世は必ず安樂國土に生れるでござらう。さればこそ高祖大師も、虚空が盡き、衆生が盡き、涅槃が盡きなば我が願も盡きなんと、有りがたい誓ひをお立てなされた。――

無明の太郎がこつそりと上手の奥から這入つて來る、鬚をぼうぼうと生やした、體つきの逞ましい男で、大きな太刀を佩き、山賊のいでたちをしてゐる。隅の方のうす暗がりに仁王のやうに立ちはだかつて、凄じい眼でぢつと上人を睨めつけてゐる。二人はそれに心付かない。

(上人)――おお、それ、ここによいものがある(頸にかけた袋の中から一冊の經文を取り出す)これは秘密の陀羅尼を記した貴いお經ぢや、これをそなたに進ぜようほどに、この中にある眞言陀羅尼を、おきる時もねむる時も念々の間に誦するがよい。

(楓)あ、ありがたうござります。

楓が受け取らうとするとき、太郎が後ろから聲をかける。

(太郎)その袋の中のものを、ついでに皆置いて行かれい。

云ひながら二人の間へ歩み出る。

(上人)(靜かな調子で)おん身は誰ぢや。

(太郎)無明の太郎の面を知らぬとは、迂濶な出家もあつたものぢや。その袋には大分目方がかかりさうぢやが、よもや經文ばかりではあるまい。どれ、その中を調べてくれう。(手をさし出す)

(上人)はて、折角ぢやが此の袋に觸れてはならぬ、おん身の爲めに惡いと申すのぢや。

(太郎)(落ち着いた上人の態度にいささか氣勢を挫かれた形で)なに？ 身の爲めに惡いと？

(上人)いかにも、たとへ盜人であらうとも、佛の功力は知つてであらう。この中には愚僧が持佛の、觀世音菩薩のお姿があるのぢや。

(太郎)觀世音でも普賢でも佛とあらば惡うはないわ。してその姿は木像か、黄金か、銅か？

(上人)小ひさい、美しい黄金佛ぢや、

(太郎)(黄金と聞いて眼の色を變へる)ほう、成るほど出家は正直ぢや。さ、命が惜しくばそれを此方へ渡して行きやれ。

(楓)(おどおどしながら)もし、太郎どの、此のお方は一乘院の上人さまぢや、粗相があつてはなりませぬぞえ。

(太郎)一乘院の上人ぢやと？ (はつと驚いたやうな樣子で、しげしげと上人の顏を見守る)おう、紛れもない高野の聖ぢや。

(上人)さてはおん身は、愚僧を見知つて居らるるかの、

(太郎)(再び猛惡な相になつてにやにや笑ひながら)上人ぢやとて聖ぢやとて、この山おくでは差別はないわ。おぬし

は欠しう諸國を勸化してゐた筈ぢやが、定めし寄進があつたであらうの。

（上人）ありがたいことには、世は亂れても信心のともがらは絶えぬと見えて、思ひの外に喜捨の寶を集め申した。

（太郎）ふん、集めて來たとは何よりぢや、それを殘らず置いて行かれい。

（上人）愚僧の物なら進ぜてもよいのぢやが、ここにある寶は悉く御佛の物ぢや。このたび新たに御寺を建立せうと思うて、長い間兵火のちまたを行きめぐり、白刄の下を搔いくぐつて、數多の善男善女から淨い志を受けて來たものを、一紙半錢もおろそかには出來ぬ道理ぢや。

（太郎）出來ぬとあらば腕づくでも取つて見せうが。（刀の柄に手をかける）

（楓）（夫の腕にすがり着いて）これ、太郎どの、何をするのぢや。そなたは聖の法力に刄向はうとおしやるのか。たとへ劍を閃めかしても、上人さまの調伏に抗ひはせぬぞゑ。

（太郎）あははは、調伏なぞとは片腹痛いわ、此の瘦せ法師に法力があるなら、どれその驗をためしてくれう。

ぎらりと太刀を引き拔いて斬つてかかる。上人はその前から密かに身を構へてゐて、太郎が太刀をかざすと同時に袂の中で印を結び、珠數をつまぐつて咒文を唱へる。と、袋の中の觀世音菩薩から俄かに一すぢの光明が輝き出で、太郎は太刀を振り上げたまま斬り付けることが出來なくなる。

（太郎）（踏み込まうとしてもがきながら）やや、どうした事ぢや、

（楓）おお、勿體なや、南無觀世音菩薩、――

光明を見て恐れおののきつつ伏し拜む、

（上人）（口のうちで非常にかすかに）まかしつだやそわか、しつだゆけいじんばらやそわか、ならきんちそわか、……

太郎、二三歩あとへよろめきながら、眼がくらんだやうにどうと尻餅をついて突つ俯す。やや長き間。上人はしづかに印を解いて太郎の樣子を見る。袋の中の光明が消え失せる。

（上人）太郎どのとやら、もはや手向ひはしないであらうの、

さう云はれても、夫婦ともまだ死んだやうにぬかづいてゐる。

下手の襖をあけて愛染が姿を現はす。齡は三十路を過ぎてゐるらしいが、殘んの色香のなまめかしい女である。きらびやかな袿の上に房々した翠の髮をすべらかし、閾の際に佇んで上人に聲をかける。

（愛染）上人さま、お久しいことでござります。

（上人）（嚴かに愛染の顔をつめて）おゝ、愛染どのぢやな。

（楓）（恐る恐る面を上げる）ではあの、上人さまは愛染どのを？――

（上人）知つてはゐるが、遠い昔の夢のことぢや。

（愛染）ほんにむかしの夢のこと。妾が知つて居りましたのはさるやんごとない少將の君でござりましたが、今では貴い眞言の行者、御山の聖におなりなされた。有りがたいことでござります。（云ひながらそこにうづくまつて恭しく兩手をつかへる）なう、上人さま、どうぞあの頃の罪をゆるして下さりませ。

（上人）いやいや、ゆるすどころではない、そなたと云ふものがあればこそ、色即是空のことわりを悟り、佛の道に這入れたものを、そなたは法の手びきでござつた。

（愛染）かたじけなうござります、（兩眼に袂をあてて涙をぬぐふ）……………したが、今も今とてあらたかな御修法の力を拜みましては、此の身の罪が思ひやられて、そゞろに來世が恐ろしうてなりませぬ。もし、上人さま、いまだに迷ひ

の雲が晴れいで、輪廻の業をいとなんでゐるわたくしを、どうぞ憐れんで下さりませ、法の手びきをした者に手びきをなされて下りませ。

(上人)(ひどく感動した様子で)おお、よう云はれた、よう懺悔をしてくりやれた、ここで會ふのも大方ほとけのおん導きぢや、こよひはそなたに結縁のよろこびを得させて進ぜる、――いや、愚僧も共にその喜びを分ちたうござるわ。

(愛染)ああ、勿體ない仰せでござります、わたくしのやうな穢れた女が一期の障りを除かれようとは、盲龜の浮木にめぐり遇うたも同じこと、――なう、楓どの、そこはあまり端ぢか故、上人さまを奥の間へ招じて下さりませ、さだめしお疲れでござりませうが、まだ秋の夜は長いほどに、彼方でゆるゆる聴聞させていただきまする。

(楓)ほんに、さうなされてはいかがでござります。奥と云うてもむさいところではござりますが、隙間もる風も此處よりはいくらかましでござりませうほどに、……

(上人)もとより愚僧は樹下石上を宿とする者、法を説くのにいづこと云うて所をえらびはいたさぬが、……はて、折角のこころざしぢや、遠慮なく受けるといたさう。

(楓)さ、さ、どうぞこちらへお越しなされませ、

楓、上人を案内して下手の襖へ這入る。

太郎は惡夢からさめたやうに顏を擡げて、眼の前に落した太刀を拾ふ氣力もなく茫然としてゐたが、愛染の懺悔の途中から、ときどき疑ぐり深さうに彼女の顏いろをうかがつてゐる。

上人が去つてしまふと、愛染はぢろりと太郎を流しめに見て消えかかつたともしびの心を掻き立て、默つて鏡臺の前に坐わつて化粧を始める。短き間。太郎の眉根がだんだん險しくなる。

(太郎)(恐怖に近い表情で訴へるやうに愛染を見ながら)聖の教へを聴かうと云ふのに、そなたは何をしてゐるのぢや、

（愛染）（化粧しながら）はて、知れたことぢやわ、おぬしの爲めに今の仕返しをしてやるのぢや。

（太郎）仕返しとは？

（愛染）またあの法師を迷はせて、煩惱地獄へ墮してやるのぢや、――彼奴のむかしはよう知つてゐる、あの法師はな、惡鬼羅刹に攻められるより妾の色香が恐ろしい、妾を見ると淺ましい犬畜生の心になると云ひ居つて、高野の山へ逃げて行つたのぢや。も一度彼奴を犬畜生にさせてやるのぢや。

さう云ひながら、自分の頰をうつとりと鏡にうつしてなほも餘念なく化粧をつづける。太郎は一としほ恐怖の色を露はにして心配さうに彼女の樣子を眺めてゐる。

第二幕

第一場

舞臺前面と同じ。第一幕より一二時間の後。太郎は上手に、楓は下手に、護摩壇の埋み火を圍んでゐる。上人の持つて來た寬づるはまだそのままに置いてあり、夕餉の膳が夫婦の間に運ばれてゐる。太郎はむッつりと思ひに沈み、時々心配さうに奧の間の方を見やりながら、楓に酌をさせて膳の物を食べてゐる。

（楓）（酌をしながら、夫の機嫌を取るやうな口調で）なう、太郎どの、その鳥の肉をたべて下されっ　たよひは何ぞ珍しいものを上げたいと思うて、そなたの好きな鶫を燒いて置いたのぢや。

太郎、默つて杯を乾し、そつけない樣子で鶫をたべる。

（楓）ことしももはや鶫の出る頃、………（獨りごとのやうに云つて、ふと氣を變へる）それはあの、うしろの山でと

らへたのぢやが、よい風味でござんせうが、………

（太郎）（それには答へず、奥の間の方を見ながら）もう何刻ぢや、

（楓）あれから大方半時あまりも過ぎた時分、子の刻ごろでござんせう、………（云ひながら、此れも奥の間の方を見る）迷うた人を導くのが御出家さまの勤めぢやとは云へ、こよひは定めしくたびれておいでなさるであらうに。

（太郎）………

（楓）したが、上人さまの教へをお聞きなされたら愛染どのも必ず罪を懺悔して、有りがたいお方におなりなさるぞゑ。なう、そなた、さうは思はぬかや。

（太郎）おのれに何が分るのぢや、上人ぢやとて昔は己と同じ男ぢや。………

楓、いぶかしさうに夫の顔をのぞき込む。

（太郎）………秋の夜長をよいことに、彼奴等二人は何をいつまで語らうてゐるのぢや。

（楓）（はつと、悲しさうになる）はて、そなたはまあ、何をお云やる？ あのお師さまは生きながら佛の功徳を具へておいでぢや。そのやうな烏滸なことを云うたら、又しても罰があたらうぞゑ。

（太郎）無明の太郎はぬすびとぢや、出家や行者を恐れてゐては、明日の月日が過されぬわ。

（楓）では、そなた、たつた今あのやうな調伏に遇ひながら、いまだに迷ひがさめぬのかや。あの観世音の御光が、そなたの眼に入らなんだかや。

（太郎）その仕返しに、あの法師めをたばかつてくれるのぢや、女の色香に攻められたら、佛も地獄へ堕ちるであらうわ。

楓、凄じい恐怖に襲はれた顔つきで唖然としたまゝ、夫を見上げる。

（太郎）（にやりと笑つて、杯をつきつける）これ、酌をせい、せいと云ふのに、何してゐるのぢや、………

楓がぼんやりしてゐるので、自分で傍の瓶子を取つてなみなみと酒を注ぐ。

（楓）上人さまを謀らうとは、ても恐ろしい人たちぢや。………何の何の、あのお師さまが迷はされよう。そなたの劍を受け止めたあの法力にかけられては、愛染どのこそきつと憂き目を見せられうぞゑ。

（太郎）（腹立たしげに）それをおのれが知つた事かは。彼奴等二人は古い馴染ぢや、法の手びきが戀の手びきとならうも知れぬ。己は彼奴を生かしては置かぬのぢや。

さう云ひながら杯を重ねる。短き間、

楓は一層悲しさうな表情になり、やがてしくしくと忍び音に泣く。

（楓）（泣きながら）………そなたに連れ添うて十年あまり、都を追はれて逃げて來てから、ただの一と日も樂しう暮らした折とてはなく………わびしい獨り寢の手枕に、山家の夜々を泣きあかしては居たなれど、………せめてことよひは聖のをしへに導かれて、つれない人の心も解けようと、それぱかりを、………それぱかりを念じてゐたものを、………

（太郎）えい、又しても何を泣きをる？　おのれがやうなたわけた女を、家のうちへ入れて置くさへあるに、走り使ひの用にも立たず、はした女の數にも足らぬおのれが、誰の情で生きてゐるのぢや。

（楓）ほんに、生きてゐたとてかひのない身の上、ひとへに御佛の慈悲にすがつて、來世をたのんでゐるばかりぢや。………

（太郎）はは、それほど來世がたのみたくば、淵川へなりと身を沈めて、早う死んで失せたがよいわ。

楓、疊にひれ伏して泣く。長き沈默。

太郎は獨り酒を飲みながら、意地の惡い眼で妻の樣子を偸み覗てゐる。その間、楓の泣きごゑは縷々として絕えず、だんだんやるせなげに、はげしくなる。と、突然、荒々しい足音と共に下手の襖ががらりと開いて、醉ひしれた愛染の高笑ひが響く。

(愛染の聲)(襖の蔭から) あははははは、これ、太郎どの、御山の聖が犬になりをつた、犬ぢや、犬ぢや、畜生ぢや、あははははは、

太郎は杯を手にしたまま、覺えず楓と顏を見合はせて愕然とする。

(愛染の聲) 太郎どの、早う奥の間へ來て見やらぬか。あの法師奴をたばかつて、毒ある酒を盛つてやつたのぢや。あはははは、

太郎、杯を捨てて立ち上り、下手へ馳け込む。その後ろから楓が追つて行かうとする。

(太郎の聲)(襖の向うから楓をどうと突き飛ばす) えい、おのれ、そこに居らぬか。

そしてぴたりと襖をしめる。

楓、突き飛ばされてよろめきながら部屋の中央へ戻つて來て、失心したやうに打つ俯しに仆れる。

(楓) 神も佛もない時代ぢや、此の世はあさましい鬼の棲み家ぢや。……

短き間。

舞臺暗くなる。そして、出來るだけ早く次ぎの場面になる。

第二場

同じ本堂の中の奥の間。上手は襖、下手と正面は壁。襖は明け放され、正面の壁殆んど一杯に、古ぼけた地獄極樂の繪が懸けてあり、やや下手寄りに明りが燈つてゐる。

部屋のまん中に、法衣を剝いで小袖ばかりになつた上人が、襟をはだけて、胸を露はにして打ち倒れ、口を大きく開いたままがくがく頭をふるはせながら、體中に痙攣を起して悶えてゐる。その周圍に二三本の瓶子がころがり、酒が流れ、脱ぎ捨てた法衣がだらしなくつかねてある。

上人、唇よりだらだらとよだれをたらし、苦しげな呻きを發する。

（愛染の聲）（襖の向うから）あれ、あれ、あのざまを見てやらぬか。あの梵論字奴が犬のやうに這ひつくばうて死ぬるぞいの、あははははは。

（上人）そなた、……そなたは何でわしを殺す、……く、くるしや、たへがたや、……

（愛染）（髪を亂したしどけない姿で、後ろに太郎を伴うて這入つて來る）痩せ法師めが思ひ知つたか、その苦しみも束の間ぢやぞゑ、

（上人）南、南、南無觀世音、……た、たすけさせ給へ、……

（愛染）あははははは、そなたの佛は、これ、ここにおはするぞゑ、（云ひながら其處にすわつて上人の前に首をつき出す）これ、この顏が見えぬか、觀世音菩薩を念ずるより、愛染明王を拜んでお死にやれ。

（上人）あ、あ、あくき、らせつが、又しても私を苦しめる、……わ、わしを、ち、ち、ぢごくへ、

太郎、悚然とした樣子で、ぺつたり襖に寄り縋いたまま、その光景を佇んで見てゐる。

（愛染）さうぢや、さうぢや、おのれは地獄へ墮ちたがよいのぢや。上人が何ぢや、聖が何ぢや、おのれが修めた難行苦行が何の役に立つたのぢや。

いきなり上人のふところに手をねぢ込み、袋を摑み出してざらざらと打ちまける。黄金佛や錢や寶がきらきらかがやいてこぼれ落ちる。

（愛染）おお、太郎どの、あるぞゑ、あるぞゑ、地獄の餓鬼に此のやうな物は要らぬ、（それらを拾ひ集めながら）此れで仕返しをしてやつたのぢや、

太郎、依然としてぢつと立ちすくみながら、愛染の手の中にある觀音の像を視つめる。

（上人）（次第に手足がしびれて行き、上吊つた瞳を開いて、幻の影を追ふやうにうろうろ虚空を見廻しながら、とぎれとぎれに譫語を口走る）あ、あ、ありがたや、……む、むらさきの雲が、……か、かりやうびんかの囀りが、……

太郎と愛染、不思議さうに上人を眺める。

（上人）（その瞳は、だんだん愛染の顏の上に眞つ直ぐに注がれ、恍惚となる）南、南無、……くわんぜをん……ぼさつ、……も、もつたいなや、……

（愛染）あははは、よい往生ぢや、それ、それ、菩薩は此處にぢや、このお姿がよう見えぬかや、

上人、しづかに息が絶える。

（太郎）（亡きがらの傍へ近寄つて、つくづくと見守りながら）あれほど淨土を慕うてゐたものを、むごいことをしてしまうた、……

（愛染）手強い法師ぢやと思うてゐたら、ほんの一と夜の睦言で命を捨ててしまうたわいの。――これ、太郎どの、愛染明王の色香のほどが、おぬしにもよう分つたであらう。心變りをするときは、きつと此の通りにして見するぞや。

太郎、深き思ひに沈みながら、言葉なくうなだれる。

（愛染）ささ、早う此奴の亡きがらを、床下へ埋めて賜らぬか、さうしてこよひの獲物を肴に、あらためて酒を酌まうわいの。

（太郎）いやいや、かりにも高野の聖の骸ぢや、あの本堂の厨子にをさめて、せめてこよひは、己が供養をして進ぜよ

う。

(愛染) はて、たわけたことを云ふ人ぢや、地獄へ墮ちて行くものに、ぬすびとの供養が何になるのぢや。

(太郎) ぬすびとぢやとて、ほとけを念ずる心がなうてはかなうまい、——なう、愛染、そなたも一緒に、手向けの花をそなへて賜れ……

愛染、腑に落ちない風情で、呆れたやうに太郎を見る。その時かすかに、襖の向うで呻きごゑがきこえ、ばたりと物の倒れる音がする。

(愛染)(きつとなつて上手を睨む) 誰ぢや、そこへ來たのは何者ぢや？

短き間。答へなし。太郎、思ひあたることがあるかのやうに、をづをづした足どりで上手へ這入る。

(太郎の聲)(力のないがつかりした調子で) 楓が死んだ、刃に伏して死にをつたのぢや。

(愛染) 大方氣でも狂うたのぢや、——死ぬのはおのれの勝手ぢやが、所もあらうに、そのやうなむさい死人をどこへ捨てるのぢや。

太郎、氣が拔けたやうに、茫然として戻つて來る。

(愛染) 蟲螻蛄のやうに暗いところにちぢまつて、泣いてばかり居たなれど、生きてゐれば何かのさまたげ、………もうけふからは、此の愛染が晴れておぬしの妻になるぞゑ。

(太郎) 折角ながら。己はけふから獨りになる。………

(愛染) 何？ 何とお云やる？

(太郎)(憎々しげに愛染を睨んで) そなたは鬼ぢや、聖を犬にさせをつた罪の深さを知らぬと云ふは、鬼の心ぢや。

(愛染) あははは、妾が鬼ならおぬしは何ぢや。いつからそのやうな臆病蟲に憑かれたのぢや。

(太郎) 聖のをしへで、無明の太郎は眼が開いたわ、上人さまと亡き妻とが、己を導いてくれたのぢや。

　云ひながら、遺骸の前にひざまづく。

(太郎) おお、何と云ふうるはしいお顔ぢや、ぬすびとを救うて下されたお方が、地獄へ墮ちよう道理はない、……きつと淨土へお生れなさるる。……

　愛染、太郎の隙をうかがひながら盗んだ品物をこつそりもとの袋に入れ、ふところに隱して立ち上る。

(太郎)(しづかに愛染を呼び止める) これ、そなた、そのふところにある物を返してくりやれ。

(愛染) これは妾が貰つて置くのぢや、おぬしは盗人を止めたと云ふに、何で寶に眼をくれるのぢや。

(太郎) この寺ぢうにある寶はみんなそなたに進ぜようほどに、あの觀世音を返してくりやれ。——亡き上人の回向のため、妻の菩提をとむらふために、あのお姿を肌身につけて此れから御山へ參るのぢや。

(愛染) ほう、よい心がけぢや、(ふところから黃金佛をとり出し、太郎の前へからりと投げつける) さ、欲しくばくれてやるほどに、早う此處を出てお行きやれ、——臆病者に用はないぞゑ。あははははは、

　愛染、高笑ひしつつ足音荒く上手へ這入る。太郎は黃金佛を取り上げ、恭しく眼の前に据ゑる。

(愛染の聲) あはは、何と云ふ臆病者ぢや、あはははは、

　太郎、刀を拔いて髻を切る。愛染の笑ひ聲がまだ聞えてゐる。

(幕)



雪解の流

小川未明

森は、身震ひするたびに、雪を振ひ落した。もう長い冬の間、凍つた雪は、かさぶたのやうに、骨ばかりになつた喬木の梢に、こびりついてゐた。また、憂欝で、忍耐強い、常盤木の枝に凍えついてゐて、ちやうど、光つた、白い簑を被たやうに氷柱が枝から垂れ下つてゐたのである。

この間、嵐は、たへず地上を脅やかしてゐた。嵐は、北の方から吹きつづけた。限りもなく遠い雪原の上を渡つて來て、最後にこの森を襲ふやうにも見えたのである。そして、さながら、金屬製の飾り物でも弄ぶやうに、枝から下つた、氷柱を搖つて、カラン、カラン、カランといふ響きを立てた。

河が、この森の傍を流れてゐる。その河もまた、長いこと止まつてしまつた。兩岸には、厚く重なり積つた雪のために、河幅は狹ばめられて見えたのである。そして、藪は、みんな雪の下になつてゐたが、そこだけは、暗い空洞となつて、ありかを知らしてゐた。たま／＼小鳥が、この穴を、こちらから、あちらへと飛んで行つ

て、小さな姿を隠す影を見る他には、ただ、嵐の絶え間なく吹きすさむ音を聞くばかりだつた。

しかし、季節がめぐると、この雪原にも、また憂欝な森の中にも、雲を破つて、日の光りが射した。

河の水は急にうなりを立て、流れるやうになつた。両岸の厚みのあつた雪の面には、深い亀裂ができて、いまゝで匿されてゐた藪が、もく／＼と下から、頭を擡げつゝある氣はひが感じられる。

黄金色の日光の箭は、この暗い森の繁みを分けて入る時に、特に、珍らしい場處でも探りあてたといふやうに、微笑んで見られたのであつた。ある夜、暖かな、大きな南風が吹くと、もう木々の根許からは、雪が消えはじめて、後には、黒い、しめつた土が匂やかにあらはれた。

まだ、春になつてから、日が淺かつたのである。幸吉は、河に糸を垂れて、その竿の先のあたりを見詰ながら、ぼんやりと俯向いてゐた。

山の方から流れて來る、氷塊が、あやふく竿の先にかからうとするのを、彼は、見詰てゐるのでもなかつた。また、いまも脅やかさうとして、森の中に叫ぶ、時々北の方から吹いてくる嵐の音に、耳を澄ますのでもなかつた。彼は破れたマントを着て、頸に襟卷をしてゐた。その太い頸は、だん／＼重もさうに下がるのであつた。

「いつでも、いゝ値で、寒鮒ならもらひます」と、町で言つた、その言葉を信じて、彼は今日も、この河にやつて來たのにちがひないが、いま、彼の頭の中にあつたものは、そのことでもなかつた。

彼は、病み衰へた、長い間、苦勞をしつづけて、いつしよに暮らしてきた、妻のことを思つてゐたのだ。

「妾は、もう長くはないでせう。幸二が、大きくなりますまで、どうか、面倒を見てやつて下さい」と、家を出る時分に、彼女が言つた言葉もなんとなく氣にかゝつた。

家の前の垣根がやつと半分ばかりあらはれてゐた。まだ、家のまはりは、冬からのまゝになつてゐて、雪がこひが取つてなかつたので、どの部屋の内も、日の光りが充分には射さずに暗かつた。

妻は、長い間、床についたり、離れたりしてゐた。この時、彼女は、立ち上つて、幸吉が、釣の仕度をして出かけるのを見送つたのであつた。

秋から、この方、釣竿は、忘れられてゐるので、糸が縺れたり、針がなかつたりしたのもあつた。彼は、それに手入れをした。

「まだ、お行きになつても、駄目ぢやありませんか。寒いのに行つて、體を壞はしては、なんにもなりません」と、彼女は、窶れた顔付で、ぢつと彼の姿を見守りながら言つた。

この時、彼は、默つてゐた。なぜなら、釣に行くより、仕方がなかつたからだ。

それでも、日が當ると、小さな羽蟲が家の横手にあつた、杉の木のうす暗い下枝のあたりで、面白さうに輪を描きながら舞はつてゐた。それを見ると、彼は、もう幾分か、河の水も、冬の間よりはぬるんだので、思はぬ獲物がないものでもないといふやうな氣持がされるのであつた。生活のためではあつたけれど、彼は、もとから釣に對して深い趣味を持つてゐた。他の人が、全く釣らずに歸つた時に、彼だけは、籠の中に大きなのを入れて、誇り顔に戻つて來たこともあつたので、この頃は、釣師になつても、近所の人々は、それをば怪しまなかつた程である。

彼の母親は、もう死んでしまつた。母親は、どんなに、悴が、こんな生活しかされないのを日頃歎げいてゐたか知れない。そして、それは、いまの妻であるおたつと、彼が、結婚したばかりに、さうなつたのだといつて、すべての罪を彼女に着せようとした。

彼の妻は、此母親の許にあつて、長い間その苦しみに耐へて來た。母親は、死んだけれど、彼女の苦るしみは去らなかつた。どうして、この貧乏を切り拔けて行つたら、いゝだらうかといふ思ひは、日夜、彼女の心を苦るしめたからだ。

「うちの倅は、子供の時分には利巧で、誰れ一人として、褒めぬものはなかつたものだ。いまの嫁とさへ、いつしよにならなかつたら、世間の氣受けもいゝし、出世もしてゐたにちがひない。あんな者の娘をもらつたといふだけで、務めもしくじれば、相手にする者もなくなつてしまつたのだ」

彼の母親は、ひとりで愚痴を言つた。その言葉が、嫁のおたつの耳にはいるように言ふのであつた。

おたつは、これを聞いても、何ともいふことができなかつた。俯向いて、顔を赤くして默つてゐた。涙が、いつしか眼の中にいつぱいになつて、仕事をしてゐる自分の膝の上に落ちることがあつた

おたつは、よく働いた。どうかして、姑の氣にいるようにと思つた。家内のことから。外の仕事まで精を出して、働いた。しかしそれがために、彼女の家庭が、貧乏から救はれることはできなかつた。

彼女はその親戚の人々とも親しまふとした。そして、できるだけ、いゝ感じをば、その人達から受けようとさへ思つた。彼女は、眞心をつくしたら、かならずそれ等の人達は、いつか、同情の眼をもつて、自分を見てくれるやうな日があるにちがひないと考へた。

しかし、姑の言つたことは、それ以上に、親戚や、身のまはりの人々の心を動かした。

「これでも、昔は、武士の家柄だのに、罪人の娘をもらつたのでは、血筋が汚がされてしまいます。ご先祖に對して、申譯けがない話です。それも、取得のある女ならいゝが、役に立たないので、何をしても、私の目から見ると、ぐずぐずしてゐて、歯痒いくてなりません」

幸吉の母親の氣性を知る者は、かういふのを聞いても、無理とは思はなかつた。長い間寡婦を通して、一人息子の幸吉を育てたのである。もう年をとつて、頭の髮の毛は、一筋一筋、銀のやうに光つて、顏には、皺が寄つたけれど、若い時と同じやうに、はき〱と仕事をした。夜は、おそくまで、燈火の下で夜業をした。そして、居眠り一つするではなかつた。

おたつは、子供を負つて、立つたり、坐つたりした。夜は、晝間の働きで疲れてがつかりすることがあつても、氣儘に寛ろぐことすらかなはなかつた。いつも、冷かな、氷のやうに冴えた姑の目が、自分の上に、注がれてゐるからであつた。

彼女は、いくたび、子供を遺して、どこかへ行つてしまはふかと、思つたこともあつた。けれど、人のいゝ夫と、子供が、後で苦るしみ、悲しむのを考へるとそんなことはできなかつた。

彼女は、この苦るしみの裡に、年老つた姑が、いつまでもかうあるのでない。そして、亡くなつてしまつてからは自分達の生活は重い石を除けたように、輕やかになるやうな氣持がされたのである。

しかし、それも、空想に過ぎなかつた。却つて、生活は、より暗く、苦るしくなつた。

姑の存在するうちは、氣が張つてゐたものか、これまで、感じなかつた、右手の痛みを寒い日には、覺えるやうになつた。

彼女は、針を持つ右手の肩を、左手で叩きながら、

「幸二が、生れたすぐのことです。お負つて井戸端へ水を汲みに行きました。手桶に水をいつぱい入れて下げる時に、石につまづいて轉びました。その時、たゞ背中の子供のことばかり考へたので、バケツを放して手を地面に突かうとし

た柏子に、石で肘を強く打つたのです。それが、いまになつてから、打身になつて出るのです」

おたつは、じみ〳〵と思ひ出すやうに、言つた。窓の外には、時折、吹雪の音が、きこえた。

幸吉は、役場を退いてからは、思はしい勤め口がなかつた。家を開けて、老母と妻を殘して旅に出る程の覇氣を持たなかつた。彼は町で團扇や、提燈の卸賣をする店の仕事をしたのである。彼は、子供の時分から畫がうまかつたので、學校でも教師に褒められた。まだ、妻の父親は、子供の時分の幸吉をよく知つてゐた。

「俺は、學校へ行つて見て來たが、よく描けてゐる。なか〳〵感心なものだ」と、言つて、彼の頭を撫でたことがあつた。彼は、そのことをいつまでも忘れずにゐた。學校では時々、生徒に自由畫を描かせて出品さした。そのなかの優れたのは、これを額にして、父兄會の時に展覽さしたのであつた。その後、幾年か、彼の生活は、提燈や、團扇に畫を描くことであつた。この店は、可なり地方に手を廣げてゐると見えて、めつたに仕事の切れる憂へはなかつた。

「いつも、三、四月になると、品物を澤山まはしてきましたのに、今年は、まだ、まはしてきませんが、妾、明日にも、町へ行つて様子を見て來ませう」と、彼女は、言つたのであつた。

「この頃、なんだか冷淡になつたなあ」と、幸吉は、炬燵にあたりながら、暗い顏をして答へた。

彼女だけは、燈火の下で、時々、右の肩さきを叩きながら、縫いものをつゞけてゐた。

「妾にも、そんな氣がいたします」

幸吉は、仰向になつて臥てゐた體を起して、言つた。

「金が、できたからだらう……」

彼女には、商人が、たとへ金ができたからといつて、冷淡になるとばかりは、思はれなかつた。

「いえ、お母さんが、おなくなりなさつてからですよ」
「さうか、しらん」
「あすこの主人は、お母さんを怖れてゐたのです。間違つたことがあれば、お母さんは、つけ〳〵おつしやつたんですから……お母さんは、傍に、他の人がゐる時でも、思つたことは、おつしやつたんですもの……」と、彼女は、言つた。
間違つたことの嫌いな、姑の性質は、よく彼女にも分つてゐた。それだけ、彼女は、自分の死んだ父親のことを言はれる時は、胸の中が苦るしかつた。
もし、姑が生きてゐたら、こんなに、仕事を切らすやうなことがないと思はれると、いつになく、死んだ姑が、なつかしまれたのである。
「妾が、あした行つて來ます」と、彼女は、思いつめた、調子で言つた。
口では、たとへかう言つても、彼女は、あくる日になつて、町へ出て、その店の前に至ると、誰か、他に人が來てゐはしないかと氣おくれがした。そして、まづ知らぬ顏付をして、その家の前を素通りして見た。
曇つた、うす暗い、寒い日であつた。彼女は、町から歸ると、がつかりしたやうな様子で、入口からはいつて來た。
「もう、店には、ちやんと提燈が積んであるのですよ」と、まづ、彼女は、かう言つて、その後をば、言ひよどんでゐた。
「どう言つた？」と、幸吉は、眼を見張つて、彼女の方を向いた。
「あんまり、失敬な話なんです。いつも行きますと、小僧が丁寧に挨拶をしますのが、顏を見ても知らぬ顏をして、あ

ちらを見ましたので、なんだか、妾には、變な氣がいたしました。しかし、この者には、用事がないと思ひまして、主人は？と聞きますと、奥にゐますが、何か用事ですかと生意氣なことを言つたのです。妾は、用があるから來たのだと餘程言つてやりたかつたのですが、こんな者を相手にしたつてと思つて、ちよつと呼んで下さいなと言ひました……」
「いや、あすこの小僧は、生意氣だよ」と、幸吉は、この話を聞きながら、むつとした樣子であつた。
「主人が、また、失敬なんです……きつと、小僧に、あゝいふやうにせいと言ひ付けたのかも知れません」
「何と、言つた？」
「昨日や、今日の關係ではありませんのに……「今年は、他の人に描いてもらうことにしました」と、素氣なく、言つたのです。妾は、あんまり、それでは、薄情だと思ひましたから、うちでは、當てにして、今日品物が來るか、明日來るかと心待にしてゐたのだと言ひますと、「失禮ですが、繪の模樣が、少し古いと思ひますから、今年は、もつと派手な新しい繪を描いてもらうことにしました」と、言つたのです。妾は、もう、それ以上言ふ氣がしなかつたので、いまいましいと思ひながら、歸つて來ました」と、彼女は、言ひ終つて、さも、無念さうに、汚れた袖口で、淚を拭いてゐた。
幸吉は、たゞ、暗い顏付をして、途方に暮れて、默つてゐた。彼は、この事だけに限らない。世中の冷淡と橫暴に對して、復讐するには、あまりに弱かつたからだ。
彼は、役場を退いた、最後の日のことを思ひ出した。
前日、彼の妻の父親は、捕へられて行つたのであつた。
東山の機業地から、知り合の男が、澤山反物を賣らうとして、持つて來たのである。男は、彼女の實家に宿をしてもらつた。父親は近所の人々や、また町の人々で、心やすい間柄を廻はつて歩るいた。それで、その二三日はいろいろの

人が、父親の家へ出たり、入つたりした。雪がちら〳〵と降つて、物悲しい風の音ばかりが聞かれるのであつた。夜になると、家では、その男と父親と、ある時は、また他の者などもまぢつて、いつしよに牛肉鍋などをつゝいて、酒を飲んだ。葱の煮える臭ひが、家の前を通ると、外の寒い空氣の中まで漂つて來た。

もはや、全く、暗くなつて、往來の人足が杜絶えた時分に、この家ばかりは、窓の障子が明るく、そして、内から、陽氣な歌の聲がしたり、また、悲しい、哀れつぽい松前追分の節などが洩れたのである。

ある日、暮方から、知らぬ人達が、ぽつり〳〵とこの家に集つたのを、近所の人々は見た。中には、同じ家の前を、二度も、三度も、往つたり、來たりしてゐたものもあつた。そして、家の内の様子を覗つてから、忍び込むやうに、その者は入つて行つた。

「今夜は、あの家に、何かあるのだらうか?」と、訝かしげに、さゝやいた者もある。

その人達は、あまり廣くもない一軒の家に集りながら、内部で何をしてゐるものか、いつもの如く唄の聲が洩れるでもなしまた酒を飲んだりして、笑聲がするでもなかつた。不思議に、人の氣はひがない如く、いつまで經つても、しんとしてゐた。その間に、默つて、襟卷で目深く顔を隠くした男が、出て行くと思ふと、また、ちがつた様子の男が、案内も乞はずに、無言のまゝはいつて行つた。

賭博をしてゐたことが、あくる日になつて分つた。誰か、指した者があつた。眞夜中頃この家の内には、大騒ぎが起つた。七八人の者が、一つ繩で繋がれて行つた。

幸吉は、その日の午前、いつもの出勤時間よりはおくれて、泣いてゐる妻を殘して、役場へ出かけた。

彼は、途中、いろ〳〵なことを頭の中に考へたのであつた。

役場に行くと、みんなの眼は、彼の顏に集つたので、彼は、すぐに感ずることができた。

晝飯がすんでからのことであつた。外は、相變らず曇つて、風が、黒ずんだ高い杉の木の葉を動かしてゐた。硝子窓を透して、外の雪が白く見られた。火鉢のまはりに、みんな集つて、火にあたつてゐた時であつた。あご髯のある、脊の高い助役が、

「いまゝで、この村から、罪人といふものを出さなかつたのが、とんだことになつてしまつた。村の名譽を傷けたもんだ」と、言つた。

それは、勿論、幸吉の妻の父親のことを言つてゐると分つた。幸吉には、それが自分に向つて浴びせられた、言葉のやうに思はれたのである。彼は、默つて、下を向いてゐた。

「とんだことをしてくれたもんだね」と、助役は、しばらくしてから、あたかも詰るやうな口調で幸吉に向つて言つた。

「なんですか？」

彼は、すぐに返事がしられなかつたので、かう言つたのである。

「なんですかもないもんだ。昨夜、君の親類で、賭博をして、引かれて行つたぢやないか！」と、助役は、村中の不名譽に對して、憤りをば彼に、持つて行くように言つた。

彼の顏は、ます〱赧くなつた。この時、彼は、こゝへ來る途中、頭の中に考へたことをつひ言ひ出す氣に、されたのである。それは、助役に對しての反抗ばかりではなかつた。實にさう考へたからだ。

「しかし、賭博といふことは、惡いことにはちがひありませんが、お互同志が、承知の上で、金をかけて、勝負をきめるのです。詐欺や泥棒とはちがふと思ひます」

「君も知つてゐるとほり、まだ、この村からは、罪人をだしたことがないのぢやないか。こんどが、はじめてだ。それをば、君は、不名譽と思はないか？しかも、君の親類からぢやないか………」

「まことに申譯けがないと思つてゐます」と、幸吉は、頭を下げた。

「申譯けがないだけで、すむことぢやない」と、助役は、言つた。

この時、村長は、居合はさなかつた。他の者は默つて、聞いてゐるより仕方がなかつた。幸吉は、やはり、朝來る時に思つたことを言つた。

「監獄にはいつてゐる罪人より、もつと悪い人間が、この世の中で立派に暮らしてゐます。たゞ、表面をごまかして、欺詐をしたり、泥棒をしてゐる者があるのです………」

助役は、顏の色を變へて怒つた。

「君は、謹愼してゐなけれやならんのに、いまの言葉は、なんといふ屁理屈なんだ。君、今日は、こゝにゐなくていゝから、家へ歸つて謹愼してゐたまへ」

村長は、毎日は、出て來ず、助役が、役場の中を獨りで切り廻はしてゐるのであつた。妥協の才に乏しい幸吉は、氣まづさに耐へきれなくて、そのまゝ家へ歸つてしまつた。

家では、幸吉の母親が、妻に向つて、それと同じやうな口振りで、

「とんだことから、私共の家名まで汚がしてくれた」とおたつに向つて、言つたのであつた。

「俺は、もう役場は、やめる！」

幸吉は、頑固に言ひ張つた。おたつは、どうかして、また、もとのやうに、出られるようにしたいと願つたけれど、

無駄であつた。

それは、濕つぽい風が青桐や、槲の木の葉に吹く五月であつた。まだ少年であつた幸吉は、おたつと木の下に莚を敷いて、その上に坐つて遊んでゐた。藁屑や、繩切れなどが、あたりに散らばつてゐた。

ちやうど、その時であつた。父親は、どこからか迷つて來た白い犬に、飯を與へて、頭や、脊を撫でながら、

「二人のお友達に、この犬を飼つて置いてやらう」と、言つた。

父親は、動物にやさしかつた。馬を大事にした。犬や、猫を可愛がつた。また、子供の言ふことは、よくきいてやつたのであつた。

その時、二人は、青々とした、木の間を透して、あちらの夕空が、紅くなる頃まで、犬と遊んだことを憶へてゐる。

その犬は、後で犬殺しが來た時に、つれられて行つた。

冬になると、村は、雪に埋れてしまつた。田も、圃も、野も、雪の下になつた。低い雜木は、影を沒してしまつて、雪の底に流れてゐる小川のさゝやぎも、耳には入らなかつたのである。

人々は、細い雪道の上を歩るいた。それも日暮に迫ると、暗い北の空から吹く風が、雪を送つてくるので、歩るく者も稀れであつた。たゞ、梢に、殘つてゐる枯葉が、悲しい、口笛を鳴らすやうに、音を立てゐた。

酒を好きな父親は、もうどこかで、酒を飲んできたものと見えて、非常に、醉ぱらつてゐた。けれど、酒に醉ふと、彼は、ます／＼陽氣に、愉快になる癖があつて、寒く、そして、外はわびしいのに、雪の上を千鳥足で歩るきながら、片方の手に、酒徳利の口に繩を結んだのをぶら下げてゐた。

彼の姿は、ふら／＼と雪の上に躍つてゐたのであつた。

「あゝ、いゝ氣持だ。どうだい…………あちらの森に、雪のかゝつた景色は…………どれ、こゝらで、もう、一杯やらうかな」

彼は、ふら／＼と體付をさして、また二三歩もあるいたが、ばつたりと雪の上に坐つてしまつて、徳利に口を付けながら、仰向いて酒を飲んだ。

「いくら金持でも、この味は、分るめえな」

彼は、ごろりと雪の上に臥轉んだ。

「小父さん、そんなとこへ臥ると、風をひくから」

子供等は、群がつてわい／＼言つた。

村の人々は、何事が起つたらうと、やつて來た。そして、笑ひ出した者もあつた。父親は、みんなに好い感じを持たれてゐるから、彼等は、父親を、家の方へつれて行つた。

だん／＼北の地平線から、暗くなつて行つた。

鳶が啼いて、また、夜には、吹雪の來ることを知らしてゐたのであつた。その下を、村の人達は、話したり、笑つたりしながら歩るいてゐた。そして、人間の去つた後の野原には、みんなの踏んだ足跡だけが殘された。

幸吉は、父親の昔の日のことを思ひ出すと同時に、監獄から出て來た時の、父親の衰へてゐた姿をも思つたのであつた。

その年の秋のはじめである。虎列剌が、この村を襲つた。巡査と役場員とが、毎日、石炭酸や、石灰を持つて、戸別に廻はつて歩るいてゐた。圃に熟しかけた、まくわ瓜や、唐もろこしなどを無理に、もぎとつて、河の中に捨てさせた

こともあつた。
その時、彼女の父親も、母親も、この病氣に感染して死んだのである。
彼は、常に、父親をなつかしく思つた。父親は、彼等二人を眞に、愛してゐた。
過去の一切は、ちやうど水の流れて行くやうに、二たび歸つては來なかつた。
幸吉は、ぼんやりと河面を眺めてゐた。赤い浮が、非常な速さで走つて行くやうにも、また逆さまに、河を遡つてゐるやうにも、見えたのである。しかし、それは、幻覺であつた。糸に繋がれてゐる浮は、いつも一處に水の勢いに押されて悶えてゐるのだつた。そして、たゞ水だけが、流れ去つた。雪の塊りを漂はせて、河水は、無韻の唄をたへずうたつてゐた。
午後になると、幸吉は寒氣を感じたので竿を上げて、絲を卷いた。仕度を終つて、空の籠を竿に結んで肩にかけて森の中を通つた時に、彼女が、朝出かける時分に言つた、言葉が思ひ出されて、氣にかゝつた。しかし、もうすぐに、それは、杞憂にすぎないことが分るやうな氣がした。
わが家に近づくと、前の垣根のところで、幸吉が、町へ出る、往來の方を向いて、獨りで泣いてゐるのであつた。
彼は、このごろヒステリーの強くなつた、妻のことを思つた。また、子供を酷たらしく叱つたにちがひないと感じた。それで、子供は、自分の歸るのを、かうして泣いて待つてゐるのであるまいか？
「幸二、お母さんが、また叱つたのか」
彼は、かういひながら子供の傍に近づいた。けれど、子供の待つてゐるのは、彼でなかつた。
「母さんがゐないの」と、泣きながら、答へた。そして、やはり子供は、母親は、町へ行つたものと思つて、あちらを

向いて、泣いてゐるのであつた。

　幸二は、まだ、晝飯も食べてゐなかつた。幸吉は、誰もゐない、しんとして、うす暗くさびしい家の内を覗くと、すべてが、彼の出かける前の有樣とは異つてゐなかつた。たゞ、雪の上を歩いて來た、彼の眼には、それ等のものが、ちらちらとしてよく分らなかつたのである。

「泣かんでいゝ、どこへ行つたか、俺は、そこまで行つて見て來よう」

　彼は、町と村との境になつた橋のところまで、夢中になつて走つた。そこに立つた時に、誰か、河端へ降りて行つた足跡が、雪についてゐないかと眼を左右に放つた。

　しかし、犬の足跡すら、雪の上にはついてゐなかつた。彼は、彼女が決して、河へ來なかつたことを知つた。

「町へ行つたか知らん……何用があつて、こんなに手間取つてゐるのか！」

かう思つて、しばらく立ちながら、橋の上で考へ込んでゐると、足の下を水が、橋材に打當つて、砕ける聲がきこえたのである。いましがたまで、彼は、この河の下で釣をしてゐたのだ。

　忩しく家に歸つた幸吉は、家に上つて、釣竿を裏の縁側の方へ持つて行つて、片附けようとすると、土間の片隅のところに、垂木へ細引をかけて、思ひがけなく、彼女は、縊死を遂げてゐた。もう冷たくなつた、青白い手や、足や、顔を雪圍ひの隙間から、射し込む、暮方の光線は傷ましげに照らしてゐたのであつた。彼は、死骸に取すがつて泣いた。

幸吉は、村の知つた人々と顔を見合せるのを嫌つた。彼は、ます／＼無口になつた。

獨り、ぼんやりと佛壇の前に坐つてゐた。彼は蠟燭に火をつけて、その火の燃えるのを默つて見つめてゐた。蠟燭は燃えるに從つて、蠟が流れて、だん／＼短かく、最後は盡きてしまつた。そして、その全く燃え盡さうとする時分には悲しい、暗い光を放つた。その時彼の眼の中には、涙がいつぱいであつた。

彼は、新しい蠟燭をともした。夜は、更けていつた。しかし、彼は、いつまでも／＼佛壇の前に坐つて、ぼんやりとして、蠟燭の火を見つめてゐた。

彼は、たへず、口のうちで何をかつぶやいてゐたのである。けれど、それが何を言つてゐるのか、知る人はなかつた。

子供の幸二は、學校で、算術の時間に、

「お前は、どうして、こんなやさしい問題ができないのだ。さうできなくては、落第するぞ」と、教師が、みんなの前で、彼を辱かしめたので、次の部室で、算術の復習をしてゐた。彼には、誰も、それについてみてやる者がなかつた。

彼が小さな拳をあげて、指で算へてゐる哀れな影法師が、うしろの障子の上に、映つてゐた。小さな拳、短かい指、それは蝸牛の影繪のやうにも見えたのであつた。曾て、同じ障子の上には、彼の死んだ母親が、俯向いて、針仕事をしてゐる、窶れた姿が映つたのだ。

幸二は、いつしか疲れて、机に依りかゝつたまゝ居眠りをしてしまつた。

春になつてからも、まだ、寒い晩があつた。……父親は、町の教會堂の番人になり、幸二は、叔母の家に養はれたのは、それから後である。

また、幾年かの月日は、流れ去つた。この村に生活する人々の上にも、また、遠い都會や、町に、住む人々の上にも、喜びがあり、悲しみがあつた。そして、小さな者は、大きくなつた。

辛二から出した手紙は、あくる日の晩方着いた。Mは、いつも、晩方になると、賑かな通りの方へ散歩に出かけるのであるが、この日も、また、いまゝでペンを持つてゐた机の前から離れて出かけようとした。すでに、歩かない前から、彼の眼には、銀行の隣りに、カフエーがあり、その隣りに新刊や、雜誌を賣る店があることが、幻に浮んだのであつた。ちやうど、家を出かけようとした時、郵便が配達された。赤い表紙の社會主義の雜誌に未知の青年からよこした、二通の封書である。

彼は、歸つて來てから、見ようとしたが、また、すぐに、それに眼を通してしまはなければ、いつまでも何か輕い負擔があるやうな氣がして、彼は、机の前に戻つて、その一通の封を切つて開いた。それは、西の國の青年から出した手紙であつた。

「私は、明日、收監されますので、急いで、この手紙を書きました。

委しく申せば、長くなりますので、たゞ、こゝに至つた事件の大略を聞いていたゞきたいと思ふのです。私達の農學校は、村でも、眺望の好い丘の上に建てゝゐました。私は、敎場の窓から、天氣のいゝ日には、遙かに見える海をどんなに、なつかしんだか知れません。また、あらしの日には、暗い空の下に、狂ひ叫ぶ怒濤を、どんなに悲壯な氣持でもつて眺めたか知れません。生徒は、すべてゞ七十餘人ありました。そして、みんなは、自分の學んでゐる學校を愛してゐました。

しかるに、去年の春から、この學校と、他村にある學校と合併の噂が持ち上りました。

私共の學校は、郡立であつて、他村の學校は、縣立であるので、こちらから、あちらに合併しなければならぬといふのです。私達はどうか、あと二三年のことであるから、この愛する學校で學びたいといふことを申出ました。そして、新しく入學する者からあちらへ行くようにしてもらひたいと願ました。私達はこの學校の眺望を愛してゐたばかりではありません。また、その周圍の土地に深い愛着を有してゐました。私達は、朝に、晩に、その土に鍬をいれて、汗を滴らして耕やしたのです。そして、もう二年の間、作つた野菜は、いづれもよく繁茂しました。

私達の切なる願ひは、聞きいれられませんでした。そこで、全校の生徒が、去年の秋、同盟休業をしたのです。その際、私と、もう二人のものは、この企ての主唱者と見做されて、三人は、退校を命ぜられたのでした。

私達は、この學校合併問題の裏面に、醜い事實の伏在することを知りました。學校の撤廢を待つて、某富豪が、その敷地跡に、自己の豪奢な邸宅を新設する計畫があつたことです。そして、この事情をよく知り、陽に陰に、それが便宜を圖る者は、實に、村長であつたのであります。

ある日、私は、決心をもつて、役場へ行き村長に自決を迫つたのです。その時、村長は熟考すると答へながら、後で、私を訴へました。辯論も畢竟無効でした。私は、强迫、職務防害、さうした罪名によつて、これから十ケ月の牢獄生活をしなければなりません。幸、身體が頑健ですから、刑を終へて、出て來たら、この社會の不正、不義のために、献身的に戰ふつもりであります。あらためて、お目にかゝる日のあることゝ思つてゐます。終りに、あなたの御健在を祈ります」

Mは、しばらく瞑目してゐた。その手紙をもとのやうに卷いて、封筒に收めた。そして、もう一つの手紙を取り上げた。それは、東北の青年からの通信であつた。

「はじめて、先生に、お手紙を差上げることをおゆるし下さい。常に、無産者や、虐げられたる者のために、味方して下さることに對して、深く敬慕してゐます。私の母も、父も、力が弱かつたがために、いたましい生涯を送りました。私も、子供の時分から、薄倖の身の上でした。物心がつくに至つて、私は、一家の不仕合な運命について歎げかずにはゐられませんでした。

ある時、私は、雜誌で先生のお書きなされたものを、偶然にも讀む機會を得ました。そして、大に得るところがあつたのです。苦るしむもの、悲しむもの、虐げられるもの、それは、獨り私達ばかりの身の上ではないことを知りました。そして、また、それが、私達にとつて、不可抗の運命でないことも分りましてから、私は、どんなに勇氣付けられたでありませう。

私は、それから、先生のものは、力の及ぶかぎり見ることにつとめました。そして、常に鞭打たれ、勇氣付けられて來ました。私は、いま親戚に厄介となつて、働いてゐます。そして、少しばかりの金を得た時は、町へ行つて、先生の文章の出でゐる雜誌や、また、書物を買ふことを無上の樂しみにしてゐます。

私は、頁を繰りながら、さびしい街道を歩るいて、村の方へ歸るのです。並木があつたり、また、石塊の澤山轉がつてゐる河原などがあります。私は、橋の上に立つて、時の經つのも忘れて、瞑想に耽ることがあるのでした。

私は、外面平和さうに見えて、しかも内部には、悲慘なことの多い村に於ては、たしかに異端者です。彼等の眼が、やうやく、私の上に向けられることも覺悟してゐます。しかし、この全國には、私と同じ境遇の者が、幾何あることでありませう。

私は、前途の困難を豫期してゐます。そして、それに、よく忍びます。どこにゐても人間として強く、意義ある生活

をしようと思つてゐます。

終りに、先生の御健康と御健闘とを祈つて止みません」

その手紙の末には、幸二と名を署してあつた。

叔母の家に養はれた、幸二が、遙かに、私淑する先輩にあてゝ出したのであつた。

Mは、その手紙を讀み終ると、もとの如く封筒に收めた。いつしか、明るく、書齋には、電燈が點つたのである。

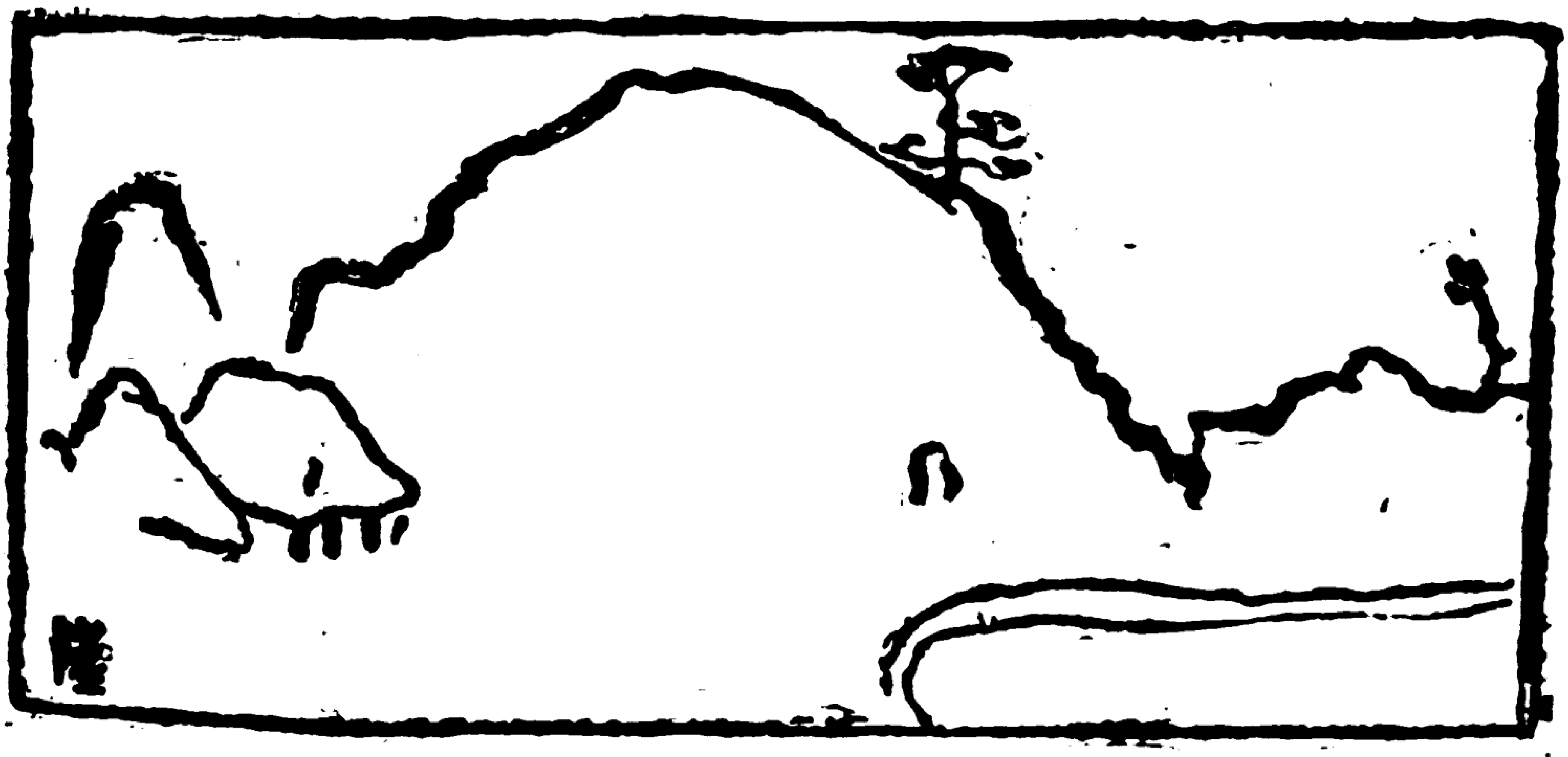
彼は散歩に出かけた。

桃色のうす絹をかけたやうに、都會の空は色ばんでゐた。

田舍にも春が來た時節であつた。河には雪解の水が、滾々と流れ、土手には、いろ／＼な草が、濕つた、黒い土を破つて、綠色の芽を萌す時分である。そして、まだ、北から吹く、寒い嵐が、裸になつた森を脅かすのであつた。

やがて、落日は、地平線に沈んだ。はてしもなく大きな、重い、暗い夜の翼は、南北の差別なく、その下に、大地を包んだ。

――一九二四、一作――



蕩兒の墮ちる地獄（三幕夢幻劇）

倉田百三

――武者小路兄にさゝぐ――

登場人物

男（蕩兒）　　　復讐の女神
童子群　　　　淫婆七人
遊女二人　　　母と娘二組
A子　　　　　友人
醫師　　　　　下宿屋の女中
髯のある男　　青年
夫人　　　　　その主人
女三人　　　　赤ん坊を抱いた女の幽靈
職人風の男　　患者
助手　　　　　看護婦
その他

時と處不詳

序曲

舞臺。日陰の濕地。異様の形狀をなせる樹木背景を蔽ひ、いやらしき形の花つけたる草一面に生ふ。中央に一個の塚穴。それを巡りて七個のやゝ小さなる塚穴。正面後にも塚穴の列あり。初め舞臺空虛、喇叭の音聞ゆ。

正面中央後ろより復讐の女神現はる。聲なく眞直ぐに立ち、一瞬間眼をとぢたるまゝ。其の顏は石の如く硬く、絶對的無表情。其の服裝は眞白く徹み透るやうに寒き感じを與へる。軈て目を開く。其の目も氷の如く冷たく、然し非常に美しい。彼女が手を擧げると其の前の列の塚穴から童子の群が現れ、左右に列ぶ。其の顏は草葉の如く靑ざめ、眼は燃ゆるが如く、眞白き肌は血に染みて居る。手には矛と盾とを持つ。女神無言のまゝ中央の塚穴を指さす。左右の列より一人づゝの童子列を離れて、塚穴の方に進み、中央の塚穴の蓋を開く。

右側の童子の列（矛にて盾を打ちて歌ふ。）目にて目を

左側の童子の列（同じく矛にて盾を打ちて唱ふ。）齒にて齒を

塚穴の中より男目をつむりたるまゝ、眞直にせり上り一瞬間後目を開く。あたりの様子を眺める。ひどく驚いた様子にて、再び塚穴の中に入らんとす。二人の童子矛もておびやかしつゝ塚穴に蓋をする。

右側の童子の列（唱ふ。）我等が肌けがれたり。

左側の童子の列（唱ふ。）我等が肌けがれたり。

左右合唱。けがれたり。

男（身を廻らして初めて女神の姿を認める。その視線と遇ふ。全身凍りたる如く立ち竦む。）

右側の童子の列（唱ふ。）此處には假借絶えてなし。

左側の童子の列（唄ふ。）秤の性質に據るばかり。

左右（合唱。）秤の性質に據るばかり。

男（兩手にて頭を蔽ふ。）

二人の童子男の墓穴の廻りなる七個の墓穴の蓋を開く。二人の童子列にかへる。各々の墓穴より一人宛の淫婆同じく目を閉ぢたるまゝ現れ、一瞬間後目を開く。その眼は爛り、毛髪は拔け、顏は皺だらけであるが厚く粉粧してゐる。男を見出すや此れを圍んで輪を作る。

七人の淫婆（輪舞し乍ら唄ふ。）

はらはったんはらはらは

へらへつたんへらへらへ

——幕

第一幕

第一場

下宿屋の二階と覺ぼしき處

男。あゝ退屈だ。アンニユイといふ奴がこんなにたまらないものとは知らなかつた。俺は前より刺激はずつと多い。女にも不自由はしてゐない。買ふことを知つてからは。それにいつも女に飢えてゐるやうな氣がする。いつも刺激が足りない。人生は却つて前より退屈になつた。コツ〳〵勉强してゐた頃にはもつとずつと希望があつたが。その癖女は一人もなかつたのに。だが今更どうなるもんだ。(解剖學の書物を擴げる。)骨の名前ばかり覺えるのは今の俺の生活全體と何といふ不調和な皮肉だらう。だが今度はもう延すわけに行かない。ギリ〳〵だ。(讀みかけてすぐ本を閉ぢる。)何だつてこんなにいやに細かいんだ。一つ一つ蚤の頭程の凹みがあればもう名がついてゐる。やり切れない

友人。(入つて來る。)失敬。

男。あゝ。

友人。殊勝にやつてるね。

男。(苦笑する。)絕對絕命だ。

友人。(座り込む。)これを皆讀むのかい。此のノートを。

男。まあ、さうだ。

友人。やれ〳〵。おや、これは皆人の名前だね。

男。借りたのさ、勿論。（溜息を吐く。）幾ら讀んでも〳〵先きへは出られない。これまでの借りを返すだけだ。
友人。全く借金と同じだね。利息が返せるだけだ。
男。うつかりしてゐた。幾らか入れとかないと流れるのだつた。
友人。いつ迄たつても女慾（フラウヱギールデ）と金缺（ゲルドマンゲル）だね。君は。
男。本當だ。新しい處へは出られないんだ。同情してくれ給へ。
友人。厭だね。平生の。
男。君はお召を着てゐるね。
友人。うむ。（ニヤ〳〵笑ふ。）
男。あの後家さんからか。
友人。そんな處だ。後家さんからこしらへてもらつた着物を着て、娘さんとあひびきに行く。
男。君は金をつくる名人だ。
友人。君も徹底し給へ。なまじつか道德意識は捨て給へ。
男。僕は懷疑だ。此の頃は女の外には何も本當の價値はない氣がする。他の事は皆その價値の手段だ。
友人。僕は初めから云つて居る。疑ふ事の出來ない價値、絶對的價値は感覺――特にスペルマチオンの瞬間だけだ。
男。肉欲が俺のすべての價値を喰つてしまつた。
友人。それもそれだけが價値だといふまでゝ、それが大變價値があるといふわけぢやない。
男。さうだね。大した快樂でもないね。まつたく。それで居てそれより外に價値がない。それを求めずにはゐられな

い。

友人。求めれば、求めるだけ飢じい。

男。二日醉の時には何を嗅いでもアルコールの香ひがして胸が惡くなるが、俺は何を見ても……がくつついて來る。樹の幹を見ると女の胴を聯想する。果物を見ると……を思ひ出す。張物板の赤い布を見ても、柔かな……を見ても――

友人。その位ならまだいゝ。俺は何の關係も無い新聞記事でフランスがドイツを强迫して居るのを讀んでも、道で蛇が蛙を喰つてるのを見ても……が起きる。そして凝ツとしてゐられない程いら〳〵する。

男。何もかも臭い。何もかも汚ない。熱病にかゝつたやうだ。

友人。曇つた眼鏡をかけてるやうな、濡れたシヤツを着てるやうな、うるさく、鬱陶しい……頭が腐るやうだ。

男。俺は往來でいゝ女の後ろ姿を見ると、…………………………。君はそんな事はないかね。

友人。俺は此の間郊外を歩いて居てふと一人の子守に出遇つた。俺は異常な………………………。子供が泣き立てなかつたらどうなつて居たかわからない。

男。君は其處まで行つてるのか。

友人。何しろその時さうするのが惡いと云ふ道德の權威が少しも感じられないのだからね。僕にとつては道德とは個人的快樂主義だ。俺自身に快樂を與へるものが即ち善だ。

男。最大多數の最大幸福主義よりは君の方が整合的な事だけは俺にもハツキリ解る。

友人。では君は社會的幸福主義より以上のものが見出だされるのか。

男。遺憾ながらそれが見出だされない。

友人。では君は僕を非難する根據はない。

男。では君を……から止めて居るのは制裁だけだね。

友人。さうだ。僕の怜悧だけだ。昔のためぢやない。

男。だが僕らは果して怜悧と云へるだらうか。僕は此の間板橋でつく〲さう思つた。コイトウスもちつとも快樂ぢやなかつた。カス〲してゐた。…………「下に行つて店を張つて居ろ」と云つたら女は憎むやうに俺の顔を見て下りて行つた。俺は考へた。俺は何しに來たんだ。しかも來るためには無理算段して金をつくつて。――たまつてゐるノート、バツの惡い借金、それに後に控えて居る反動的な空虚と倦怠――それでも怜悧と云へるだらうか。

友人。だから俺はその空虚を補うのに罪惡を以てする。たらしたり、捧つたりする。女を口說き落すのは不思議な快樂だ。俺が強迫するのがだん〲好きになるのはそうすると……の快樂が恐ろしい程增大するからだ。さうしなくては……はもう僕等にはカス〲したものになつたのだ。

男。俺はどうも處女にはさうなれない。

友人。君らしくもない不整合だね。…………論理を別にすると云ふのは。僕のやうに徹底したまへ。

男。さうなり切れない處に僕の二重の苦痛がある。

友人。君は案外初心だからな。それでゐて――あれはどうした。此の間來たお孃さんは。

男。あれは生娘だ。まだ拾七だ。

友人。ホヤ〳〵ぢやあないか。(肩をたゝく。)しつかりしろ。

男。いやあれだけは——あれは僕の安全瓣だ。僕の墮落の。

友人。君は弱者だ、道德家の仲間外れで、又デカダンとしての名譽もない。

男。善は空虛だ。どうして罪惡は充實してゐるのだらう。

友人。多分神は概念で、惡魔は實在だからだらう。

男。カス〳〵したものと知り乍ら、どうしてこんなに驅り立てられるのだらう。

友人。それが僕等の人生さ。惡魔が實在なら、世界とは地獄のことだらうからな。

男。あゝ。俺の生活は蠟を嚙むやうだ。それでいつも女だけほしい。と云つて勉强をしないわけにも行かない。でなくては結局女が得られなくなる。生活の殆ど全部は只手段で、無味乾燥だ。その間にポツリ〳〵と女がはさまる。それがすむとすぐ元の蠟を嚙むやうな生活だ。

友人。しかもその肝腎の女がかす〳〵して來る。

男。デイレンマだ。恐るべきデイレンマだ。

女中。(掃除した茶道具を持つて這入つてくる。)

友人。君こんなのはどうだい。物だらうか人格だらうか。

女中。何を云つてらつしやるのです。惡口でせう。

友人。此の人がねえ、お前さんが此頃綺麗になつたとさ。

女中。又初まつた。(男の方をチラリと見る。)

男。馬鹿な。

女中。（退場）

男。冗談を云つちや困る。

友人。君あの女は君に氣があるやうだぜ。

男（苦笑する。）

友人。まさかあんなのに手出しをする者はあるまいからな。

男（何か考へて不愉快さうな顏をする。）　時に君僕は變なことがあるんだが。……君がやつたのはトリツペルだつたね。

友人。ああ。

男。實は股の處にぐりぐりが出來てるんだが。

友人。ふむ。そいつは醫者に診せないといけないぜ。

男。君は自宅でやつてゐたぢやないか。

友人。初めは醫者へ行つた。それに横痃だつたら手術しなくては。

男。困つたな。

友人。まだわからないよ。

男。（不安さうに）いや、どうも只の淋巴腺とはちがうやうだ。……出かけるのかい。

友人。あゝ。（ニヤニヤ笑ふ。）後で報告する。

男。いや、許してくれ。挑戦するのは。君の話をいつも聞かなければならないのは僕の一つの地獄だ。

友人。僕は話して反對するのだ。……だが僕のはもう單なる色事(いろごと)ではない。――惡事だ。

男。色魔か。

友人。君も早晩さうなるのだ。色慾は必然的に色魔にならざるを得ない。

男。行つてくれ。僕は骨の名を覺へなければならない。

友人。（退場。）

男。（書物を讀みかけるがすぐ止める。）どうもやり切れない。知識欲がなくて、たゞの手段としてこんな煩瑣な勉强が出來る筈がない。手段である以上できる限り簡單を望むのは當然だ。しかも此の限りのない複雜な、面倒な、器械的な暗記をしろといふのは無理な註文だ。人間なら堪えられない。（間）しかし今度延ばすと……弱者になつて、仙人のお殘り物をしやぶつて――どうしてもやらなければならない。あゝ。デイレンマだ。どうしてもデイレンマだ。（間）彼奴はうまくやりやがるな。……俺はどうして色魔になれないんだ。俺は道德を認めてはゐない。それだのに俺の内の「善人」は……こいつがまた俺の苛責だ。

A子。（登場。）急にお目にかゝりたくなつて……お手紙を見ると。

男。よく來てくれました。

（沈默。）

A子。本當で座いますか。あれは……

男、本當です。私はいろ／＼な事もして來ました。しかしあなたに對してだけは……

A子。でも私のやうな……

男。あなたゞからこそです。他の女にはすれからしな私も――他の女は皆私を受け容れる事ができませんでした。そのくせ身の振方を先きに考へました。自分が潔くもないくせに。それにあなたは自分は清いのに私のふしだらを知り乍ら、どこまでも純に――あなたに對してだけは――

A子。私でもよろしかつたら……私は……

男。若しあなたを欺したら――(……。)

A子。(…………。)私うれしくつて……

男。(………。)あなたは可愛い。(………。)

A子。捨てゝはいやよ。(涙ぐむ。)

男。私を信じて下さい。ね。B子さん。(………。)

A子。(硬くなる。)

男。(氣がつかない。)どうしたんです。

A子。(はげしく泣く。)

男。どうしました。え。急に、そんな(……、口を耳たぼのとこまで持つて行く。)え。B子さん。B子さん。

A子。(男を突き放し立ち上る。)酷いわ。酷いわ。

男。(氣がつく。沈默。)

A子。(泣きつゞける。)

男。ゆるして下さい。ゆるして下さい。

A子。そんな……大事な〳〵時に。

男。ゆるして下さい。僕は決して嘘を吐いたのではない。どうして間ちがへたのか自分にもわからない。

A子。わたしを侮辱遊ばすんです。

男。さういう譯では決してない。

A子。わたしはあなたを信じあげました。これまでどんな事をなすつても、心は清い〳〵方だと。私にだけは本當だと……それだのに。あなたは……あなたは……

男。本當なんです。まつたく眞實なんです。

A子。あゝ。恐ろしい。（柱に身を支へ、息苦しそうに胸を波打たす。）

男。A子さん。きいて下さい。B子といふのは私が前に關係した女です。その女は私が「遊ぶ」ことを知るとすぐ私を捨てたのです。今少しもその女を私は愛してはゐない。輕蔑してゐる。それだのにどうして私はその女の名を呼んだのだらう。

A子。私の耳の中であなたのお聲が釣鐘のやうでした。たつた三口の聲が。

男。尤もです。あなたがいやだつたのは。しかし私は決して心にあの女を思つて云つたのではない。

（沈默。）

A子。（出て行かうとする。）

男。待つて下さい。

A子。でもわたし……歸つてよく考へて見なくては。

男。も少し辯解させて下さい。まつたく無意識な——

A子。（遮ぎる。）それは信じます。でも私さう思つても何か殘るものがあるんですから。（退場）

（沈默）

男。これはたしかに辯解しにくい事だ。（間）彼の女はもう來ないだらう。（間）俺はもう駄目だ。彼の女で女に對する俺の淸さをやつと喰ひ止めてゐたのだが。（立ち上り、部屋を歩く。）もうおしまひだ。俺は墮ちさうだ。もつと下へ。——汚濁へ。

第二場

病院と覺しき處。病室。

男。（ベットに寢てゐる。）

醫師。どうも小さくならないな。

男。駄目でせうか。

醫師。少し進んでますから。

男。手術しないで何とかなりませんか。

醫師。さあ。——レントゲンをかけてゞも見るか。

男。さうして下さい。なるべく手術しないで——

醫師。（輕蔑したやうに男を見る。）まあ。もつと冷して見たまへ。（退場）

男。(嘆息を吐く。)
或る女。(入つて來る。)やつと探しあてました。
男。却つて、通知しませんでした。
女。何處がお惡いのですか。
男。(曖昧に)。痔です。——今日は顏色が惡いね。
女。實は心配が出來ましたの。夫に感づかれました。
男。(ドキッとする。)どの程度迄。
女。一番深い處まで。
男。(暗くなる。)だが證據は握られてはゐないでせう。
女。それが——日記を見られたんです。
男。馬鹿な。あなたらしくもない。
女。手ぬかりはない筈だつたんですが。——(男の顏を見る。)あなたは引受けて下さいませうか。——私の運命を。
男。お互いに、さう事をシリアスにしない約束だつた筈ですが。奥さん。
女。でもかうなりましては。——私何も手に職もないのですから。
男。貯蓄がおありでしたね。
女。お恥しい事ですが、實はあれは體裁に——それに夫は今は權利を持つてゐますから、私の上に——あなたの上にも。……

男。私の上にも！——多分あなたは御主人をなだめる事が出來るでせう。
女。それが夫は高利貸見たやうな人間ですから。
男。ふむ。
女。金です。——金なら解決できるかも知れません。
男。僕は金はない。
女。でもお國の方はね。
男。困つた。
事務員（登場。帖簿を擴げて）失禮でムいますが。このお名前はあなたの本當のお名前でムいませうか。
男。……
事務員。御都合も御座いませうが、病院では規則がありまして。
男。いづれ又後で。
事務員。では（退場。）
女。なぜ僞名なさるのです。
男。見舞がうるさいから。
女。（窓の下を見る。）大變……夫が來ました。
男。（靑ざめる。）
女。（早口に）金にして下さい。ヤボを云はないで——到底かくし切れませんから。

夫（登場）私は名譽を恢復しに來たのですが。――くどく云ふ必要はない。君が否認しない限りは。それとも否認しますか。

男。……

夫。此處に一切を自白した女が居る。

女。（男の耳にさゝやく。）

夫。すぐに善後策にかゝりませう。見た處君は聰明な人だ。

男。方法は。

夫。私は利を愛する。あなたが色を好むやうに。

男。私は貧乏だ。

夫。あなたは署名すればいゝ。私が貸してあげる。――それとも國家に仲裁を委任しますか。

女。のがれられませんわ。もうかうなつては。

夫。（紙片を差し出す。）

男。（おどろく。）こんなに。

女。仕方がありません。

男。この率は恐るべきだ。

夫。半年間あなたは樂しみました

女。あなたは私を引受けて下されば、隨分私の生活費がかゝるでせう。私はぜいたくですよ。

男。ふむ。美人局だな。

夫。引つかける氣で引つかゝる。

男。(署名する。)

夫。(妻に) 多分私たちを長く見て居たくはあるまいから。

女。ではお大事に。…………………………………………。やつぱり淋しいものね。人と別れるのは。

夫。左樣なら。(扉口で振り返る。) だがこれ切だと思ひ給ふな。

男。へまな人間だ。俺は。へまといふこともいゝことではない。自己侮蔑を感ずる。

看護婦(登場) 御面會です。

男。どんな人でしたか。

看護婦。(笑をかくす。) 御婦人です。

男。通して下さい。(看護婦退場。) はてな。

女中。(登場)

男。(眉をひそめる。) お前か。

女中。あなたは酷い。在りかをくらませて。

男。ついて來てはいかんといふのに。

女中。そんなにいふもんではありませんよ。やつと探しあてゝ來たのに。(花束を枕元の瓶にさす。) これお見舞に。

男。ありがたう。だが退院するまでもう來てはいけないよ。

女中。あなたは何故私を嫌うんですか。そんなに嫌なら何故――（泣き出しさうになる）。

男。さういふ譯ではない。だが具合が悪いから此處では……もう二度と來な。

女中。いゝえ。來ます。そんなにうるさがるならなほ來ます。

男。なに。僕のいふことを聞かないのだな。若し二度とやつて來たら――

女中。捨てゝしまうと云ふんですね。あなたは。捨てられるものなら捨てゝ御覧なさい。私は何處までもついて行くから。

男。お前そんなに僕を追つ掛けてどうしやふと云うんた。まさか僕の女房になれるとは思つてゐはしないだらうが。

女中。（顔中がしかまる。）そんなだつたら……何故あなたはあの時――

男。あの時は酒に醉つて居た。それにお前の方がもと／＼俺に氣があつて――

女中。（涙をポロ／＼落す）私だつて、私だつて、たゞのなぐさみものにされるのは……（しやくりあげる。）

男。泣くのは困る。え。たのむから泣くのだけは止せ。――人が來る。

友人。（登場）

男。君、どうかしてくれ給へ。困つてゐるんだ。

友人。（女中を睨んで）なんだ。此處を何處だと思つてゐるんだ。

女中。（何泣きつゞけ乍ら）くやしい。くやしい。

友人。歸れ。――もし歸らないと……

女中。嚇かすんだね。嚇かすなら嚇かして見るがいゝ。

友人。何だと。
女中。喰ひ付いても放しやしないから。
友人、(もてあまして) 少しは名聲も考へてやれ。
女中。あなたらが無理をなさるんなら、あたしもう恥も外聞も構やしないから。
友人。私が仲には入る。悪いやうにはしない。今日は歸つてくれ。
女中。さういふなら今日は歸ります。だけど覺えてゝ下さい。私もうあなたらが放さうとしたつて、放れるんぢやないから。雷が鳴つたつて放しやしないから。(退場)
友人。恐しいことを云うぢやないか。雷が鳴つても放しやしないとよ。山椒魚といふ魚が一度噛み付くと雷が鳴るまで放さないといふことを聞いてるが……
男。困つたものに引つかゝつた。
友人。あんなに思つてるんだ。一層の事女房にしてやつてはどうだ。
男。(泣き出しさうになつて) 冗談どころぢやない。一體君があの女をおだてたのが惡かつたんだ。俺が氣があるなんて。
友人。まあ怒るものぢやない。
男。君は僕を嘲笑するのか。
友人。俺は何でも嘲笑する。あらゆるものを俺の快樂の手段とする。
男。俺は嫌ひだ。

友人。なに手を燒くと段々習業が積むよ。――色魔道の。

男。色の林の奥深く……ああ俺は迷ひ込んで來たんだな。

友人。山の奥の奥まで俺が引つ張つて行つてやる。

男。君は恐しい導師だ。……さしあたりどうしたらいゝだらう。彼の女は。

友人。何でもない。見て居給へ。俺がどうして此の君の醜惡事を苦もなく片づけるか。――處で君の病氣はどうだ。

男。どうもいけない。冷して見てはゐるが。これからレントゲンをかけて見る氣だ。

友人。ふむ。止し給へ。醫者を肥すばかりだ。思ひ出すと胸が惡くなる。百日の間毎日々々通つて、手應へのない光線を、しかも金屬の板越しにあてる。效くのか、効かぬのか一寸もわからない。その辯お金の方は一度、一度、現金で支拂ふのだ。歸つてから、少しは小さくなつたかと思つて撫でゝ見る。一向解らない。醫者は小さくなりましたねといふが、さう思へばさうも思へる。さうでないとも思へる。だから不服も云へない。止める事もできない。

男。で結局はどうだ。

友人。百日目に醫者は患部を見て、ケロリとした顔で云うんだ。「少し切開した方がいゝかも知れないね」つて。

男。おやレントゲンも駄目かな。

友人。手術は遁れられまい。

男。あゝ。（間）君、云つてくれ給へ。ひどく痛むものかね。

友人。さあ。――生きた肉を切つたり、燒いたりするんだからな。

男。嚇かしちやいけない。

友人。嚇かしと思うならナイフで一寸と君の股を突いて見るといゝ。

男。肉體的苦痛といふものはいやなもんだ。

友人。（眞面目に）さうだ。世界中で俺の如何ともできない苦手は肉體的苦痛のみだ。――これは決して嘲弄できない。

男。生きてる者が、凝ッとして生き身を切らせる。――そんな不合理な事があるだらうか。

友人。いくら不合理でも君はもう遁れられない。君の聲がかれ、君の髮毛が脱け、鼻が落ちるのを君が耐えられない限りは。

男。……

友人。さうなつて見給へ。すべての家の門は君に閉ぢられ、あらゆる女が君から逃げる。君が街を通ると子供がはやす――

男。おゝ。俺は禍ひだ

友人。君が肉體的快樂を唯一の福とする限り、肉體的苦痛は唯一の禍ひだらうからな。まつたく整合的だ。はゝゝは。

男。君は笑うのか。

友人。肉體的苦痛は嚴肅だ。それは笑う事を許さない。併し此の場合はそれを受けるのは君であつて、僕ではない。

男。魔藥だ。クロヽホルムだ。――俺はそれをかけてくれるやうに院長に賴もう。

第三場

手術室

醫者。此の病院では此の類の手術は麻藥は掛けない事にしてあります。

男。さうではありませうが、特別にお願ひしたいのです。

醫者。注射をしてあげます。

男。注射では不安です。

醫者。女でも、もつと大きい手術を、例へば乳癌の手術を注射で辛捧します。

男。僕は特別に神經質ですから、それでは耐へられません。

醫者。（助手にさゝやく。）

助手。（男の腕に注射をする。）

醫者。今の注射で意識が朦朧として來ます。で半睡半醒の狀態で手術出來る筈です。

男（不安さうに）本當ですか。

醫者。まあ、待つて呉給へ。そのうち今の注射が効くだらう。

男。（室の隅の腰掛にかける。）

手術室の扉があく。一人の看護婦血みどろになつたガーゼや脫脂綿を一杯入れたバケツを持つて出て來る。男の眼の前を通つて、もう一つのドアから出て行く。他の入口から繃帶した手を頸に釣つた學生登場。

學生。ガーゼ交換に來ました

醫者。（看護婦に手傳はせて繃帶をほどく。傷を見る。ピンセットで方々つゝく。）

學生。（面をしかめる。）

醫者。痛みますか。

學生。（耐えた聲で）ずいぶん。……（叫ぶ。）あッ痛い。

醫者。膿だ。……また瘻孔（フイステル）になつたな。

學生。（泣き出しさうな顏をする。）またですか。ぢやまだ癒るまでには長い〳〵間かゝるんですね。

醫者。まあ。辛棒し給へ。今度は燒いて見やう。

學生。さうして下さい。痛くてもヂリ〳〵長びくよりまだましです。

醫者。君はまだ一年だ。痔瘻の患者には五年もガーゼ交換に通つてるのもある。

學生。やれ。やれ、

（醫師看護婦と共に學生に手當てをして居る。）

男。（同じ腰掛にかけて待つてる他の患者に）君は手術を受けられたのですか。

患者。えゝ。

男。ひどく痛むものでせうか。

患者。かなり痛みます。ですが、それより肉の焦げる臭ひや、骨のポキ〳〵折れる音が怖い。

男。（青くなる。）魔藥はかけなかつたんですか。

患者。えゝ。醫者がかけてくれないんです。肋骨カリエスはかけなくてできると云つて。

男。賴んだらかけてくれないでせうか。

患者。さあ。――あなたは今日手術ですか。

男。えゝ。痛みは耐えられる程でせうか。

患者。苦痛より恐怖です。あなたは手術の時日かくしをよくして貰ひなさるがいゝ。私の時は隙間からメスのぴかぴか光るのが見えたのでひどく怖氣ついた。

男。痲藥をかけるのもあるのでせう。

患者。足を截り落したりするのはね。しかし此の頃は腹を切り開くのでもかけずにやると云ひます。

男。……

患者。それでも一度ですめばまだいゝが。

男。え。一度切りではないのですか。

患者。私は三度受けました。

（看護婦患者の名を呼ぶ。患者退場）

醫者。どうです。眠くなりましたか。

男。一向睡くなりません。咽喉がひどくかはくだけです。

醫者。はてな。……かはくのは注射の勢だが。

男。益々意識が冴へて來ます。

醫者。ではも一本やりませう。（注射をする。）

男。先生。僕は神經質ですから痲藥をかけて下さい。

醫者。君は痲藥痲藥と云ふが、それをかけると治癒がをくれるのだ。

男。をくれても構ひません。

醫者。がんばり給へ。君のためだ。

男。本人が希望する以上、をくれてもいゝといふ以上、かけて下さつてもいゝではありませんか。

醫者。（不機嫌に）醫者としてはさうはいかない。術も治療に害があると認めた以上は、一體僕がこんなに云ふのは僕のためぢやないのですぞ。かけた方が手術はずつとやりいゝのだ。

男。（哀願的に）よく解りました。さうではありませうが、僕は特別にネルフエーズですから。どうか枉げてかけて下さい。

醫者。君は卑怯者だね。

男。さうかも知れません。併し僕は意識があつて、自分の肉體の切られるのを凝つとして耐えてゐる氣にはなれないのです。

醫者。よろしい。君がそんなに云ふなら、やつて見て若し耐え切れない時にはかけてあげやう。

男。一層初めからかけて戴けませんか。

醫者。（答へず。看護婦に目くばせす。）

看護婦。（男の耳の穴にガーゼを詰める。）脱衣して下さい。

男。（着物を脱ぐ。）

（手術室から搬送車に載せられた一人の女血痕のボタ〳〵ついた半裸體のまゝ、繃帶を一ぱいされて運ばれて來る。）

男。（青ざめる。）

醫者。（手術服と着かへて。）見給へ。あの女は乳癌を麻藥なしで手術したのです。

（同じく眞白の手術服を着た二名の助手出て來る）

醫者。睡くなりませんか。

男。（首を振る。）ます／＼はつきりします。

醫者。君は酒をやりますか。

男。えゝ。

醫者。飲酒家はパントポンに强い。

男。（看護婦に。）水を一杯戴けませんか。かはいて／＼。

醫者。手術がすむまで辛棒し給へ。手術中に嘔吐すると困るから。

看護婦。（男に。）此の上にあがつて臥て下さい。

男。（手術台に上つて仰臥する。）

看護婦。（眼かくしの白布を面にかける。患部を消毒する）

男。（ピク／＼足を動かす。）

（看護婦たちクス／＼笑ふ。）

男。何がおかしいんだ。

助手。まだ消毒ですからりきまなくてよろしい。

醫者。（患部をさはつて見て、看護婦に）探針（ゾンデ）を。（男に）一寸痛むぞ。（探針を突込みぐり／＼かき廻す。）

男。(呻めく。足をびく〳〵動かす。助手と看護婦足を抑えつける。)

助手。力まないで。凝つとして。

男。(呻く) 麻藥をかけて下さい。

醫者。まだ探つただけだ。切つたのではない。

助手。(コカインを注射する。)

醫者。(メスで切る。)

男。(ピク〳〵足を動かす。)

助手。力まずに。力まずに。

他の助手。(低聲で) 我慢し給へ。君が色々……………結果だ。

(一同嗤き出す。)

男。を……をれは一生懸命なんだぞ。

(一同沈默)

醫者。(また切る。) さう動いては手術できんがな。

男。(泣き聲で) 麻藥を――麻藥を。

醫者。(助手と顏見合す。) 少しかけやう。

(看護婦クロヽホルムを浸したガーゼを男の鼻と口とにかける)

助手。數を計へ給へ。――ひと――つ。

男。ひと――つ。

助手。ふた――つ。

男。ふた――つ。

（段々聲がぼんやりして廿まで數へた時止める。）

男。（うなる。）

醫者。苦しいか。

男。（答へず）

看護婦。（脈を診て居たが）かゝりました。

第四場

林中と覺しき處

（年増の女と若き娘と伴ひ乍ら登場。）

年増の女。お前はまだ肩あげもとれないのに、もうそんな眞似をして。

若き娘。母さん…………。

母。お前は家で雛遊びでもしてゐるかい。どうしてそんなに私の後にばかりついて來るんだ。

娘。あたしどうも腑に落ちないことがあるんだから。

母。ね。お前はいゝ子だから母さんの邪魔をおしでない。一寸用事があるんだから。

娘。（何か考へて。）ぢや歸りますわ。だけど母さん。若し自分の娘の分も取りあげて喰べるお母さんがあつたら恥知らずですわね。

母。そうだとも。そんなお母さんは鬼だ。

娘。では歸りますわ。（退場。）

母。（石を拾つて投げる。）

男。（林の中から出て來る。）待たせるもんだね。

母。すみません。娘がつきまとうもんだから。

男。（笑ひ乍ら）まだお乳を飲むわけぢやあるまい。（二人並んで掛ける。）

母。……………………………。

男。（………………………。）

母。（……………）……………………………。

（…………………………………。）

男。（女の横顔を覗き込み）…………………………………………。（…………。）

娘。（樹の後から躍り出て、男に飛びつく。）

男。（おどろいて立ち上る。）

娘。…………………………。

母。あなたは。あなたは。

男。…………

娘。……………………………………。……

母。あなたは年端も行かないものを……

娘。（…………。）…………………………………。

男。（逃げ出さうとする。）

母。どうして下さるんです。

男。私が惡かつた。罪とは思つたが止められなかつた。ゆるしてくれ。

母。（嚴しく）それで——

男。綺麗にわかれる。そしてつぐなう。

母。…………………。

娘。……………………。

母。綺麗にわかれるのだつて。きれいに。

（……………………。）

男。つ……つぐなうんだ。

母。…………。

（二人娘の傍に行く。）

母。下へ「潰れたむくろに似合つた處へ。

（……………………………………）

男。（顏を蔽ふ。）

（間。）

一人の靑年（林の中から出て來る。つか〳〵と男の前にすゝみ）あなたはT……子といふ少女を御存じですか。

男。あゝ。

靑年。言つて下さい。あなたはその女を汚しましたか。

男。汚しはしない。合意だつたのだ。

靑年。では何故捨てたのです。

男。………………………………………………。……君は何故そんなことを訊く。そんな質問をする權利はない。

靑年。（一個の拳銃を出す。）さあ、いゝ方を取れ。

男。なんだ。一體君は。

靑年。僕はその少女の戀人だ。一生懸命の。

男。俺は汚したのではない。

靑年。汚したのではないと。よくそんな事が云へるな。僕は童貞だ。命がけでその少女を思つてゐる。僕はT子を處女とばかり思つてゐた。僕は一生T子を處女のまゝで置かうと決心して、自分を制して來た。しかしT子は或る日泣いて打ちあけた。僕は泣いた。天地が暗くなつた。君は何故そんなに無造作に僕の戀人を汚したんだ。

男。俺がT子と關係した時君はT子を知らなかつたのでないか。

青年。僕にとつては大事な〳〵眞珠——それを君は何の感激もなく、退屈まぎれに……あゝ。僕は憎む。呪ふ。

男。それは無理だ。

青年。いや。T子が僕のものでなくても、君の行爲は一般に尊いものを、——人類の寶をふみにじつたのだ。

男。君はまだ若い——物がわからない。

青年。僕は一個の青年として、處女性そのものゝために君と鬪ふ。君がふみにじつた青春の名譽のために決鬪を申出る。

（ピストルを突きつける。）さあ。

男。俺はさういふ野蠻なものには感激がない。

青年。君も男子だらう。

男。ふん。馬鹿らしい。

青年。卑怯者。決鬪を申込まれて、受ける事ができないのか。

男。俺は今はもう誇りといふやうなものは持つてゐない。それよりなるべく人を殺すやうなことはしたくない。すべてが空恐しく、ゾク〳〵して來だした

青年。さういふ殊勝らしい言葉はT子に對する君の行爲と釣合はない。

男。（嘆息する。）俺は惡氣があつてT子を弄んだのではない。たゞズボラだつたのだ。

青年。さうだ。君のズボラのために僕は死にたくなつたのだ。人生の信仰を失つたのだ。……さあ、武器をとれ。

男。君は若い。——愛すべき青年だ。俺は君のその水々しい胸を打ち貫きたくはない。

青年。いや。僕は君のそのダレ切つた、しまりの無い脳髄を打ち毀すまではをさまらないのだ。
男。君は到底理解しさうにない。
青年。さあ、勇しく闘へ。
男。血氣より、年の功だ。勝味は君にない。
青年。なに。（ピストルを無理に握らせる。）そんなら打て。（胸をたゝく）此の雪のやうに眞白な運動服の胸を。
男。（瞑目する。）
（二人十歩離れて互にねらふ。同時に發射する。青年倒れる。）
青年。T子よ。――青春よ。僕はお前のために悦んで死ぬぞ。（死ぬ。）
男。（死骸を抱く。）俺は意志に反して殺さねばならなくなつた。かつて自由の意志でした一旦の不謹愼のために。……
そして此れ等がみなたゞでは濟まない。薪と油とがまた積まれた。おゝ俺は禍ひだ。
――幕

第二幕

第一場

花野。一端に泉あり。石の橋がかゝつて居る。日輝き鳥うたふ。

男。（歩き乍ら）嗚呼退屈だ。周りが美しければ美しい丈け俺は退屈だ。あの蜜蜂がぶん〳〵呻つて花から花に蜜をあさつて居るのを聞くと俺は苦しい。俺は飢じいのだ。女が一人あつたらなあ。俺は女が好きだ。女程いゝものはない。女がなくては花が何んだ。太陽が何んだ。（間）俺は肉慾がほしいのではないのだぞ。俺は女の色香がほしいのだ。いや、それよりも女の感情(こころ)に惹かれるのだ。それは露よりも哀れだ。俺は其の甘い露にびつしよりとぬれたい。只それだけだ。ちつとも女を傷つけるんぢやない。

一人の女。（花の蔭から登場。男の側を無言のまゝ通りぬけやうとする。）

男。お待ち下さい。お嬢さん。

女。（立ち止まる。）

男。突然見知らぬ者が聲を懸けてお赦し下さい。でも私は呼びかけなくては居られなかつたんです。

女。（去らうとする。）

男。お待ち下さい。多分あなたは私を無禮だとお思ひになつたんでせう。貴女の御立腹は貴女に充分ふさわしい。貴女が美しいから。然し見知らぬ男と女とが突然野原で會つて話しかけたとしても、其れは必ずしも間違ひではありません。

女。…………………

男。（女の面を熟視する。）何んと云ふ美しさだ。

女。（男の面を射るやうに見る。）

男。貴女は何うしてそんなに冷たい目をなさるのです。貴女の目は氷りのやうに冷い。だが實に美しい。

女。（冷やかな笑ひを浮べる。）

男。貴女はどうしてそんなに沈默していらつしやるんです。何んとか言葉をかけて下さつてもよろしいのでせう。

女。（沈默。）

男。あゝ貴女の冷たい美は私の心を捉へてしまふ。（跪く。）私は死ぬ程貴女に惹かれる。何とか仰しやつて下さい。

女。（唇に手をあてる。）

男。冷笑されてもいゝ。只貴女の眞珠のやうな齒を見せて下さい。

女。（沈默。）

男。お願ひです。お孃さん。（跪く。）私を可哀想だと思つて下さるなら。

女。（突然指をまろめて男の鼻先きに爪彈きし、そのまゝ無關心なる態度にて、舞臺を横切つて退場。）

男。（立上る。）氷女奴。（間。）あゝ俺に今ほんの一筋でもいゝから優しい感情を懸けて呉れる女があつたら。

一人の女。（反對の方より登場。なれ／＼しく男の側により。）何うしていらつしやるんです。

男。私は淋しいんです。

女。私と同じですのね。

男。私は辱しめられたんです。或る女から。

女。まあ。あなたを辱しめる事が出來るつて何んな女の方でせう。

男。石のやうに冷たい女です。私を愛して呉れる女があつたら。

女。…………………………。

男。そんな事はありません、私は優しい女の心に飢ゑてゐるんです。

女。…………………………。

男。…………………………。

女。(冷笑をかくす。)では指切りをしませう

男。…………………………。

女。……… ………………。

(二人指切りをする。)

男。(馴れ〳〵しく)貴女の愛の證據を見せて下さい。

女。證據ですつて?。

男。えゝ。解つて居るでせう。

女。(わざとらしく)存じませんわ。

男。(急に怒つて見せる。)貴女は卑怯だ。愛のない證據だ。

女。許して下さい。そんなに怒らないで。

男。いや。私はもう知らない。

女。（泣いて見せる）あなたに捨てられたら私は生きては居ません。

男。（急に優しく）では證據を見せて吳れるんですか。

女。（しなをする）私ほんとうは解つて居ますの。

男。（夢中になる。）では…………（……………………。）

女。（男の手をたゝき返へす。）もう澤山。

男。（怒る。）貴女は今になつて。

女。あなたは眞面目になり過ぎました。

男。私は眞面目です。すべての飢ゑて居る者がさうであるやうに。

女。私は眞面目になる事は大嫌ひです。其れは愚かな事です。貴男はよく御存じの癖して。

男。さうです昔は。併し今は私の饑餓が──

女。それに惡い事にはあなたは眞面目になるだけ醜く、田舍者らしくおなりです。それは私にとつては堪らない事です。

男。氣がきいてゐると云ふ事はこゝでは何んと云ふ困難でせう。

女。でも私あなたをさう云う方かと思つたんです。あなたが私を惹きつけたとすれば、其の點だけだつたんですから。

男。それはひどい。一旦愛の誓約をした以上その證據を見せ合ふのは戀人同志の義務です。

女。それは隨分危險な事です。事が危なくならない程度で泣いたり、怒つたりして樂しむのがかしこい事です。左樣

なら。

男。貴女は私を捨てるのですか。それでは私は生きては居られません。

女。(ふき出す。)およしなさい。みつともない。此處では野暮な事ははやらないんです。(退場)

男。ちえつ。此處では女はずるいんだな。俺が飢ゑてゐなかつたら。だがよし。狐は落し穴で取れる。要心するがいゝ。

二人の女。(バケツを持つて石橋を渡つて登場。)

男。今日は。お孃さん。

女。私はお孃さんではございませんわ。(泉から水を汲む。)

男。お手傳ひさせて下さい。

女。それには及びません。

男。さう仰つしやらないで。私は一杯でもいゝから御手傳ひしたいんですから。

女。ではどうぞ。

(二人水を汲む。)

女。何をぼんやりしていらつしやるんです。

男。貴女の顏か水に寫つて居ます。あゝ綺麗だ。

女。お世辭をおつしやいますこと。

男。いゝや、まつたくです。私は前から貴女を知つて居りました。木陰に隱れて、貴女の姿を見て居ました。貴女を

驚すまいと思つて。

女。おや、それでは何んなにおはづかしい處を見られたでせう。

男。どうして。私は森の女神かと思つたんです。

女。（忙がしいさうに洗濯を初める。）私の手はこんなに堅くて、赤く膨れてゐますのに。

男。その赤い手がなんていぢらしいでせう。お孃さん。私はだまつて居られなくなつて出て來たのです。私は貴女を思つてゐるのです。

女。私澤山洗濯物がありますから。急ぎますの。

男。私と結婚して下さい。お願ひです。

女。冗談を。宅に母が待つて居ますから。

男。いや約束だけでいゝのです。そしてその代り——

女。今日は急ぎますから。

男。お待ち下さい。（媚を示して）返事をして下さる迄は歸しません。

女。（男の顏を見る。輕蔑の表情が唇に浮ぶ。）あなたの眞心を見せて下さつたら。

男。（驚く。）私貴女の爲には何んでも致します。

女。眞實で御座いますか。

男。無論です。指を切れとおつしやれば指を切ります。此の淵に飛び込めとおつしやれば飛び込みます。

女。（沈默。）

男。お孃さん。（指に接吻しやうとする。）
女。（立ち上る。）
男。私を信じて下さい。
女。（バケツを持つて石橋の上まで行く。）此處までいらつして下さい。
男。（石橋の上について行く。）
女。眞實に私を愛して下さるのでしたら、此の淵の中へ飛び込んで見せて下さい。
男。（沈默。）
女。さうすれば私もすぐ後から飛び込みます。
男。飛び込みます。（飛び込みさうにする。）
女。さあどうぞ。
男。併し貴女の顏がそれぎり見られなくなるのが苦しい。
女。ではお言葉通り指を切つて見せて下さい。私もすぐ切りますから。
男。（蒼ざめる。）
女。お世辭使ひ。あなたにおしやべりを切りにげさせるには、かうする他なかつたんです。あなたに指を惜しんであげませう。感情耽溺は愼しみなさい。愛や、誓ひや、證（あか）しや、大事なものをボロ〳〵と浪費するのは。………左様なら。私は御飯を焚かねばなりません。（石橋を渡つて退場。）
男。誰だ、今笑つたのは。（淵を覗く。身慄ひする。）

（舞臺突然暗くなる。淵の中からもやが立ち込めて來て、舞臺全體を包む。その爲に光線は黄色くなる。三人の女淵から這ひ上り登場。男顏を掩ひ、舞臺の前方に蹲る。）

第一の女。（皺だらけの顏に厚化粧して居る。）お久しう。

男。わしは見覺えはないよ。

老婆。何んだね。よく御覽よ。お前さん。自分…………忘れる奴があるものかね。

男。（一度老婆の顏を見、身慄ひして、顏をそむける。）

第二の女（その方向からのぞき込み）私をお忘れではあるまい。お前さんに可愛がられた女さ。おかげでこんなに落ぶれてしまつて盲になつたが、やつぱりお前さんが忘れられないのさ。

男。（顏をそむける。）

第三の女。（その方向から顏をつきつけ）わしは…………お前さんに御厄介になつた女さ。それでお前さんのお土産で、御覽の通り…………………………………………。

男。（顏を掩ふ。）

老婆。お前さんは女の子に飢ゑておいでのやうだから、あたしやお前さんをこつてりと…………………やつて來たのさ。

盲の女。わたしは目は見えないが、お前さんの肌を撫でさしてお呉れ。

鼻かけの女。わたしやお前さんが釣りそこねた娘のやうにつれなくはしないから、………………………。

男。あつちへ行け。俺は澤山だ。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

老婆。遠慮はいらないよ。お前さんが…………………………………………………

男。(拂ひのける。)

盲の女。私は盲でも……………。お前さんにほめられた昔のやうに。(……………)

男。(押しのける。)

鼻かけの女。……………………………………。(…………)

男。(突きのけて)どけ。どかないと——

老婆。いひゝゝ。お前さん此處を何處だか知らないな。

男。ゆるしてくれ。私を一人で居らして呉れ。わしはひもじくてもその方がましだ。

盲の女。わしはお前さんが氣に入つた。お前さんが……………………………………………
…。(…………)

鼻かけの女。昔お前さん……………………………………………………………
…………………。(男に抱きつく。)

男。赦して呉れ。わしを離して呉れ。

老婆。いや、離されないよ。お前の精血を吸ひ取つて、よろ／＼にする迄は。

盲の女。……………。

鼻かけの女。時が來る迄——私等の預る番だ。そして時が來たらお前さんはほかの番人に渡されるだらう。(皮肉に)そいつは多分もつと慈悲深いだらうよ。はゝはゝは。

第二場

遊里らしき、しかし幻想的なる部屋。一隅に華麗なる屏風立て廻はされ、他の一隅になまめかしき衣物が衣桁にかけてある。灯。

男。（蒼ざめて、よろ〳〵になり登場。しかしその不安な、燃えるやうな眼付と、額に浮んでゐる青筋とは心内の焦燥と飢えとを示してゐる。）

男。俺はどうしたんだ、俺の此の驅りたてる欲望が俺の肉體から出るくせに、俺の肉體がこんなに弱いといふのは不合理だ。無茶だ。いざといふ時になると……あゝ、たまらない事だ。あの水々しい、逞しい生れたばかりの、獸のやうな、精力はどこに行つたんだ。……女は俺にとつてもう憧れではない。打ち貫かねばならない的だ。底を突き拔くべき舟だ。俺の欲望は集中する。一點だ。開眼だ。

（遊女らしき美しき女登場。）

女。お目見得に參りました。（指をついて頭を下げる。）

男。此方においで。

女。（羞しさうにする）

男。お前は美しい。お前にする。

女。お氣に召しましたら……

男。俺はお前のやうに音なしい妓が好きだ。もつと近く。

女。（寄り添ふ。）

男。いゝ眼をしてゐるね。お前は。

女。お口がうまい。（…………………）

男。（…………）冷めたい手だね。（………）

女。あれ。旦那。（…………………………）

男。（………。）

女。（………………）

男。（……………………………）

女。どうなすつたんです。

男。（女を放す。）氣分が惡い。

女。（變な顏をする。）急に。

男。心臟がドキ〳〵するんだ、俺の癖なんだ。

女。（てれて）私がお氣に召さないんでしよ。

男。さうぢやない。へんな病氣なんだ。

（氣拙き沈默）

男。今夜はあちらに行つてやすんでくれ。

女。（泣き出しさうになつて）はい。

男。お前は好きなんだよ。好きなんだよ。だけど……………。（ゴロリと橫になる。）

女。（コソ〳〵と逃げるやうに退場。）

男。あゝ。俺はどうしたんだ。あんないゝ女を見すく\逃がして……それに女だつてよろこびはしないのに，（起き上る。）もう動悸はケロリとをさまつてゐる。飢えは倍になつて生き返る。……あゝ苦しい。俺はむしろ去精僻になりたい。

（ほこりに充ちた、併し魅するやうに美しい女登場。）

女。誰か私を……………。

男。お前のやうな女を見たのは初めてだ。

女。私はお職なの。（男の顔を見る。嫣然とする。）あなたは何て可愛い。

男。お前は黒光りがする程美しい。

女。…………。

男。うむ。だが俺には……

女。何を初心らしく（顔をつゝく）あなたは氣に入つた。（手を取る）いらつしやい。（……………）

（髯のある大男とそれを制し乍ら仲居と登場。）

髯のある男。何處へ行きやがつたんだ。

仲居。お待ちなさいよあなた。

髯のある男。女を出せ。女を。

仲居。今すぐつれて行きますよ。

髯のある男。見ちがへるな。俺はふられて默つてすつ込むやうな男ぢやねえぞ。

仲居。わかつてゐますよ。だからさ。

痣のある男。ぢや早くしろ。俺は睨んだ女を意地を通さずにすました事はねえんだ。

（二人反對の側に退場）

（屏風の影から初めに男、後から女追ひすがつて出て來る。）

女。何だね。つまらない。…………………。

男。俺のくせなんだ。

女。意久地なし。

男。病氣なんだ。心臟が……

女。（強い侮蔑の表情を浮べる。）男の價打はない。

男。さうだ。俺は性的侮辱を感じる。だが、を……をれの病氣……業なんだ。

女。（憐憫の表情を浮べる。）それぢや男のたのしみはないぢやないの。

男。（沈默）

痣のある男。（登場）何をしてやがるんだ。

女。私の勝手ですよ。

痣のある男。早く來ないか。

女。（儼然と）いやですよ。

痣のある男。なに。（女の面をピシヤリと打つ。）

女。私を打つたれ。

髯のある男。ふれるたら撲つて見ろ。(また打つ。)

女。(突然)もつと打つておくれ。もつと。いゝ氣持だ。私を打つことの出來た男はお前さんきりだ。私はお前さんがすつかりすきになつた。

髯のある男。よし。(また打つ。)はゝゝ。面白い女だ。

女。打つなと、蹴るなとしてをくれ。……………………………………………

男。ぢや云ふことを聞くんだね。

女。…………………………………………。

男。(命令的に)來い。

女。はい。支配されるといふことは女にとつて何といふ幸福だらう。

髯のある男。此の男は何だ。

女。……………………………氣の毒なヘナ〳〵男よ。

(髯のある男と、女退場。)

男。(立ちあがる。身を慄はせる。極度の焦燥をもつて、あちこち歩き廻る。顏色は愈々青く、眸は變に据はる。)女人よ。女人よ。

玉の肌よ。神秘の宮よ。………………。參りたい。(………………………………………………

……。)俺は喰いたい。喰いたい。(よろめく。)あゝ俺は餓鬼だー

ダークチエーンジ(極めて早く轉換さるべし。)

第四場

右に暗き森。左に石の井戸。遠景に丘と十字架。

男。（青ざめてよろめき乍ら登場。）あゝ。咽喉がかはく。（井戸の側に寄る。釣瓶から飲みかける。と男の鼻さきに大きな皺だらけの擴げられた手がぬつと出る。男おどろく。）

女。かへしておくれ。かへしておくれ。

（一人の黄ばみたる顏した痩せ衰へた女が井戸の後ろから現はれる。）

男。誰だ。

女。わたしよ。お忘れではあるまい。

男。（女の顏を見る。）うむ。だが今頃何しに――

女。お前さんには貸しがある。

男。………

女。それをとりに來たんだ。返しておくれ。（手を出す。）

男。今更、ずつと〳〵昔の事ぢやないか。

女。帳面は消えてない。

男。（沈默）

女。さん〴〵搾つた金を皆返せ。

男。何もない。俺は何も持つてないんだ。

女。着物を脱げ。（男の着物を剥ぐ。）

男。これでいゝだらう。

女。まだ。まだ。

男。もう無一物だ。俺は丸はだかぢやないか。

女。眼で返せ。歯で返せ。

男。ゆるしてくれ。あはれんでくれ。

女。（冷たく笑ふ。何處からか女の恨み泣くやうな聲と、赤兒の泣聲が聞える。）

女。後がつかえて居る。左樣なら。

男。お前行つてくれるのか。

女。私たちは又逢うだらう。（退場）

男。（ほつと溜息を吐く。再び釣瓶から飲みかける。井戸の中をのぞく。ギクリとする。）あれは何だ。

（井戸の中から青い火が燃える。やがて赤ん坊を抱いた色蒼ざめた女の姿があらはれる。無言のまゝ凝ッと男の顔を見る。赤坊だけはしきりに泣く）

男。（顔を蔽ふ。）

女。なつかしや。なつかしや。

男。迷うたな。

女。ながい〳〵間あなたを待つてゐました私を可愛がつて下さい。

男。ゆるしてくれ。あきらめてくれ。

女。いゝえ〳〵あきらめることはできません。いつまでもついてゆきます。

男。…………

女。（赤ん坊に）坊や。お父様だよ。お父様だよ。

赤ン坊。（急に泣き止め、小さな眼を据えて凝っと男の面を見る。）

女。日の眼を見ずに死んだ、可愛相な兒です。抱いてやつて下さい。

男。（思はず後退りする。）

女。何故です。たしかにあなたの兒です。あなたのお子が私のお腹にゐた事は御存じでせう。私はあなたに捨てられ途方にくれ、八月のお腹で入水しました。さあ。抱いてやつて下さい。

男。（後退りする。）ゆるしてくれ。迷うてくれるな。

（赤ん坊又泣き出す。）

女。こんなに泣いてゐるのに……さてはあなたは――

男。消えろ。消えろ。

女。怨めしや。怨めしや。

男。成佛してくれ。

女。迷うぞ。迷うぞ。因果な子は奈落へゆけ。（赤ん坊を投げつける。赤ん坊は石に中つて死ぬ。）

女。死骸を負うてゆけ。(井戸の内に消ゆ。)

男。(頭を抑へて去らんとす。)

(その方角の森の奥より序曲に現はれた復讐の女神登場。同じく序曲に現はれた、蠻兒二人從ふ。)

男。(太つたやうに立ち竦む。)

(蠻兒、赤ん坊の死骸を男に背負はせんとす。男拒まんとす。蠻兒矛にて嚇かし、縄にて赤ん坊を丸はだかの男の皮膚に喰ひ込む位にくゝりつける。)

女神。(沈默のまゝ遠くの丘の十字架を指にて示す。やがて蠻兒と共に退場)

(男子供の死骸を負うてあちこち歩く。死骸を振り落さうとするが、深く肩に縄が喰い込んで居てはづれない。と突然大勢の童子群の鬨聲起る。男恐れをなし、隱れ場所を求めてうろ〳〵し、遂に樹の後ろにかくれる。童子群手に手に青竹を持つて登場。)

童子甲。あの男は何處に行つたんだ。

童子乙。今日こそ復讐日だ。

童子群。(皆青竹を持つて地面を打ち)復讐だ。復讐だ。

童子甲。見つけたぞ。あの樹の後ろに赤ン坊の足が出て居る。

童子乙。引つ張り出せ。それツ。

童子群。(鬨聲をつくり、突進し、男を樹の後ろから舞臺の前方に引きずつて來る。)

童子群。やゝァ。(鬨聲をあげ青竹を空にあげて矢來のやうに組む。)

童子甲。此の男の變な恰好を見ろ。

童子乙。赤ん坊の死骸をおんぶしてゐる。

童子丙。呪ひを負つてゐるんだ。

童子甲。罰せられたもの丶目じるしだ。

童子乙。さうだ。罰を受けるべきだ。此の男は。此の男は淸らかなものを瀆したのだ。

童子丙。無垢な肌を汚したんだ。

童子甲。順性の用を變じて、逆性の用としたんだ。

童子乙。自然を狂げたんだ。

童子群。聖靈を瀆したんだ。

男。（童子群の叫ぶ間兩手にて顏を蔽ひ、見物の方を向いて眞直に立つてゐる。）

童子甲。打て。

童子群。（青竹を揮つて一齊に男を亂打する。男地に仆れる。）

童子甲。（見廻して）もうよろしいか。空腹は癒えたか。

童子群。まだだ。まだだ。

童子甲。もつと打て。もつと打て。青竹が赤くなる迄。

童子群。（同打つ）

（男、身動きも出來ず死骸の如く横たはつてゐる。）

童子甲。（見廻して。）これでよろしいか。

童子群。（沈默）

童子乙。まだだ。復讐の或る性質が足りない。憎みに對しては憎みだ。併し——

童子群。侮辱に對しては侮辱だ。

童子乙。此男は學校の歸りをまち伏せて、藪の中でナイフで赫かして、…………

…………。

童子丙。此奴は私の小さな兩足をつかまへてさかさにしておもちやにしながら…………

童子丁。汚ないものを…………それを私の着物で…………。

童子甲。（丙と丁。）何でも君等の思ふやうにするがいゝ。

童子乙。（しばらく輕蔑の表情を以て睨んで後）俺はふぐを突くやうに此の男の厚い面の皮をついてやる。（青竹を持つて男の顔を突き押へる。）此の男の口の醜く、いがむのを見ろ。

（皆これに倣ふ。）

童子丙。なめくじのやうに唾でくたばれ。（唾を吐きかける。）

（皆之に倣ふ。）

童子丁。（先刻から極度の憎みのために青くなつて、顫へて居たが。）此の……此の男にはこれが一等似つかはしいぞ。

（立つて尿をかける。）

（皆之に倣ふ。）

童子甲。これでよからう。

男。（呻き乍ら）あはれみを。あはれみを。

（童子群青竹をかつぎ歌ひ乍ら退場。）

眼にて眼を。

齒にて齒を。

此處には假借絶えてなし。

秤のさゝがに揺るばかり。

（間）

男。（起き上る。身體をさすりながら、よろ〳〵として樹の幹にすがる。）骨節が痛い。噛むやうだ。俺が昔味つた肉體的快樂は俺にとつて禍ひであつた。俺はそれを増すためにはどんなことでもしたが。今俺はそれを呪ふ。（ふと繩の切れて居るのに氣がつく。）打たれた拍子に切れたのだな。さうだ。（子供の死骸を下ろし、樹の根元の土を掘つて埋める。あたりを見廻し立ち去らうとする。）

淫婆。（登場。）お待ちよ。お若いの。

男。（ギクリとして立ち止まる。）

淫婆。（男の裸體をジロ〳〵眺め乍ら）お前さん今此處で何をしておいでだつた。

男。（本能的に子供を埋めた所の土の上に上り、隱くすやうに立ち乍ら）俺は今通りかゝつたばかりだ。

淫婆。ふむ。お前さん御鳥目はまだだつたね。

男。なんだ。お前さんは一體誰だ。

淫婆。此處は私の繩張り區域なんだ。誰れでも此處を通り過ぎるものは通行税を拂はなければならない。

男。通行税？

淫婆。あいよ「一錢をも償うまでは此處を出づること能はさる可し。」

男。俺は一錢も持たない。御覽の通り裸かだ。

淫婆。（ニヤ〳〵笑ふ眼のふちに皺がよる。）裸か、結構

男。（ゾツとして沈默）

淫婆。なか〳〵美男子だ。

男。俺は行くよ。

淫婆。勝手にするがいゝ。だがお前さんの足の下には何があるか先きに答へなさい。

男。…………

淫婆。いや。何でもないよ。あれは多分夢だつたんだ。わしが祠(ほこら)でついウト〳〵してゐた時に、變な芝居を見た氣がしたのはね。ところで私お前さんを私の庵に招待したいんだが。

男。折角だが、辭退させてくれ。

淫婆。まあ。さう云はないで呼ばれとくもんだ。（命令的に。）ついておいで。私の庵を案内するから。

男。（不承不承について行く。）

淫婆。（立ち止まり指さす。）御覽あれが本堂だ。

男。一體お前さん何を祀つてゐるのだ。

淫婆。側に寄つて御覽。（指す。）あれが本尊さ。

男。（側に寄る。サツと顏を赤らめる。）

淫婆。（平然として）あの大燈籠の火は昔から消えたことはないが、あの油は美男子の體からしぼつたものだ。

男。…………

淫婆。あちらが墓地だ。

男。無數の茸だ。

淫婆。日が當ることが無いから。

男。何といふいやらしい形と色だ。

淫婆。あの墓地からは毎夜幽靈が出る。ひよろ〳〵に瘠せた女の。そして油をなめに本堂へ參詣する。生きてるうち男にさん〴〵しぼりとられた油を取り返すのだ。それで私は男の油をきらすことができない。

男。（青ざめる。）

淫婆。ついでに奥の院を案内しよう。

男。いや、もう澤山だ。たゞ一つきかしてくれ。此處ではどうして何もかもかう、歪んだ、へん〳〵な形をしてゐるのだ。

淫婆。何んでも變態なことでなくては刺戟が足りない魂が參る寺だからさ。無論ね。

男。…………

淫婆。何を今更そんな顏をするんだ。よし。お前さん得心が行かないやうだから、私が實地に敎へてあげやう。

男。あゝ。此處を通りかゝらねばよかつた。

淫婆。さあ　私の庵へ行かう。

男。行かせてくれ。俺は先きを急ぐから。

淫婆。先を急ぐ？　お前さん。どつち道同じことだらうぜ。どうせ拂ふだけのものは拂つてしまはなくちやお前さんの旅はすまないんだから。それどころぢやない。此處でゆつくりして行く方がまだましだらうぜ。（恐ろしい顏になる。）お前さん。云つて置くが此れから先きの道がもつとらくだらうとは思はないがいゝぜ。

男。（沈默）

淫婆。油がつきかけてゐる。油は補はれなければならない。

男。ゆるしてくれ。

淫婆。お前は交された。掟に據つてお前の油はさゝげられる。

男。（逃げ出さうとする。）

淫婆。（權威を以て）時が來るまで、假りの權力がわしの手にある。

男。（立ち竦む。）

淫婆。（男の手を取る。）お前の肌は水々しく、油つぽい。

男。いや俺の肌は尿で汚れてゐる。此の通りいやな臭ひがするだらう。だからお前——

淫婆　もう恥も忘れたな。だがわしはその臭ひが好きだ。…………

…………

男。…………

淫婆。わしは大喰だ。それに豚のやうに何でも喰べる。汚ないものだけ好んでたべる。つまり昔のお前さんの通りさ。

男。此處は恐るべき處だ。

淫婆。恐ろしいことはない。お前がしなかつたことを何一つ私はするのではない。たゞ今度はお前が受身になるだけだ。

男。どうしても遁れる事はできないのか。

淫婆。秤が平らになる迄は。

男。（目をつむる。）

淫婆。（男の手を取る。）おいで。私の庵へ。其處にはもう苛責の寢床が用意させてある。（男を引き立てゝ庵の内に退場。）

──幕

第三幕

岩壁で圍まれた狭い谷間の盆地。正面後の小高い岩の上に十字架が立つてゐる。その左方に更らに後ろに厳めしき鐵門、大きな錠がかゝつてゐる。右側は峻しい崖、かづらが纏ひついてゐる。崖の頂邊に孤立した、高い松が四五本、舞臺しばらく空虚。松に風の渡る音、左側から一人の女ふら〳〵と出て來る。三十五六歳、やさしい、母らしい顏と姿をしてゐる。只眼だけは遠方を見てるやうにうつろな感じを與へる。

女。（手に帽子と頸卷とを持つてうろ〳〵し乍ら）彼の人はどうなすつたんだらう。まだ戻つていらつしやらない。風の吹くのに帽子もかむらずに出ていらつしたんだが。頸卷なしで風をお引きになるといけないのに。もう今にお歸りになるだらう。

小女。（心配さうに同じ道から出て來る。左の頰にほくろあり）あゝ。此處にいらした。母さん。歸りませうね、家へ。

母。お待ちよ。もうちきお父さんがお歸りになるだらう一緒に歸りませう。

小女。（涙ぐむ）また同じ事ばかり。

母。お前もうお湯はたぎつてるだらうね。お歸りになつたらすぐ煮え花をあげたいから。

小女。えゝ。えゝ。母さん。だから歸つて、仕度して家で待ちませうね。

母。（ふところから帖面と鉛筆を出す。）處で私は今のまに計算をして置かう。かうつと。

少女。またあれだ。

母。うまいぞ。此の月は少しあませたやうた。それでお前にミシン臺を買つてあげたいもんだ。月賦でね。

少女。母さん。本當にかへりませう。寒いから。私ミシン臺も何もいらないから、母さん家にじつとしてして居て下さ

いね。

母。(松風に耳をすませる。) タクシーの音だ。きつと歸つていらしたんだよ。(退場。)

娘。(泣き出しさうになつて、) ちがいますよ。ちがいますよ。母さん。あれは松風ですわ。あゝ行つておしまひなすつた。(がつかりする) お歸りになるものか。出て行つたきり十五年も音沙汰もないのに。母さんが出歩かないでさへ下されば助かるんだけれど。追つかけてばかりゐるので、稼がれない。(決心したやうに) かうしてはゐられない。(退場)

(舞臺しばらく空虚)

男。(崖からかづらを傳つて下りて來る。ばつたりと倒れる)

娘。(引き返して來る。) おや。人が倒れてゐる。(側に寄る。) しつかりなさい。もし。しつかりなさい。

男。(夢中で) ゆるしてくれ。責めるのだけは。後生だ。

娘。(水を木の葉で掬んでふくませる。) しつかりなさい。あなた。

男。(目を開く。) あなたは誰だ。

娘。通りかゝりの者よ。あなたが氣絶していらつしやつたから

男。ありがたう。(娘を凝つと見る。)

娘。あなたお苦しい? 渇くのでせう。

男。何處か身體を洗う處はないでせうか。

娘。其處に谷川があつてよ。

男。（よろ〳〵谷川の方に行く。）
娘。危ぶないてよ。（助けやうとする。）
男。私にさはつてはいけません。（谷川につかり身體を洗ふ。やがて上にあがる。）
娘。あなた寒いのでせう。（羽織を脱いで着せる。）
男。（涙ぐむ。）親切にしてくれたのはあなたきりだ。
娘。（凝つと男を見る。）氣の毒さうな人、私のやうに。
男。あなたは何なさる人です。
娘。それは聞かないで頂戴。（顔を赤らめる）だけどあなたはどうして——
男。私は、頑體です。或る力が私に旅を强いるのです。それがいつすむかわからない——。
娘。私は或る人を待つてますの。それがいつ來るか解らない——
男。許嫁をですね。
娘。いゝえ。（淋しさうに。）そんなこと考へられる身ではないわ。お父さんをよ。
男。お父さん？
娘。えゝ。母さんと二人で。小さい時にわかれて顔もおぼえてはゐないの。
男。ふむ。そして母さんは？
娘。母さんはね。それも聞かないで頂戴。
男。何だか氣にかゝる。（傍白）不思議だ此の娘を見ると私の心からやさしい感情は湧きだしたのは。（放心したやうに

立ち上る。）ではお大事に。

娘。（悲しさうに）あなた行つちやうの。

男。行きたくなくなりさうだから。私はね。それは悪い恥かしい人間なんだ。女を欲しがつて旅をしてゐるんだ。だがあなたは恩人だ。それにどうしたものかあなたを見ると可哀想で……だからあなたに悪い事をしないうちに早く――

娘。（涙ぐむ）。行かないでね。あなた。わたし本當は……………。だつて母さんを養はなくつちやならないもの。私何んにも云つてしまうわ。私の母さんは氣狂ひなの。

男。氣狂ひ？

娘。えゝ。お父さんのことばかり思つてとう／＼氣狂ひになつたの。

男。ふうむ。

娘。だからあなた遠慮しなくてもいゝことよ。私そんなことしてもらはなくてはならないやうな柄ではないんだもの。

男。可愛想に。

娘。だから行かないで頂戴ね。あたしあなたが好きなの。

男。わしは汚ない／＼人間だよ。

娘。あたしだつてお互ひだわ。

男。それに餓鬼のやうに飢えてゐるのだ。

娘。あなたがそんなに……………………………………………………………?
男。お前それは本當かい。
娘。え〻。そして…………………………
男。旅が初つてから、私は女の本當の愛を一度も受けた事がない。だからその髮の毛一條だけでも受けると私の全身が顫へるのだ。
娘。(小さな兩手を…………。)そんならあたしが……………………。
男。(…………………。)
男。私男に本當に可愛がられた事は一度もないの。あなたは私が許嫁を待つてるのかと云つたでせう。私一度も今までそんな事思つて見た事もなかつたの。だけど私何だか今はそれが……あなたがさうではないかと思へるの。
男。私は女の愛なんか腐る程あると思つてゐた。だから塵埃のやうにそれを捨て〻來た。だが今はそれがどんなに尊くて、まれなものか沁々感じられる。
娘。恐いから家に入りませう。だけど私のお母さんには私の稼業は內緒よ。お母さんは私をそれは大事に育て〻お父さんに渡す氣なんですからね。
男。よし、よし。お母さんは何處にゐるんだ。
娘。毎日、うろ〳〵歩き廻はつてるの、お父さんが今にも歸るから迎へにゆくと云つて。
男。…………
娘。溫い家へ行きませう。

（男と葵登場。）

（職人風の二人の男登場。）

男甲。えゝ、おい。まつたく素敵な掘出物さね。

男乙。一寸待つた。すると何だね。そのお前がいふ代物はあの第三區の角の家なんだね。

男甲。さうよ。

男乙。そして左の頰にほくろがあるんだね。

男甲。それが馬鹿に愛嬌ぼくろなんだ。自慢ぢやねえが。

男乙。（ニヤ〳〵笑ふ。）てつきりだ。

男甲。何だい。

男乙。その代物は共有だ。

男甲。え。

男乙。お前のでもある。俺のでもある。

男甲。葵。貴様もか。

男乙。怒つたつて仕方はねえよ。どうせなぐさみものだ。女房にするんぢやなし。皆でたのしむがいゝ。

男甲。どうもなあ。………を人に使はせないとは云へねえからな。

母。（ふら〳〵と出て來る。）もしもし。私の夫はまだ歸らないでせうか。

男甲。知りませんよ。

母。若しか途中でお逢いになりませんでしたでせうか。

男乙。逢ひましたよ。あの向うの辻堂で休んでゐましたぜ。

母。（飛び上つて）さうですか。どうもありがたう。

（よろこんで退場。）

男甲。いたずらは止せ。可愛想に。

男乙。どうせ氣狂ひだ。何んだつて同じだ。

男甲。おい。彼奴の處へ二人で押しかけてやらうぢやねえか。

男乙。うむ。彼奴がどういふ風にでるか見るのも面白いだらう。

（男甲、乙退場）

（男と娘登場。）

娘。もう迎へに行つてやらないと風邪を引きますからね。母さんは弱いのですから。でもあなたはついて來て下さらなくてもいゝのに。

男。いや。これに少しでも一緒に話してゐられるからね。

母。（ぼつ・りした様子で引き返して來る。）

娘。あゝ。母さんが。

母。今お父さんに遇つたといふ人があつたもんだから行つて見たが嘘だつた。

娘。酷い奴。（涙ぐみ。傍白。）氣狂をだますなんて。

母。でもいゝよ。いゝよ。今に歸つていらつしやるんだから。あれは誰だい

娘。知つてゐる男の人。

母。眉をひそめる。滅多に男の人とちかづきになつてはいけないよ。間違ひができるといけないから。あんな乞食見たやうな男と。

娘。でも親切にして下さるのですから。

男。(近寄る。驚いて凝つと母を見る。棒立ちになる。)

母。(ヂロ〳〵男を見るが、すぐ無關心に傍を向く。)

娘。これがお母さんよ。

男。…………

娘。どうなすつたの。あなた。

男。あ……あれが、——あれがお前のお母さんか。

娘。えゝ。失禮をしても堪忍してやつてね。私が男とちかづくのをいやがるんですから。

男。(眞青になる。)

娘。どうなすつて。あなた。氣分が惡いの。

男。(倒れる。)

娘。あなた。あなた。

母。歸らうよ。家へ歸らうよ。そんな乞食のやうな男とかゝり合ひにならないで。

男。ゆるしてくれ。ゆるしてくれ。
娘。どうしたの。あなた。急にそんなに。母さんを見ると………
男。恐ろしい………
娘。親が氣狂ひなのを見たのでいやになつたの。
男。(態度が一變する。)娘、ゆるしてくれ。
娘。あなたは。
男。父だ。父だ。あれは私の女房だ。お多だ。
娘。(眞青になる。)
男。ゆるしてくれ。し……しらなかつたのだ。
娘。(顔を蔽ふ。)…………
母。何だね。お前。(娘の袂をしきりに引つ張りながら)歸らう。そんな人ほつて置いて家へ。
男。(母の前にぴつたりとひざまづく)ゆるしてくれ。
母。知らないよ。お前さんは。わたしは
男。わしが悪かつた。どんなにしてゞもあやまる。わしは恐しい事をした。
母。何だね。わたしお前さんにかゝり合ひはないよ。
娘。畜生だ。…………畜生だ。
母。すぐ歸らうよ。此の男はお前に蟲をつけやうと思つてるんだよ。此の乞食は。

男。俺だ。女房。俺だ。わからないか。十五年前にお前たちを見捨てたお前の夫だ。

母。私の夫だつて。云つて貰ふまい。私の夫はね。それはすらりとした、氣前のいゝ人だつた。お前さん見たいに瘠せこけた、どす黒い、汚ならしい人間ではない。

男。難儀苦勞でこんなになつてしまつたのだ。

母。（夢中で）いつも小ざつぱりとしたなりをして——それに明るい、氣持のいゝ顔をしていらした。心に罪がないもんだから……

男。おゝ。俺は罪と罰でその明るい顔をなくしてしまつたのだ。

母。（男の言葉をきかずに、得意さうに）云つてあげませうか。家の人はね。それは綺麗な人だつたの。それに男らしくつて。……あゝ、あの日にもちやんと揃つた大島を着て出ていらしたんだ。

男。お前が見違へるのも無理はない。だが氣を落ちつけてよく見てくれ。乞食のやうに、罪人のやうになつてはゐるが昔の俺だ。お前の亭主だ。

母。私の亭主？（男の顔を見る。）ちがう。ちがう。眼がちがう。眼のなかの佛がちがう。あたしお前さんを知らないよ。

男。おゝ。俺を知らないと云ふのか。俺の眸には惡魔が映つて居るのだ。

母。（娘に）惡魔が喰ひ付かないうちに早く家へ歸らうよ。此の男はうつちやつてお置き。

娘。（泣き乍ら）その惡魔が…………………………。

母。（身慄ひする）飛んでもない。お前は私が大事に〳〵育てゝ來たんだ。あの人が歸つておらつしやるまで、蟲をつ

けては申譯がないからね。今にあの人が歸つていらしたら第一にお前のことをおきゝになるだらう。その時、見て下さい。御留守のあひだに、こんなに立派に育てましたと自慢したいからね。（身悚ひする。）お前が若し傷物にでもなつて御覽。

娘。母さん。私もう…………

男。…………

母。はゝゝゝ。

男。嘸々憎いだらう。怨んだらう。お前たちをおいてきぼりにしてしまつて。小さい子と母親とを、その上、正眞正銘の…………——

母。（遮ぎる。）私家の人を怨んだ事など一度だつてないよ。あんな善い人を。彼の人が歸つていらつしやらなかつたのは何か譯があつたのにちがひない。歸られない譯が。それに彼の日私が何でもない事で腹を立てさせたのが惡かつた。ほんの一寸のことだつたんだけれど。（泣く。）あゝ。あの朝はいつものやうに曲り角で後を振り返つて下さらなかつた。あの後ろ姿が目に殘つてゐる。（帽子と頸卷を思ひついたやうに又取り出す。）風をお引きになるといけないが。

男。ゆるしてくれ。女房。どうか。此の惡い／＼わしを。

母。あたしお前さんは知らないよ。

男。知つてくれなくても仕方がない。どうかゆるすと云つてくれ。どうかそれだけ——

母。はゝゝゝ。

男。正氣がないのなら仕方がない。口先きだけでもいゝ。許すと云つてくれ。その言葉がお前の唇から出るのをわしは聞きたい

母。(わきへのく。娘に。)歸らうよ。早く家へ歸らうよ。

男。(母の前について行く。)云つてくれ。ゆるすと一言。たのむ。只空しい音のひゞきにすぎなくてもいゝ。わしはそれを聞かなくては……

母。(わきへのく。)

男。(ついて行く。)あやまる。どんなことをしてもあやまる。(身をもがく。)どうすればあやまることが出來るのか。

母。(答へず。娘の袂をしきりに引つ張る。)

男。あゝ。地獄だ。深い――恐しい――

娘。頭の狂つたものはさいはいだ。正氣でこれが耐えられるか。(立ち上り、一目散に走つて行く。)

母。お待ちよ。お待ちよ。私も一緒に行くから。(娘の後を追ひかけて退場。)

男。おゝ。恐ろしい。今まで受けたどの苛責もこれ程骨身には徹へなかつた。飜弄も、拷問も、侮辱も、今の俺の此の苦しみに比べれば、手習ひのやうなものだつた。刑罰だ!。俺は思ひ出す。あの俺が同時に…………………。それは不思議な、地獄的な歡樂だつた。今の不思議な、地獄的な苛責と對蹠的な――俺はどうすればいゝんだ。どうすればあやまることができるんだ。俺の罪をつぐなうことができるんだ。俺はその方法さへあればどんな事でもする。俺は罰をのがれたいとは思はない。その罰をあたへてくれ。それがほしい。それがほしい。そうしたら此の心がらくになるだらう。今俺を救つてくれるものは罰だ。處刑だ。十字架だ。

（此の白の間に舞臺の樣子が變つて來る。以下全體讚文的調子を以て演ぜらる。）

復讐の女神童子群を隨へて登場。沈默のまゝ十字架を指す。男兩手を擴げて自分から十字架の方に進んで行く。數名の童子男を十字架につける。童子整列にかへる。

娘。（ふら〳〵と引き返して來る。）どうしたのだ。私は何も知らなかつた。私が知つた時には父はもう居なかつた。あらゆる種類の難儀、母の狂氣、貧乏とはづかしめ――そして………。おゝ。私は何も知らなかつたのだ。

童子群合唱。アブラハムの罪。イサクの罪。ヤコブの罪。

娘。（十字架の下に跪く。）

母。（期待に充ちた表情にて登場。）彼の人が歸るのだよ。家の人がかへるのだよ。

男。（十字架の上にて大聲に呻る。）

（一同沈默。）

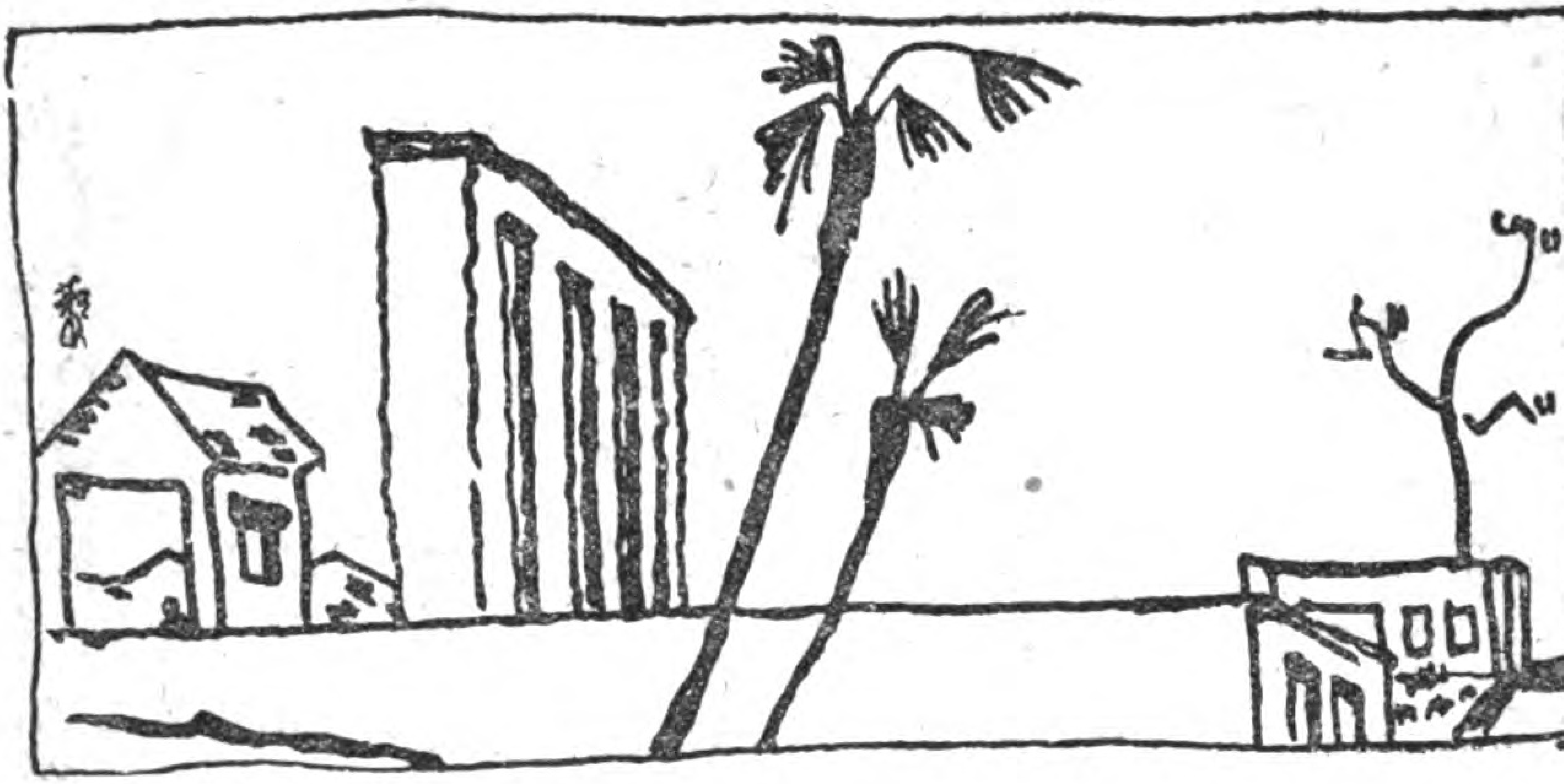
（女神十字架の上の男の顏を凝つと眺め、その手に持つた鍵を母の手に渡す。童子群を從へて退場。）

母。（無意識に受取つた鍵を同じく狂人の無關心さを以つて、鐵門の錠にさし込む。カチリと鍵の音がする。）

男。（十字架の上にて）有り難い。ありがたい。（がくりと頭を垂れる。）

その途端鐵門が開く。光りがサツトさし込む。

――幕――



或る男の話

武者小路實篤

一、

自分達のことが新聞や雜誌にいろ〳〵かゝれたので、君も或所までは知つてゐるだらう。僕に女の子が出來たこと、それが僕の妻に出來たのではなくつて、安子と云ふ女に出來たことも知つてゐるであらう。かう云ふことは自分の口で云ふべきことではなく、默つて萬事他人の想像にまかしておくのが賢いことかも知れない。そして誰もそんなことはもう問題にもせず、忘れてゐることゝ思ふ。

しかし僕は一通りこの事件の眞相について君に話しておきたく思ふ。之は辯解ではない。まして自慢でも、告白でもない。事實に忠實になりたいからだ。そして君の筆で事實をはつ切り書きとめておいてほしく思ふ。

この事件についてはいろ〳〵の想像が行はれる。しかし事實は想像よりも、もつとこみ入つて、そしてもつと元因結果がはつ切りしてゐる。その元因結果があまりはつ切りしてゐる所が僕は面白く、そして君に話したくなつたのだ。

——かう彼は云つた。そして次ぎのやうな話をした。自分は聞きまちがいがあるといけないと思ふので、この彼の話をかいたものを彼に見てもらつて、そして思ひちがいの處はなほしてもらつた。元より自分のことでも思ひちがいや、解釋のちがいがないとは云へない。しかし自分は事實としてかいておく。それは自分が彼の噂を聞いて想像したのと隨分ちがう處があると思ふからだ——

二、

僕の妻が新しき村以外で生活することにきまつたのは、安子が村にくるより半年程前だつた。それは房子（妻）が病氣をしたからであつた。その病氣はなんだつたかよくわからない。日向熱だらうと云ふことになつてゐる。そしてそれは宮崎の神田橋と云ふ宿屋に、その少し前に泊つてゐた時、その病毒をもつてゐる蚊にさゝれたからだらうと思ふ。之もはつ切りはわからない。はつ切りわかたことは、房子が村の生活をしてから段々身體がよはくなつた事だ。一體房子は村の生活をするまで僕と七年程一緒に生活してゐたが、病氣らしい病氣にかゝつたことはなかつた。身體は一たいに丈夫な方ではないが、どう云ふわけか病氣はしなかつた。醫者にかゝつたことは一度もなかつたらう。それが新しき村の生活をするやうになつてから、時々病氣するやうになつた。生活がすつかりかはつたからであらう。雪國から暖國に來たのも一つの元因かも知れない。更に生活がまるでちがつたのが、大なる元因であつたらう。

何しろ食ひものがひどい、それからどうしても身體の無理をする。一體に身體をつかれすごしてはいけない體質らしい。身體のことはよく知らないが、村の生活は、少くも今の村の生活は房子の體質に向かないことは事實で、このまゝ村にずつとすませたら生命にまで影響しさうな氣がした。

實際日向熱（假りに日向熱にしておく、土地の醫者はさうだと云つた。）にやられた時は僕は房子は死ぬのではないかと思つた。このことは僕が當時かいた詩をよんでくれゝばわかる。僕は死なしたくないと思つた。

僕はブランドではない。妻の生命を自分のものとは思つてゐない。妻のこの世の生命はこの世の生命として尊敬する。

そんな理窟は別としても、僕は村の生活に無理に適應させるために僕は他人に知らさずに隨分妻に無理を云つた。妻の體質を無視してゐた。人によつては僕は妻に寛大すぎるやうに云ふ人もあるが、それは夫の心を知らないものだ。他人の前に妻を辯護するのは人情ではないか。しかしかげでは僕は隨分無理を云つた。之は知る人ぞ知るである。現に妻の身體がよはつてゆくのでもわかるはづだ。元より僕達は村の内で一番樂をしてゐた。しかし妻は村の生活を知つて入つて來たものではない。村の生活をすることは覺悟してゐたが身體も村の生活に適するので入つたのではない、僕について入つたのだ。だから他の人とすこしはわけがちがうのは許さなければならない。妻は僕が文士の時に妻になつたのだ。元より僕は金持ではなかつた。しかし文士の生活程、不規則でいゝものはない。寢たい時に寢、起きたい時に起、食ひたい時に食ふ、そして骨の折れることは何にもしないでいゝ。房子の身體は寢たいだけ寢てゐればいゝ、そして過勞しなければ病氣にならずにすむ身體なので、之は小さい時からの生活にもよるだらうが、たしかに體質からも來てゐる。だから僕が文士でなく、始めつから新しき村のやうな生活をしてゐたら、妻は僕の妻にはならなかつたらう、僕も妻にしなかつたかも知れない。しかし僕は當時一生文士生活をするとはつ切り思つてゐなかつたが、新しき村のやうな生活をするとはなほ思つてゐなかつた。自分達の生活は段々樂になり、金も少しづゝは入るやうになり、妻自身が設計した家も出來、その家は妻に氣に入り、又得意だつた。そして庭も自分の思ふやうにつくり、すきな木を少しづゝ買ひあつめて來つゝあつた時、不意に僕が新しき村の仕事をすることになつた。房子は未練なくそれをすてゝ新しき村の生

活に自分も入ろと云ひ出し、又その決心をした。しかしそれは僕の妻だからであつて、體質や、氣質に自信があるからではない。僕とはたれてすむのがいやであり、又僕とはなれて生活する餘裕もない時であるから、僕に從ふことになつた。之は妻としての當然なことであるであらう。

そして妻は村の生活に入つた。そして始めて女中をつかはない生活に入つた許りでなく、自分も冬の最中六時前に起きて皆の飯をたく仕事をしたり、又兄弟のもの丶洗濯や、下駄を洗ふこともやつた。それらはながつゞきしなかつたがしかしそれは氣がなかつたのではなくつて、身體がつゞかなかつたのだ。そして麥の半分入つた飯を味噌だけで食つたり、とても想像の出來ないぐにや〱の澤庵でのみこんだりした。こんなことは覺悟の前だつたから、ぶつ〱は云はなかつた。又云はしもしなかつた。そして僕は寧ろ妻の働きの足りないのを蔭で非難した。同情もしたが、その時は自分達には今のやうな考へに餘裕がなく、馬車馬的に、働き、そして出來るだけ儉約した。近所の人の食ひものより自分達の食ひものは遙かにわるく、又働き方は遙かに熱心だつた。之は半年切りつゞかなかつたが、しかし妻の身體はそれで最初の打擊をうけたことはたしかだ。

元より自分はこ丶では妻の身體のわるくなつたのも無理がないと思つてもらへばそれでい丶のだ。他の話にはふれやうとは思はない。そして妻の體質が本當によかつたら、村のさう云ふ生活も、害がなかつたらうと思ふ。しかし妻の身體はだん〴〵病氣にたいする抵抗力がよはくなつて來てゐたのは事實だ。そして半年後だつて、勞働こそ樂を少しするやうにはなつたが、食ひものは依然としてよくなかつた。大水で川どめで米が買へずに麥許りの飯も食つたし、のみこんだと云ふ方が本當だらう。そして肉なんぞは殆んどお目にか丶らず、大根おろしだけで食つたり、ごま鹽で麥飯を食つたり、たまに東京鮭でもくると、皆うまいのでおどろいた。しかし自分達はそれに不服を云ふのをすまなく思つた。

身體のいゝ時はそれでいゝのだが、身體のわるい時はそれではなほりがおそかつた。そして醫者のゐる所までは三里近かい峠をこさなければならなかつた。そしてその醫者もいゝ醫者とは云へないであらう。から云ふことは覺悟の前であり、田舍の人はそれですまして來てゐるのだから、自分達贅澤を云ふのは恥ぢる。しかし普段はそれでいゝ、大病されて見ると、それでいゝとは云へない。出來たら、生かせるだけ生かしたい。房子の病氣の時に村の兄弟達がよくしてくれたことは感謝の言葉がない。しかしもし死なれたらと思つたら僕はどうしていゝか知れない。自分の仕事の犧牲なぞと云つてすますわけにはゆかない。苦しがつたり、四十度以上の熱が出てうは事なぞ云はれては、自分の生命もいらないやうな氣がする。

それに僕には房子の病氣の元因が宮崎で得たのが本當とすれば、それは僕の嫉妬に元因があるのだ。

それをくわしく話すと少しながくなるが、話しついでに簡單に話をしやう。僕の今度のことを非難した人は、元因に元因がどう重なつてゐるかを本當には知らない人だ。知つてゐる人があれば僕一人である。だから眞相を知らない人間の非難は少し輕蔑したくなるのはやむを得ない。

少しくたびれたらう。僕もくたびれた。

三、

房子が大病――それ程の大病でなかつたのかも知れない。しかし僕には大病と思へた――にかゝる半年前に村に火事があつて、十何人がすまつてゐた合宿所と僕達が入つてゐる家が燒けた。その家は村でたてた最初の家で、又最大の家だつた。十疊が三間と、九疊が一間あり、其處に湯殿と臺所がついてゐた。

この家は始め村の川向ふの石河内本村と云つてゐる所の紳主さんの家だつた。それを四百五十圓で買つて、皆で大工の手つだいをしてそれをとりこはし、そしてその材木全部と、家根のカヤまで全部新しき村の兄弟でかついで新しき村の土地まで運んだ。彼も自分の力相當のものをかついだ。一番大きな村木を運ぶ時なぞは新しき村の家のものが八人位いかゝつて運んで、隨分苦心して建てた家だが、便所だけのこして綺麗に焼けた。

其處でその家に住んでゐた人達が、方々に建つてゐた小さい家に別れて入つこむことになつた。そして彼の家も二間あつたので、書齋にしてゐた方の板敷の室に半分、つまり八疊の室の四疊だけ疊を入れて、其處に焼け出された兄弟が二人入ることになつた。

そして彼達は四疊半の室に住むことになり、家不相應に廣い一間の巾の椽側に机をおいて、其處が彼の書齋になつた。

この隣りの室に住んだ一人の兄弟、Aは、僕達が信用してゐる男で、彼の妻と同じく家が豪農で、非常な大きな家に住んでゐた男なので、村の生活の不自由と、あまりに貧しい生活なのをよく知つてゐたので、房子に同情してゐた。二人はよく話が逢つたが、僕はそれは當然なことで別に氣にしてゐなかつた。Aは本當に僕を尊敬してゐてくれたしろぶな人間だつた。村のことを思つてゐることもよくわかつた、又村の勞働がかりとしてよくやつてゐたので、僕達はよくAのことをほめてはゐたが、嫉妬する必要は感じなかつた。所が僕が村の用で二晩家をあける必要があつた。その時から僕はやゝもすると嫉妬を感じるやうになつた。僕は大丈夫だと思つてもゐたし、又嫉妬に根據があるとも思はないが、しかし嫉妬を感じることはさけること が出來なかつた。自分の親兄弟が留守居して、妻を看視してゐる家だつたら、そんな嫉妬的な想像を入れる餘地はないが、境遇と、位置から云つて想像する餘地がありすぎるので、僕はそれにうちかち切ることは出來なかつた。そして二人の間が清いにしろ、二人は同情しあつてゐることは事實であり、又二人

の考が一致して來たことは見のがすことが出來なかつた。僕が房子にたいする態度、房子に一町以上さきから水をくましたり、三町ある所から飯を運ばしたり、その上よく小言云つたりするのを見て、Aは房子に同情し出してゐること又その時あたりから房子が、彼と別居したがつてゐる調子が見へたりすることは、僕の嫉妬の目から見のがすことが出來なかつた。僕は今でも當時、二人の間は淸かつたと思つてゐる。しかしお互に愛しあつてゐる。少くも同情しあつて來たことは見のがせなかつた。その内に僕の嫉妬をAが感じ出した。其處でAの僕にたいする態度が少しづゝ窮くつにならないわけにはゆかなかつた。

その時、僕は熊本に演說をすることをたのまれた。僕はそれを承知したが、しかし房子を一人村においておくのが氣になつた。それで房子を宮崎まで一緒につれ出し、そして房子だけ宮崎において僕は熊本に行つたのだ。

だから僕の嫉妬が房子を村において　おけなかつた爲に、宮崎へつれてい　つたのだから、宮崎で病氣になつたとすれば、その原因は僕の嫉妬にあつた。その原因は又村の火事にあつたとも云へる。

房子の病氣は僕の嫉妬に一時打ち克つた。そして僕は房子が村ではあとの養生が出來ないこと、又村の生活が房子には不適當なことを知つた。

又その時分には僕の本も賣れるやうになり、僕の原稿も少しは高く賣れるやうになつたので房子を村以外で養生させるだけの餘裕は自分が少し奮發して原稿を餘計かけば出來るやうになつてゐた。何と云つてもこの世では生命が大事だ。嫉妬、それも何處まで本當で何處から空想かわからない嫉妬のために房子の生命をちゞめてはよくないと思つた。

その上に、僕自身、浮はきものゝ本性が中々あることを否定出來なかつた。相手が得られないからだけにすぎないのだから、嫉妬するのも一面滑稽にも見へた。しかしいくら滑稽でも、いくら不合理でも嫉妬が起れば仕方がなかつた。そ

れに打ちかち氣輕になりたくも中々なれなかつた。しかし今、死にかゝつてゐる房子を見るとそんなことは云へなかつた。それでもつといゝ醫者のゐる、養生がいくらでも出來る生活に房子を入れてやらうと決心した。

房子の病氣がなほりかけて來た時、その話をしたら、房子はよろこんでゐた。

そのうちにAは家の都合で故鄕に歸つた。そして房子も病氣がなほると、養生に實家に歸つた。

それから二三ケ月の自分の村の一人の生活は淋しかつた。皆はよくしてくれたが、夕方なぞは淋しかつた。房子はもう村へは歸つて來ないことになつてゐた。僕は自分の仕事の上から云つても、その位いのことは甘受するつもりでゐた。しかし淋しかつた。そして村の生活がいやになればすぐとび出して、村以外で家庭生活の出來る人達が羨やましかつたこともあつた。しかし村の人達はよくしてくれたし、僕は不自由はなかつた。又僕の決心から云つても、そんな女々しい氣にうちかつことは大したことではなかつた。房子は出てからも、又大病した。しかし僕が心配すると思つてそれ程ひどくは云つて來なかつた。

正直な所、僕は房子に村以外の生活を許した時は、房子にたいしてもう嫉妬はよさうと思つてゐた。しかしさう許りはゆかなかつた。

しかしAは故鄕にゐることはたしかだし、房子の故鄕とは二百里位ははなれてゐると思つてゐるからその方は安心してゐた。

それから三四ケ月程たつて、僕は上京することになり、そして房子の故鄕の方へゆき、其處で房子や、房子のお母さんや、妹や、キク子、(キク子は僕の從妹の子で僕の養女になつてゐる。始め一緒に村に居たが、一年程たつ內、當時の村の生活は十位いの女の子には向かないことがわかつたので、房子の實家にあづけて、學校に通はしてゐた)と粟津の

温泉に一週間許り骨やすめした

それから東京に行つた。

四、

東京へ行つてゐる内、安子が僕の處へたづねて來た。安子はその一年程前に僕が上京してゐた時始めて僕の所へたづねて來て、村に入りたいと云つた。身體は丈夫さうに見へなかつたが、熱心なのと、それ以上、僕に氣に入つたので村に入ることはすぐ承知したが、しかしお父さんの反對で、その後ずつと村には來れずにしまつてゐた。その時も來年の三月迄、あと半年程まつてそれでもお父さんが承知して下さらなかつたら、その時は逃げてもゆくと云つてゐた。しかし僕はあまり信用しやうとは思はなかつた。いつも、來年は村へゆくとか、何月になつたら村に入れて戴きますなぞと云ふ人は、その時になると大概事情が異つて、入れなくなるのが例であつた。安子が一年程の間決心がかはらないのは寧ろ不思議であつた。齢も二十二位いになつてゐるし、その内には結婚でもして、村へこれなくなるのが一番事實らしく思つてゐた。

しかし一方信じる氣もしてゐた。なぜかと云ふと、決心が一年かはらなかつた上に、非常におちついてゐて、時間なぞと云ふことにはあまり影響をうけさうもなく見へた。房子とちがつて、いつでも同じ氣持がつゞくたちのやうに見へた。その上、僕の所へよこした手紙なぞでも、半年に一度位い切りよこさなかつたがその決心はうはついてはゐないやうに見へた。その時分の手紙が一つのこつてゐるから、證據にその内の一部をかいておいてもらはう。

「父は私の望みに對し返事を延ばしたまゝ未だに何とも申しません。私はだまつて待つております。私自身は今はもう

村へ行くか行かないかの問題ではなく、行く爲にはどう云ふ道を取つたら一番よいか、それをずいぶん考へましたが矢張父母が許してくれるまで待つつもりでつとめて呑氣にしてゐます。(中略)もし父母があくまで反對し私の身體を押込めでもしましたら私はどうしやうかと心配でなりません。もしもどうしても非常手段でやらなければ村へゆかれないとしましたら私は先生方が御歸村の時、御一緒に汽車へ乘り込んでもよろしいでせうか。もしもあとから追ひかけられて警察へ引ばられたりして、先生方に御迷惑をかけたり、親類中にさはがれたりするやうなことになりましたら、私はどうしやうかと恐ろしくつてなりません。どうかそんなことが無いやうに幾度も頭の立直しを繰り返して居ります。それから今まであのやうに御心配下さいました先生に反き、村にゆかれないやうになりましたら私は死んでお詫びしやうと考へた事もありましたが今死んでも誰の爲にもならずかへつて悪いことのみ殘すことになつてはいけないと思ひましてこのことは止めることに致しまして氣を永く持つてをりました。(中略)父は先生を信じていゝ方と思つてゐると申しましたのですから私が命がけで切に願ひましたら、最後には許してくれることゝ、私は一人で信じて居ります。(中略)

何卒奥様によろしく御傳へ下さいませ、皆様にもよろしく願ひます」

正直に云ふと、之は房子が故郷に歸つてから一ケ月程してから安子から來た手紙だつた。安子は半年程、たよりをよこさなかつたので、どうせ村に來れなくなつたのだらうと思つた。それで自分は淋しい最中、樣子を知りたく思つて村へ來れなくなつたのか、どうなつたのか聞いた返事にこの手紙が來たのだ。僕はこの手紙を見てよろこんだのは事實である。

しかし東京でその秋あつた時、安子は矢張りうちの人が承知しないから三月まで待つて見ると云つた。自分はそんなことを云つてゐる内に來られなくなると困ると思つた。正直に云へば安子を自分は愛し出してゐた。

その時一ケ月程自分は東京に居た。そして自分の村に歸る時は、村に一度居た、今又村にゐる。そして一度お父さん

に東京につれて歸られた、阿部さんと云ふ女の人が僕と一緒に村へくることになつて居た。房子は神戸あたりまで僕を送つて來て又引きあげるわけで、そのあとは阿部さんが僕の世話をするやう、房子はたのんでゐた。安子も阿部さんに逢ひ、又阿部さんが村へ僕と一緒に村にくる計畫など聞いて、羨やましがつて居た。

所がいよ〳〵僕が東京をたつ前日、阿部さんはお父さんの反對で來られなくなつた。

僕は阿部さんを信用してゐたし、いゝ人だと思つてゐたが、しかし阿部さんはその時分まだ女學生の感じが殘つてゐ、中々頑固だつたので、僕は房子に冗談のやうにかう云つたことがある。「I（安子の姓）さんと二人だけで旅行するのは危險かも知れないが、阿部さんなら大丈夫だ」

處がたつ日になつて、東京驛へゆくと其處に安子が來てゐて、之から一緒に村へゆくつもりで出て來たと云つた。房子はその時僕が露骨にうれしい顏をしたので不快だつたやうにあとで云つた。

阿部さんは來られなくなつたと聞いて躊躇してゐたが、二人に勸められてとう〳〵村にくることになつた。

房子とは大阪で別れた。房子は一人で京都に行つてその時京都にゐた志賀達に逢つた。志賀はあとで「あの時の房子さんは本當にお氣の毒だつた」と云つた。房子は京都に家をもつわけだつた。しかし京都も氣に入らないで、又故郷に歸つた。

五、

僕は安子と二人だけで道中をつゞけた。その旅行は方々で演說することになつてゐた。それで岡山で下り、演說をし支部で泊り、翌日德山で演說をし、その宿屋で泊り、翌日又山口で演說をし、其處で泊つた。安子は謹み深く、彼によ

くした。彼も不淨な考へを持つ必要がなかつた。又翌日演說會をひかへてゐるので心を潔くすることが必要でもあつた。

下關まで來た時、村の兄弟が一人其處まで來て、僕と一緒に村に歸りたいと云つた。僕はその人に厚意がもてなかつた。なぜかと云ふとその人は彼が目的で其處に來たのではなく、阿部さんが一緒だと思つて其處に僕を待つてゐたことが、僕には露骨に感じられた。

阿部さんの方ではその人を何とも思つてゐないことはわかつてゐたが、その人は厚意を持つてゐたらしいことはわかつてゐた。

その人は彼が村の兄弟のうちで最も世間的な如才のない人間と思つてゐた。その人はもう一年程前に村を出た人だ。この男は今阿部さんのかはりに安子が一緒なのを見て失望はしなかつた。どんな女でもいゝ男はよくゐるものである。

その晩僕は下關で話し、翌日佐賀に行つた。佐賀で晝飯に洋食をよばれた時、その男は腹が痛いと云ひ出した。安子は心配して、容體をきいたりしてゐた。僕は邪推深い男のせいか、この腹痛がどうも女たらしの技巧のやうに見へた。僕が演壇に立つた時、その男は安子に何か云つて藥をもつて來てもらつたりしてゐた。僕はそれを見ていゝ氣はしなかつた。元より演說する時だから、瞬間に一寸さう思つただけだ。話は思つたよりもうまくしやべれた。

こんなことは云はないでもいゝことだが、僕はもう安子に嫉妬を感じかけてゐた。

安子と僕とは村へ歸つて二三ケ月の間、淸い交際をつゞけてゐたが、僕はもう安子を失ひたくなくなつた。安子も、一生僕の爲に働くと云つた。僕は益々夢中時代に入りかけた。

しかしその時でも房子から淋しがつてゐる手紙をもらうと、泣かないわけにはゆかなかつた。自分は房子を愛してゐた。そして房子が實家に居ても面白くないやうに云つて來た時、房子に村へ歸るやうに云つた。

そして僕も房子とはなれて不安な氣持をつゞけるのに參つてゐたので、村へ歸つてくることになつた。

その時、僕は宮崎まで房子を迎へにゆくことにした。しかし僕は安子を失なふことはどうしても出來ない決心をし、安子は僕に接吻を許さなかつたが、清くつきあへる限りにおいて彼を愛してゐることを示した。

その時分は僕の熱病時代であつた。その時に僕のかいたものは「張男の最後」である。あれをかいて京もなく房子を宮崎に迎へた。

宮崎で房子の乘つてゐる汽車に僕がのつた、房子はよろこんでくれた。僕もうれしかつた。そしてその晩、高城の深水で泊つた時、僕は安子にたいする僕の氣持をしやべつた。そして房子のAにたいする愛を許すかはりに、僕の愛も許してくれ、まだ間は清く、接吻もしたことはないのだと云つた。その時房子は、わりに元氣に笑ひながら聞いてゐたので、僕はよろこんだ。所がその夜中、目がさめると急に大聲をあげて泣き出して、そして之から歸ると云ひ出した。僕も泣いて、それを無理にとゞめた。そして僕も自分の嫉妬してゐた時のことを一々話した。こんなことは耻かしくなく一々饒舌るわけにはゆかない。ともかく房子は泣きやみ、歸る決心をやめて翌朝僕と一緒に村に來ることになつた。房子も外にゆく所もなかつたのだから今思ひ出しても氣の毒に思ふ。その時のことを思ふといつも房子に同情して泣く、しかし安子を思ひ切ることは出來ない。

翌朝村の人が二三人迎へに來てくれたので二人は元氣になれた。そして村の近所に來ると、安子が村に居たもう一人の女の松尾さんと迎へにやつて來た。所が安子のかぶつてゐる帽子を見たら僕はびくつとした。

その帽子は死んだ嫂の帽子で房子が好きでもらつて來て、大事にして滅多に自分でもかぶらない帽子なのだ。それをそのさい安子にかぶつて來られたのを見て、僕はぞつとした。之はしまつたと思つた。安子は何にも知らず、村に居て

安子がくるまで僕の世話をしてゐた齋藤に出してもらつて冠つて來たのだが、僕がかぶつてゐるやうに房子はとるにちがいないと思つた。

僕は安子と呑氣に話すことは出來なかつた。そのくせ僕は安子にたいしても、一種の氣がねをしてゐた。しかし今の場合、房子に又昨晩のやうな眞似をされるのを恐れた。僕のその時の態度について房子が非難し、又不快がつたのは無理のないことで、僕だつていやだつた。

その晩房子と安子は仲よく話して、大きな聲で笑つたりしてゐた。それを見、又聞くとうれしかつた。それは不自然と許りは思ひたくなかつた。房子も僕のゐない時の安子とは仲よく出來ると云つた。しかし勿論そんな關係が氣持ちよくゆくわけはなかつた。

房子は又東京に歸ることになつたのは、二月か、三月あとだつた。そしてそれ迄には、僕からAに手紙を出して、房子の一生を幸福にするために骨折つてもらいたいことをたのんだ。之は不自然なことかも知れない。今度のことで僕に一番缺點があれば、Aに房子の幸福の爲に努力してほしいと云ふ手紙をかいた點にある。Aが房子を愛してゐるのは事實であらう。それ以上房子に同情し、そのために一生盡すことによろこびを感じるのも事實であらう。二人はどの位い戀してゐたか、自分にはわからない。恐らく僕が安子を愛してゐるのと、房子がAを愛してゐるのとはさうちがいがないのではないかと思ふ。そして房子と僕との愛、それは特別なものであるかも知れないが、それも負けずおとらずと思ふ。

あとでこのことには事實についてふれる時があるであらう。

ともかくAにさう云ふ手紙をかくより他にいゝ道を僕は見出すことは出來なかつた。

そして房子は東京に住み、そして芝居をやる氣になつた。之も僕が房子を元氣にするための方法の一つとしてすゝめ

たのである。

六、

それから半年程して、僕が東京に出て、村の電氣のために芝居をすることになつたのもその延長にすぎない。僕と安子の間は平和に發展したが、安子は僕に一生はくれても身體をまかせることは中々ゆるさなかつた。僕は二人の間をいつまでも清くしておくことを絶對にいゝことゝは思つてゐなかつた。言葉を換へて云ふと僕は安子と肉の交はりをすることをさう罪だとは思つてゐなかつた。

僕は聖フランシスと聖クラヽの關係を美しいものと思ふ。尊敬し、讃美するものに反對しない。しかしそれは信仰から來てゐるから美しい、腹の底から來てゐるから美しい。僞善でないから美しい、對世間でないから、又利害關係を超越してゐるから美しい。しかし聖フランシスのやうな信仰のない、來世を信じない、又肉を否定しない、又性慾に打ち勝ち切ることも出來てゐない、見ず知らずの女にも性慾を感じ兼ねない僕が、聖フランシスを氣どつたら滑稽であゐ。勿論僕は安子が僕と何處までも淸くつきあいたがれば、僕はそれに反對はしない。しかし僕はそれに賛成は出來ないであらう。

戀は理窟ではなく、性慾も理窟ではないが、しかしそれが非常な罪惡であつたら、僕はそれに打ち克つために苦鬪をしたらう。しかし僕はさう云ふ良心上の苦鬪はあまりしなかつた。淸くつきあつたにしても、房子をさびしくすることは同じである。そしてそれによつて安子を幸福にすることが出來るか。

安子に童貞の生活を强いる、之れは不可能なことではないかもしれない。寧ろそれを當時安子は望んでゐた。しかし

その望む理由は、深いものとは思へなかつた。それはむしろ先入主にとらはれてゐるやうに僕には見へた。しかしこのことについては僕ははつ切りしたことはわからない、僕は女ではないから。

ともかく僕の考はまちがつてゐるかも知れない。僕は安子を失ないたくなかつた。安子と一生をともにしたかつた。之は安子もはつ切り承諾した。一時房子のゐる時、だん〳〵ことがもつれかけて來、房子がヒステリーを起しかけて來た時、僕は安子の決心によつては安子のことを思ひ切らうと思つた瞬間があつた。その時安子は一生を僕のくれてることをはつ切り云つた。それで、房子の方が東京に出ることになほ決心したことがあつた。

房子は表面は强いが内はよはかつた。隨分皮肉でひどいことを平氣で云ふし、又中々惡らつな時もあるが、すぐ又機嫌がかはり、又相手を同情したり、氣の毒になつたりして、腹の底にものをたくわへることは出來ないたちだ。僕と喧嘩すれば二時間位いは、兩方で皮肉と惡口の云ひあいをするが、それがどん〳〵誇張されてゆくと、ふき出したり、又泣いたりする。そしてその時の房子は實にいゝ性質を見せる。それがあるので僕は房子を憎めない。

安子は表面は弱はい、しかし怒り出して默つてしまうと、一寸手がつけられない。そしていつもちやんと自分の立場と、考へをまもつてゐて、いざと云ふ時になると、死んでも動かないと云ふ處を見せる。

だから房子と安子ともし喧嘩するとすれば喧嘩買ひは房子の方であるが、そして房子の方が大概勝つが、それはこぜり合ひの時で、本當の喧嘩になれば房子の方がまけるだらう。

房子が妹と喧嘩する時もさうだ。妹を泣かせることは名人だが、妹が本當に怒り出すと、房子の方がまける。

安子は一度、僕に接吻を許すまでには考へるだけ考へたらしい。しかし一度許した以上は、あとにはひかない。

話が少しそれたが、自分は安子を一生失なひたくないと思ひ、そして房子の許しも、ともかく得、そして安子も承知

してしまつた以上、僕は安子と僕の間を清くしておく必要は感じなかつた。それは安子をすつかり自分のものにしたい氣もあり、それ以上、禁慾がつゞいてゐる所からくる强い要求もあり、その上、性慾をさう惡と見てゐないので、僕は自分の考へを安子に承諾させた。

僕は妻以外の女に子供を生ますやうになつた經路を露骨に、そして簡單に話せばさうである。この僕のとつた態度の善惡は僕にはわからない。しかしそれが宿命的であり、僕には他によりいゝ方法がとれなかつた。

男はどう思ふ。

村に火事があつた。

之は善ではない、しかし惡ではない。

其處で燒け出されの兄弟を方々の家でひきとつた。そして僕の處へは、僕達が氣らくに話しの出來る二人の兄弟が住むやうになつた。

之は當然なことであらう。

その内の一人には僕は嫉妬を感じなかつた。しかし他のAに僕が嫉妬を感じた。之はくわしく話せば無理がないのだが。

前にも云つたやうに、房子とAとは貧家の境遇が似てゐたし、その他の理由でも、話があふのは無理がない。その上に房子には子供がない。又僕との性慾の不調和と云ふのも少し誇張だが、僕は、子供の時からの習慣で早寢である、そして夜はつかれすぎ、朝は仕事の都合で禁慾が必要の時が多い。くわしく云ふのはいやだが、僕はいつのまにか、房子と一緒にゐる時が性慾の誘惑を感ぜず、一番おちつけるので、それを一方よろこんでゐた。

しかしそれが嫉妬の元因の一つになつてゐたかも知れない。ともかく房子が病氣する前に僕が嫉妬に人知れず苦しんだことは事實である。

其處へ病氣が來た。之は一時の病氣にすぎなかつたかも知れないが、しかし村の生活が房子の身體によくなく、病氣にかゝりやすくなつてゐたのは事實である。其處で房子を村以外で生活させることにきめたのは、當然なことゝ思ふ。

そしてその時、安子を僕は知つてはゐたがそして安子は既に村に來たがつてはゐたが、それは半年程前の話で、その後安子からは何のたよりもなかつたのだから、房子が村以外に住むことになつたのは、それも一時的ではなく、一生村のそとで生活し、村のためにそとからつくす決心をしたのは當時、生るか死ぬかの時には當然なことである。

その半年後に安子さへ來なければ、房子は靜かに村以外で生活することが出來たであらう。しかしその時、僕の嫉妬は生長しはしなかつたかと思ふ。その結果は、反つて二人の間をさきはしなかつたかと思ふ。當時僕はもう嫉妬するのにはほと／＼あきてゐたから。

しかし事實はすつかりちがう方面を見せて來た。さう云ふ下地が出來てゐる時に安子が來たのだ。

之はいゝことか、わるいことかわからないが、僕が新しき村に淋しさを感ぜずに生活するためには絶對に必要であつた。

僕が運命から與へられたものとしてそれを受けとつたのは無理はないと思ふ。少くもやむを得なかつたと思ふ。そしてその時安子が出て來たために僕は嫉妬なしに房子のことを思ふことが出來、そして房子を自分が愛してゐることを本當に知り、そして房子と自分の間がゆるがなくなつたのは事實である。

之は不自然だと人々は思ふであらう。

しかし自分は房子を愛してゐる事實は否定出來ない。自分に云はすと、二人の子供を愛することは不自然ではない如く、このことは不自然ではない。二人の友達をもつことが出來るが如くこのことは不自然ではない。又ダヰンチとミケルアンゼロ、レンブラント、ベートベン、モツアルトなぞを同時に愛することが出來ることが不自然でないやうに不自然ではない。

自分の房子にたいする愛は、熱烈な戀ではないだらう、熱烈の戀なぞと云ふものは一時的である。少くも満された戀は、おちつきを得る、自分が房子を愛してゐる愛は親の愛に似てゐるやうに思ふ。幸福でゐてくれ、喜び多くゐてくれそのためにはどんなことでもしたいと云ふ氣持である。

今でも芝居や活動寫眞を一人で見にゆくとなんだかもの足りない。房子をつれて來たらどんなによろこぶだらうと思ふ。そしたら自分もうれしいと思ふ。之は事實である。安子はさう云ふものを見たがらないし、安子とはさう云ふ所へ行つたことはないので、行きたいとは思はない。

七、

房子が東京へ行つてから、時々手紙をよこしたが、それは村へくる前、實家からよこした手紙とはくらべられない程元氣な手紙だつた。芝居の稽古に熱心になつてゐた。Aが借りた家が稽古場で、千家もAと一緒にゐたことがある。其處に松原とか、その他の人が集つて芝居の稽古をしてゐた。もう僕は房子の手紙を見て泣く必要はなくなつた。それでも時々淋しさうな手紙がくると、僕も淋しかつた。安子と僕とのことは云はないでもわかつてゐるであらう。それはおちついた靜かなものであつた。僕は嫉妬にかけては氣のまわりすぎる質だが、安子はそれを知つて、決してその元因を

つくらなかつた。僕も安子に若い男の人が多いのでた戀さゝないやうに、なるべく冷淡にしてゐるやうに注意した。

實際日本人の多くは、僕なぞもその一人だからなほさう思ふのかも知れないが、男女の交際になれてゐない。そして一寸した親切でも女にされるとすぐ愛されてゐるのではないか、なぞと考へたくなる。之は面白くないと思ふ。しかし西洋でも矢張りさうかも知れない。ゲーテの「親和力」の內のオツテリエが男の人の手巾をひろふのを姉が注意してゐる話がかいてあつた。一寸した親切から、すぐ相手の戀を燃やさし、そしてそれをあとで拒絕するといふことは面白くないことである。

安子は親切ものすぎる傾向があつたので、それは惡いことではないと思つたが、僕と二人の間がはつ切り皆が知るまでは、あまり親切をしないやうに注意した。

和歌の會なぞをする人達が安子にも出てくれと、いろ／＼の方面から安子にすゝめる人があつたが安子は出なかつた。僕もそれをよろこんだのは事實だ。

しかし僕は安子のことを饒舌らうとは思はない。

しかし僕は子供が出來るのを房子のために恐れた。もう少し房子がおちつくまでは待たうと思つた。

僕は村のことや、世間のことは氣にしなかつた。村の人は僕の性質を知り、又僕達夫婦のことを知つてゐた。別にそれで惡影響をうける人もあるとも思へないし、僕達は又模範人物にならうとも思はなかつた。又世間でそんなことを問題にすることも考へもせず、又事件の力にまきこまれてゐる自分はそんなことを恐れる暇もなかつた。たゞ出來るだけ、村に迷惑を與へないことゝ、房子や安子を不幸にしたくないと思つてゐた。

實際そんなことも考へず、吞氣に心うれしく、おちついてくらしてゐる日が多かつた。

八、

又半年程たつて自分は東京に出た。房子は東京驛迄迎へに來た。僕達は逢つて氣まづい思ひをする必要はなかつた。

その前から新しき村に水路をつくり、發電所をつくりたく思つてゐたので、寄附金をあつめたく思つてゐた。新しき村を世間では僕一人の仕事のやうに思つてゐる。しかし僕は新しき村を少しでも早く立派なものにするのは僕のためだとは思つてゐない。日本に立派な新しき村を生み出すのは僕達村にすむ人間が幸福になるためではない。僕の名譽のためでないこともわかり切つてゐる。僕は新しき村を立派につくりあげるためにはいろ／＼の人の助けを借りられたらかりたいと思つた。房子はそのために東京に出たあと、僕の舊い友達にあつたり、三島に逢つたりして、皆に會合してもらつたり骨折つてゐた。

その結果、三島の發起で有樂座で、何かやつて金をとる計畫が出來、そして有樂座も借りる約束をしてゐた。しかしその時僕達はやることになつてゐなかつた。三島や園池は千家や房子達が芝居をやることにあまり氣が進すゝんでゐなかつた。芝居のむづかしいことを知つてゐるのと、房子達の仲間が、無藏法ものゝ集りなので、不安に思つてゐた。だから有樂座では活動寫眞に、他に何かをやることに計畫が出來てゐたが、それが駄目になつた。其處で有樂座をかりたがことはることにしようと云つた。僕はそれを聞いた時、僕達で何かやらうと云ふ氣になつた。

僕達は村の餘興に芝居をやつたことがあるので、少しは自信があつた。その上その一年前に本郷の青年會館で芝居の眞似をやつたことがあるので、やつてやれと云ふ氣になつた。

やりかけてよすと云ふことは僕は嫌いなのだ。やつてしくじる方が、やらないでしくじるよりは僕はすきなのだ。もう

劇場までかりてしまつたなら、やる方がいゝと云ふ氣になつた。それで急にやることになつたが、千家はその時東京に居ないので他の人達でやれる簡單なものをやることにした。

房子は乘氣になつた。僕もよろこんだ。芝居の時のことは別に話す必要はない。あの時僕達は、夫婦仲がわるいとは誰も思はなかつたらう。Aはうち氣で芝居はやりたがらないのでやらなかつたが、僕はAと一緒に芝居をしても少しも氣まづくなくやれたと思ふ。

もう僕達の間に厄介な事件はすぎさつて、そしてすべてがおちつく處におちつき出し、そして新しい關係がおちつきをもつて生れ出してゐた。

正直なことを云ふと、房子と安子とは氣らくにつきあへない關係になつてゐたが、僕とは三人ともよかつた。Aは房子よりも寧ろ僕を信用してゐた。それは當然なことであらう。房子は僕が後見しなければ何をするかわからない所がある。全然氣分本位で、自分の感情を支配することは房子には出來ない。其處が面白い處であるが、あるたがをつくつてその範圍からはみ出さないやうにすることはAには出來ない。僕は房子のこつをすつかりのみこんでゐる。

僕は文士の生活をつゞけてゐたら房子を貞操ある妻にすることが出來たらう。それはいつでも二人一緒に居ることも出來、行きたくない所にはゆかずにすむから。だが新しき村の生活をすれば、さう嫉妬を露骨に出すわけにはゆかない。二人だけの生活は出來ないのだから、ねる時より他に二人だけの時間はない、そしてその時はつかれ切り、眠い頂上である。

だから村では夫婦の生活をすることは困難である。この頃の村は少しづつそれが出來るやうになつてゐたが、村が出來て二三年はそれは不可能であつた。だから村で結婚した人は六組あつたが、皆一年もゐないで村を出た。二人だけで

家庭的な生活をしやうと思へばさうするより仕方がなかつた。

だから世間的の生活をしてゐる人には、僕達の新しき村における夫婦生活は見當がつきにくいと思ふ。どつちがいゝと云ふのではない。形式がかはつて來てゐると云ふのだ。

又話がそれたが、ともかくAは僕を信用するから、安心して房子とつきあつてゆけるのだ。だから僕はAに感謝しても憎むことはない、又非難することがあれば僕にあるだけだ。そしてAと逢つても少しも嫉妬は感じなくなつてゐた。之は安子がゐるからである。

名譽ではないだらうが、事實である。

九、

そしてその秋には房子は又村へ歸ることになつた。そしてAは房子より前に村に歸つてゐた。自分や房子は京都でも芝居をして、そして大阪に歸つてゐた安子も一緒に自分と房子と三人、村へ歸つた。

三島が來て村の活動寫眞をとつたのはそれからまもなくであつた。

僕は新聞や雜誌にいろ／＼かゝれたことはもうすつかり忘れて、腹も立たないし、云ひわけする氣にもならないが、この村での生活も大體無事にすんだ。時々ごく一寸したことからごた／＼が起りはしたが、それはすぐなほつた。

それから半年程して僕と房子は又東京へ出た。安子はその時だけ村にのこつた。安子はそれ迄、僕が上京する時には必ずついて來た。それは安子のお父さんが安子に逢ひたがるのも事實であり、そして安子に一緒に出て來るやうに云つてくるのも本當だが、前に云ひおとしたが、安子のお父さんは、安子が村へ入つてまもなく、無理につれ歸つて安子に

死なれでもしては困ると思つて、村へ入ることを許し、そして村に百圓寄附したりした。そして僕とも禮儀の上の文通を時々した。それからもう一つ云つておきたいのは、僕と房子とは清くつきあふやうにお互にしてゐることである。一緒に旅行しても性的誘惑はうけない。之も名譽とは勿論思つてゐないが、僕は安子にたいしては貞操を守りたく思つてゐる。又安子には貞操を要求したく思つてゐる。

ともかく安子は村にのこり、そしてAも村にのこり、自分と房子だけが上京した。その時は僕の全集の方の仕事があり、そして五月十二日には僕に厚意をもつてゐてくれる人達を招待してお禮を兼ねての會をすることになつてゐた。そしていつも上京すると母の家に泊るのだが、其處では自分の仕事の出來る室がないので、五月の始めに鎌倉の宿屋で房子と二人で十日許り生活することにした。

鎌倉には木下、長與、千家、園池が居た。又鵠沼には岸田がゐた。すこしおくれて倉田が、僕の泊つてゐる宿に來た。この鎌倉の生活はたのしい生活であり、そして房子は隨分よろこんでゐた。

しかしその時、僕に氣になることがあつた、それは安子が姙娠したらしいと云ふことである。姙娠したらしいと云ふことは村を出る前から安子は彼に話し、二人はおどろいて許りはゐなかつた。むしろたのしみにしてゐた。

安子は子供が出來ることを恐れてゐなかつた。僕も恐れてはゐなかつたが、たゞそれを房子に何うして知らせやうかと云ふことが氣になつた。まだはつきりはわからないので、もつとよくわかつてから話さうと思つて、一日のばしにのばしてゐた。所が僕はその時分齒がわるかつて、鎌倉から一日おきに東京へかよつてゐた。そして或る日齒醫者の歸りに母のところへゆくと、手紙が澤山たまつてゐた内に安子からの手紙が入つてゐた。それを見ると安子の姙娠はいよ〳〵本當なので村を出て大阪に來たこと、そして村にゐた女の人に一人大へん安子に同情してくれる人があるので、家の人

に知れる前に何處かに室を借りてその人とすみたく思つてゐることがかいてあつた。

自分はいよ〳〵自分にも子供が出來たのだと思つた。それはうれしかつた。それに安子の世話をしてくれるいゝ人が出來たこともよろこんだ。しかし房子に知らせることが氣になつた。

安子と僕との間が子供が出來るのは當然なことは房子は知つてゐた。しかし子供を隨分ほしがつて子供の出來ない房子に、このことを知らせると、又一爭動が起りかねない。少くも今よろこんでゐる最中にそれを知らせるのはどうも氣がひける、五月十二日の僕の誕生日に皆をよぶのでそれ迄は、少くもかくしておいて、その日を純粹によろこばしたくも思つた。

ともかく云ひだすのに一番いゝ方法は、手紙で知らせるのがいゝだらう。それには房子が一寸故郷によるさうだから、その時知らせやうか、それも氣の毒だ。どうかしてよはらさずに知らせる方法はないかと思つた。

僕はさう云ふ點がさつぱりしてゐない。相手の氣持がわかりすぎるので、傷にふれるのが臆病になる。そしてその内に十二日が來た。自分はまだうちあけずに居た。母には話した、母はたのしみにしてゐた。

十二日に僕は一人さきに鎌倉をたち上野でやつてゐた春陽會を見に行つた。其處で岸田に逢ふ約束だつた。ゆくと梅原や木村、中川が居た。話してゐる所に阿部さんが僕を見つけて來た。そして思ひがけなく逢つたのをよろこんでくれた。

それから皆で菓子を食つて、それから從弟にあつた。その友達が隣りの彫刻の展覽會に彫刻を出してゐるので、見ることをすゝめられて阿部さんと見にゆき、それから三越にゆきドイツの展覽會へゆき、それを見て阿部さんにわかれ、すぐちかくの齒醫者にゆき、そして少し氣にしながら母の家へ歸ると、房子はもうついて居た。元氣にしてゐたから安子の手紙は運よく來てゐなかつたのだなと思つてゐた。

そして晩の會に出かけやうと着物を着かへてゐたら、房子が

「惡いことをしました」

と云つた。

「何したのだ」。自分は安子の手紙を見られたのか知らんと思つた。しかしわりにおちついてゐるのでちがうかと思つた。

「封筒に名がかいてなく女の字だつたものでついあけてよみました」と云つた。

僕は房子に安子から手紙が來たことを注意されて中の文句を聞かれるのを恐れて、安子に名をかゝないでくれと注意した。

安子はさう云ふことを非常にいやがるのだが、僕は房子のヒステリー的な突發を恐れるので、名をかゝないやうにたのんだ。

それが反つてわるかつたのかと思つた。しかしわりにおちついてゐるので、反つてさう云ふ風に知られた方が一番よかつたのかと思つた。しかしよりもよつて今日、房子の一番よろこんで居、たのしみにしてゐる日に、房子が内に氣にしてゐた事實を、露骨に見せつけたことを氣の毒に思つた。

房子は「今日はそのことについては何にもふれないやうにしませう」と云つた。

そして自分達は會に出かけた。

その日武郎さんも來てくれた。いろ〳〵の人が來てくれて僕はうれしかつた、房子もよろこんでゐるやうだつた。だが手紙のことを思ふと房子に氣の毒な氣がした。しかしその内に僕はそれを忘れてしまつた。

家に歸つてから氣にしたが、無事に寢た。しかし夜中に房子は泣き出した。

「私はあんなに子供をほしがつてゐたのに」

十、

翌日僕達のやつてゐた雜誌が主催で村でうつした活動寫眞を見せる演說會があつて其處に出かけた。房子も來た。村の活動寫眞があるので村の人は大勢來てゐた。そして其處に來てゐる村に居た女の人が、房子に安子に子供が出來たことを村にゐる人から知らせて來たことを話した。

あぶない所だと思つた。房子は知つてゐたからよかつた。知らなかつたらどんな氣がするだらう。そして僕が默つてゐたことをどんなに恨むだらう。

昨日手紙を見てくれたことはよかつたと思つた。それにしても少し噂が早やすぎると思つた。

しかし村の人がのこらず知つたらうと思ふことは氣がらくであつた。

房子はその翌日わりに元氣に故鄕へ一人さきにたつた。そして、僕は安子に來てもらつて母に逢はせそれから一緒に京都の方へ出た。このことは房子は知つてゐた。

二日のちに京都に僕がつく少し前に一人の人が僕を知つてゐて挨拶した。

僕は京都で安子とわかれて、京都の支部に行つたが、房子は中々來なかつた。電報をうつたらすぐ京都へ來た。そして村へ一緒に歸つた。今度は村には安子が居なかつた。

僕は房子とは勿論、Aともよかつた。しかし安子は隨分あはてゝゐた。又少しひがみ出して來た。家をさがすことを他の人にたのんでも駄目なので、自分一人で搜したりするうちに氣が滅入つたらしく、それに嫉妬してゐるのでいつも

よりもなほ神經質になり、僕を恨むやうな手紙さへかくやうになつた。

無理はないと思ふが、僕もどうもしやうがなかつた。それで安子の世話をしてくれると自分で云ひ出してくれた女の人によくたのんで出かけてもらふことにしたが、しかし家が見つからないので、女の人の出かけるのも次第にのびて行つた。

房子は矢張り村におちつかないので、一人で宮崎の宿屋にゆくことにしたが、その時はもうあきらめがついたのか、子供の出來ることに少しづゝ樂しみを感じてゐるらしく、ヒステリーはすつかり起さなくなつた。

僕との間も平和であつた。たゞ安子が時々ひがんだ手紙をよこした。そして子供が出來たことを僕のせいにし、恨みがましい手紙をよこした。無理はないと思つて、なるべくなだめた手紙を出したが、僕はとう〳〵怒つてしまつた。

そして安子の方が折れて來なければ、勝手にしろと思つた。それは安子が僕よりもある男の人の方が親切で自分のことを本當に心配してくれてゐると云つて來たからだ。そんならその人と結婚したらいゝだらうなぞとまでかいた。しかしそのあとで僕は實に淋しかつた。それから安子は恨みがましいことは云はなくなつて、おちついて相談して來た。自分は實にうれしかつた。

これがごた〳〵の最後であつた。それからまもなく村に居た女の人と二人で山口縣のある海岸の小さい町の老人夫婦の宿の室をかりることにし、其處におちついた。そして老人夫婦が親切なことや、醫者に近いことや、產婆もよささうな人であることを知らせて來た。僕はそれですつかり安心した。

十一、

こんな話の仕方が面白くないと思ふ。

その時分武郎さんの心中が報告された。僕なら死なゝいと思つた。武郎さんだから死んだのだが、死なしたくなかつたと思つた。しかしもうすぎたことだ、やむを得ないことゝ思つた。それから半月程して、自分は叡山に夏期大學に話に出かけることにした。勿論僕は講義などに自身がなかつたのだが、安子に逢ふ口實が出來るのでゆくことにした。ゆく時宮崎によつて房子に逢つた。房子は元より安子に逢ふために夏期大學にわざ／＼ゆくことは云つてゐたが少しも不服は云はなかつた。反つて彼が、夏期大學をすませて三日目か四日目には、村への御客の關係で歸らなければならない話をした時、「歸らなくつたつていゝでせう。」と云ふ意味のことを云つた。それには皮肉なひゞきはなかつた。

自分が安子の居る所の宿屋についたのは朝の四時頃で日のながいさかりだつたが、まだ少しくらかつた。安子はねてゐたが、あわてゝ起きて來た。おなかの大きくなつたのにおどろいた。

自分は其處に四五日居て東京に行つた。三島に電話をかけたら一寸話したいことがあるから一寸およりすると云つた。

僕が上京するといつも逢ふ連中が集つてゐる所に三島が來た。少し居て歸る時、僕に一寸話したいことがあると云つた。

「Tが僕の處へ來て君のことについてへんな噂があるが本當かとし切りと聞くが、そんなことはないと思ふと答へておいたが」

僕は覺えがよくないから、言葉はそのまゝ覺へてはゐない。僕は三島が僕をへんに信じすぎてゐるのに恐縮しながら「嘘ではないのだ。しかし僕のことだから安心してほしい」と云つた。

それから三島は僕のことが新聞に出さうだと云つて氣にしてくれたが。

僕は出たら出たでかまわないと思つた。僕は自分の仕事の上から云つて、世間を無視する、少くも自分の良心よりは世間を無視することを修養して來てゐる。

だから世間で何と噂しやうが、それで僕の價値は上りも下りもしないことを信じてゐる。元々だましてほめられたつてそれを喜ぶのは耻かしい。事實をかゝれて、それで笑はれるなら仕方がない。しかし自分は、新聞に出されても平氣だと力んで見せる氣もしなかつた。實際又吹聽する程の話でもない。なるべく遠慮しておく方がいゝ話と思つてゐた。

その時分には僕は白樺に詩を書いて、僕に子供が出來たと云ふ噂は嘘ではないと否しておいたあとだから三島が知らない方を僕は不思議な位いだつた。

友達からはいつ生れるのだいとか、お目出たいのださうだねとか、ひやかしてなしに云はれて僕も平氣で、十一月に生れるはづなぞと話してゐた時だつた。僕は日かげの子供をつくる必要がないのをよろこんでゐた。

だが新聞に僞善者にならない程度においては出ない方がいゝと思つたので、三島にも、出ないやうに出來ればそれにこしたことはないが、そのために新聞に出るのを恐れてゐない程度にしてもらうことをおとなしく話した。

僕は三島の親切を元よりうれしく思つたので、ごくハンブルに話せた。そして三島も承知して歸つた。僕はそれを聞いても、氣分を亂されるやうなことはなかつた。武郎さんの場合は一生の總勘定になつてゐるのだから大きな問題としてあつかはれるのは當然だが、僕のは、エピソートにすぎない、それも、もうすんでしまつて、今更どうにもならないことだし、又どうにもならないことをよろこんでゐるのだから、僕の問題にはならないのだから、いそがしい世間の問題になるなぞとは考へる方がおかしい位いに思つてゐた。一部の人に笑はれたり、愛想をつかされたりするのは覺悟の前

だが、まだ十年や二十年は生られるつもりでもゐるので、いつもそんな不名譽位いはとり返せると思つてゐたし、腹の底でわるいことをしたと思はうとしても思へないのだから呑氣にしてゐた。

しかしすつかり呑氣になつてゐたと云つたら嘘になるかも知れない。

それから二三日たつて自分は叡山に居た。

叡山には日を一日とりちがつて一日早く行つた。その位いなら京都の志賀の處か内藤君の處に一晩とまればよかつたと殘念に思つたがおいつかなかつた。それで時間に暇が出來たので日記にへんな詩のやうなものをかいた。それを見ると。その時の自分の氣持がわかる。

「生れけり、死ぬ時迄は、生くる也」

「私は生る爲に
仕事のために
安子を知つたことを
よろこぶものです
さう新聞記者に答へてやらう
新聞種になつたら」

「煮ても燒いても
中々喰はれてはやらないぞ
この俺は

自分の仕事と他人の生命は
大事にするがね」

「俺の圖太さの
瓜のあかでもやりたかつた
武郎さんに」

「臆病にかけても
圖太さにかけても
人後におちない
この男」

「ゆきつまれば
道自づと開く
ゆきつまれ」

「いぢけて他人に
すかれるよりは
欠伸して
他人に嫌はれるなり
夏の日」

「禮儀は大事でないとは云はない
だがいちけてはいけない。
我儘はいゝものだとは云はない、
だがいぢけてはいけない。」

之は皆七月二十九日に叡山でかいた。新聞で輕蔑された數日前の作だ。

これだけ用意してあるから自分は用意の方がつよすぎて、新聞の記事の方が他愛なかつた。新聞に惡口をかゝれた時、志賀は「君は不△△だから安心してゐる」と云つて來た。他の友達も皆安心してゐた。

勿論僕は當時不快を受けたが、快活さは失なはなかつたし、安眠も奪はれなかつた。まして自信や、希望は失なはなかつた。そして房子は僕に逢ふと元氣になつたし、安子もよわりはしなかつた。しかしあとで聞くと、房子と兩親、安子の兩親、僕の母は閉口したらしい。僕の母は昔もので世間の評判を氣にするたちで、一時は生てゐるのがいやになつたさうだが、僕が三四百里はなれてゐるので、慰めやうがなかつたが、しかし手紙でなぐさめた。

十二

話が少しとびすぎたが、叡山では講義には失敗したが氣持はよかつた。夜叡山の頂に立つて月の川を見、大津や、京都の電燈が、ひらめくのも見た。

たゞ講義を聞きに來てゐる人が、あまり多くないので主催者に損をさしたやうなのが少し氣になつた。僕許りがしやべるのではないが、僕にもう少し力があれば、損さゝずに、すむと思つた。聞きに來た人にも氣の毒な氣がしたが、そ

れは字をかいたり、村の話をしたりしたので帳消し出來たと思つてゐる。叡山に二晩とまつて京都へゆき志賀や内藤君に逢つた。その時、僕は新聞に僕のことが出るかも知れないと話した。たゞ笑ひ話に話をしたにすぎない。

それから歸り道に又安子の所へよらうと思つて汽車にのつて、神戸で何げなく新聞を買つて見ると、その新聞にちやんと自分のことが大きな見出しで出てゐる。

一寸恥かしい氣がしてよんで見たが、この位いならまあいゝとしておかうと云ふ程度だつた。それから安子の處に二日よつた。其處で、改造に出した、二十枚許りの對話をかいた。之はまだ世間からさう悪口を云はれてゐることを知らない時だつた。

それから房子と一緒に村へ歸る約束になつてゐたので、約束の時間に宮崎を通る汽車で村へ歸つた。汽車が宮崎へつくと、いつもの調子で房子が元氣にやつて來た。二人の對面は一寸ドラマチツクであつた。房子は例によつて目立つ風をして、そして宿屋の人大勢におくられて來て居た。

皆が僕を見る目には好奇心が感じられた。あんな顔して、子供をつくつたのかと思つて見てゐるやうに思はれた。あまり名譽のことにも思へないが、恥かしがつて見せるわけにもゆかないから平氣な顔をしてゐた。

房子と僕とは別に今迄知らなかつたことを新聞に知らされたわけでもないから、相變らず仲よく氣らくにいつもの調子で話してゐた。人々の好奇心は感じられたが、芝居をして見せるのもいやだから、あたりまいにしてゐた。

しかし人々にはこの二人の自然の仲よさが不思議に見へたらしい。汽車が動き出して皆にあいさつして汽車の窓をしめて二人切りになると、房子は新聞記者にせめかけられたことや、自分があまりいゝ役目でないことや、いろ〳〵馬鹿

なことや、まちがつたことをかゝれた話をした。しかし笑ひながら話したので、二人とも元氣だつた。
「あんまり惡口をかくので、新聞社の前で首くゝつてやらうと思ひましたわ」
なぞと云つて笑つてゐた。又宿屋の息子の嫁や、かゝりつけの女中達まで泣くので、自分も心細くなつて泣いたなぞとも話して笑つた。

高鍋で汽車をおりて、そして村へくるお客、そのお客は高島さんで、高鍋にたのまれて、講演に來られたので、そのついでに村を見たいと云ふのだつた。僕達は高島さんにはいろ〳〵お世話になつてゐるし、兄の先生だつたので子供の時から知つてゐて、僕が今でも先生と云つて、おつきあいしてゐるのは高島さんだけだ。それで高島さんが村へ來て下さるのは隨分よろこびだつた。

高島さんの宿屋へ行つたら、まだ學校で、お留守だつたが、まもなく歸つてこられ、久しぶりに逢つたのでうれしく思つた。

高島さんは用事の都合で翌日來られることになつて僕達はさきに村へ歸つた。

新しき村へ歸ると自分の世界に歸つたやうな氣がする。誰も新聞記事なぞは問題にはしてゐないし、相變らず皆やつて來て愉快に話した。自分達は呑氣な話をしては高笑ひした。

翌日は高島さんが見へ、夜歡迎會をした。皆あつまつていろ〳〵演說したり、かくし藝をした。高島さんの話を皆よろこんでゐた。その翌日大雨で、高島さんの歸るのが大へんだと思つてゐる處に、來客があつた。雨のふる所大へんだと思つたら大阪毎日の記者で、感じのわるくない人だつた。大雨に職務のためでもわざ〳〵この遠方に來たのも同情した。それで自分はなるべく無駄骨をおらしたくなかつた。

高島さんは大雨のなかを元氣よく歸つて行つた。そのあとで自分は饒舌るといつもまちがつてかゝれるので原稿に鉛筆で走りがきして渡した。それから雜談風にいろ〳〵話してゐた。

その人は自分も藝者か何かに夢中になつて、それが元因で夫婦わかれしたことがあるなぞと房子一人の時に話してゐて、別に僕のことを珍らしいことにも思つてゐなかつた。たゞ房子がまいつてゐるやうに聞き、首でもくゝりさうならその樣子を見て歸れと云はれて來たのだが、房子が元氣にしてゐるのにおどろいた。房子が腹を立てないのが、どうもわからないなぞと云つてゐた。

房子は、「それでも實篤の顏を見ると腹を立てるわけにもゆきませんからね」なぞと云つてゐた。僕はそれをきいて「それは俺の方がいつた言葉だ」とおかしかつた。さう云ふ點では俺達は似たもの夫婦かも知れない。

今でこそ冗談で、思ひ出してもいたつて呑氣で、惡口を云つた人間にも少しも腹はたゝなくなつてゐるが。人がよはり出してゐると思つて、いゝ氣になつて惡口を云つたり、又眞面目に怒つた手紙なぞは毎日五つ六つやつて來だした。あまりいゝ氣もしなかつたが、相變らず快感さを失なはず、又安眠も出來。その一番ひどい最中に、「桃源にて」と云ふ三幕ものをかいたりした。僕の處へ直接來た手紙には、武郎さんのやうに首をくゝつて死んでしまへとか。僞善者だとか、愛想をつかしたかと、今迄子供があなたのものを愛讀してゐたがとか、もう忘れたかいろ〳〵の手紙が來た。

その時分の日記にはこんなことをかいた。

八月七日

『新聞は安子のことをかきたてゝゐる。

わりに平氣だが馬鹿どもが生意氣なことを云つてゐるのと、手紙をくれた人がおるので、いろ〳〵想像すると不快だが。やむを得ない。平氣でゐてやることにする。安子からは本當にいゝ手紙をよこした。安心しうれしい。

房子とは毎日仲よく話しあふ。時に新聞記事に不快なことが出ると皮肉を云ふがすぐ快活になり、愉快に話す。

一幕ものをかきかけた。あまり自信がない。明日までにかくのだから困る。

『どつちにしろ僕の眞價は反つて今度のことでわかる人にはわかると思ふ。

嫌ふ奴に嫌はれて

わかる人にはわかつてもらへる

氣らくさ。

今、金がないのが一番いけない。早くくるはづの金がくるといゝ。』

こゝにかいてある一幕ものが、一幕ものではおさまらずに三幕ものになつて、翌日かき上げたのが、「桃源にて」だ。

ついでに言ふが、第二幕第三幕はドラマチツクでないかも知れないが、完成品の感じがあつて、自分はすきだつた。

その後彼が大阪毎日に出したものを見てから、へんに尊敬者が出て來たり。又厚意を見せる人が出て來た。矢張り少し淋しかつた時と見へてさう云ふ手紙は中々うれしかつた。

その内に悪口の手紙はぱつたり來なくなつた。その後も雜誌なぞに僕が馬鹿者だと見ぬいてゐる連中が何かかいたが、下手よむと何か又かきたくなるので、キタナイものにはさはらないのが利口だから。ゲーテの所謂「讀まない自由」をふりまわすことにした。

萬事はすぎた。

十三

あとは子供の無事に生れることをのぞんだ。又それこそ一番大事件である。

から子供に非難されたら僕は一番まいる。

「私はこの世に生れたくなかつたのです」

どうかして生れたことをよろこんでもらいたい。又自分は親の愛を出來るだけ生かさしてもらいたい。勿論それは村の仕事のよくゆくことの邪魔をしないで、出來たら新らしき村にとつても子供の生れることは喜びであつてほしい。

之は僕は何處までも謙遜な心でのぞんでる

勿論人間は親が生みたいと思つても生れるものではない。だから一人の人間が生れた責任を全然親がもつと云ふわけにはゆかない。生みたくなくも生れ、生みたくも生れない、又どんな子が生れるか、それは誰が知らう。

この子に生れたかつてゐるものはどの位いあるかわからないが、その目的を達するものは實にわづかである。しかしそんなことは今云つては切りがない。それに就ては他で云つたこともあるからこゝでは云はないが、僕は生れる子供の責任が全然自分にあるとは自惚れない。生れる子供にたいしても自分の力の小なことを知つてゐる。しかし責任がないとは云へない。

勿論、子供が生れたことをよろこんでもらいたいのは責任問題ではない。自分は自分が善人だと云ふ證明がたつても子供が不幸であつては困る。自分が惡人だと云ふ證明がたつても子供を不幸にはしたくない。

しかしそれは自分には力のないことだ。出來ることは安子に養生してもらうことゝ、心を平和にもつてもらつて、出來るだけ胎内の子にいゝ影響を與へることだ。しかしそれも自分には十分の一も力をつくすことが出來ない。しかし人間の自力と云ふものは知れたものだ。そのあとは與へられた運命に從順になるより仕方がない。

安子は自ら進んで新らしき村に入り、自ら進んで僕に一生をまかせ、又自ら進んで子供をつくる決心をした。勿論それには僕の努力も加はつてゐるだらうが、僕は他人の意志を尊敬することは何處までも忘れはしなかつた。

このことはその時分の安子の手紙を見ればわかると思ふ。安子の手紙にはこんなことがかいてある。

「昨日下の關の新聞記者が參りまして寫眞をとらせてくれと申して本家 宿の）の方へ參つたのをぢゞががんばつてかへしました。そしたら支店の方へ行つて電話で色々近所のうはさを報告したさうでございます。すつかり天下のおたづね者になつていやになります。」此の節はその時間が短くなりました。御手紙拜見して心が靜まりました」

「安子はもう心から安心して居られます。お暑いのにたくさんの御勉强で大へんでございますね。お體お丈夫なのは何よりのことで、（中略）おなかでは丈夫らしく昨日醫者と産婆が參り見てくれまして疑りなきよしでございます。（中略）又今日新聞記者が參りましてK子さんが店で逢ひ三十分もつきらぬことを話してやうやく歸りました」

私は村で産むのが一番いゝと思つております、それで此間歸りたいと申しました。けれど他の方の感情や、住居のこと、醫者のことを考へてあきらめました。こゝで産むことになりますと、あと七、八ケ月動けないことになりまして私は心細くてなりません。

『昨日東京時事新報の記者ごく若い人がきましたが、別に惡い感じもしませんでして、普通の話をして歸つてしまいました。私もこのごろ前より大分强くなりました。でも中々それは努力してのことなのでございます。時々たまらなく悲

しくて一人の時思ひ切り、泣きます。心底では安心もし、母になることを喜んでおります」

「私は此頃すつかり心の底から落ついてしまいました。そして大へん樂觀的になつてしまいました。私自身は心が第一の生命でございますから、他のことは第二のことでございますから、本當になんとなくうれしくております。……世の中にはどんなに不幸な方が多いかと云ふことを考へて自分が幸福であればある程、深く考へなければなりません」

「どんなことが起きませうと私の心は安泰でございますから安心でございます」

十四

之で君は新聞の記事が僕達を少しも不幸にしないですんだことを認めるであらう。之は痩せ我慢ではない。そして新聞の記事のおかげで僕はあらためて村の人に告白することをたすかり、又入村者に一々云ひわけすることをたすかり、又安子のお父さんにどううちあけようかと云ふことの心配がなくなつた。

安子のお父さんは打撃をうけても、父の愛で安子と縁を切る勇氣はなく、殊に新聞記者が來て勘當することを暗に勸めてくれたので反つて反對に出る勇氣も出た。それ以上父の愛は何ものも許す力をもつてゐる。

もう萬事は目出たくすんだ。其處へ地震が來た。しかしそれは僕の話す事件には別に影響はしなかつたが、僕は九月三日に地震のことを日向の新聞で見ておどろいた。そしてすぐ東京に家のある會員の人達四人と村を出た。

僕は何となく東京にゐる母や、キク子や、甥の實光が、無事にしてゐるだらうと思つてゐた。僕は蟲の知らせを何となく信じてゐる。自分が千里眼を信用しないが自分の母達についての想像はあかるいものだつた。

僕の母は非常に地震が嫌ひな質なので、その方は氣にしたが、僕は噂が誇張されてゐるやうに思つた。しかしそれは僕

の感じにすぎない。僕の理性はその感じに根據のないことを證明する。

その時のことを話すと切りはないが、ともかく僕は宮崎まで出ることにし、その時分もう宮崎に歸つてゐた房子の所により、なほ事實を調べて、矢張り、大地震で、噂の半分でも大したことだと思つて、翌朝一番の汽車で東京の方に向つた、汽車のなかは地震の話許りだつた。新聞をのこらず買つて見た。

僕は正直なことを云つて安子の處へ一寸でもよりたかつた。新聞には東京へは普通の人は入れないやうにもかいてあつたし、萬一のことがあれば三日おくれてゐるのだから、もう云ひわけはよそう、ともかく勝手な云ひわけをつくつて安子の處に汽車の都合で十時間許りよつて京都に行つた。警察へ入京の手つゞきをしてもらいに內藤君と一緖に行つたが、どうしてもゆるしてくれなかつた。いろ〳〵の方法をとつても駄目だつた。その時東京へ行つた志賀が歸つて來て母の居た僕の生れた、又二十九位いまで住んでゐた家はやけたが、皆無事なことを知つた。それで安心した。三四日のちに僕一人だとあぶないと志賀が云つて瀧井君に志賀がたのむようにすゝめてくれて、僕は瀧井君と一緖に隨分苦心して入京した。母達は母の妹の家に逃げてゐたので、其處に行つて、母達が元氣にし、又叔母の一家から實によくされてるのを見て、安心した。

この叔母は僕の事件を、「いゝことゝは云へないが、子供が出來たことは大へんいゝことだ」と名言をはいた。その言葉は僕の親類達の氣持を一番率直に云つたものらしい。

僕は一週間許り東京にゐて、又安子の處へ行かうと思つた。原稿をかく云いわけが自分にもたつので。そして又苦心して京都へ來た時。

安子はその間に大阪の兩親の家に歸つてゐることを知つた。其處に六日許りゐて、「秋の曲」（三幕物）をかいて又

上京した。以前の上京の時は東京中が新しき村になつたやうだと云つて村の人があつまると笑つてゐたが、今度は少しづゝ都會らしくなつて來てゐた。

自分は東京に暫くゐて母の引越を手つだい。母達のおちついたのを見、それから又大阪に一晩とまり宮崎に一泊して村へ歸つて來た。安子が兩親のもとに歸つたので、自分はなほ一層安心した。

十五

自分は自分のその時分の又日記に語らしたい。

「宮崎で房子に逢つた。相變らず呑氣で、氣らくで、氣持はかはらない。」

「あけ方、生れてくる子の名を考へた。女だつたら「新子」之はすぐきまつた。新しき村の子である。西園寺さんのお新さんと同じ名だが、お新さんは死んだ人だし、僕は個人的につきあつたことはないが、娘の娘として時々逢つた感じは好きだつたから。それでもいゝと思つた。男だつたら厚行、篤行。と云ふ名が最初に浮んだ。しかし厚秋にしやうかとも思つてゐる。秋はお母さんの名だし、ものゝ實る時だし、生れるのも秋と思ふから。厚行か、厚秋かどつちかにしやうかと思ふ。字の形から云ふと厚行の方が好きか知れない。しかし武者小路と云ふ重い名のあとには秋の方がおちつくかと思ふ。今日一晩考てきめようと思ふ。」

「子供の名は

女なら、新子、篤子、

男なら、篤秋、厚秋
にきめることにした。子供は村で育てたい。そして獨立出來る村の一人前の男女にしたい。」
「よき子よ、よき子よ
無事に生れておくれ
そして母子とも健全にゐておくれ
俺はへんに安心してゐる。
運命を信じてゐる
しかし少しは氣になる。
よき子よ、よき子よ
無事に生れておくれ」
「Aから石川に手紙くる、房子の家出來て引越し、氣に入つてゐるらしい。先づ安心、幸福であれ。よろこび多くあれ。祭日に花火を三十本もつてくるさうだ」
「之で安子から元氣な手紙が來れば實にうれしい」
「子供よ生れることを
又生れたことをよろこんでおくれ
そしたら俺達は實にうれしい
それにまさる孝行はない。
さうなつて俺達をよろこばしておくれ。

お前の生れてくることは俺には實にうれしい。たのしみなのだ。」

「今日も安子から手紙が來ないのでがつかりする。しかし心配なことはないと思ふ。その内に來ると思ふ。無事を祈る」

「安子より手紙來た安心した。無事ありがたし、子供が出來たために身體をそこねられては隨分閉口する」

「房子少々病氣と百瀬さんからしらせてくる。大したことはないと思ふが、早くなほることをのぞむ」

「昨日房子歸つてくる。相變ず元氣。相變らず賑かで華だ。皮肉家だ。しかし僕とは實にいゝ。二人は定る處にさだまり、愉快に一緒に居られる。今度かりた大きな家の自慢をしてゐた。村に金のない時、平氣で金をつかふことを自慢してる所が房子らしい面白い處だ。僕の文士として愛する人の性格をもつてゐる。いぢけた僞善者が當世に多い時に、かう云ふ性質も面白い。僕自身は質素に生活することがすきだが、房子らしく一生生かしてやりたく思ふ」

切がない。

赤坊は中々生れなかつた。ぢらすだけぢらして、中々おちついてゐた。おちついてゐる方がいゝとは思ふが、何しろ遠くにゐるのだから氣にすると切りがない。

十一月二十三日は、「子供は今日あたり生れさうに思ふ。しかし待つてゐる時には中々生れないかと思ふ。男の子の方がいゝが、女の子でもうれしい。無事に丈夫に育つてほしいものだ。自分は自分の子供を教育することをたのしみにしてゐる。よく働く、しつかりした、しかも優しい人間であつてほしい」

赤坊は十二月一日に生れた。女の子で丈夫だつた、自分は大よろこびでとんで行きたかつたがやめた。しかしそれから二週間程たつとから出かけて行つた。

「赤坊の顏を見る。いろ／＼の顏をする。泣く、乳をのむ、おむつをかへるのを見る。おむつをかへると滑稽な顏をする。今よくねむつてゐる。段々へんに可愛いくなる」

しかし僕は[illegible]て樹へ歸つて來た。自分は時々子供が見たくなる。もう二週間もしたら又出かけるつもりだ。

十六

僕の話し方はまづかつたであらう。しかし僕達の關係は大體わかつたことゝ思ふ。

僕のしたことはいゝことか、わるいことか知らない。しかし萬一罪があればそれは僕にある。許してもらへるものには許してもらい。排斥するものには排斥してもらはう。だがそれは生わかりの非難だけは御免かうむりたい。

しかしそれも今の世にそんなこと迄のぞむのは贅澤すぎることも知つてゐる。

自分は世間的の惡る者になつてもいゝ、皆を幸福にしたい。そして自分の心を平和にし、よろこびを多くし、自分の仕事をますます〳〵してゆく力をたくはへたい。

自分が進んで頭を下げる人は、

家庭的エゴイストにならず、又世間を恐れず、相手に犠牲を強いず、又浮氣もせず。そしてお互に愛し、お互に愛することによつて益々力を得、そしてその力をもつてますます〳〵自分の仕事、――それは直接、間接に人類の生長に役立つ、仕事でなければならないのは云ふまでもない、――をしてゆく人である。

自分は自分のふんで來た道によつて一番、自分の心を亂さず、又自分のエネルギーを、出來るだけ浪費せずにすめる樣に實行出來ると思つてゐる。

自分のこの氣持は君にはわかつてもらへると思ふが。

どうかね。ともかくも僕はまだ完成の域には遠すぎる人間だ。だが僕は完成の域を目指してはゐるつもりだ。もうおしまいにしよう。くたびれたらう。僕たちもくたびれた。（二四、一六、四、）

編輯を了へて

□歐米の人氣男が時を同じうして安かに往生した。そして立派な寢臺で名醫を侍らしつつ死んだ。しかしウヰルソンはブルの代表者だけに、このごろの若い人々にはその死も殆んど問題にされなかつたがレニンの死はすべての階級によりて悲まれた。

□ロシア革命は勿論彼一人の功勞ではない、しかし彼が最大なる主動者であつたことは否まれない。彼の風格を奈翁や、シーザーに較ぶるものもあるが、私は、その事業、風格、學才、識見、思慮より判斷してレニンは古今に卓絕する第一人者であるといひたいウヰルソンの如きは比較の對象にはならず。

□ウ氏は過去數の人、レ氏亦長く第一線を離れていたが、しかし彼は風中にありて仲違いを走らすの威望があつた。此人一人去つて赤旗亂れんとさえ思ふものがある。

□ブルの代表國が勞働國となつた、勞働黨の代表者が英國大宰相となつた。我國では樞密院の古手が宰相の榮冠を帶びて大森の隱居家から飛び出した。一方英國內閣では勞農ロシアを組閣後旬日を出でずして承認した。政治は萬事こうテキパキ行く所に趣がある。

□五月十日は選擧だ。櫻のない五月でれあるが、生新の氣の漲る五月だ。一週試驗濟みになつた古手議員を選擧するな。護憲三派の主張にも暇して聞け、政友本黨のそれには勿論のこと。

□先づ第一に、候補者の主義と主張を檢討し、人格と、操守と、勇氣と、忍耐に對して候補者を試驗せ。地方問題を云々し、金力を振廻はし、印頭主義を採り、先輩を振り廻はす徒輩は斷じて葬れ、世界的經綸なきものは選良の資格なし。選擧者は府縣會議員を選ぶ氣持ちと、代議士のそれとは自ら別箇の標準でやるべきである。

□創作欄には今後必ず新人の力作を發表するつもりです。又、論文欄にも新人の溌剌たる力作を掲載したい考です。此兩欄とも五月號より實行を期します。

□近來力作三幕戲曲「蕩兒の墮ちる地獄」を下さつた倉田氏の厚意を感謝する。讀者と共に靜に氏の意のある所を味ゐたい。

□谷崎氏の力作「無明と愛染」も正月號の創作壇の評判ものであつた丈け、本月號も前號通り歡迎されることでせう。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は每部につき郵稅金拾錢を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵劵にて定價通り御拂込ありたし但し郵劵代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾參年二月廿日 印刷納本
大正拾參年參月壹日 發行
（定價九拾錢）
東京芝區愛宕下町一ノ一 編輯發行兼印刷人 平田貫一郎
東京牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二 印刷所 秀英舍
發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九二

豫約募集

監修 文學博士 松村武雄
　　 慶應大學教授 小山內薫

全二十二卷 一萬八千頁

世界童話大系

現代は童話の世紀である。それは兒童の智能を雋鋭にし情緒を高雅にし人間愛に燃え立たせる爲めに必要なばかりでなく、吾人の心靈を優美にし、人間本來の性質に味到せしめんが爲めに童話、童謠、童話劇が最も有力にして最も普遍的な利器であるからである。

本大系は全二十二卷、一萬八千頁の尨然たる書册のうちに、世界各國の童話、童謠、童話劇の代表的なものの總てを網羅し盡した世界空前の大全集で、之を國別にすれば二十三ヶ國、地球全土を含み、時の古今、洋の東西に於ける兒童文學の全局を包嚢し、以て兒童文學界に眩目すべき一大記念塔を樹立せんとするものである。

本大系の誇るべき長所

一、各篇が字義通りに全集であることである。
　從來出版せられたグリムやアラビヤンナイトはその全體の十分の一にも足らぬ部分譯であるが、本大系は加何なる斷篇小說と雖も一切之を輯載して徹底的に全譯の意義を全うしてゐる。

二、童話、童謠、童話劇の各部門に亘つて、將來吾が文壇の定譯定本たるの權威を保持せしめんが爲め、悉く斯界最高位を占むる權威者の責任ある執筆になることである。

三、飜譯の典據をすべて母國語による原書中の最良書を求めて、努めて重譯を避け得たことである。

編譯者（ABC順）

東北大學教授 青本正兒（支那童謠）
浦和高等學校教授 馬場吉信（伊太利）
慶應大學教授 茅野蕭々（獨逸童謠）
早稲田大學教授 日夏耿之介（亞剌比亞）
學習院教授 金田鬼一（獨逸）
楠山正雄（劇）
文學博士 松村武雄（印度日本、英吉利）
慶應大學教授 及川恒忠（支那）
陸軍大學教授 岡野馨（劇）
慶應大學教授 小山内薫（劇）
早稲田大學教授 西條八十（佛童謠）
第六高等學校教授 山宮允（愛蘭）
浦和高等學校教授 須川彌作（和蘭、佛西班牙）
高等師範學校教授 竹友藻風（北歐、英童謠）
山崎理學博士夫人 山崎光子（トルコ、ルシヤ、リシヤ、レマギロ）
陸軍大學教授 米川正夫（露西亞、露西亞童謠）
早稲田大學教授 中村白葉（露西亞）

◉全二十二卷の要目◉

第一篇 希臘、羅馬 イソップ物語 伊太利外五篇
第二篇 獨逸（1）グリム童話集
第三篇 獨逸（2）ハウフ童話集
第四篇 北歐 アンデルセン童話集
第五篇 露西亞（1）アファナーシエフ童話集
第六篇 露西亞（2）クルイロフ、トルストイ、ソログーブ
第七篇 英蘭 ハートランド 蘇格蘭 ダグラス
第八篇 愛蘭 グレーブス イエイツ
第九篇 佛蘭西、和蘭 ラ・フォンテーヌ、ペロール、グリップフ 西班牙 イス、セゴヴイア
第十篇 印度 ジャータカ、パンチヤタントラ
十一篇 土耳古 クノッス、オルロット 波斯 フイルッン
十二篇 亞剌比亞（1）アラビヤンナイト
十三篇 亞剌比亞（2）アラビヤンナイト
十四篇 亞剌比亞（3）アラビヤンナイト
十五篇 支那童話集
十六篇 日本 日本、朝鮮、アイヌ、童話集
十七篇 世界童謠集（上）
十八篇 世界童謠集（下）
十九篇 童話劇（1）花嫁の冠 外十篇
二十篇 童話劇（2）ヒッパ踊る 外十一篇
廿一篇 童話劇（3）小さい夢 外十篇
廿二篇 童話劇（4）和の輪舞 外九篇

略規

體裁 形體―菊判新型。表紙―最上布製。裝幀―金文字典雅。印刷―鮮明正確。紙質―最上等。製本―機械綴堅牢。

會期 期間―二十二ケ月―大正十三年五月ヨリ向フ二十二ケ月間 配本―毎月一回―毎卷ノ紙數平均七百頁以上トナル。

會費 申込金四圓八十錢（一册月拂 金一圓八十錢 申込金は最終の會費に充つ 金[illegible] 送料市內六錢地方十八錢）

內容無料 これだけにても世界童話の概觀と日本童話の發達とが分る

見本進呈

豫約三月卅一日限 締切

申込所 東京市京橋區相互第一館 近代社 振替東京六二一九八番

發行所 東京市京橋區相互第一館三一三 世界童話大系刊行會

戯曲

愛すればこそ

谷崎潤一郎著

本書は明治、大正藝術壇の代表作として不朽の神品と稱せらる。三角關係の深刻なる戀愛を描いたもので、人間愛慾の悩みがいた〴〵しいまでよく表現されて、讀む人をして一氣に藝術の殿堂へと引ずつて行く、眞に名人の名作で、千古の光輝を放つ快著だ。

九十二版發賣

◇定價壹圓六拾錢◇

四六判上製◇送料十五錢◇

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

近代の戀愛觀

文學博士 廚川白村著

戀愛は人間の最高善であり、人生の最高理想であると高く標置して、因襲的結婚、非戀愛的生活に勇敢なる痛撃を加へたる本書は、茲に百版を突破す。新時代の青年士女に新戀愛の經典の如く歡呼されたる熱情火の如き新戀愛觀の陣容を見よ。戀愛を遊戲視する國民は一書を購つて一生の禍福を名鏡に照せ。

百版を突破！

◇定價貳圓五拾錢◇

四六判上製◇送料十七錢◇

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

◇本社殘留書整理の結果左の書籍若干部數を發見致しましたから貴需に應じます。

桑木彧雄著 **物理學と認識** 定價一圓五十錢 送料十五錢

犬養健著 **一つの時代** 定價二圓五十錢 送料十九錢

フラマリオン作 高瀨毅譯 **此世は如何にして終るか** 定價二圓 送料十七錢

近松秋江著 **二人の獨り者** 定價二圓 送料十五錢

尾瀨敬止著 **勞農ロシア詩集** 定價二圓 送料十七錢

藤村千代著 **脂粉の顏** 定價二圓三十錢 送料十九錢

矢崎美盛著 **現代哲學思潮** 定價一圓五十錢 送料十七錢

藤森成吉著 **東京へ** 定價二圓三十錢 送料十九錢

北一輝著 **日本改造法案** 定價一圓五十錢 送料十五錢

梅澤親光著 **水泳** 定價一圓八十錢 送料十五錢

槙有恒著 **山行** 定價三圓三十錢 送料十九錢

三宅大輔著 **野球** 定價二圓八十錢 送料十九錢

加藤一夫著 **亂舞する焰** 定價二圓 送料十五錢

武林無想庵著 **文明病患者** 定價二圓卅錢 送料十七錢

中西伊之助著 **農夫喜兵衞の死** 定價一圓七十錢 送料十五錢

ブハーリン著 稻垣守克譯 **轉換期の經濟學** 定價一圓八十錢 送料十五錢

石原純著 **アインスタイン講演錄** 定價一圓八十錢 送料十五錢

昇曙夢著 **ロシア現代思潮及文學** 定價一圓八十錢 送料二十七錢

堀江歸一著 **續經國際經濟と國民經濟** 定價一圓五十錢 送料十九錢

長田秀雄著 **愛憎篇** 定價一圓六十錢 送料十五錢

賀川豐彦著 **雷鳥の目醒むる前** 定價一圓三十錢 送料十七錢

北澤秀一著 **近代女性の表現** 定價一圓七十錢 料送十五錢

長與善郎著 **青銅の基督** 定價二圓 送料十七錢

室伏高信著 **印象と傾向** 定價二圓 送料十七錢

佐藤春夫著 **侘びしすぎる** 定價一圓六十錢 送料十五錢

恒藤恭著 **ジムメルの歴史哲學** 定價三圓 送料十七錢

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

「日本の社會」研究

今までの日本の歴史といふものは、そのすべてが戰爭の歴史であり、政治の歴史であり、外交の歴史であり、忠臣傳であつた。そして日本の庶民社會の發達について説いた歴史は一つもない。これ今までのすべての歴史家が、戰爭とか、偉人とか、政治、外交以外の頭腦のなかつた結果だと見られる。カーライルは「歴史は英傑の傳記である」といつたが、我國の歴史家も彼一流の如き間違つた考への持ち主であつた。

玆に於て社會問題の歴史即「日本社會史」を、要求したくなる。我國には社會史たるものがないために、大古乃至中古、近代に至るまでの社會組織、社會階級、社會問題の研究に苦しむのだ。しかし、何處の國でも必ずいつも社會問題は介在する。貧富の鬪爭は必然的に介在する。

たとへば上古には氏族制度の社會があり、氏姓を有する氏族と半自由民、非自由民との間に鬪爭があつた。そして土地問題で爭つた、これが社會問題の我國に於ける第一の階級鬪爭であつた。大化改新によりてこの氏族制度は破壞されたが、奈良朝では、奴隷制度的勞働組織の時代であり、そしてその時代には班田制度で呪はしい問題を惹起したのであつた。

平安朝に至りて再び貴族制度が復活されたのであつたが、そこに貴族、僧侶、庶民、奴隷、地方豪族との各階級が對立して、土地所有の問題と、土地兼併との抗爭で白熱的態度を示した。

鎌倉時代では、五階級の間に、土地問題と德政問題とが存在し、室町時代には土一揆があつた。

德川時代に封建制は完成され中央集權の齊擧り九階級軋轢し、米價調節の如き重大なる社會問題が起つた。明治維新でこの九階級は撤廢されたが、しかし重要なる社會問題は却つて煩く持ち上がつてくる一方であつた、殊に大正になると問題が具體化して、各階級が智識的に目醒めて對立の姿いよ／＼物凄くなつて來た。

その爭端は何れも分配の不公平による貧富問題に歸する。つまり根本は經濟問題である。

我國の經濟史の權威である京大教授本庄經濟學博士は、上古より大正に至るまでの社會組織、社會階級、社會問題を討査して「日本社會史」なる一著を公にした。

我國の社會史として始めての著書である丈け多大の界待をかけられている。われ／＼は本書によりて我國の歴史の缺陷が補正され得ると信ずると共に、本書の公刊が世界的に重要な結果を齎らし得ることを信ずるものである。敢へて日本を研究する人々へその一讀をすすめるものである。

（日本社會史　定價一圓八十錢送料十七錢　本庄榮治郎博士著　改造社發行）

近刊二種

經濟學博士本庄榮治郎著

日本社會史（三月五日出來）

定價壹圓八十錢
送料十七錢

文學博士桑田芳藏著

民族心理學（三月三日出來）

定價參圓五十錢
送料廿一錢

改造社


使へば使ふほど
歯を強く美しくするものは、ライオン歯磨ばかりで御座います。
香といひ、味といひ、效果といひ、全く申分が御座いません。
ライオン歯磨

POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR.
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO

厨川白村著

苦悶の象徴

（三月十日發賣）

本書は白村氏の唯一の遺稿である。そして随筆集ではない。脉絡一貫したる文學論の精髓を傳へた千古の名文である。此一書は我々の精神の糧として、亦、生命の糧として誰人にも讀まるべき芳香高き名著です。

四六版上製　定價壹圓六拾錢　送料七錢

東京　改造社　振替東京八四〇二